

暗殺教室 28+1

水野治

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗殺教室に1人加えました。基本的に原作通りに進めていきますが、オリジナルストーリーを入れたりしていきます。原作で足りないと感じた中学生らしい休日などを盛り込む予定です。

原作と公式キャラクターブック”名簿の時間”とイラストファンブック”卒業アルバムの時間”を熟読した上で更に読み込みつつ書くので矛盾などがないように書いていきます。

タイトルは律とイトナを加えたE組28人に+1しただけの何の捻りもないものです。

目次

3月

第0. 1話 導入の時間 1

第0. 2話 相談の時間 6

第0. 3話 勝負の時間 11

第0. 4話 日常の時間 20

第0. 5話 ドッチボールの時間 30

第0. 6話 ボーリングの時間 43

第0. 7話 犬猫の時間 59

第0. 8話 幕間 71

4月

第1話 暗殺の時間 75

第2話 野球の時間 83

第3話 カルマの時間 89

第4話 休日の時間 その1 98

5月

第5話 プロの時間 106

第6話 支配者とテストの時間 114

第7話 準備の時間 124

第8話 旅行の時間 その1 133

第9話 旅行の時間 その2 144

第10話 旅行の時間 その3 152

第11話 転校生の時間 169

6月

第12話 仕返しの時間 181

第13話	ある雨の日の出来事	193
第14話	師匠と克服の時間	202
第15話	転校生の時間 その2	212
第16話	球技大会の時間 その1	224
第17話	球技大会の時間 その2	237
7月		
第18話	才能の時間	250
第19話	歩く花	262
第20話	ビジョンの時間 その1	273
第21話	ビジョンの時間 その2	284
第22話	期末の時間	292
第23話	隣町の隣探訪記	306
第24話	ガラスの脳	325
8月		
第25話	策謀の時間	341
第26話	リゾートの時間 その1	352
第27話	リゾートの時間 その2	364
第28話	リゾートの時間 その3	374
第29話	リゾートの時間 その4	386
第30話	同級生のうちへ遊びに行こう	399
第31話	陽の香る場所	413
第32話	遠い記憶で溢れる前に	428
第33話	夏が終わる	440
第34話	始業の時間 2学期	463

3月

第0. 1話 導入の時間

（渚視点）

僕が通っている柵ヶ丘中学校は進学校だ。それもただの私立の進学校とは違い”超”が付くくらいに教育が徹底されている進学校。

授業のレベルが高いことはもちろんだが、明らかな違いがあるのは「E組」と呼ばれるクラスの存在だ。

エンドのE組と呼ばれ、このクラスに行きたくない、優越感に浸っていたという意識から生徒たちは勉強に勤しむ。

もちろん僕だって行きたくない、堕ちたくないっていう思いから必死に勉強しテストを受けたがダメだった、無理して中学受験をして自分に見合わないレベルにいたことのツケが回ってきてしまい、E組落ちが決定した。

担任の先生からはお前の顔を見なくてよくなるのが唯一の救いだとか、クラスメートからは今までとは180度違う言葉を吐かれた。

家に帰ると母さんからありとあらゆる言葉で罵倒され、この先どうすれば良いのかなと色々と言われたが何一つ頭に入ってこなかった。中学二年生、年齢にすると14歳にして人生の烙印を押されてしまったのだ。そうやすやすと立ち直れるものではない。

そして今日がクラス替えの日である。柵ヶ丘中学校の場合卒業式終了後進級前にクラス替えを行う。そこで改めて格差というものを認識するのだ。

僕は今本校舎から1km離れた旧校舎へと歩いている。クラスにどんな人たちがいるかわからない、クラス替え特有のドキドキ感はあるが憂鬱な気持ちも勝ってしまった。早めに家を出たということと特に誰と会うこともなく旧校舎に到着し、教室に入ると僕は驚いた。そこにはE組とは程遠い人がいたからだ。

*

〈南雲視点〉

いかん、早く着きすぎてしまった。そう考えながら自分の座席で鞆の中身を整理していた。

だつてさ、クラス替え初日だよ？早く学校行こうとか思うじゃん。学年末テスト後に貼り出されていたE組行き名簿を見るに面白そうなやつが多いクラスだと思つたし、何より仲が良い友達が少なくとも5人はいるんだ。

早く誰か来ないかなんて思いながら持参した本を読んでいたら教室の戸が開いた。すぐにそちらに目をやると口をポカンと開けて立っている男子がいた。

「おつす、これからよろしく」と声をかけると、ゆっくり口を開いて南雲君だよね？と確認をとられた。

「おつ俺のこと知ってる感じ？」

「知らない人の方が少ないと思うけど…それにここにいるはずがない人だから…」

「そんなに俺有名かなー…ていうかここにいるはずないって面白いこと言うのな。名前なんて言うの？」

そう尋ねると男子は潮田渚だよと自己紹介した。

「渚か、これからよろしく。改めて自己紹介すると南雲純一だ、名字、名前好きな方で呼んでくれ」

じゃあ…南雲君だと渚は言った。

「渚は俺のことここにいないはずないって言ったけど、そんなことないぞ。他の人たちと同じで成績・素行不良と見なされたからここにいるんだから」

「そうだよね…ごめん…」

「いいっていいって、それより話しようぜ。一人で寂しかったんだよ」それから渚と漫画、映画など色々話をした。ていうか可愛い顔してソニックニンジャ好きなのな。やっぱり男なら世界を救う孤独のヒーローとかに憧れるよな。

始業のチャイムがなる10分前くらいに結構な人数が教室に入っ

てきて自分の座席に座り始めた。渚もそろそろ先生来るからと自席に戻っていった。

俺の座席は出席番号順的に一番後ろなので教室全体を見渡すことができる。その特権を生かし全体を見るとやはりほぼ全員浮かない顔をしている。そりやそうだよなと思いつつ、知り合い5人がいることもしつかりとチエックした。

そのとき教室に女の先生が入ってきた。クラスにいる全員は同じ事を思ったはずだ。”そのシャツ何!?”と。

「これから君たちと一緒に勉強していく雪村です、1年間という短い時間だけどよろしくね」

と、雪村先生は軽い自己紹介を終えて、今後の予定を語り始めた。クラスのみんなは配られたプリントに目を通しつつ先生の話に耳を傾けていた。

雪村先生はたぶん、いや絶対に優しく良い先生だと感じた。その考えを持ったのは俺だけじゃなくクラス全体が同じく感じたのだろう、さつきまでの強張った顔から固さが取れている顔になっていた。

進級初日は授業がなく、教材配布や今後の説明だけ行われ午前中には学校は終わる。

明日からは通常通り授業が行われるが、まずは今日をどう過ごすかを考えた。家に帰ったら何をするかと考えていると出席番号順にクラス全体への自己紹介が始まっていた。

出席番号1番の赤羽は現在停学中らしく2番の磯貝からだった。
…こいつ絶対にイケメンだなと思う完璧な自己紹介だった。

順々に自己紹介をしていき、ついに俺の番がきた。雪村先生に南雲君と呼ばれ、ハイと返事をして俺はその場に立ってクラス全体を見ながら話した。

「南雲純一です、興味を持って何でも取り組んでいこうと思います。これから1年間よろしくお願いします。」

と短く挨拶するなかで5人に目を合わせると、気まずい1人を除いて4人は何となく挨拶的なのを返してくれた。

俺の出席番号の次の狭間が自己紹介しているなか、俺はその1人と今後どういう接し方をすればいいかを考えていた。

*

「それじゃあ今日はこれで終わります。みんな寄り道とかしないで家に帰るんだよ」

そう優しく雪村先生は言ったあと終業の挨拶をしてみんな鞆を持って帰り始めた。俺はすぐに鞆を持って5人の内の1人に声をかけた。

「岡島！久しぶり！」

「純」！お前がここにいるのまじでビックリだぞ」

そうか？と俺は笑いながら答える。

「そうだよ。教室に入って渚と話してるやつを見たらお前なんだもん。」

会話に入ってきた前原がオーバーリアクション気味に話し始めた。

そのまま3人で話の花を咲かせながら帰った。

ここで説明をするが俺と岡島と前原はE組に入る前から仲がいい。前原は中学校からだが岡島とは小学校からの付き合いだ。俺の家が父子家庭ということで運動会などの学校行事のときはいつも岡島家にお世話になっていた。

前原とは1年のときに同じクラスでそのときに仲良くなった。当時のクラスの女子が俺たち2人をイケメン二人組と言ったのがきっかけでそこから遊ぶことなどが多くなった。

他のE組の人たちで話をしたことがあるやつは多くいるが、仲が良いやつと言える男子は現時点ではこの二人である。

3人でバカな話をしていると帰りが別れるところまで着いた。

「じゃあ、俺（こ）までだから。また明日」

「おう、また明日なー」

久しぶりに話をしたなーと若干にやけながら家に帰る。先生もクラスメイトも良いやつばかりで明日から楽しみだなと思いつつは家の鍵を開けた。

第0. 2話 相談の時間

クラス替えから数日がたち、徐々にクラスメイトも互いに打ち解けてきたのかクラス全体の雰囲気も明るくなってきた。それでもE組という負い目からかどこか暗い感じが、授業で当てられたときに答えられなかったときなどはズンとクラスが沈む感じがあった。

雪村先生は明るく接してくれているが、エンドのE組というレッテルを持った生徒は自信などなくその明るさが返って空回りしさらに雰囲気が悪くなるという悪循環にもなっていた。

俺はというと関係が気まづくなっていてる1人といまだに話せてないという焦燥感から授業に身が入っていない。

岡島、前原はもちろんのこと、野球仲間である友人。1、2年生時に同じクラスで比較的話をすることが多かった速水とはE組に来てからも問題なく接することができた。

ただ、中村莉桜とは一言も話せていない。

小学生のときに天才小学生と呼ばれていた彼女は始業式、終業式など毎回何らかの表彰を受けていた。テストで解けなかった問題で盛り上がり上がるときに寂しそうな目でこちらを見ていた彼女に話しかけたのが仲良くなったきっかけだった。

普通がよかった、普通になりたいと言っていた彼女は当時小学生だった俺たちの誰よりも大人だったと思う。そんな彼女とテストの話はあまりできなかつたが休み時間に一緒に遊んだり、休日に映画を観に行ったりなど楽しく過ごした。

小学6年生になったときに柗ヶ丘中学校を受験するという話を聞いてそれなりに頭によかった俺は1人じゃ寂しいだろ？と岡島も誘って3人揃って中学受験をした。

3人の合格が決まったときには3人の家族でご飯を食べに行くくらい祝福されたし俺たちも喜んでいた。

そして柗ヶ丘中学校の入学式の時俺は驚愕した。開いた口が塞がらないとは正にこのことだと思った。中村が黒髪を金髪に染めていたからだ。入学式終了後の下校時に一緒に帰った際に中村が言った

一言は今でもはつきりと覚えている。

「頭が悪くなりたいたい。バカになりたい。」

小学生のときと同じ寂しい目で言った彼女に俺は声をかけることができなかつた。何て言えば正解なのかわからなかつた。結局その日以来疎遠になつてしまい、何度か彼女に話しかけようと機会を伺つていたら今までと環境が変わつたことと前原、速水といった新たな関係が生まれたことで話すことなどなく約2年が過ぎてしまつて今に至る。

俺は誰にも、父さんにも相談することができなかつた。だつて恥づかしいじゃないか。女の子となんとなく気まづくなつたからどうにかしたいつて。思春期にはかなり高いハードルだよ。絶対にかからかわれるに決まつてる。

でも俺はE組に来てその考えは捨てようと思つた。E組での彼女の浮かない顔、寂しげな目を見たときもう一度彼女と仲良くなりたいたいと心から思つた。

どうすればいいかはわからないが、ちゃんと話を聞いてくれそうな、信頼できそうな人が今は目の前にいる。

今日の放課後に相談してみようという考えに至り、まずは授業を真面目に聞こうとノートに板書をまとめはじめた。

*

そして放課後。

先生に帰りの挨拶をしてみんなが帰り始めてる中、岡島と前原が俺の席にきて、俺たちも帰ろうぜーと言われ俺は言葉を返す。

「悪い、この後先生に話があつてさ一緒に帰れないんだ」

「じゃあ話が終わるまで教室で待つてようか？」

「いやどれくらいかかるかわからんし、二人に悪いから先に帰つてくれ」

二人はりよーかーいと間延びした声で返事をし、また明日など帰つてつた。俺はそれに応えるように手を振つた。

二人を見送りとりあえず職員室に向かうかと心の中でタメ息をつきながら歩き始める。ギツギツと古い床特有の音が放課後の廊下に響く。その音が俺の心臓を急かしているのか職員室に近づく度に鼓動が速くなる。

心臓の鼓動と汗ばんだ手に気付き、柄にもなく緊張していることを情けないと感じた。職員室に入る前にハンカチで手を拭き、息を吐ききることで気合いを入れて失礼しますと俺は職員室の戸を開けた。

職員室に入るとハイと明るく返事をした雪村先生はどうしたの？と聞いてきた。先生の鞆が机の上に置いてあり、ひよっとして帰ってしまうのだろうか、今日中に相談したいんだけど。

「先生に相談があつて来たんですけど…ひよっとしてもう帰っちゃいますか？」

「いやいや！大丈夫だよ！私の用事なんかより生徒の相談の方が大事だよ！」

と、体の前で小さく手を振りながら言葉を返してくれた。

よかった、今日相談できると安堵した俺はふうと息を吐いた。そして雪村先生に悩んでいることを包み隠さず現在に至る経緯までを話をした…。

話し終わると先生は顎に手を置き、むむむと唸っている。先生には申し訳ないけど正直可愛いなと思っていると先生は口を開いた。

「つまり中村さんと話をして蟠りを解きたいってことだよね？」

「そうです。それでどうすればいいかなって。」

「それはね、簡単にできるよ。」

先生はウインクをしつつ手でOKマークを作りながらそう言った。俺が訝しげにそんな簡単にいくんですか？と言うと幼子を諭すよう

に話し始めた。

「結論から言うとな、中村さんと向かい合って話をすればすぐに解決するの。でも君たちは思春期だし思ってることを素直に言えないのが普通なのね。大人でも気ままずくなっちゃって話が出来なくなることだってあるけど結局は話し合いでしか解決できないんだー。だからね、勇気を持って中村さんに話しかけてみよ？」

「でも…拒絶…というか向き合ってくれますかね。」

「その点は心配ないよ♪」

また同じ仕草をして雪村先生は言う。再度俺は訝しげな視線を送りながらどうしてですかと尋ねると雪村先生が優しい笑顔で

「たぶん中村さんも同じ事を考えているからだよ。言って良いのかわからないけど中村さん休み時間に何回も南雲君のこと見てるもの。普通関わりたくない人なんて見向きもしないでしょ？だからきつと大丈夫。」

と、言ってくれた。

俺は嬉しくなって思わず笑顔になった。悩みが解決することもあるのだが、先生がちゃんと俺たちのことを見てくれてるんだってことがわかったから。

満足そうな顔をした俺を見て先生は大丈夫？解決できそう？と聞いてきた。俺はもちろん！と答え、

「これで解決できなかつたら男じゃないですよ」

と、続けた。

うんうんと先生は笑顔で頷いた。相談が終わり油断している先生に俺は、早く帰らなくて大丈夫ですか？用事あるんですよね？と聞くのと、先生は時計を確認して、いけない！と焦り始めた。

さつきまで頼れる先生の顔だった人が正反対の顔になったので俺は思わず声を上げて笑ってしまった。先生はもうバカにしてと頬を膨らませながら急いで鞆に私物を入れていた。

「先生ありがとうございます。話し合ったら先生にまた報告します。」

帰り支度をしている先生にそう言うのと頑張つてねとエールを送つ

てくれた。失礼しますと職員室を出ると、いつのまにか心臓の鼓動が元に戻っていた。こんな簡単に胸のつつかえが取れるんだなと俺は帰り道を歩いた。

明日の放課後中村を捕まえて話し合うぞと小さく拳を握った。

第0. 3話 勝負の時間

朝目覚めて布団から出て朝食の準備をする。俺の家は父子家庭で二人で家事を分担して行っている。

炊事について大まかに言うと平日は俺、休日は父さんだ。平日の昼飯は互いに弁当なので前日に作り朝起きて弁当箱に詰めるという方式なのであまり手間に感じない。

その他の家事については細かい決めごとなどあるが2人で協力して行っているので汚部屋などになることなく生活が送れている。

朝飯ができる時間帯に父さんが必ず起きてくるので揃って朝食を食べるのが習慣となっている。今朝はご飯、味噌汁、前日の夕飯の余り物の焼き魚という和食テイストだ。

いただきますと互いに言い、テレビをBGMに朝食を食べる。ある程度食べ終わったところで父さんが口を開いた。

「新しいクラスはどうだ？」

「岡島とかいるし、楽しくやってるよ」

「そうか…。楽しいんだったら大丈夫だな。仲良くやれよ」

「言われなくてもそうするよ」

それもそうかと父さんは笑う。

2人ともに食べ終わったのでごちそうさまでしたを言い、それぞれ身支度をし家を出る。

ちなみに食器は潤かしておいて夕食後に一緒に洗う。これも生活を楽にする1つの方法だ。

既に誰もいない家についてきますと言い、鍵を閉め学校に向かう。今は自分の考えを纏めている。昨日先生に相談した通り、中村と話し合う予定だからだ。

：しかし何も思いつかない。話すと決めたがどう切り出せばいいかもわからない。こういうときは下手に考えずにそのときに思ったことを口に出せばいいかと思い、考えるのをやめた。

俺は宇宙空間をさまよう完全生物かよと自分にツツコミを入れ旧校舎へと続く裏山を登り始めた。

*

午前の授業も終わり、昼休みになった。誰が言ったわけでもなく各々机を組み合わせてグループを作って弁当を食べるのがE組の昼食時の動きとなっている。

今日は誰と食べようかなと思いつながら教科書を片付けていると速水がちよつといい？と話しかけてきた。

「どうしたー昼飯でも一緒に食べようって誘いにきたのかー？」

「そうだけど…何にやけているの？私の顔になんかついてるの？」

「いや、誘われると思わなかったから。2人きりで食うの？」

「バ、バカじゃないの？神崎と話しててあんたの話になって仲良くなりたいって言うてたからよ。カン違いしないでよね」

「す、すまん。…女子2人だと緊張するから杉野誘っていい？」

「ああ、野球やってる男子だっけ。全然大丈夫。」

「うし、じゃあ誘ってくる。」

俺は机を動かす前に杉野のところに行き、一緒に食わないかと誘うと二つ返事で了承を得たので自分の席へと戻り準備を始めた。

今俺たちは4人で昼食を食べている。俺の隣に杉野、正面に速水、斜め向かえに神崎という座り位置だ。

仲良くなつた経緯を聞くに速水と神崎は二人とも国語が得意で読書が好きという共通点があるようだ。てつきり神崎がジャズダンスでも得意なのかと思った。

女子二人の話が終わったところで神崎が質問してきた。

「杉野君と南雲君って何がきっかけで仲良くなったの？」

「あー友人とは野球繋がりでな」

「そうだな、俺が野球部でランニングしてるときにいきなり野球部に所属してなかった純一が話しかけてきたんだよ」

「南雲君は野球部じゃないんだ。ちなみに何て話しかけてきたの？」

「話しかけてきたというかほぼ技術指導だよ。『お前セツトポジションのときに同じテンポで投げすぎだ。相手にバレたらランナーに走られ放題だぞ』っていきなり言ってきたよ」

「いや野球部の紅白戦のときに見たらお前まじで同じテンポだったんだよ。メトロノームかよって思ったからさ」

メトロノームという単語が面白かったのか速水が吹き出し、神崎は上品に口に手を当てて笑っている。

「二人はそこから仲良くなっただ？」

「まあ最初はなんだこいつって思ったけど、純一は野球で有名人だったから言ってることは間違ってるんじゃないんだなって。それに言われたところ直したら盗塁されることは減ったし」

「そうなの？純一って野球やってたの？」

「あれ？速水に言っただけじゃなかった？父さんが昔やってたからその影響で小学生のときだけやってたよ」

「ふうん。有名人ってことは南雲君野球上手いんだ？」

「いや、純一は上手いなんてもんじゃない、化け物だ。何てたって小学6年生のときに少年野球の日本代表として世界大会に出てたんだから」

「…すごい」

「いや、ありがたいけどそんなに褒めるな。それに友人だって部活でエースだったろ」

速水が何あんたたち男同士で褒めあってるのよと苦笑したら、神崎が当然の疑問を投げかけてきた。

「でもそんなに上手だったら何で中学でもやらなかったの？」

「んー…他にやりたいことあったからかな。それに友達と仲良く遊んだりとかしたかったし。野球やってたら土日がほぼ潰れちゃうからさ」

そっかと神崎は納得した。友人が弁当を食べ終わったのか片付け始めた。しかしどうやらお腹一杯になっていないらしく、俺にお菓子持ってない？と聞いてきたので飴ならあると俺は制服のポケットか

ら出すとそんなんで腹が膨れるかと断られた。こいつ、人の好意を無下にしやがった。

杉野君、いいものあるよと神崎が笑顔で板チョコを出すと友人は顔を赤くしながら、えっいいの？あ、ありがとうとチョコを受け取った。

今の一連の流れを見た俺と速水は目を合わせ、こいつ完璧に堕ちたなど思った。

神崎がとところで新たな話を切り出してきた。

「南雲君は速水さんのことどうして名字で読むの？速水さんは南雲君のこと純一って呼んでるのに」

「ちよつと！神崎!？」

「あーそれはだな、神崎……」

隣の友人を見るとまだ浮かれている。俺はなんて言おうかなと思った。まさか1年生のときに”はやみん”とか”凜香ちゃん”とかとふざけて呼んだときにぶっ叩かれ、それから名字でしか呼べなくなつたなんて言おうものなら速水に処刑されるかもしれない。

俺の頭がフル回転してるのを感じる。脳が震える。そこで出てきた言い訳は自己犠牲だった。

「それは俺が女子に不馴れで緊張しちゃうからだ」

そうなんだと神崎は納得してくれたみたいだ。速水を見ると少し申し訳なさそうな顔をしている。友人はそういえば純一が名前呼びしている女子がいない気がする小さな声で漏らしている。そして神崎はまたも爆弾を投下してきた。

「じゃあ、これからは名前で呼んだら？南雲君の苦手の克服になるし凜香ちゃんも喜ぶし♪」

「神崎！ちよつと待って！」

「純一：男を見せろ」

「そうだな…克服に繋がるなら仕方ないな」

俺はこの状況を楽しむことにした。女子に苦手意識はないつもりだし仲の良い相手を名前呼びするなんてイージーだ。赤子の手を捻るものだ。

さて、景気よく名前を呼ぼうと思い速水、いや凜香の目を見て口を開く。

「……り、り、凜香」

「…はい？」

顔を赤くしていた凜香だったが俺の不馴れな様子と赤い顔を見て普段の呆れ顔に戻った。その様子を見ていた友人と神崎は二人して笑っている。

「純一本当は女子が苦手だったの？」

「いや、そんなつもりはない。本当に。ただなんか凜香の目を見たら緊張してしまっただけ」

「かしくまっただけ名前を呼ぶことって普段ないからね。恥ずかしくなってもしょうがないよ」

天使や。ここに天使がおるで。フォローしてくれた神崎を拝みたくなった。すると天使はじゃあど話を続けた。

「私のことも有希子って名前でもいいよ？」

「…いやそれは勘弁してください」

天使じゃなくて小悪魔だったみたいだ。背中の白い羽が黒に染まっている。

覆水盆に返らず。吐いた唾は飲みぬ。二度と取り返しをつかないという言葉が俺の頭を駆け巡る。どうやら女子に不馴れで緊張してしまっただけ名前を呼べないというキャラが出来てしまった。

仕返しではないが赤面した凜香が見たかったため、俺の提案で凜香と神崎はお互い名前を呼び合うようになったが、赤面を拝むことはできなかつた。

そんなこんなで4人で楽しく昼食兼昼休みを過ごし、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

3人にじゃあまた今度と言いつつ机を片付けて自分の席へと戻る。神崎はおしとやかで美人だが見た目に反して結構ぶっこんでくるなど思いながら次の授業の教科書とノートを机に並べた。

*

そして放課後。

雪村先生がみんなの挨拶に手を振って応えてるとき、俺と目があつた。

口パクで頑張れと言ってくれた。俺は小さく頷き、中村の下へと言つて声をかけた。

「中村、一緒に帰らないか。ちよつと話したいことがあるんだ」
「……いいよ」

中村は驚いたかのように目を見開いてすぐに返事をしてくれた。まずは第一ステーションクリアと心でガッツポーズをし、先生さよならーと二人で教室を出る。

先生はまた明日ねと言いながら片目でウインクをして手を振る。中のシャツはダサいのに着てる本人はなんてカッコいいんだと俺は思いながら旧校舎を後にする。

*

中村と二人で並んで山を下りながら話すタイミングを伺っていた。いや、というよりも何て切り出せばいいのかを考えていた。

雪村先生の言葉を思い出す。”勇気を持って向かい合う” たったこれだけなんだ。何を怖がる必要がある。

俺はふうと息を吐き切り気合いを入れ、話しかける。

「中村あのn…「純一」ごめん！」

えつと俺は驚き中村を見る。彼女は立ち止まってこちらに頭を下げている。

「えつちよつ頭上げて！中村は俺に頭下げるようなことはなにもしてないし、ただ互いに気まづくなつてただけじゃん」

「…そんなことないよ。入学式の日以降勝手に壁作ってたし、心配して話しかけようとしてくれた純一を避けてたから…」

「そうだったのか…俺は全然気にしてないけど中村が気にしてるんだつたら謝られておくかな」

出来るだけ彼女が気負わないように笑顔でそう返した。改めてごめんと言われたので俺はおう、もう俺のことは避けるんじゃないぞとおどけながら彼女の頭にポンと手を置いた。

彼女は頭に手を置かれたことに驚いたのか、こちらを見てきた。

「あつ悪い。小学生のときの癖で…。嫌だった？」

「…嫌じゃないよ。ただ懐かしいなって」

そうかそうかと俺はそのまま頭をワシヤワシヤと撫でる。まるで昔に戻ったみたいだなと思った。

今でこそ10センチ以上身長が離れてるが、2年前小学生だったときの彼女の身長は約160センチで俺の身長は164センチと彼女よりやや高かったが、女子である彼女に身長を抜かれるのではないかと危惧した俺は彼女の頭を撫でる度に心で『縮め！縮め！』と唱えていた。

ちなみに頭を撫でる理由付けとして、親しい間柄で相手を褒めるときには頭を撫でなきゃいけない、考えてもみる、親は撫でてくれるだろう？という謎理論を展開し俺と彼女はテストで満点を取ったときなど互いに撫であっていた。

昔と違い互いの知らないことが増えたため、俺と中村はゆっくりと歩きながら多くのことを話した。

バカばかりやってたら勉強の仕方や点の取り方も忘れて本物のバカになっちゃってE組に落ちたこと。親の涙を見て失ったものの大切さに気づいたこと。俺の知らないことがいっぱいあった。俺もE組に落ちた理由を言うと純一らしいねと笑われた。

色々と話しているとそろそろ互いの帰り道が別れるところが近づいてきた。

ふと中村はあつと思いついたかのように話し始めた。

「あんたそういえばはやみんのこと今日から名前呼びすることにしたの？」

「お前は凛香と友達なのか、はやみんって…。そうだな、流れとして仕方がないから名前呼びだな」

「ふーん、そっか。じゃあ私のことも名前呼びに変えてよ」

「いいよ別に。ところで名前なんだっけ？」

俺が笑いながらふざけてそう言うのと、てめ〜と言いながら脚を軽く蹴ってきた。

「冗談だよ、莉桜。これからよろしく」

「…っ。不意撃ちすんな。…こちらこそよろしく！純一！」

莉桜の笑顔を見て俺は思った。俺たち二人の間に壁なんて元々なかったんだなって、勝手にあると勘違いして思い込んで捕らわれてただけなんだなって。

雪村先生が言った通り簡単なことだったなと思いつきながら歩いていくと帰りが別れるところに着いたようだ。

「…純一あんた今までに彼女いた？」

「俺に？いないよ。どうして？」

「2年間純一とは話してなかったけど、結構女子の間で話題になってたからさ。それに告白だってされてたでしょ？」

「…まあ確かにたまにされてたな」

「断ってたってことは好きな人でもいるの？」

「いないよ。異性と手を繋ぐとかすら考えたことないからな」

「…まさか男が好きなの？岡島とか前原とか杉野とか」

「ちげーよ！単純に考えたことがないっただけだ！ちゃんとそう言っただ断ってたし！」

ふーん、そうなんだと莉桜はにやにやしながら俺を見ている。この2年間で随分変わったな。俺が知ってる莉桜は純粹そのものだったのに。

「じゃあ面白いことも聞けたし帰る！改めて来週からよろしくね！純一！」

「おう、気をつけて帰れよ」

莉桜が敬礼してきたので敬礼で返し、互いの道を帰る。俺は週明けの学校がより楽しみになり、脚を弾ませながら家へと帰った。

*

く中村視点く

「純一、色々大きくなってたなー」

歩きながら、そう呟いた。2年前より伸びた身長、そして二回りくらい大きくなった手。頭を撫でられたことを思い出し顔が赤くなる。

そういえばと純一が言っていた言葉を思い出す。

告白してきた相手に付き合うことを考えたことがないって言ってたんだっけ？告白してきた相手にその返しはつまり”そういう目で君を見たことがない”って言ってるようなもんだよね。告白してフラれた女の子に少し同情する。

純一との壁も解消され、E組に落ちたことに対するショックがなくなり心が軽くなっているのを感じた。心地良い気分のまま私は昔見たCMの曲を小さく口ずさみながら家へと向かう。

第0. 4話 日常の時間

莉桜との関係が回復したのは金曜日だったので土日に休み週明けの月曜日に登校すると、何やら教室が騒がしかった。誰が騒いでるのかと思いい教室の戸を開けると騒がしさの中心にいたのは莉桜だった。おはようと声をかけるとおはよーとアホっぽい感じで返事が返ってきた。

先日まで比較的大人しかった莉桜が元気になったのもやっぱり心のつつかえが取れたからだろうとうんうんと納得しながら席に向かうと急に制服が引つ張られた。ためーと振り返るとやはり犯人は莉桜だ。

「莉桜、制服を強く引つ張るんじゃない。服が破けちゃうだろうが」「そんなに簡単に破けるわけじゃないじゃない」

俺の一言に不破が、あつジョジョと進撃だと小声で言った。さすが自己紹介のときに漫画が大好きと言っただけはある。

「そんなことよりあんたは渚の性別どっちだと思う？男か、それとも女か！」

「いや、どう考えても男だろう。確かに可愛い顔はしてるがズボン履いてるし」

「…その言い方だとズボンじゃなかったら女ってことになるけど」

ふとスカートを履いた渚を想像してみる。うん、これは…

「女だ、間違いないね」

「ちよつと！南雲君！」

「悪いな、渚。お前の可愛さが眩しくて俺は庇うことが出来そうもない」

そう言っつて渚に親指をたて今度こそ席に向かう。鞆を開けて忘れ物がないかを確認していると神崎がおはようと話しかけてきた。

「おはよ、神崎。俺に話しかけるなんて珍しいな」

「うん、昨日せっかく仲良くなったしね。あと凜香ちゃんから南雲君も結構本を読むって聞いたからもつと仲良くなつてどんなの読んでいるのかなつて聞きたくて」

「ああ、なるほど。俺はわりと幅広く読んでるよ。エッセイからミス
テリーまで」

神崎がクスッと笑った。うーむ、可愛い。笑った理由を尋ねる
と、

「本を読む幅でエッセイって言う人始めてだったから面白くて」

なんだ、そんなことかと俺も笑った。それでと神崎は話を続ける。

「今は何か読んでたりするの?」

「今は…これだな」

と、言い俺は鞆から本を取り出す。

俺の今読んでいる小説は読書家でなくてもおそらく子供のときな
どに耳にしたり、あるいは絵本を読んだりなどして絶対に目にしたこ
とあるものだ。

「オズの魔法使いだね、話が分かりやすくておもしろいよね」

「そうなんだよ、だからこそ絵本だったり人形劇だったり幅広く年
齢層に受けてるんだろうな。俺も正直絵本でしか知らなかったから
小説を読んで懐かしく感じることもあったり新しい発見があつて面
白いんだよ」

「へえ、読み終わったら今度貸してもらっていいかな?」

「おう、いいぞ。じゃあ神崎もなんかオススメあつたら貸してくれ」

「ふふつ、南雲君が満足する一冊があるかな?」

「読書家の神崎のオススメなんだから間違いないだろ」

それじゃあ約束だよと神崎は笑顔で小さく手を振って自分の席に
戻っていった。本の話なんて誰かとするのがあまりないから楽し
かったなと思った。漫画だったら前原とかと話すことが結構多いん
だけだ。

さて本でも読むかと開こうとしたら、岡島がオイオイオイと俺
の下へと来た。お前は露伴先生か。

「純」ひよつとして中村と仲直りしたのか?」

「いや、別に喧嘩してたわけではないからな?昨日の帰りに話をして
関係が回復したよ」

「いやーよかったよ。小学生のときの大人しきはどこへやらだが元気

になったからな」

「そうだよな、女の子はやっぱり笑顔じゃなきゃな」

俺がそういうと前原にいきなり肩をポンと叩かれ、わかってるじゃないかと言われた。やかましいわと俺は前原に軽くパンチし会話を始めた。どうやら前原は片岡以外のE組全女子に声をかけたが玉砕したらしい。ざまあみろ。

話していると教室の戸が開いてみんなおはようと笑顔で雪村先生が入ってきた。みんなはおはようございますと返したとき、先生は騒がしくしている莉桜を見たあとに俺を見てきた。

俺は報告代わりに笑顔のVサインで応えた。それを見た雪村先生もVサインを返してくれた。前原はお前もしかして雪村先生とデキてるのかと嘆き、岡島はあの2つの大きな夢はお前のものだったのかと崩れ落ちていた。

前原はまだいいとして岡島、お前はぼかして言ったつもりかもしれないけど周りの女子がドン引きしてるからね。仲間と思われたくないから離れてくれない？俺の願いが通じたのかは別として始業のチャイムが鳴りそうなので二人は自分の席へと戻っていった。

チャイムが鳴ると起立して改めておはようございますと挨拶をする。今日も頑張りますかと心の中で呟き、一時間目の準備を始めた。

*

SHRが終わると雪村先生は両手をパンと叩き、素晴らしい提案をするかのように言った。

「みんなある程度クラスに馴染んできたと思うので今日は席替えをしようと思います！」

素晴らしい提案をするかのようにと言ったが素晴らしい提案そのものだった。

E組の現在の座席は出席番号順で廊下側から縦に数えて奇数列が男子、偶数列が女子となっている。俺の席は3列目の一番後ろで男子と女子の人数の関係で俺の両隣は誰もいない。これが中々に寂し

かった。普段は良いのだが授業中に何となく暇になったときなどに
どうしようもできないのだ。小声で話すことも出来なければ、イタズ
ラもできない。そんな小さな不満持っていたからこそこの席替えは
非常に嬉しかった。

雪村先生が席替えの説明をしていた。女子の人数が少ないことで
不人気の前側の席になる可能性が高いことから女子の座席全てに番
号を振り出なかったところを空席とすると説明をした。

いや、そこは別に重要ではない。とにかく俺の隣に誰かが来てくれ
ればそれでいい。そんなことを考えていると左斜め前に座っている
凜香が俺の方を向いて、隣になれるといいねと小声で言ってきた。そ
んなことを可愛い女子に言われたら舞い上がっちゃうだろ。俺は凜
香の言葉に笑顔でそうだなと返した。凜香は照れたのか顔を赤くし
てすぐに前を向き直した。

くじを引く順番は男女それぞれの出席番号の頭とケツがじゃんけ
んで決めるみたいだ。男子は磯貝と吉田が、女子は岡野と矢田がじゃ
んけんをした。じゃんけんの結果男女ともに番号が若い方から引い
てくことになったが、俺は番号が中間らへんなのであまり変わらない
など思いながらくじが回ってくるのを待っていた。

「何も変わらないじゃあないか…」

俺はそうぼやいた。席の位置が変わらなければ、両隣には誰もいな
い。ちなみに凜香は前までの席の一個前に移動とあまり変わってい
ない。

席替えの移動も終わって各々準備をしていると俺の前の席となっ
た千葉が小さくよろしくと言ったので、俺もよろしくと返した。

午前の授業が終わり、みんなは昼食の準備をしている。なにやら雪
村先生に矢田と倉橋は何かを聞いていた。まあ、大方授業でわからな
いことでもあったんだろうと思いい準備をする。

今日は前原と岡島、そして磯貝という男のメンバーで昼食をとる。

岡島が下の方向に暴走しないようにだけ気をつけようと俺は3人のところへと弁当片手に行った。

*

今は弁当を食べながら3人の話を聞いている。磯貝は自己紹介で感じた通り、話の随所にイケメンらしさが見える。テニス部だったらしく今度一緒にやろうぜと誘われたのでありがたく誘われておいた。

そのまま話していると片岡と倉橋と矢田の女子3人が磯貝の下へと来て片岡が話しを始めた。

「磯貝君ちよつといい？」

「片岡さん、どうしたの？」

「倉橋さんと矢田さんが雪村先生に旧校舎の前にある花壇を整備して花を植えていいかって聞いたたら了承を得たから男子の学級委員の磯貝君にも言っておこうかと思って」

「そういうことか、じゃあ手伝うよ！」

イケメンな委員長は快諾し、その場でクラス全体に放課後に花壇の整備をするから手伝ってくれないかと呼びかけた。半分くらいのクラスメートがいいよーとそれに応える。スムーズに快諾するのもそうだが、クラスに呼び掛ける姿は正にイケメン。俺の中の磯貝のあだ名は” 柵ヶ丘のジュノンボーイ” に決定した瞬間だった。

女子三人がありがとうと手を振って戻っていくのに手を振り返す磯貝。それを見た俺はここだけ少女漫画の世界かなって思った。

磯貝はお前らは放課後大丈夫？と聞いてきたので俺と岡島は大丈夫と返した。しかし前原はすまんと両手を合わせて謝ってきた。

「今日は他校の女子とカラオケに行く約束があるんだ！だから手伝えない！」

「そっか、お前らしいな」

そう苦笑いする姿も絵になる男、磯貝。お前の爪の垢を煎じて煩惱の岡島とチャラ男の前原に飲ましてやりたいと思った。あるいは磯貝の切った爪を瓶に入れて保管すればいいのに。：吉良かよとセル

フツツコミを入れてみると友人と渚にキャッチボールに誘われた。俺はいいよと昼食を共にした3人に一言言ってから準備を始めた。なんでも旧校舎の用具室に野球道具が一式置いてあったらしい。

*

放課後俺たちは腕捲りをしたり男子は制服のズボンを折り畳んで動きやすい服装を作って花壇に集まった。雪村先生は花壇の整備道具と花の種を持ってきてくれた。用事があつて手伝えないのと謝っていたが、みんなは大丈夫だよとか準備してくれただけでもありがたいとうございますなど言っていた。先生は頑張つてね、水やりとかは率先して手伝うからと帰っていった。

集まったメンバーは出席番号順に、

男子は磯貝、岡島、木村、渚、友人、千葉、俺

女子は奥田、片岡、神崎、倉橋、莉桜、凜香、不破、矢田の計14人だ。

磯貝がさて、と口を開く。

「さっそく整備するか。ところでちゃんとした花の植え方とか知ってる人いる?」

磯貝の問いに倉橋がハイハイと元気よく手を挙げた。それに矢田も小さく手を挙げていた。

「いきもの好きだし、花も好きだから詳しいよ」

「私は小学生のときに花壇のお世話係だったから：陽菜ちゃんほど詳しくないけど…」

倉橋と比べて矢田は控えめに言っていたが知識が0なのと多少経験するのは雲泥の差だ。磯貝も同じことを思ったのか矢田に頼りにするよと言っていた。

倉橋がみんなにやり方を説明し、片岡がそれぞれに役割を振って整備がスタートした。俺の仕事は土作り。土の状態が良いらしいのでフカフカにして肥料だかを加えるだけでいいらしい。

詳しいやり方についてはあまり説明していなかったので、とりあ

えず野球のグラウンド整備と同じ要領でやったら倉橋からちがう！とツツコミが入った。それを見た友人は危なく注意されるとろだったと胸を撫で下ろしていた。ただ倉橋さん、やり方の説明をするときに俺に抱きつくような指導は中学男子である俺には刺激が強いのでやめてもらっていいですか？それを見た岡島がけしからんとか言ってるし、周りの女子引いてるじゃん。お前はもっと女子がいる前では煩惱を隠せよと思った。

作業がほぼ終わりに近づいたので俺は休みながら種を蒔いてるクラスメートを見ていた。花壇の看板作りをしていた千葉も休んでいたのので俺は千葉によろお疲れと話しかけた。

「イメージ的に千葉が花壇の手伝いにくるとは思わなかったからビツクリしたよ」

「…まあ俺も花が特別好きって訳じゃないから」

「へー、じゃあどうしてだ？」

「…俺は将来建築士になりたいから。設計するだけじゃなく外観にも拘る必要があるだろう？…庭が欲しいっていう家庭もあるだろうから」

だからかと俺は思った。手伝いに来た理由を聞いただけなのに将来の夢を言われたから俺は驚いた。俺なんか夢なんて話してよかったのかと聞くと千葉は少し考えたのか間を開けてから答えた。

「…南雲は何となくただ生きてるだけじゃなくてやりたいこととか目標がある気がして。…なんかそんな感じがしたただだから間違つたら申し訳ないけど」

「バレたか。誰にも言っていないけど…、千葉が将来を言ったから俺も言おうじゃあないか」

俺は自分の夢を千葉に教えた。千葉の目は前髪に隠れて見えなかったけど、たぶん見開いたと思う。

そりゃ驚くのが当たり前だ。俺の夢は誰もが憧れるけど世界が違うからと将来の夢の選択肢にすら入れない。それくらい大きな夢だ。

何となく間が空いて、しんとした空気が流れた。そうしたらいきなり千葉にお前ジョジョ好きだろって聞かれたからどうしてわかる？と返したら語尾でわかると言われた。確かにわかるわな、あからさまではないにしろ知ってる人がいたら語尾の違和感に気づく。

俺はジョジョを知っている人がいるというのが嬉しくてついテンションが上がって声が大きめになってしまったら、不破も会話に入ってきた。千葉は有名どころの漫画を読んでいて、不破は少年誌だったら幅広く何でも読んでいるらしい。

3人で話していたらどうやら完成したらしく、かんせーいと倉橋を中心としてみんなが言った。まだ花は咲いていないけれど、整備された花壇は前と比べて見違えるほどだった。差し入れの飲み物の買い出しに行っていた磯貝と木村も戻ってきてみんなで飲み物を飲んで完成を祝った。中心となっていた倉橋と矢田が咲くのが楽しみだね〜という言葉にみんなは同じことを思ったのか頷いている。

「みんな今日はありがとう！水やりとかの当番はまた明日話し合おう。決まるまでは私が責任持つってお世話をするから」

片岡の一言でみんなはじゃーねとかまた明日と言って解散した。俺も帰るかと思えば教室に鞆を取りに戻ると凜香が俺を待っていて一緒に帰らない？と言われたので俺はいいよと言って二人で帰ることにした。凜香と帰るのは1, 2年のときに数えるほどしかなかったのに誘われたのに驚きを隠せなかった。

*

花が咲くの楽しみだなくとか他愛もない会話をしながら歩いている。凜香と一緒に帰ろうと誘ってきたのは何か話したいことがあるんじゃないかなと思つた俺は長く続きそうな話題は避けていた。会話が終わり、少し間が空いたあと案の定凜香が重々しく口を開いた。

「…実は純一が千葉と話していた内容聞こえてきたんだ」

俺と千葉が話していた内容でなんか重くなるようなことなんてあつたかなと考えて、それがどうかしたのかと聞くと凜香は浮かない

顔で言葉を返してきた。

「…勝手に聞いてしまったことを謝りたいのと、私って将来何をやりたいのかとか目標がないからさ。二人の夢を聞いて私って何も考えてないなと思って」

凜香の言葉を聞いて俺はこれはちゃんとした言葉で返さなきゃダメだなと思った。上辺を取り繕った言葉じゃなく、俺の言葉で。少し考えたあと、俺は凜香の目を見て言った。

「盗み聞きした訳じゃないんだから気にするなって。やりたいことが今の段階で決まってるやつのほうが少ないだろ。それに将来の夢が決まるきっかけなんて大したことないぞ」

「そうかな…うん、そうだね」

凜香が笑ったので俺も笑った。

雪村先生に相談したときもそうだけど、中学生の俺たちは他人から見たら大したことないでも自分の中で難しく考えすぎてしまうんだなと思った。たったの十数年しか生きてないから答えが出せないのは当たり前だ。周りに頼ればいいのにそれに気づかない。色々と経験して成長して大人になってくんだろう。そしてまた下の世代に伝えていく。きつとその繰り返しだ。

頭の中で小難しいことを考えていたら凜香が話しかけてきた。

「そういえば席替え隣になれなかったね」

「しかも俺の両隣は誰もいないしな。席は離れたけど俺のことを構ってくれよ」

「当たり前でしょ。1年からの付き合いなんだから」

「よろしくな、はやみん」

「その呼び方はやめて」

凜香のジト目になったのを見て俺はしてやったりと思った。それと話の中で気になったことを聞いてみた。

「俺の将来の夢ってみんなに聞こえちゃったかな？だとしたら恥ずかしいんだけど」

「その点は問題ないよ。私と有希子にしか聞こえてないと思うから」

「まあ凜香と神崎なら大丈夫か」

「みんなには言わないから安心して、有希子にもそう言っておくから」
神崎は注意しなくてもたぶん言わないと思うけど、ありがとうと凛香に伝える。

「どういたしまして。ところでさっき夢が決まるきっかけなんて大したことないって言ってたけど純一のきっかけは？」

「あーそれはだな…」

俺は凛香にきっかけを話すと凛香は堪えきれなかったのか口を開けて笑った。

「本当に大したことなかったね」

「うるせー、そんなもんなんだよ」

「ふふっ、ところでこの理由って他に誰か知ってるの？」

「いや、誰にも言っていないから知ってるやつはいないな」

俺の言葉に凛香は、じゃあ…とウインクをしながら人差し指を口に当ていたずらっ子のような顔で俺に言った。

「このことは二人だけの秘密だね」

*

凛香と別れたあと、俺はふうと息をついた。最後に言われた言葉もそうだが、普段見せない仕草に俺はめっちゃドキッとした。

漫画とかで読むギャップ萌えの破壊力は現実でも効果があるんだなと思った。普段は悪い粗暴な性格や行動をするが、いざというときにいい人キャラになる。”ジャイアン映画版の法則”を体験することができた。ジャイアンと凛香を一緒にしたら怒られるなど苦笑いしながら俺は家へと帰った。

第0. 5話 ドッチボールの時間

3月の中旬にクラス替えをしてから日を重ね、2年生として学校に通うのも残すところあと2日となった。今日はいつも通り授業を行い、明日は終業式で明後日には春休みへと突入する。などと今後の予定を頭で考えながら俺は今登校している。

話は変わるが俺はいつもイヤホンで音楽を聴きながら登下校している。一人で歩いているときに耳が寂しいからだ。登校中にクラスメートに出くわしたときや誰かと帰るときにはもちろん外して会話を楽しむ。

ジャンルはアニソンから洋楽まで幅広く聴いている。本を読むときもそうだが、俺は何かをするときに幅広く何でもやるということに重点を置いている。それは父さんの教えだ。父さんは俺に一つのことを好きになるのは重要だけど、色々好きになったほうが人生楽しめるぞと教えてくれた。俺はなるほどと思い、その教えを愚直に実践している。某狩りゲーでは片手剣からガンナーまで、インクが銃弾のゲームではローラーからチャージャーまで。

出来る幅が広がるのも楽しいが、一つ一つのやり方が異なるので長く楽しめるっていうのが一番の利点に思える。

歩いていると後ろから肩をトンと叩かれた。叩かれた方向を見ると指が俺の頬の形を変えた。俺はクスッと笑ってイヤホンを外しながら挨拶をする。

「おはよ、莉桜」

「おはよー、なに聞いているの?」

そう言っつて莉桜は俺が外したイヤホンを奪って聴き始めた。

「大迷惑って曲。今の莉桜にピッタリな曲だよ」

「むむっ、朝から可愛い女子が構ってあげてるというのに何て言い草だ」

「可愛いとか自分で言ったらダメだろ。…いや、可愛いって言われてそんなことないですよっつて否定しまくるやつのがダメだな」

「純」は何言ってるのさ。ところでこの曲テンポが激しいね、歌詞も

なんか嘆いてる感じだし」

「まあ昔の曲だから、父さんの影響で聴いているだけだよ」

「あんたのそこ親子仲いいもんね、羨ましい」

そう言った莉桜を見て、失言だったかなと思ってたら莉桜がすぐにその考えを否定した。

「いやいや、気にしないで！今はギクシヤクしてるけどその内解決するからさ。純一さつき女子が可愛い云々って言ってたけど、あんたも女の子を見て可愛いとかって思うの？」

「そりやそうだ。思わないわけないだろ」

「へえ、じゃあクラスでは誰が一番だと思う？私的には渚を推すけど」

「渚は男だろ…。まあ、男子の一番人気は神崎だろうな」

「渚じゃないのか。じゃあ純一今日神崎ちゃんに可愛いって言うてみてよ、言われ慣れてそうな人がなんて返すか気になるし。」

「えー、言わされるのはなんか違うだろ。言うんだったら俺がそう思ったときに言いたい。言ったことないけど」

「純一は変な拘り持つてるね。…ってことは神崎ちゃんを可愛いって思ったことあるんだ？」

「そりやあるよ」

「二人とも楽しそうだね、なんの話をしているの？」

莉桜と話してたら当事者来たよ。聞いてたかな？とか考えていたら莉桜が口を開いた。

「おはよー神崎ちゃん。いや渚より神崎ちゃんのほうが可愛いよねって話」

「ふふっ渚君は男の子だよ。でも可愛いって言うてくれてありがとう」

神崎はそう言って微笑んだ。言われ慣れてる人は違うなと莉桜と顔を合わせて感心していたら、南雲君もおはようと挨拶をされたのでおはよと返した。

それから3人で話をして登校した。教室に入ったときに友人がえっ何で神崎さんと登校してんの？みたいな顔で見てきた。お前に

は一緒に入ってきた莉桜が見えていないのか。友人の視線を流しながら俺は忘れ物の確認を始めた。確認が終わる頃に雪村先生が教室に入ってきて始業のベルが鳴る。おはようございますと挨拶をした後にみんなは着席した。

ここまではいつもと同じ流れなのだが唯一違うことがあった。出欠確認をするために先生が筆箱からペンを取り出すのがその時に鼻唄を歌っていたのだ。それを見た前の席のやつらは先生をいじり始める。

「なんか最近ゴキゲンだね、雪村先生」

「良い事あったの？」

先生がえーと……と困っていると前原が止めを刺した。

「フフフ、俺には見えるぜ。男の影が」

「そーいやさつきバッグの中にプレゼントっぽい包みがあった！」

「おいマジか!!」

「クラス始まったばかりのこの時期にお熱い事だ!!」

みんなは拍手を送ったりヒューヒューと囁し立てる。もちろん俺も。先生はううう……と困っているがやはり教師、すぐに空気を切り替えるために出欠を取る。

「バカな事言っていないで出欠取ります！赤羽君!!」

先生はみんなにいじられたからかいつもはやらないポカをした。

クラス全体の雰囲気は先程とは打って変わり静まる。

「……ごめん、休みだったね」

「……いーって先生、ここはそういう場所なんだから」

「赤羽君は今日様子見に行きます。次磯貝くん！」

「……はい」

停学中ということで先生はみんなに気を使って赤羽の出欠は取らないようにしたが、誤って名前を読んじってしまったためみんなはE組は停学になる生徒がいるくらい堕ちた場所ということを思い出したかのように沈んだ。何とかクラス全体を元氣付けることはできないかと俺は考えを巡らせた。

*

そして昼休み、みんなはまだ何となく元気がない。その時に磯貝がクラス全体に呼びかけた。

「みんな、昼食が終わったらドッチボールをやらないか！実質今日が最終日みたいなもんだし最後にみんなで体を動かそう！」

磯貝の呼びかけに倉橋などの元気の良いメンバーは賛成！と返事をする。それに伴って続々とやるかくなどの声が聞こえてきたが、寺坂、村松、吉田、狭間のグループはパスと言って断ってきた。無理に誘う理由がないので、磯貝がわかった、でも参加したくなったらいつでも来てくれよと言っていた。

俺はドッチボールの準備を磯貝とするためグループを作ることなくいつもより早く弁当を平らげた。磯貝の下へと行くと、食べるの早いなとツツコミながらラストスパートをかけ最後には飲み物で流し込んでいた。急かしたみたいでごめんと言うと磯貝は気にすんなつてとウインクをしてきた。そのやり取りを見ていた三村は絵になるなと言っていた。確か映像編集が趣味だったか、俺は三村の一言にVサインで応え磯貝と教室を出た。

廊下を歩きながら白線引きやボールが必要だなとかコーンのほうが視認性がいいかなど準備の段取りを話した。職員室にいる雪村先生にドッチボールをやる旨を伝えるとじゃあ先生は審判やるよ！と笑顔で返してくれた。

職員室を後にして用具室からラインカー（白線引き）とコーンとボールを用意して、今は白線を引いている。大きさは何となくでいいよなと確認するとオツケーと返事が返ってきた。出来るだけ乱れなように引いていると磯貝が真面目な顔で話しかけてきた。

「南雲、ドッチボールを提案してくれてありがとな」

「いいよ、気にすんなつて。クラスが暗いままなのは嫌だったからさ」
「俺より委員長に向いてるんじゃないか？」

そんなわけないだろと俺は磯貝に返す。俺が本当に委員長に向いていたら授業の間の休み時間に磯貝に相談などせず自分で昼休みに

みんなに呼び掛ける。そうしなかったのは磯貝が俺よりも人徳があるからだ。それに俺はリーダーとしての磯貝を信頼してるからな。

その旨を磯貝に言うとありがとうと分かりやすく照れていた。準備が終わったので磯貝とボールを軽く投げ合っているとみんなが集まってきた。参加者全員が集まったあと片岡が口を開いた。

「チーム分けはどうするの？」

「それについてはさっき南雲と話した。自分の主観でいいから自分と同じくらい運動できる人とペアを作ってじゃんけんをしてくれ。勝ったらAチームで負けたらBチーム。男子は11人で1人余るからそこは3人でじゃんけんをして分かれてくれ」

みんなはわかったとペアを作り始め、俺は友人とペアを作ってじゃんけんをした。

結果、

Aチーム

男子：磯貝、木村、竹林、俺、菅谷

女子：片岡、奥田、神崎、凜香、矢田

Bチーム

男子：前原、岡島、渚、友人、千葉、三村

女子：岡野、原、倉橋、莉桜、不破

以上10人―11人に分かれた。

磯貝がルールを説明する。

・ゲームはジャンプボールで開始し、ジャンプボールを行った者に初手ボール当ては禁止

・最初外野は男子2人女子1人の計3人とする

・内野が当てられたら外野に行く、復活はなし

・顔はセーフ、ただし鼻血などが出たら一時的に治療のため抜ける。治療後は戻って試合に参加する

・複数人に当たって誰もキャッチできなかったら当たった人全員がアウト。逆に当たっても地面にボールが落ちる前に誰かがキャッチした場合はセーフ

説明後全体に質問はあるかと確認したらなかったので全員ルール

を理解したようだ。まあ、正直復活がない以外は普通のルールと変わらんしな。

AチームBチームで分かれいよいよ始まる。

Aの外野は木村、竹林、奥田でBの外野は渚、三村、原だ。

そしてAのジャンプポラーラーは俺、Bは前原である。ジャンプポラーってジャイロポラーみたいでカッコいいなと思った。俺は父さんの事をおとさんとは言わないけど。なんて下らないことを考えながら分析するが、前原と俺では若干俺のほうが身長は高いが運動神経が良いので油断はできない。雪村先生がそれじゃあ始めます！といい試合が始まる。

*

ピツと笛がなり先生がボールを上げる。

俺と前原は同時にジャンプするが、余裕で俺がボールを取った。それを見てクラス全員が「ジャンプ力やばっ!!」とハモった。俺が幼い頃からバスケットをやっていることは誰も知らないからなと内心ほくそ笑む。

Aが勝ち取ったボールを拾った片岡はすぐに外野の木村へとパスをする。運動神経の良い木村を外野に置いたのは機動力が優れていて相手を攪乱できるからだ。

パスを受けた木村はすぐ近くにいた不破にボールを当てアウトにする。不破は私の敵を討ってくれよとオーバリアクションをして外野に行った。友人は任せておけと素早くボールを拾いこちらに投げてきた。ここで俺はフツと笑う。なぜなら友人が投げたボールが遅い速度でゆっくりとカーブしたからだ。

なぜカーブするのか知らない人に解説すると、野球ボールを投げるという動作では指からボールが離れる瞬間に指先で回転を加えて投げている。だから野球経験者ではドッチボールなどで投げるのが苦手という人が多いのだ。余談だがその時の回転数が多ければ多いほどストレートであれば伸びる球になる。

友人はやってしまいました！と叫んだ。この球なら誰でも捕れるだろうと思って見てたら矢田の下へとボールがいった。矢田も簡単に捕れると思ったのか捕ろうとしたら落球した。それを見たBチームはラッキーと喜んでいた。落とした矢田はというとやっちゃったと舌を出して笑っていた。なにそれ可愛いな。

切り替えていこうと磯貝が言って攻撃に移る。磯貝が力強く投げると前原がキャッチをし、すぐさま速い球を投げ返してくる。磯貝はくつと言いながら避けると後ろ側にいた菅谷は避けようとしたが当たり、ボールが少し上に浮いた。

浮いたボールを捕れると判断した片岡は菅谷をセーフにしようとしたがボールを滑らして落としてしまった。…なんとダブルアウト。雪村先生がピツと笛を吹きアウトになった2人の名前を呼び、Bチームはよっしゃー！とハイタッチをしている。

これで残り4人―7人とAチームが不利になってしまった。

Aチームは外野から内野、内野から外野と細かくパスを回した。相手も内外でしかパスをしないなど感じ始めた辺りでパスを受けた竹林が素早く外野同士である片岡にパスしこれまた素早く相手にボールを投げる。伊達に眼鏡をかけてないな、頭脳プレイだ。

投げたボールは倉橋に当たり、これで4人―6人。だが依然として男子が残り2人のAが不利なのは変わらない。

千葉が当てれそうだと判断したのか凜香を狙う。当てやすい上半身ではなく相手が捕り辛い下半身を狙ってくる当たりコントロールが良い。下半身だったら当たってもボールが浮きにくいしな。

避けるかなと思ったら凜香はボールを見事キャッチした。このプレイには敵味方関係なく、おおくと歓声上がる。凜香は照れているのかすぐにボールを投げず、少し止まってから急に俺にパスしてきて小声で言った。

「純」ちよつと本気で投げてみてよ。杉野みたいなミスをしないうように上手くね」

「…怪我人が出たらスマンな」

俺がそう言うとう会話聞いていた磯貝がえつと漏らした。俺は

大きく助走をつけて思い切り投げる。指先で回転を加えることなく、ボールを掌で押し出すように。女子は狙わないように。

ボールは物凄い勢いでBチームのコートへと投げられた。岡島がへつととぼけた声とボールが体に当たったバン!!という音と共に被弾した。勢いがすごい分ボールは体に当たると大きく弾む。弾んだボールは千葉にも当たりダブルアウト。

雪村先生がピツと笛を吹きアウトになった2人の名前を呼ぶ。みんなは呆然としている。本気で投げてみてよと言った凜香でさえも。

岡島は外野に行きながらチートや、チーターやろそんなんと叫んでいる。それを見た竹林は吹き出していた。

「えっと…南雲くん？今の球を女の子に当てないようにね？」

「ハイ、もちろんです」

俺は先生の言葉にそう返事をする。何はともあれこれで4人―4人となり不利な状況を脱した。しかしB側にボールがあるので油断はできないし、ボールは友人が持っている。パスをするか、当てに行くかを迷っている。俺は神崎に耳打ちをして友人を揺さぶつてくれと頼んだ。神崎は意味あるかなと苦笑いしながら友人に向かつて言った。

「杉野君…その…痛いのは嫌だから優しくしてほしいな？」

「…ハ、ハイ」

「二いや、ハイじゃないだろう」

クラス全員がツツコミをいれた。前原がこいつダメだと思ったのかすぐに外野にパスをしると指示を出す。友人は原さんにパスを出す。原さんはすぐにボールをこちらに投げてきた。ボールは神崎に当たりアウトとなった。外野に行くときに神崎は友人に嘘つきと泣き真似をして言った。それを見た前原がすぐにこちらに抗議をしてきた。

「純―！精神攻撃は卑怯だろう！」

「うるさいーあそこまでやれとは言っていないしお前の遊びの遍歴を言っていないだけありがたいと思え！」

俺の言葉に神崎はふふつと悪戯つ子のように微笑み、前原はぐつと

黙りこんだ。Bチームで味方同士であるはずの岡野が何故か前原を睨んでいる。

神崎が当たったことによりボールはこちら側にある。俺はすぐに外野となった神崎へとパスを送る。パスを受けた神崎は近くにいる友人へと先程の微笑みのままボールを投げる。見蕩れてしまったのか友人はキャッチすることなくアウト。挙げ句当たったのに悔しさの欠片もなくデレデレしている。その様子を見てクラス全員が察した、こいつ堕ちてるなど。

これで3人―3人。残りはAチームは俺、磯貝、凜香でBチームは前原、岡野、莉桜となった。男子が多い分今度はこちらが有利だ。

ボールは現在Bチーム側で莉桜がボールを持っている。莉桜は助走をつけて投げようとしたとき急に投げるのをやめた。どうした？とみんなが思っていると遠くを見ながら、あつ寺坂たち参加しに来たのかな？つと言った。

当然みんなは莉桜が向いている方向を見る。誰もいないじゃないかと前を向き直すと磯貝が被弾していた。莉桜はしてやったりとずるい顔をしている。みんなはポカンと口を開けている。そりやそうだ。莉桜が元気よく先生アウトだよね!と聞くと先生はむむむと考えてから、

「…まあ南雲君の精神攻撃もあつたからこれでキャラということだ」
ジーザス。因果応報で貴重な戦力を失った。そんなことを考えていると凜香が転がっているボールを素早く拾い投げる。投げたボールは岡野に当たりアウトとなった。凜香の素早い判断に俺はナイスとハイタッチを求めた。凜香は笑顔で手を出してきたのでパンと互いの手を合わせる。

これで2人―2人となった。Aチームは俺と凜香でBチームは前原と莉桜だ。ボールはBチーム側。俺と凜香どっちを先に潰しにくるかかわらないので何にでも対処できるように警戒する。

前原は凜香に対して力強く球を投げてきたが凜香はそれを難無くかわした。そのときに俺は凜香は動体視力がいんじゃないかと思つた。考えたら千葉が投げた低い球も動体視力がいんじゃないかと思つた。

れたんだなと気づいた。

避けたボールはそのまま相手の外野の下へといった。友人はすぐに凜香に投げる。凜香は最初と同じ曲がった遅い球がくると油断したのか友人の速い球への反応が遅れキャッチをミスって球が浮いた。浮いた球を捕ろうとしたとき凜香が待つて！と声を出したので俺はキャッチをしなかった。

「いや、今の頑張れば捕れそうだったけど」

「バカ、頑張ればってことは少しきついでしょ。純一がキャッチをミスしたらダブルアウトで負けになっちゃうでしょ」

あーなるほどなと思つてたら転がったボールが相手側にいつてしまった。それを見た凜香は呆れ顔で、そのこぼれ球は確保しなさいよと言つてきた。いや、今凜香と話してたやんと思つたが悪い、勝つから許してと言つた。凜香は頑張つてねと俺の背中をバンと叩くと外野へと向かつた。

Aチームの残りは俺一人。なんとしてでもボールを確保するしかない。当てる自信があるのか前原がパスを要求して前原の手にへとボールが渡つた。

前原は助走をつけて思い切り投げてきた。ボールは勢いよく俺へと向かつてくる。体の下側で捕り辛い位置だなと思つたので俺は補球態勢ではなくバレーのレシーブの形を作つてボールを上からキャッチした。

みんなはそんなのありかとポカンと口が開いている。俺の真後ろで不破だけはカイザーが！ゲームマスターが現実に現れた！と騒いでいる。

俺はお返しだと前原に素早く投げ返す。俺の曲芸とも言える捕り方に驚いている内ならばそれほど速い球でなくても大丈夫だろうと先程よりも遅く投げた。案の定前原の反応が遅れたので残りは莉桜だけとなり勝つたなと思つたら莉桜がボールを横から叩き前原を守る形でアウトになった。

「…磯貝への騙し討ちといい油断ならんな」

「へへん、私だけが残つたら負けが確定するからね」

「すまん、中村助かった」

「いいっていいって。とりあえず色々と暴れて好き放題やってる純一を倒してきてよ」

前原は莉桜の言葉に任せると言った。いや、待て。暴れてもいないし、好き放題にやってないと俺は心の中で莉桜にツッコミをいれた。

莉桜が外野に行ったのを確認してから前原はよし、と言って再び助走をつけてボールを投げてきた。勢いよく球が向かってくる。キャッチするのは難しいからとりあえず避けるかと思いついた。幸い俺の真後ろには先程騒いでいた不破しかいないし、不破が前原の球を捕ってすぐに投げられるとは考えにくい。仮に投げれたとしても簡単にキャッチできるだろう、そう考え避けた。

すぐに後ろを振り返り相手の動きに備えようとしたら俺は被弾した。なぜ被弾した？ 不破が投げたのか？ と前を向いたら笑顔で渚が立っていた。

真後ろにいるのは不破だけじゃなかったか？ 素早く回り込んで投げて俺に当てたのか？ そもそも試合中渚はどこにいた？ 俺の頭は今とても混乱している。だが俺がアウトになったというのは事実。雪村先生がピツと笛を吹き試合終了！ と元気よく言った。

整列を促されたので全員整列をする。Bチームの勝ち！ と先生が言う。とBチームはよっしやー！ とガッツポーズをする。負けたAチームはというと悔しいとかではなくみんな楽しかったー！ と笑顔でいる。みんなの笑顔を見て俺と磯貝はやってよかったなと拳を合わせて喜びを共有した。

みんなが一頻り感想を言い合っていると昼休み終了のチャイムが鳴る。それを聞いたみんなは教室へと戻っていく。戻っていく中で俺は渚に声をかけた。

「最後やられたよ、不破のいたところまで回り込んだのか？」

「違うよ、僕はゲームの最初から外野の真ん中において当てられてアウトになった不破さんが後からやってきたんだよ」

「…マジか、渚に当てられるまでどこにいるか気づかなかった」

「僕強くないし影が薄いからかな？ でも上手い南雲君をアウトにでき

たしよかったよ」

そう言つて笑う渚の頭を俺はグシャグシャと撫でた。それを見ていた前原や岡島から渚に当てられてやんのくとからかわれた。俺がからかわれてるのを見て笑っている渚になに笑つてんだよとお姫様抱っこをして運んでやった。それを見たクラスのみんはイケメン王子と可憐なお姫様だ！と笑う。雪村先生も潮田君ごめんねと言いながら笑っている。片岡だけはキラキラした目でお姫様抱っこを見ていたのでおそらく憧れでもあるのだろう。

落ち込んで沈んでいたのが嘘みたいだなと思いつつ俺は教室へと戻つて授業の準備をした。

*

～放課後、帰り道～

「勝つから許してつて言つたのに負けちやつたね」

「いや、まあ、うん、そうだね」

「純」ははやみんにお前のために勝つてカッコつけたのに私たちBチームに負けたのか」

「いや、そんなことは断じて言つてないしカッコつけてもいない」

俺たちは3人で帰っている。授業が終わつて帰ろうとしたときに凜香と莉桜から一緒に帰ろうと誘われたのだ。そして今俺は2人からかわれている。

「申し訳ないけど負けたから許すことができないね」

「申し訳ないと思つてるんだつたら許してくれてもいいんだよ？」

「なんか甘いものでも食べないと許す気になれないよね？はやみん？」

「そうだね、ちょうど帰り道の近くにハニートーストが絶品な喫茶店があるんだけど」

「最初からそれが望みか。わかった、ずっとこのネタでからかわれるのもあれだからそれで手を打とう」

「いいの？ありがとう」

「…君たち仲良いね」

ハア〜と溜息をつけて俺は歩く。女子2人はなに食べる〜と盛り上がっている。えっハニートーストじゃないの？他にも何か頼むつもりなの？心でツツコミを入れながら3人で喫茶店へと向かう。喫茶店で磯貝がバイトをしていて莉桜がからかいまくるのはまた別のお話。

第0．6話　ボーリングの時間

今日はついに2年生最終日である。俺たちは終業式があるため早めに登校して今は本校舎へと向かっている。竹林がふうと溜息をついたので俺は声をかける。

「竹林疲れたのか？体力もないほうだし俺がおぶってやろうか？」

「ありがとう、南雲君。でも心配には及ばないよ。ただ集会の事を考えたら気乗りしないだけさ」

俺は確かになど苦笑いする。集会などの全校行事の際には他の生徒から嫌味を言われたり差別待遇を受ける。E組になって今日が初めての全校生徒が集まる行事ということで竹林は気落ちしているということだ。まあ差別待遇なんて慣れるもんでもないしな。俺は竹林の肩を軽く叩き気にせず行こーやと言う。

「純」おぶってくれるの？」

「莉桜、俺がおぶる提案をしたのは竹林だ」

「えーケチくさい！おぶってくれてもいいじゃん！」

「何でやらなくてもいいことをやらないだけでケチ扱いされないといかんのだ。…よし、俺にジャンケンで勝ったら本校舎の校門前までおぶってやろう」

「えっいいの？きつすがー！」

まあ、竹林より軽いだろうしなと俺は付け加える。いざジャンケンというときに莉桜はよくある心理戦を仕掛けてきた。

「純」ってジャンケンのときに毎回パーから出すよね？」

「莉桜、その手には乗らないぞ。最初はグーから始めるかジャンケンぽんだけでやるか、かけ声だけ決めよう」

莉桜はちえつとこぼしながらジャンケンぽんだけだと言った。俺はフツと笑いをこぼす。なぜなら心理戦を仕掛けてきたのもそうだが莉桜が勘違いをしていて、俺がジャンケンのときに初手でよく出すのはグーだからだ。つまりパーを出すと思っている莉桜はチョキを出してくるわけで俺はいつも通りグーを出せばそれだけで勝てる。俺はイージーだなと思いき勝負に臨む。

しかしここで俺は気づく。パーから出すよねって莉桜は言ってきたが、果たしてさっきの考えの通りに相手が素直にチョコキを出してくるか？答えは否。仕掛けてきたのだからそのままチョコキなはずない。だとすると…パーだ！パーが正解だ！俺はにやけそうになる顔を我慢して莉桜と向き合う。対する莉桜は笑っている。いざ、開戦。

「ジャン！」

「ケン！」

「ぽん！」

勝負は一瞬だった。俺がパーで莉桜がチョコキ。

負けてしまったと自分の出したパーを見つめていると、莉桜がイーイと言いながら俺の背中に飛び乗ってきて言った。

「純一は深く考えすぎなのよ」

「ひよっとして俺がよく出す手知ってた？」

「そんなの知ってるわけないじゃない」

莉桜は俺の背中ですう言ってカラカラと笑っている。俺は本当に深く考えすぎていたんだなと感じたので、これ以降ジャンケンは何も考えずやろうと思った。

「中村さんいいな、おんぶしてもらって」

「神崎ちゃんも純一に頼んでみたら？今日は私だけど他の日だったらいいよ」

「勝手に言うな。江戸時代の駕籠かきじゃないんだから人を進んで運ぼうとは思わん」

「えー？そう？純一って結構押しに弱い気がするけど」

莉桜がそう言う与会話が聞こえていたのか近くにいた凛香が確かにと言っている。…マズイ、このままじゃ本校舎に行く度に俺は人を運ばなければならなくなる。流れを変えるために俺はそうだ！と話を切り出す。

「今日は午前中に終わるし午後みんなでどこか遊ばないか？」

「純一から言い出すとは珍しい。でもいいじゃん！」

莉桜がそう言うのと周りも同調する。どこに行こうかと話し合って最終的にボウリングに決定し、磯貝と片岡が場所などを細かく決めて

いる。委員長の2人はもうすっかり役職が板についてきている。

莉桜が俺の背中であく早く着かないのかくとジタバタしているの自分で歩いたほうが速いんじゃないか？と言って降ろそうとしたら、絶対に降りませーんと舌を出しながら笑顔で拒否してきた。不覚にも可愛いと思っただが悔しいので絶対に言っただけやるもんか。

*

終業式も無事に終わりE組は早く旧校舎に戻るよう促された。無事と言っているのかはわからないが、校長先生の話のときや司会進行の教頭先生がいちいちE組いじりをしてくるのが鬱陶しかったらしい。なぜらしいという言い方なのかというと、俺は立ちながらボートを漕いでいたので知らないからだ。

ともあれこれで旧校舎に戻って雪村先生の話聞いて帰るだけだなど体育館を出ようとしたときに俺は本校舎の女子の集団に南雲君！と呼び止められた。

「どうした、何か用か？」

「こ、これを渡したくて！」

集団の1人が意を決したかのように手紙を渡してきた。おそらくラブレターだろう。受け取らない理由もないのでありがとうと返すと、女子の集団は足早に離れていった。受け取った俺もすぐにみんなの輪に戻る。前原にさすがだなと言われた。

本校舎にも一応E組用の靴箱がある。そこで集会のときなどに靴を履き替える。なぜ突然こんな話をするかというと俺の靴箱には本校舎に来たときにはなかったものがあつたからだ、ラブレターだ。それを発見した岡島が靴箱にラブレターって都市伝説じゃなかったんだなーと言って手に取ったので俺は岡島の手から素早く手紙を取り返す。

「こういうのは他の人に見られたら嫌だと思っただけから」

「こ、ごめん。そうだよな」

俺と岡島のやり取りを見たE組のみんなはイケメンだ！と口を揃

えて言った。いやいや普通に考えて自分の書いた手紙を出した相手以外が読むのは嫌でしょ。

男子勢によつて色男などとからかわれながら裏山を登り始める。すると倉橋が純君〜と言つて俺の隣に来た。

「俺の事そんな呼び方してたっけ？」

「莉桜ちゃんと凜香ちゃんが下の名前で呼んでたから。私なりの呼び方だよ〜嫌だった？」

「いや、別に嫌じゃないよ。それでどうした？」

「ずっと立つてて疲れちゃったからおぶつてほしいな〜つて！」

俺は察した。莉桜が言っていた押しに弱いということ聞いていたなど。

「俺は午後のボウリングに備えて体力を温存しなきゃならないんだ、すまん」

「え〜、ダメなの〜？」

ぐつ上目遣いとは、さてはおねだり上手だな。これで手を打とうじゃないかと俺は上着のポケットから桃味の飴を渡す。

「いいの？ やった〜♪」

倉橋はそう言つてジャンプしながら喜びを表現している。その反応可愛いな、てか疲れてたのはやっぱり嘘かよ。上機嫌な倉橋を見ていると凜香が話しかけてきた。

「純一、私も飴が欲しいんだけど」

「んっ…ほい」

「ありがとう。ていうかラブレターもらつてるところ久しぶりに見たよ」

「あーかもなー。なに？嫉妬してくれてるの？」

「バ、バカじゃないの。別に嫉妬なんかしてないんだから、カン違いしないでよね」

冗談だから怒らないでくれと凜香に謝る。すると矢田も話に参加してきた。

「私は誰かがラブレターを渡すところなんて初めて見たよ」

「矢田は誰かに書いたこととかないのか？」

「んー…あつ！書いたことあるよ！小さいときにパパに結婚してくださいって紙に書いて渡したよ！」

…矢田の父さんを見たことはないが、デレデレで受けとる姿が容易に想像できる。

「そうなのか、矢田の父さん喜んでたろ」

「うん！桃花は絶対に嫁に出さんって雛人形を片付けるのがすごく遅くなったよ」

「…なかなか愉快的なパパさんで」

私のところもそういえば片付けてないと凜香が小さく言った。まあ確かにこんな可愛い娘がいたら嫁には出したくなくなるだろうな。生憎我が家は男だけなのでその感覚はわからないが。凜香と矢田が家での娘に対してのお父さんあるあるを話してるのに相づちを打ちながら山を登っていると旧校舎が見えてきた。

エネルギーシユに溢れた雪村先生が一番乗りく♪と教室に入ってしまった。やつぱり先生最近機嫌がいいな。

学校が終わるとすぐに家に帰って遊ぶ準備をする。13時半に柗ヶ丘駅に集合とのことなので時間に遅れないようにする。俺たちはまだ中学生で外食にお金をかけられないので昼食は各自家で取って来るようにと磯貝から指示があった。俺は適当にカップ麺を作って食べ身支度を整えて家を出る。少しのんびりしすぎたため時間ギリギリになりそうだ。俺の格好は白を基調としたシャツに軽くカーディガンを羽織り、下はデニムのジョガーパンツとラフなスタイルだ。

腕時計を何度もチラ見しながらいつもより気持ち速めに歩いていると柗ヶ丘駅が見えてきた。時刻は13時25分で俺以外全員到着してるっぽい。

「ごめん、待ったー？」

「大丈夫、今来たところだよ」

「ふっ最高の答えだ。…1000点やろう」

「あんたたちバカなの？」

俺と前原のやり取りを見て凜香がそう言う。不破がないから漫画ネタが通じるやつがないのが悲しい。磯貝がこれで全員揃ったなどと言った。俺は誰が来るのか把握していないのでここでメンバーを見る。

男子は磯貝、渚、友人、千葉、俺、前原

女子は岡野、片岡、神崎、倉橋、莉桜、凜香と綺麗に男女6人ずつの計12人のメンバーだ。矢田がいないのは珍しいなと片岡に聞くと病弱な弟さんの看病だとか。なんて良くできた娘なんだ、矢田の父さんが嫁に出さんと言っている気持ちがよくわかった。

それじゃあボウリング場に向かおうと磯貝が先導する。みんなはそれに付いて行く形で歩き始める。俺は財布は忘れてないよなとクラッチバッグの中身を確認していると凜香が話しかけてきた。

「さっきの1000点やろうってなに？何かのネタ？」

「あーあれはバガボンドって漫画に出てくる伊藤一刀斎ってキャラのセリフ」

「ふうん。純一って割と何でも詳しいよね、漫画とか映画とか」

「家で時間さえあれば見てるからなー。話変わるけど凜香そのハット似合ってるな、服装もオシヤレだし」

「あ、ありがとう…。純一も似合ってるよ」

「お、おう。素直に褒められるとは思わなかったからビックリしたわ」

凜香がどういう意味？とジト目で見てきたのでそのまんまの意味だよと返す。莉桜がヒューと言いながら会話に入ってくる。

「お熱いねー二人ともー。ちなみに私はどう？純一」

そう言っただけで莉桜はその場で器用に1回転する。シャツにジーンズというシンプルな服装だが女子の中では身長の高いほうである莉桜にピッタリな服装だと思う。

「あー世界一可愛いよー」

「うわー…適当ー」

「まあ、似合ってるぞ」

「そう？どうもどうも」

そう言つて莉桜はニシシと笑う。莉桜は女子一人一人を指差してファツションの評価を促してきた。

「ひなたは？」

「一番動きやすそう、似合ってる」

「メグは？」

「なんかカッコいい、似合ってる」

「神崎ちゃんは？」

「一番清楚な感じ、似合ってる」

「陽菜乃は？」

「なんかふわふわしてる、似合ってる」

「：最後似合ってるしか言つてないけど適当じゃない？」

「いやちゃんと見た感想を言つてるけど：」

俺の評価間違つてないよな？と男子陣に同意を促すとみんなはうんと答えた。ほらね、間違つてない。前原は岡野にお前も女らしい格好似合うのなと言つて脛を思い切り蹴られてた。なぜそこでお前はデリカシーがなくなる？

そうこうしていると駅から一番近いボウリング場に到着した。ボウリング場というよりゲーセンとか色々な遊戯施設がある場所だ。要するにラウンドワンみたいなのところと言えばイメージしやすいだろう。

磯貝と片岡が受付をしている。何ゲームやるかわからないのでとりあえず投げ放題にしたらしい。2ゲームやれば元が取れるらしく最低2ゲームやるぞと磯貝は意気込んでいる。

磯貝が盛り上げるために罰ゲームを用意したと説明を始めた。

3人1チームの計4チームに分かれ、最初の2ゲームでの合計点数が最下位のチームが1位のチームに飲み物を買うという罰ゲームを行うらしい。そのため出来るだけ力が平均的になるように上手いと思う人は自己申告で名乗り出てそれを均等に分けていくとのこと。

上手いと自己申告したのは磯貝、千葉、前原、片岡のちょうど4人で、後は俺を除いて経験者。みんなにやったことないっていうのが意

外と言われたが中学生でボーリングをやったことないなんてザラにいるらしく特にそれ以上何も言われなかった。ちなみになぜ俺が今までボーリングをやっていないかという腕や指を痛めたくなかったからだ。

チーム分けの結果は、

A：磯貝、友人、神崎

B：千葉、倉橋、凜香

C：俺、前原、岡野

D：渚、莉桜、片岡

となった。Dチームはパツと見女子しかいないように見える。どうやら莉桜も同じ事を考えたようで女子3人組くと言つて肩を組んでる。何度も言うようだが渚は男だからな。

始める前に俺は前原からレクチャーを受ける。ボールの持ち方から最低限怪我をしないようにやらない方がいいことなどを教わる。点数の計算法を聞こうとしたらモニターに合計点数が表示されるから別に覚えなくてもいいぞと言われた。最初に試投が出来るから俺の投げ方を真似れば大丈夫だからと笑う前原は自信満々だ。

そして前原が投げる。おーテレビとかでよく見る投げ方や。…ストライクやんけ。すると岡野と前原はイエーイとハイタッチをしてそのまま俺にもハイタッチを求めてくる。イエーイ。…どうやらボーリングはストライク、スペアを取るところやってハイタッチをするのが習わしなんだとか。それを聞いたときにふと友人に目をやると神崎とハイタッチをしたらしく顔が緩んでいた。幸せそうで何よりです。

岡野に南雲君の番だよと言われたので先程の前原の投げ方を真似て投げてみる。…むっ、前原みたいに曲がらないな。てか端の3ピンしか倒れてねえ。

俺がピンのボールの行く末を見守つてから後ろを振り替えるとみんなは無言で俺らの卓のモニターを見ている。

「…あのーコメントがないと寂しいんですけどー」

「…いや40キロ越えてるの初めて見たから言葉が出ない」

「1ピンだけしか倒れないコースなのにピンの跳ね方がすごくて巻き添えで倒してる…」

「…ピンが可哀想」

みんな思い思いの感想を口にする。ていうかピンが可哀想ってなんだよ、ガーターとかでピンが倒れないほうが可哀想だろ。

「それよりもだ。純一はちよつと力強く投げすぎだ、もっと力を抜いてコントロール重視でも大丈夫だ」

「ほーん、そんなものなのか。なんかコツとかある？」

「レーンの手前に黒の三角形があるだろ？ エイムスパットって言うんだけどあれを目印に投げると安定するぞ」

「おー全然気づかなかった。ちなみにカーブってどうやって投げてんの？」

「俺は2本指で持つて投げてる、まあ本当は3本指で投げなきゃダメなんだけど俺たちはプロじゃないからな」

「なるほどなーでも今日は初めてだしストレートだけでいくよ」

前原もそれがいいと言う。

さて2投目だ。前原に言われたことを守りつつ三角形をよく見て投げる。綺麗に真ん中にいったが1ピンだけ残ってしまった。

「おー2回目にしてこれなら1番をとれるぞ！」

「南雲君も出来そうだし充分狙えるよ！」

そう2人は盛り上がっている。俺も負けじと最下位だけは避けるぞ！というのと2人にそりやそうだと返される。お前らなんか息合ってるな。

他のチームも試投が終わり、いよいよゲームが始まる。第一投の前原がストライクを取り良いスタートを切った。

1ゲーム目終了時点での各チームの点数は

A : スコア 3 3 4 : 磯貝 1 4 0、 杉野 1 0 2、 神崎 8 6

B : スコア 3 4 6 : 千葉 1 6 1、 倉橋 7 2、 凜香 1 1 3

C : スコア388 : 前原 174、 俺 103、 岡野 111
D : スコア384 : 渚 108、 片岡 134、 莉桜 142
となっていた。

俺たちCチームは前原が上手いのはもちろんだが俺がビキナーズラックかはわからないがそこそこの点数を取って現在一位である。しかしスコアを見て少々おかしい部分があるので本人に直接聞いてみる。

「なあ莉桜、お前上手くないか？」

「そう？たまたまでしょ、たまたま」

そう言った莉桜は悪戯な笑みを浮かべている。俺はそれを見て確信する。こいつ自己申告のときに隠しやがったなど。それでも磯貝は説明のときに上手いと思う人は自己申告で名乗り出てほしいと説明したので何もルールに引つ掛からない。

「さすが莉桜、小賢しいな」

「賢しいと言いなさい、賢しいと」

清々しいまでに堂々としているので思わず笑ってしまう。前原と岡野は俄然やる気が出たらしく燃えている。第2ゲームが始まるうとしたそのとき事件が起きた。

「あれー？前原君？」

女子の声がした方向を見るとそこそこ可愛い感じのセミロングの女子がいた。名前を呼ばれた前原はというとおっ久しぶりーと言いながらその子との会話を始めた。

みんなはやれやれこの男はという感じだったが岡野だけは違う反応を示していて、段々と不機嫌になっていくのが目に見えてわかった。さすがにこの雰囲気でもウリングをしたくなかったので俺は岡野に話しかける。

「岡野？喉乾いてないか？何か買ってくるか？」

「大丈夫、乾いていない」

一蹴された。みんなから同情の視線を受ける。岡野がなぜ不機嫌になったかはなんとなく察したが状況を打破しないことには何も始まらない。くそー岡野がダメなら前原をどうにかするしかない。

「おーい前原、話に花を咲かせてるところ申し訳ないんだがそろそろ2ゲーム目を始めたいんだが」

「ああ悪い悪い」

「ごめんね前原君、私もグループのところに戻らなきゃ！今度また遊ぼうねー！」

「遊べるとき連絡くれよなー」

ふう、どうやら引き戻すことに成功したようだ。前原とCチームの卓に戻るときつきより更に不機嫌になった岡野がいた。片岡はご機嫌取りに失敗したのかこちらに両手を合わせて頭を下げている。

「あれ？岡野？なに怒ってんだよー、ほら始めるぞー」
「…うん」

いやお前が原因だよと心の中でみんなツツコんだに違いない。岡野の今の返事の怒気を聞いて普通にボーリングが出来るお前のメンタルを見習いたいよ。

…と思ってたが顔には出てないだけで前原のスコアがた落ちやんけ。1ゲーム目の点数はどこへやら。俺たちCチームは全員がスコアを大きく落とした。

*

結果、1位は片岡率いるDチームとなった。最下位はもちろん俺たちCチーム。

飲み物を自販機で奢るときに莉桜のやつは一番高いレツドブルにしがった。今夜寝られなくて明日学校に寝坊すればいいのにか考えたが、明日から春休みなので何も影響がなかった。ジーザス。

ボーリングが終了し、みんなはゲームセンターでUFOキャッチャーなどをやっている。俺が後ろから見ていると前原がこそつと話しかけてきた。

「おい純一、頼みがある」

「…用件を聞こうか」

「岡野機嫌悪かったじゃん？たぶん俺のせいだと思っただけで俺から謝っても聞いてもらえなさそうだからこれを渡して間接的に謝ってくれないか？」

「まあ別に構わんが。許してもらえなくても俺のせいにするなよ？」

「OKOK、じゃあ頼んだ！」

そう言うのと前原は離れていった。岡野はどこだと探すとみんなとは別のUFOキャッチャーの前に立っていた。俺はなぜ前原がこれを渡してほしいと言ったのかがわかり、そのまま岡野に話しかける。

「よっ岡野、元気か？」

「元気ではないけど落ち着いた。…さっきは当たってごめんね」

「いいよいいよ、その代わり俺が怒って八つ当たりしたときは多目に見てくれよう…」

「ふふつなにそれ…あれ？その手に持ってるのって」

「ああ、これは前原がお前に渡してくれて、あとごめんって伝えてほしいって」

「…全くあの男は直接謝りにこいってのに」

「岡野、前原を許してやってくれよ。あいつキャラキャラしてるけどいいやつだぜ？見てたからわかると思うけど今日初めてボーリングする俺にも丁寧の説明してくれたしさ」

「それはわかってるけどさ…」

「それに今渡したぬいぐるみもさ、たぶん前原が岡野が欲しがってるってわかったから急いで取って謝る準備したと思うんだ。早く岡野と仲直りしたくてさ」

「ふふっ」

「おっ笑った」

「だって南雲君は全然悪くないのに前原のために必死に弁明してるんだもん、それが面白くて。…前原にありがとうって伝えてもらっていい？」

「おう、お安いご用だ」

「…本当はさ、他の女の子と仲良くしてようが私は彼女でもないし前原が怒られる謂れはないと思うんだ。でも仲良くしてるのを見たら不機嫌になっちゃう自分が女の子と仲良くしてる前原以上に嫌」

「…答えたくなかったら無視してもいいけど、前原の事好きなんだろう？」

「…うん。好きかはわからないけど確実に気になってはいる」

「そっか、まあ俺からは頑張れよとしか言えないな」

「…南雲君は好きな人いないの？ラブレターもらったりモテるでしょ」

岡野の質問に俺は考えてから答える。

「好きな人はいないな。たぶん今の身の回りの関係が心地よくて、それが壊れるのが嫌なんだと思う。ラブレターをもらうのは一言二言しか話したことがない人からがほとんどだから告白してきた相手に付き合うことはできないってすぐに返事ができるのかな？…でも親しい人から告白されたことはまだないし付き合うとかって本格的に考えたことないからそういうのはわからないんだ——」

俺は親しいと思う人を思い浮かべてから言葉を繋ぐ。

「でももし、親しい人から想いを伝えられたらちやんと答えを見つけないとダメだよな。仲の良い友達の間係を続けたいとかも俺のエゴだと思うし…、ごめん上手くまとまらないや」

俺は長く話続けてしまったかなと思ってたら岡野はずっと真剣な顔をして話を聞いてくれていた。

「ううん、そんなことないよ。きつと南雲君に想われてる人は幸せだと思うな、相思相愛かは別として」

「最後の一言がなかったらもつと嬉しかったんだがな」

「私、嘘つけないから」

「それは今日知ったよ。お互いとりあえず頑張ろうぜ」

「うん！南雲君に好きな人ができたら教えてね！」

「それはケースバイケースだな」

なにそれーと岡野は笑う。岡野と話してる中で、恋愛について考えたが言葉にしようにも上手くまとまらなかった。よく話に聞くが恋

愛に正解はないというのはこういうところからきてるのかなと思つた。理屈ではない、人と人が関わることによつて生じる化学反応。中学生の俺たちではまだわからない、大人になってからわかる日が来るのだろうか。

ボーリングを始めてやつて良い経験になったのもそうだが、普段意識しないことについて考える良いきっかけとなった日だと思つた。

*

くその日の夜、個人LINEく

純一：おーいまだ起きてるかー

凜香：起きてる

凜香：どうしたの？

純一：いやなんとなく寝れなくて

純一：話し相手が欲しかった

凜香：寝るも何もまだ10時だけど

純一：なんとなく疲れて寝る準備したけど

純一：目が冴えちゃつてな

凜香：わかる

凜香：疲れて逆に眠れない感覚

純一：そうそう、まさに今その感覚

凜香：別に春休みだから寝なくてもいいんじゃない？

純一：いや明日予定あるから寝たい

凜香：どこか行くの？

純一：凜香と隣町のワンにゃんショーに行く

凜香：は？私知らないんだけど

純一：これから誘うつもり

純一：明日予定空いてる？

凜香：空いてるからいいけど：

凜香：なんで私？

純一：一度前原とペットショップ行つたけど
純一：女の人から声かけられるの多かつたから
純一：女子連れてれば大丈夫かなって
純一：あと凜香といると色々と楽
凜香：ふーん、楽つてどういうこと？
純一：他の人と違って気使わなくていいし
純一：俺の事わかつてる感じするから
凜香：まあ2年間一緒にいればね
凜香：それで何時から？
純一：開園は10時で閉園が18時だから
純一：凜香の都合の良い時間でいいよ
凜香：じゃあ12時半に駅に集合で
純一：おーけー、楽しみにしてる
凜香：私も
凜香：そういえばボーリングやったことなかつたって
純一：おーなかつたよー
凜香：球速くてビックリした
純一：そんなに速かつたのか？
純一：いまいちピンとこない
凜香：私筋力ないからちよつと憧れる
純一：凜香細いからな
純一：UFOキャッチャーはなんか取つたのか？
凜香：ちよつと欲しいのはあつたけど
凜香：小遣いも限られてるし我慢した
純一：偉いな
純一：ちなみに何欲しかったの？
凜香：猫のぬいぐるみ
純一：そんなのあつたのか、気づかなかつた
凜香：岡野と話してたもんね
純一：ああなんか八つ当たりしてごめんって
凜香：素直だけど直情型っぽいよね

純一：あんまり話したことないのか？

凜香：うん、クラスも別だったし

純一：俺もクラスで話したことないやつ結構いるし

純一：そんなもんか

凜香：キツカケあったら今度話してみる

凜香：そういえば純一から借りた小説有希子がおもしろいつて

純一：おーそれはよかった

凜香：私にも今度なにか貸して

純一：OK、明日何か持って行くよ

純一：ちなみにジャンルは？

凜香：ミステリーがいいかな

純一：夢い羊たちの祝宴って読んだことある？

凜香：ない、面白いの？

純一：短編が続くから読みやすいのと、その短編ごとに緩い繋がりがあがるからそれに気づいたらより楽しめる感じかな

凜香：面白そう、楽しみにしてる

純一：忘れずに持って行くよ

純一：眠くなってきたから名残惜しいけど寝るかな

凜香：おやすみ、私も話せて楽しかった

純一：おやすみ、明日楽しみにしてるよ

第0. 7話 犬猫の時間

凜香と隣町のワンにゃんショーに行く約束をしたので待ち合わせの場所へと行く。集合の時間より10分ほど早く着いた。どうやら凜香はまだ来てないらしい、そう思っているとポケットの携帯が震えたので確認する。

凜香：12時半ちょうどに着く

純一：了解

純一：黒ぶちの伊達眼鏡してるからいつもと違う

純一：あと白い靴履してる

凜香：上着とかを教えてくださいましたほうが見つけやすいんですけど

純一：それは着いてからのお楽しみで

凜香：わかった

凜香の返信を確認して俺は携帯をしまい貸す予定の本を開く。この本の最大の面白さは各短編の最後の一行がどんでん返しとは言わないけどその一行によって作品の全容が明らかになる感じだと思っている。高尚な印象は受けないので本を普段読まない人にも勧めやすい一冊に感じる。気に入ってもらえるといいなと何ページか捲っているとき純一と声をかけられた。

「オッス、昨日ぶり」

「ごめんね、待たせちゃって」

「いや時間的に遅れてないから気にしなくていいよ。いつもと髪型違うのな」

「うん、せっかくだし変えてみようかなって。どう？」

「似合ってるし服装にあってると思う」

「そう、ありがとう。純一も眼鏡似合ってるよ」

「それはよかった。似合わないとは思ってないけどそう言われたら安心する」

ジャズダンスという洒落た趣味を持っている凜香は普段の服装もオシャレなので服装を褒められると普通の人に褒められるより嬉しく感じる。ちなみに凜香の髪型はサイドアップにっていて、服装も動

きやすい感じのジーンズスタイルだ。服装に安堵していると凜香がところろでと話を続ける。

「隣町までどうやって行くの?」

「ああ、あと10分くらい待ってればバスが来るからそれに乗っていい」

じゃあまずバス停に向かうよと凜香が先に歩き出す。男的には先導したほうが良いのかもしれないけれど、これが俺と凜香の距離感。俺が先に立つことがあれば今みたいに凜香が先に立つこともある。それは他の女子にはないものに見える。

バス停はそこそこ混んでいて席に座れるかどうかというものだった。バスが来たので乗り込むと案の定待ち合い客全員が座れなく俺と凜香を含めた5人が立つこととなった。出発時刻となりバスが走り出す、公共機関ということもあり会話はあまりしない。目的地まで約20分、停留所は10個ほどだったか。そんなことを考える。

暇だなーと車内にある看板を目で追っていると目の前に座ってる乗客二人の間の降車ボタンがあり、そのボタンに泥を拭いたような痕がついていることに気がついた。やんちゃな子供でも乗ったかなーと思いつつ携帯に目を移す。

5分ほど経過したときにふと目の前を見ると先程の降車ボタンの泥が拭われていた。このボタンを押す可能性があるのは俺と凜香とそのボタンの前後の一人がけに座っている乗客の2人の4人である。

席が空いた場合に残りの時間を凜香に座ってもらうために俺はどちらの乗客が降りるのかを推理して座席をプレゼントしようと考えた。

さて、と情報収集を開始する。前の座席に座っているのはクリーム色のコートにイヤホンをつけ、ポケットに手を入れて外を見ている大人の女性。後ろの座席には車の揺れに耐えるかのように背中を丸めている老女。俺と凜香はまだ降りないので降りるのは2人のどちらかだが2人とも降りる気配はない。本などを読んでいて閉じるなどの行動をしてくれたらわかりやすいのだけだ。

ボタンの汚れが拭かれているので手袋でもつけているのかと思いで二人の手元を見てみると老人は手袋をつけているが女性はポケットに手を入れていたのでわからない。

しかしここで俺は考える。別に手袋をしていなくても泥を拭うことは可能なのではないかと。ボタンを押すという行為で汚れが消えるということは落ちやすい汚れであり別に手袋はなくても消えると推測する。

他に何かないかなと女性に目をやるとバッグからマフラーがはみ出していた。暑い車内では確かにマフラーはしていられない、つまりマフラーをしていないということはまだバスから降りないのでは？：うーん少し弱いな。そもそも狭い車内でマフラーをつけるとは考えにくいし外に出てからつけるかもしれないし、もっと決定的な何かはないか。

バスを降りるときには何が必要か、そうICカード又は運賃だ。ポケットに手を入れている女性は定期入れをポケット内で掴んでいるという線はないか。加えて普通は膝に置いてあるバッグなどは落ちないように手でも添えはしないだろうか？そう考える。

ましてや女性は男性と違い化粧道具などを持ち歩く人が多い。バッグからマフラーが顔を出しているということはそれらの小物が散乱する可能性が非常に高い。つまりバッグを支えずポケットに手を入れているということは定期入れを手で掴んでいるということだ。それに今は信号待ちでバスは揺れていない。

バスが走り出すと女性が降りるのが決定的となった。ポケットから手を出しバッグを落ちないように掴んだのだがその手には定期入れが握られていた。俺は勝利を確信して少し移動をして凜香に声をかける。

「凜香、もう少しこっち側来て」

「どうして？」

「ちよっと良いことがある」

凜香は不思議そうな顔をしながらも少し移動して女性の目の前に立つ形となった。

特に混んでいる訳ではないから普通に席が空いたときに座っていよと譲ればいいじゃんと思う人もいるかもしれないが、凜香の性格的に目の前の席が空いたら目の前に立っている人が座るべきと座らない可能性が非常に高い。なので俺はどちらの乗客が降りるかを推理して座席の目の前に立つよう誘導して座ってもらおうと考えたわけだ。

運転手が停留所の名前を言い、バスの扉が開く。推理通り女性は席を立ち降りていく。それに付いて行くように遅れて老女も降りていった。

：2人とも降りるのかよ。俺は釈然としない思いを胸に抱えながら席に座る。もちろん凜香も空いた席に座る。

オモイコミ、ダメ、ゼツタイ。外の景色を見ながら俺は今日の出来事を教訓にしようと思った。

*

バスから降りたときに凜香はそういえばと聞いてきた。

「ちよつと良いことがあるって言ってたけど、あれってなんだったの？」

「あーそれはだなー…」

俺はバスの中での推理を話す。それを聞いた凜香はいつものクルさはどこへ？と思うくらい笑っていた。

「別に気にしなくていいのに」

「いやー女子が立って男が座るっておかしいじゃん」

「私は気にしないよ」

「俺が気にするから今後は俺が譲ったら座るようお願いします」

「わかったよ」

それに推理が無駄になっても困るしねと凜香は悪戯な笑みを浮かべながら言ってきた。くそー悔しいが可愛いので許す。そうこう話していると目的地の会場に到着する。心なしか凜香の頬が緩んでいる気がする。

「聞くのかなり遅い気がするけど、犬猫好き？」

「猫がすごい好き、みんなには秘密にしているけど」

「ほーん、秘密にしているのはなぜ？」

「…だって私のキャラじゃないし」

「まあ確かに普段の凜香からは想像はできないな」

そう言えばボウリングのときに猫のぬいぐるみ欲しがってたなと思いつく。あまり猫が好きということは口外しないようにしようと思いつく。

俺と凜香はまず犬のコーナーへと足を伸ばす。猫を先に行くかと提案したら満足して帰っちゃいそうだからと犬を先にすることになった。満足して帰っちゃうって猫好きすぎでしょ。俺は犬派か猫派かと聞かれると僅差で犬のほうが好きなので犬派と答えている。両方ともめっちゃ好きなのでワンにゃんショーは天国かな？と思うくらいだ。

犬との触れ合い広場で今は2人共犬と戯れている。猫が好きと言っていたが犬も好きらしく笑顔が眩しい。いや、ほんとに。普段のクールさが微塵もない。凜香と子犬の写真を撮ろうとしたが、撮影はご遠慮くださいという注意書きを思いだし断念した。せめて忘れないうようにこの光景を目に焼き付けておこうと思う。

満足したのか、次はお待ちかね猫のコーナーへと行く。犬のときより数倍眩しい笑顔が見れた。太陽かかって思うくらい、猫と凜香が重なったときにようやく直視できる感じ。日食かよ、と心で一人でツツコミを入れる。

凜香は満足したのか猫のコーナーを後にする。犬は時間にして約30分、猫は約1時間。単純な話、犬の倍は猫のことが好きらしい。さて次はどうするかと凜香に尋ねる。

「うーん…確かカフェあったよね？そこで休まない？」

「そうだな、一度休憩するか」

ということできぎカフェへ。

「本当に猫が好きなんだな、いつもの凜香と180度違ってビックリしたわ」

「…忘れて」

今ごろになつて恥ずかしくなつてきたのか顔が赤くなつている。

「あれが世間でよく言われているギャップ萌えと言われるものかと実感したよ」

「忘れて」

「…はい」

有無を言わさない凜香の言葉に思わず返事をしてしまった。くそー、もうからかうことができない。

「あれ？純君と凜香ちゃん？」

「あつほんとか、おーい！」

声のした方を見ると倉橋と矢田がいた。

「おー倉橋と矢田か、倉橋はやっぱりと思つたが矢田も来てたのか」

「うん、陽菜ちゃんに誘われてきたんだ」

「桃花ちゃんと来たから誘つたんだ、凜香ちゃん犬とか猫好きだったの〜？」

「うん、そうだよ」

「凜香は俺が誘つたんだ、一人で回るのもなんだし」

「そうだったんだ、てことは南雲君と凜香はデート？」

「すまん、その辺りは全く考えもせず誘つてしまった」

「気にしないで大丈夫だよ、私も犬と猫楽しみだったし」

倉橋と矢田はなんだーと言っている、意識してなかったが確かにデート言われればデートだ。なんかそう思つてたらちよつと恥ずかしくなつてきた。凜香の方をちらと見ると凜香も恥ずかしいのか少し俯き気味な気がする。

「ところで2人はどこに行くの？」

「ああ、俺たちは一度カフェで休憩しようかなと思つて」

「そうなんだ、もしよかつたら一緒に回らない？人が多いほうが楽しいと思つて」

「俺はオツケーだけど、凜香は？」

「うん、それでいいよ」

「じゃあカフェへと行こう〜」

了承の返事をする。と倉橋を先頭にカフェへと移動する。俺は凜香にだけ聞こえるようにこそつと話しかけた。

「ごめんな、考えなしに誘っちゃって。今度から気をつけるよ」

「さっきも行ったけど気にしなくていいよ、私は誘ってもらえて嬉しかったし。また遊びに行くとき誘ってよ」

「そう言ってもらえると助かる、ていうか俺からも誘うけど凜香からも誘ってくれよ」

気が向いたらねと凜香は笑う。話ながら移動しているとカフェに到着した。席に着いてメニューを開く。ワんにゃんシヨが開催に合わせて開かれたカフェなのでメニューは多くはないがオーソドックスなもの是一通りあった。

俺はコーヒードで女子3人は紅茶、あとはそれぞれ違う味のケーキを頼んだ。こうすれば違う味も楽しめるからな。

「俺の家は特にペットは飼っていないんだが3人は何か飼ってたりするの?」

「私の家は両親二人とも働いてるから飼ってないよ」

「私は弟の体が弱くてペットどころじゃない感じかな?」

「私は可愛い犬飼ってるよ、ドーベルマン!」

「ド、ドーベルマン…。可愛い…のか?」

「カッコ可愛いよ、お兄ちゃん代わりだから!」

ドーベルマン飼ってる人っているんだなく、警察犬とかのイメージしかないからビックリだ。倉橋のペットトークを聞いていると店員さんが飲み物とケーキを持ってきたのでそれぞれ食べ飲み始める。

「へ〜純君コーヒードブラックで飲むんだ」

「ああ、甘いものを食べるときだけな。普段はもっぱら雪印かマックスコーヒードだよ」

「雪印のコーヒード美味しいよね〜」

「それでもブラックでコーヒードを飲めるのすごいと思うな」

「苦いだけならいいけど酸味が強いのはダメなんだよ。だから缶コーヒードとか買うときはちゃんと文字を見てから買ってる」

「なに、缶に書いてある文字見たら酸味あるかとかわかるの?」

凜香の問いに俺はウンチクみたいなこと言うの好きくないけどと答える。

「大雑把に言うのと粗挽きが酸味、細挽きが苦味がそれぞれ強い。豆によつて違いはあるけど」

「へ〜南雲君よく知ってるね」

「酸味が少ないのを選ぶために色々調べたからな、まあこの話は置いていてケーキ食おうぜ」

「そうだね〜」

それぞれの選んだケーキは俺がチョコレートケーキ、凜香がチーズケーキ、矢田がシフォンケーキ、倉橋がショートケーキとなっている。

女子同士はお互いに食べさせあい、所謂あーんをして食べてるわけだが俺は恥ずかしくて絶対に無理なので押しに負けず皿に分けて渡すという方式にしようと思つている。そんなことを頭で考えていると凜香が自分のケーキを切つてこちらの皿に乗せてきた。さすが凜香。

「てんきゅ」

「純一のも頂戴よ」

「もちろん…ほれ」

「ありがとう、…甘くて美味しい」

「チーズケーキは甘すぎなくていくくらでも食べれるな」

「ふふっそれは無理でしょ」

「純君の私にも頂戴〜」

「私も南雲君のチョコケーキ欲しいな」

「おー今切るから暫し待たれい」

俺はフォークで食べやすい大きさにカットしてそれぞれの皿に乗つける。矢田も自分のケーキを切つてこちらの皿に渡す。よし良い流れだと思つていると倉橋があーんとこちらに向けてケーキの刺さったフォークを差し出している。

「あの一倉橋さん？恥ずかしいのでお皿に乗っけていただいてよろしくって?」

「何その喋り方〜いいから食べなよ〜」

倉橋が意識していないものを俺が断るのもおかしいかとあーんともらう。：ショートケーキのほうがチョコケーキより甘いな、いやそんなはずはないんだけど。雰囲気か？倉橋のゆるふわ雰囲気が足されて甘くなっているのか？甘党の方は倉橋と付き合えば将来安泰じゃないか。

「美味しいけど同級生のあーんは恥ずかしいので次からはもうやらな
いからな」

「食べさせてもらったほうが美味しいんだよ、私の家の犬も手であげたほうがよく食べるんだよ」

「：俺は犬と一緒に」

倉橋はそれほど異性を気にせず接してる感じだな。なんか慣れてる雰囲気から察するにおそらく男兄弟がいるなど推測する。

俺も普段は異性は意識しないが、あーんなど一歩踏み込んだような感じのアクションに関してではてんで弱い。そういう自己分析をする。だって男の子だもん。しゃーない。

ある程度休憩もできたので店を後にする。女三人寄れば姦しいという諺があるがこの三人にはそれは当てはまらなかった。ちゃんと節度を持って行動しているというか話のボリューム調整が上手いのか。単純にお喋りなやつがないのか。そこはわからないがとりあえず静かに行動している。無言というわけではないが。

俺は3人の一歩後ろに付いていくように歩いている。方向的にどうやら猫の触れ合い広場に行くようだ。猫のコーナーへと再度訪れると先程よりやや空いている位だったので色々な猫と3人は触れあっていた。俺はというと近くのベンチで座っている。遊園地で遊び疲れたお父さんみたいだなと思った。

凜香は最初に来たときみたいに笑顔ではなく凜とした感じで猫を抱っこしている。どうやら倉橋と矢田には見られたくないらしい、まあ俺もデレデレしてる顔とか他人に見られたくないから当然だなと思う。

「ひよっとして南雲か？」

「そういう君は磯貝悠馬」

「何でフルネームなんだよ」

そう言つて磯貝は笑う、ふと見ると後ろに子供がいたので磯貝に尋ねる。

「弟と妹？」

「うん、ほら兄ちゃんの学校の友達の南雲お兄ちゃんだよ。ちゃんと挨拶して」

「南雲お兄ちゃんこんにちはー」

「おーこんにちは！元気で良いな」

「元氣すぎて困つてるくらいだよ、今日は一人で来たのか？」

「子供は元氣すぎるくらいがちょうどいいんじゃないか？俺は凜香と2人で来たんだけどさつき倉橋と矢田と偶然会つて一緒に行動している」

「そうなのか、じゃあ3人にも声をかけてくるかな」

そう言つて磯貝は弟たちを連れて3人のところへと行った、雰囲気から察するにおそらく磯貝の弟たちを含めて猫と戯れるみたいだ。
：と思つていたら磯貝だけがこちらに戻つてきた。

「どうした、こっちに戻つてきて」

「いや、南雲が1人で寂しいかと思つてさ」

磯貝はカッコいいとか抜きに良いやつだ。それに頭もいい、この間クラスで行つた小テストでも満点を取つていた。E組に落ちる要素がないだけになぜ落ちたのか不思議に思つたので聞いてみることにした。

「言いたくなかつたらいいんだけどさ、どうしてE組に落ちたんだ？」

「うーん：簡単に言うるとアルバイトしてるのが学校にバレてそれで落ちたんだ」

「重度な校則違反で落ちたつて感じか」

「うん。：俺が中学1年生のときに父さんが交通事故で他界しちゃつてさ、それで家計の足しにでもなればと思つてバイトしてたんだ」

「そうだったのか：ごめんな嫌なこと聞いちやつて」

「いいんだ、俺は気にしていないから。ただ弟たちに寂しい思いさせてないかつてことが不安で：。母さんは働いて弟たちは甘えたいの

「あまり甘えられないしさ」

「見てる感じだと弟さんたちが寂しそうには見えないな。ほら、倉橋とかと話して屈託なく笑ってるし。寂しいやつはもつとそういう笑い方するから大丈夫じゃないか？」

「そうかな…うん、そうだな！」

これだけじゃ言葉が足りないというか弱いと思っただので俺は磯貝に意を決して打ち明ける。

「…磯貝だから言うけどさ、…実は俺母親がいないんだ」

「えっそうなのか？」

「話でしか聞いたことがないんだけど、俺の母さんは体がかなり弱かったらしくて俺を出産した数日後にそのまま体力が低下して亡くなったらしい」

「…」

「さつき磯貝がさ、弟たちは母親に甘えたいと思うって言うていたけどきつと大丈夫だと思う。俺もそうだったから」

「俺も、というと？」

「誰かに甘えたいっていうときに父さんがいたんだ。磯貝の弟さんたちでいうと磯貝、お前と同じだよ。父さんが俺を構ってくれたから俺は腐らず成長できたと思う。だから磯貝の弟さんたちは大丈夫だ、俺が保証する」

「そうだったのか、ありがとな。俺を元気付けるために自分が辛いことを話してくれて」

「別に辛くないから大丈夫だ」

「嘘つけよ、涙落ちそうだぞ」

「えっ」

目に触れてみると確かに涙が零れる一歩手前だった。俺は慌ててハンカチで涙を拭く。

「これは寂しいからとかじゃなくてあれだ、雨だ」

「そっか、傘持ってきてないから止むことを願うよ」

「ああ、これ以上降らないように祈っててくれ」

磯貝はティッシュ使うかと差し出してきたがハンカチで事足りる

ので断った。とりあえず凜香たちにはバレたくない。俺は逆側を見て落ち着くのを待つ、その間磯貝は黙っていた。俺は落ち着いてきたので再度磯貝には話しかける。

「…寂しくないとかは嘘じゃないんだ。…ただ、1度くらい母さんに甘えてみたかったなって」

「そうだよな、俺の弟たちも1度も甘えたことないってことではないからな。…南雲辛いことがあったらいつでも頼ってくれよ、こういう話をした間柄だしさ」

「おう、磯貝もな」

「もちろん」

「さて、湿っぽい話も終わりにして猫と戯れるか」

「そうだな、行くか！」

磯貝と二人でみんなのところへと向かう。

俺は母親が早くに亡くなってからずっと父親と2人だった。最初から母親がいなかったが磯貝はどうだろうか？中学1年生という多感な時期に父親を亡くしている。最初からいないものならそういう風に変換できるが、今までいた人がいなくなるというのはかなり辛いはずだ。ましてや大黒柱である父親。俺も母親がいなくて辛いが磯貝はもっと辛いはずだ。けど泣き言を一切言わず前を向いて生きている。俺が後ろを向いているとは思わないが、磯貝に対してただのクラスメートというだけではなく尊敬の気持ちが生まれてきた。どうか俺たちがこれから前を向いて生きていけますように、それを願わずにはられない。

*

この日の夜、月の直径の7割は消し飛んだ。

第0. 8話 幕間

くE組の男子グループトークく

前原：お前ら今朝のニュース見たか！

三村：見た！月のやつだろ？

杉野：月？なんだそれ？

渚：月が爆発して蒸発したってやつだよ

前原：ずっと三日月なんだぞ！やばいだろ！

杉野：テレビつけたらマジだった！

菅谷：餅についている兎はもう見られないのか…

南雲：菅谷は目の付け所がSHARPだな

渚：月の兎なんて久々に聞いたよ

木村：海外とかだと見え方違うんだっけ？

岡島：女性に見えるところもあるらしいが、

岡島：もしも月が二つあればおっぱいになると思うんだ

前原：知らねえよw

南雲：それ女子の前で絶対に言うなよ

ある
千葉：色彩認識能力の違いで男女で見え方が違うって聞いたことがある

磯貝：へくそうなのか

前原：今度女の子に言ってみるよ、ありがとう千葉

南雲：思い切り付け焼き刃だな

岡島：付けると言えば最近俺は家のトイレで練習しているんだ

渚：何の練習？

岡島：みなまで聞くな…

南雲：じゃあ最初から言うな

杉野：あー察した

三村：なるほどねw

磯貝：岡島：女子の前では本当に言わないでくれよ…

木村：片岡とかめつちや冷めた目で見てるしな

岡島：そうなんだよ、片岡はエロ警察だな

岡島：バレたら取り締まられる

前原：エロ警察って響きヤバイな

三村：片岡がいやらしいみたいだ

岡島：普段が真面目なだけに、こう…ギャップがな

前原：うむ、素晴らしいな

南雲：ちよつと笑つちやつたけどそういう話は個人トークでやってくれない？w

岡島：個人トークでもしてるから

木村：尚たちが悪いなw

磯貝：ハイハイ！この話はもうやめ！

前原：じゃあ渚なんか新たな話題を提供してよ

渚：えつぼく？

岡島：渚はこのクラスに一人しかいないだろ

杉野：そうだよ、早くしろよ

渚：えつとー…今みんなまでトークしてるけど予定ある人とかはいないの？

磯貝：あつ

前原：あつ

南雲：あつ

木村：あつ

菅谷：あつ

杉野：お前らはみんな用事があったのかw

南雲：結構時間が危うい

磯貝：俺はバイトに行かなきゃいけない

前原：デートの準備をせねば

南雲：渚でんきゅ、助かった

渚：話題じゃないけどよかったのかな？

*

くE組の女子グループトークく

片岡：三日月のニュースやってたけど私達の身の回りで異常とかないよね？

矢田：ないよ！

中村：ない

原：ないよー

不破：ジャンプの発売日に影響ないから大丈夫だよ！

片岡：そう、何もなくてよかった

矢田：さすが委員長、みんなが第一って感じだね

倉橋：生態系崩れてなきやいんだけど

速水：倉橋、それは大丈夫だと思うけど

倉橋：ほんと？よかった

矢田：まだ大丈夫って決まったわけじゃ

奥田：地球には今のところ問題ないってやってましたよ

片岡：なら大丈夫だね、それよりみんな春休み満喫してる？

矢田：してるよ！陽菜ちゃんとワンにゃんショー見に行ったんだ

倉橋：凜香ちゃんと純君も途中から一緒だったよ

岡野：途中から？

中村：凜香デートしてたの!?

速水：してないよ、色々理由あって誘われた

中村：ふーん、怪しいな

矢田：南雲君もそこら辺はあまり考えてなかったって言ってたよ

中村：あいつモテンのに誰とも付き合わないからな

岡野：でも色々考えてるみたいだよ

神崎：そうなんだ

不破：うちのクラスの男子で一番かっこいいのって誰かな？

中村：磯貝か純一か前原の3人の内誰かじゃない？

原：前原君はその3人だったらちよつとなしかな

岡野：えっどうして？

矢田：うーん、そうだねー

神崎：女子みんなに声かけてたからね

岡野：あー：確かに

片岡：えっそうなの？私声かけられてないよ？

速水：委員長だから怒られると思っただんじやない？

倉橋：雷落ちたら嫌だもんね〜

片岡：私そんな怒ってるかな…？

奥田：そんなことないですよ！しっかりしてて良いと思います！

矢田：イケメグだもんね！

片岡：ならいいんだけど…

中村：じゃあ磯貝と純一のツートップってことで

倉橋：ヨーグルトベリーパフエミたいなおいしいスイーツの店誰か教えて〜

速水：すごい話変わったね

矢田：うーん…パット出てこないな

神崎：場所わからないんだけど学校の近くにハニートーストがおいしい店があるって聞いたことあるよ

中村：あー磯貝がバイトしてるところかな、たぶん

倉橋：有希ちゃん莉桜ちゃんありがとう！今度行ってみるね！

片岡：磯貝君またバイトしてるのか…

中村：短期で入ってるって言ってたよ

不破：家庭のために頑張るイケメンって漫画の世界みたいだよ！

片岡：まあ家庭の事情とかもあるし私達でカバーしていかないかね

不破：私の一言は無視ですか？

…

4月

第1話 暗殺の時間

（渚視点）

春休みを終えて僕たちは3年生となった。始業のチャイムが鳴り担任の先生が入ってくる。

「HRを始めます。日直の人は号令を！」

「き、起立!!」

日直は僕なので号令をかける。それと同時にクラスのみんなは立ち上がり銃を一斉に先生に構える。

「礼!!」

打ち合わせ通りに僕の声と同時に一斉射撃が開始される。

「おはようございます、発砲したままで結構ですので出欠を取ります。銃声の中なので大きな声で。磯貝君」

「は、はい！」

「岡島君」

「はい!!」

……

「吉田君」

「はい」

「遅刻なし……と。素晴らしい！先生とても嬉しいです」

一斉射撃なんてなかったかのように平然としている先生を見て、クラスのみんなはやや俯き気味になっている。

「残念ですねえ、今日も命中弾ゼロです。もっと工夫しましょう、できない……最高時速マツハ20の先生は殺せませんよ！」

出来ない生徒に勉強のアドバイスをするかのような軽やかな口調で先生は話をする。すると急に顔が縞々模様に変わった。

「先生を殺せるといいですねえ、卒業までに」

僕等は、殺し屋。標的は、先生。

桐ヶ丘中学校3—Eは暗殺教室。始業のベルが今日も鳴る。

何でこんな状況になったのか、3年生の初めに僕等は2つの事件に同時に遇った。

1つは月が爆発、7割方蒸発してしまい三日月しか見れなくなってしまうこと。

2つ目は始業式後のHRのとき…

「初めまして、私が月を爆発させた犯人です。来年には地球もやる予定です。君達の担任になったのでどうぞよろしく」

このときクラス全員は5、6カ所ツツコませろ！と思った。そのとき担任の先生を名乗る者の横にいるスーツの人の一人が補足のような説明を始めた。

「防衛相の烏間という者だ。ここからの話は国家機密だと理解頂きたい」

烏間さんの話を要約すると、

・担任と名乗る怪物を殺してほしい

・この生物は来年の3月に地球を破壊する

・なぜか3年E組の担任をやらせてほしいという提案をしてきた
ということらしい。ちなみに政府が承諾した理由としては教師として教室に来るのなら監視ができるし、何よりも30人も人間が至近距離で殺すチャンスを得るからと烏間さんは言っていた。

何で怪物が担任に？どうして僕らが暗殺なんか？そんな皆の声は烏間さんの次の一言でかき消された。

「成功報酬は百億円。暗殺の成功は地球を救うことなのだから当然の額だ」

そう言うと烏間さんは銃とナイフを生徒みんなに手渡した。僕は編入してきて隣の席となった茅野と顔を合わせ、この異常事態は夢ではないということを確認した。

*

く南雲視点く

変な状況になったなと思う。中学3年生になって特に変わることなく学校生活を送り普通に卒業できるはずだったのに。考えてみると月が爆発してから何もかもが変わってしまったのだろう、渚の髪型も変わったしな。

その渚はというと寺坂たちと外に出ていった。あまり渚は寺坂たちと親交があったわけではないのでキナ臭いと感じるも、おそらく暗殺の計画でも進めてるんだろう。

俺は神崎と凜香に昼飯を誘われたので友人に声をかけて4人で食べることとなった。

「お題にそって短歌を作ってみましょう、ラスト七文字を”触手なりけり”で締めてください。出来たものから今日は帰ってよし！」

触手っていつの季語だよ。先生の見た目的にタコの触手だとして：October的な感じでいくと10月で秋か？それともマダコの旬は冬だから冬の季語か？そんなアホなことを考えていると茅野が手を挙げた。

「先生しつもん」

「…？何ですか、茅野さん」

「今さらだけどさあ先生の名前なんて言うの？他の先生と区別する時不便だよ」

「名前…ですか、名乗るような名前はありませんねえ。なんなら皆さんでつけてください、でも今は課題に集中ですよ」

「はい」

そういえば名前は言ってなかったな、呼ぶときに先生という固有名詞でしか呼んでなかったけど会話の時とか不便だな。

茅野の質問に答え終わったあと先生の顔がうすいピンク色に変

わった。それと同時に渚が課題の紙を持って立ち上がった。

「お、もうできましたか。渚君」

いや、違う。殺る気だ。課題の紙の裏に対先生用のナイフを忍ばせている。まさか寺坂たちと計画したのはこれか？でもこれだけのために計画なんて必要なのか？

先生に課題の紙を手渡せる距離、つまりナイフが十分に当たる間合いに入ると同時に渚は動き出す。左の逆手でナイフを持つと先生の頭目掛けてナイフを突き刺す。しかし迫真の攻撃は空しく先生に止められていた。

「…言ったでしょう、もっと工夫を」

渚はまるで決めていたかのように先生に前から抱きつく。なんだこの暗殺と無関係な行動は？疑問に思っていると突然先生と渚が大きな音をたてて爆発した。いや先生と渚が爆発したんじゃないか？何かが爆発したんだ。

「ッしゃあやっただぜ！百億いただきイ！まさかこいつも自爆テロは予想してなかったろ！」

「おい寺坂！渚に何を持たせた！」

「あ？おもちゃの手榴弾だよ、ただし火薬を使って威力をあげてる。対先生弾がすげえ速さで飛び散るようにな」

「渚が死んでたらどうする気だ！」

「人間が死ぬ威力じゃねーよ、俺の百億で治療費ぐらい払ってやらア」
俺が渚に駆け寄って安否を確認すると…無傷だった。それどころか火傷のひとつも負っていない。もっとよく確認すると渚を何かの膜がおおっていてこの膜が渚を守ったらしい。

「実は先生、月に一度ほど脱皮をします。脱いだ皮を爆弾に被せて威力を殺しました、つまりは月イチで使える奥の手です。」

声のする方を見ると先生は天井に張り付いていた、でもそんなことは問題じゃない。先生の顔色は、顔色を見るまでもなく真っ黒。ド怒りだ。

「寺坂、吉田、村松。首謀者は君らだな。」

「えっ、いついや渚が勝手に！」

そう言うと同時に先生は目の前から消えた。と思つてたら数秒でまた目の前にいた。手にたくさん持つているのはなんだ？…表札だ、それもクラス全員分はある感じた。

「政府との契約ですから先生は決して君達に危害は加えないが…次また今の方法で暗殺に来たら君達以外に何をするかわかりませんよ。家族や友人…いや、君達以外を地球ごと消しますかねえ」

クラス全員悟った。”地球の裏でも逃げられない”と。どうしても逃げなければこの先生を殺すしかない。みんなが黙っていると寺坂が震えながらも反論し始めた。

「何なんだよテメエ…迷惑なんだよ！いきなり来て地球爆破とか暗殺しろとか…迷惑なやつに迷惑な殺し方をして何が悪いんだよ！」

寺坂の言い分もわかる、俺らが状況を飲み込めていないのは確かだ。すると先生の顔色が普段の黄色に変わり赤丸が浮かび上がる。

「迷惑？とんでもない、君達のアイディア自体はすごく良かった。特に渚君、君の肉迫までの自然な体運びは百点です。先生は見事に隙を突かれました。…ただし！寺坂君達は渚君を、渚君は自分を大切にしなかった。そんな生徒に暗殺する資格はありません！」

今の言葉にクラスみんなはハツとする。先生の言わんとすることが先程の当事者のみならずクラス全体に言っているものだったから。「人に笑顔で胸を張れる暗殺をしましょう。君達全員それができる力を秘めた有能な暗殺者だ。これがターゲットである先生からのアドバイスです」

俺は異常な教育だと思つた、でもなにか暖かさを感じる。きつとそれは俺たちをよく見た上でアドバイスをくれたからだろうか。

「さて問題です、渚君。先生は殺される気など微塵もない、皆さんと3月までエンジョイしてから地球を爆破です、それが嫌ならどうしますか？」

「その前に先生を殺します」

「ならば今殺ってみなさい、殺せた者から今日は帰つてよし！」

いや、今殺すのは無理だろ。

「殺せない…先生…、あつ名前”殺せんせー”は？」

「おついいですねえ、先生気に入りました！これからは殺せんせーと呼んでください！」

そう言うと殺せんせーは表札の手入れを始めた。俺は殺すのではなく課題の紙にペンを走らせて短歌を完成させて先生の下へと行く。

「おや、南雲君。暗殺ですか？」

「いいえ違います。短歌です、完成したので」

「おお！どれどれ…」雪の内 君と出会いて 芽吹く春 不易流行 触手なりけり” それっほい感じで素晴らしいですね！」

「ありがとうございます」

日本語が合っているかはわからないが殺せんせーの言った通りそれっぽく詠んでみた。ちなみに触手は冬の季語のつもりだ。すると茅野が質問してきた。

「南雲君、どういう意味なの？解説して」

俺はとりあえず黒板に短歌を書く。俺が説明しようとしたら殺せんせーが解説し始めた。

「雪が降る季節にあなたと出会って私の中にも春が来ました、季節なごの変化と共に進展する新しきは触手のようにうねり私の中に根付くでしょう。という意味です。おそらくここでのあなたとは異性のことでしよう。つまり恋をして変わっていく自分を詠んだ句ですね、でしょう？南雲君」

「そ、そうです」

恋を詠んだ句だからか女子達がおくと云っている、正直めちゃくちゃ恥ずかしい。

「純君ロマンチスト」

「倉橋、ちよつと黒歴史になりかけてるからやめて」

殺せんせーはという顔でピンク色にしながら俺の顔を覗いてくる。

「南雲君は恋多き男子生徒なんですか？要チェックですねえ」

「恋多き男子生徒は前原です！あと殺せそうにないんで一句詠んだし帰ります！表札持って帰りますから！」

俺は自分の家の手入れされた表札を持って、先生さようなら！と言

いながら教室を出る。出ていくときに一番前の座席である木村と倉橋と磯貝がまた明日と言っていた。

帰り道に俺は恥ずかしかったがクラスの雰囲気は柔らかくなったしよかったかなと思う。自爆テロのような暗殺のせいで怒られたことなどみんなはたぶんどうでもよくなっただろう。明日からどうやって胸を張れる暗殺をしようか、その事を考えながら俺は学校を後にする。

*

く個人トークく

神崎：南雲君が詠んだ短歌素敵だったよ

南雲：数少ない黒歴史に入りかけてるんだが…

神崎：そんなことないよ、いつも本とか読んでないなああいうのは思い付かないから胸を張っていいと思うな

南雲：神崎がそういうなら黒歴史には入れないでおく

神崎：ところであれは誰かのことを想って詠んだの？

南雲：いや、あれは誰のことも考えてない

南雲：こんな感じの恋がしたいなって思う感覚で詠んだ

神崎：じゃあ南雲君の心は今冬なのかな？

南雲：そんなことないよ

南雲：クラスのやつらはいいやつばかりだし充実してる

神崎：そうなんだ！

神崎：話は変わるけど明日私のお薦めの本を持っていこうと思ってるんだけどいいかな？

南雲：おつまじか！全然オツケー！

神崎：アルジャーノンに花束をって読んだことある？

南雲：ない！タイトルはレンタル店かで目にした記憶あるけど

神崎：小説を原作に映像化もしてるからレンタル店で見たことあるのかも

神崎：序盤はストーリーの都合上文章が読みにくいんだけど引き込

まれるし是非読んでほしいな

南雲：楽しみにしてる！明日の朝簡単なあらすじとか教えて！

神崎：うん！朝話すの楽しみにしてるね

南雲：そんなこと言われたら照れるから！

南雲：じゃあ今日はもう寝るかな、おやすみ

神崎：おやすみなさい

第2話 野球の時間

眠い目を擦りながら登校する。最初は山を登るなんてキツかったが今は疲れることなく登校することができているので体力がついたということを実感する。通学していると後ろから声をかけられた。

「南雲君おはよー」

「おう茅野、おはよう」

「今日はいつもより早いんだね」

「ああ、神崎が本を貸してくれるからな。少し早めに出てきた」

「神崎さん読書好きなんだ」

「読書家だから国語の成績良いつて言ってたな。何か読みたくなったら神崎に聞くといいよ」

「そうなんだ、今度聞いてみる。南雲君も貸し借りするくらいだから詳しいんじゃない?」

「まあまあかな」

「まあまあかく、でも神崎さんとも仲良くなりたいし本をキツカケにしてみるよ」

「茅野ならすぐに仲良くなれるだろ、3年から編入してきたのにもう馴染んでるし」

「えへへ、みんなと早く仲良くなりたから積極的に声をかけるようにしてるんだ」

「ほーん頑張り屋だなー」

「うん!...あれ?あそこでキャッチボールしてるのは渚と杉野君?」

「ああ、渚と友人は毎朝キャッチボールしてるよ」

「そうなんだ、2人は仲がいいんだね」

「たしか美化委員だったときに仲良くなったって言ってたな」

「へえ。でも南雲君も杉野君のこと名前で呼んでるってことは仲いいんだ」

「俺と友人は野球繋がりだな」

「そうなんだ!今度キャッチボールしようよ!」

渚とやれと言うと茅野がなんでさ!と反論してくる。いや渚は面

倒見いいし加減もしてくれるから、決してキャッチボールが面倒くさいというわけではない。ええ、決して。

横でブーブー言っている茅野と教室に入ると既に神崎が登校していたので神崎の下へと行く。

「おはよ、神崎」

「おはよー神崎さん」

「おはよう南雲君、茅野さん。珍しいね、2人で登校？」

「なんかついてきたから」

「なんかとはなにさ！なんかとは！」

「ふふっ仲良くていいね」

いや仲が良いけど友達っていうより親戚の子供っていう感じが強い、背とか小さいし。

「ハイ、南雲君。約束の本だよ」

「てんきゆ、神崎。ちなみにどんな話なんだ？」

「知的障がい者の男性が主人公で脳の手術をすることで頭が劇的に良くなるんだけど、それに伴って今まで気づかなかったことだったり人間関係が変わる様を主人公視点で書いた作品だよ。きつと感動すると思うな」

「おう、読むときは横にハンカチでも用意しておくよ」

「とか言って淡々と読みそうだよね、南雲君は。泣く姿が想像できないー！」

茅野はそう言うがそんなことはない、俺は泣いたことがあるものも思い出す。

「ちゃんと泣いたことあるぞ」

「へえ〜何で泣いたの？」

「んー…スパイダーマンでうるつときたな」

「スパイダーマンはアクション映画でしょ！」

「おじさんが死ぬ場面だよ、大いなる力には大いなる責任が伴うっていうシーン」

「確かにあのシーンは感動したな」

「神崎さんまで！…私はずれてるのかなあ」

「まあ人の感性はそれぞれだしな、気にすることはない」

「むーなんか偉そうでムカつく!」

茅野が軽く殴ってくるが全く効かない。これが俗にいう蚊が止まってるかと思っただぞ、か。

気づいたら始業のベルが鳴る時間が近づいてきたので神崎に再度お礼を言つて席に戻る。俺も茅野もバッグを持ったまま話したので慌てて机に戻りバッグを置く。忘れ物の確認をしていると渚と友人が教室に入ってきた。気のせいでなければ友人が落ち込んだ様子だ、何かあったのだろうか。本人には聞きづらいのであとで渚に聞いてみようと思っていると始業のベルが鳴った。

*

休み時間になったので渚の下へと行き友人のことを聞いてみる。

「渚、友人なんかあったのか?」

「うん：野球ボールを投げるっていう暗殺をしたんだけど杉野の球が殺せんせーに届くまでに用具室までグローブを取りに行かれてキャッチされちゃったんだ」

「あーなるほど、球速が遅いことを落ち込んでいるのか」

友人の良さはそこじゃないんだけどなーと思う。あいつはランナーがいるときの牽制や間の取り方はかなりうまい、それこそ友人からエースの座を奪ったやつより。フィールディング一つを取ってもそこらの強豪のエースより上手かった。

渚と話をしていると烏間さんと鵜飼さんが入ってきたので磯貝が対応している。どうやら殺せんせーの放課後の予定は授業終了と共にニューヨークまでスポーツ観戦らしい。烏間さんは俺らに暗殺と勉強の両方頑張ってくれと言つて教室を出ていった。

でもマツハ20で飛ぶ生物をどうやって殺せばいいのだろうか、全く検討がつかない。

翌日の放課後、俺と渚は英語で日記を書くという課題をやってきたので殺せんせーを探している。ちなみにこの課題、やってもやらなくてもいいらしいがちよつと点数がもらえるということなのでクラスの大多数はやっていないが2人はやってきたというわけだ。

職員室にいなかったのでも2人で探していると外で友人と話してるのを発見した。外靴に履き替えて行くと友人が触手に絡まれてたので慌てて駆け寄る。

「なにしてんの殺せんせー!」

「生徒に危害を加えないって契約じゃなかったの!」

「おや南雲君に渚君。今先生は杉野君の筋肉を見ているんですよ」

「筋肉?」

「ええ:杉野君、昨日見せた投球フォームはメジャーの有田投手を真似ていますね」

そう言えばそうだ。友人は有田選手の豪速球に憧れてフォームも真似ている。

「でもね触手は正直です。彼と比べて君は肩の筋肉の配列が悪い、真似をしても豪速球は投げれませんねえ」

「なんで先生に断言できるのさっ」

渚が友人に代わって反論すると殺せんせーは新聞を見せてきた。そこには触手責めにあっている有田投手が写っていた。

「そっか:やつぱり才能が違うんだなあ:」

「一方で肘や手首の柔らかさは君の方が素晴らしい!鍛えれば彼を大きく上回るでしょう。才能の種類はひとつじゃない、君の才能に合った暗殺を探してください」

「肩じゃなくて肘や手首が俺の才能か:」

どうやら友人は投手としての道を見つけたらしい。俺と渚は本来の目的を思い出し離れていく殺せんせーの下へと行く。

「殺せんせーは友人に助言するためにニューヨークへ行ったんですか?」

「もちろん!先生ですから」

「でも普通の先生はそこまでしてくれないよ、ましてやこれから地球を消滅させる殺せんせーが…」

「…先生はね、ある人との約束を守るために君達の先生になりました。地球は滅ぼしますがその前に君達の先生です、君達と真剣に向き合うことは地球の終わりよりも重要なのです」

そう言いながら俺と渚の提出課題をマツハで採点する。ノートの裏には変な問題が書き足されていてペナルティをくらった気分だ。殺せんせーの言った言葉の中に気になることがあったので訪ねてみる。

「殺せんせー、ある人との約束って雪村先生ですか？」

「…ええ、転勤する彼女に頼まりましたから」

「そうですか、会うかはわからないですが先生によろしく伝えてもらっていいですか」

「もちろんです」

採点を受けた俺と渚は帰る準備をする、友人を誘うとちよつと特訓するから先に帰ってくれと言われた。キャッチボール相手がいないのにどうする気だ？と聞くと書店に寄るとのことだった。それは特訓じゃなくて調べものだろ。

1週間後、放課後に渚とキャッチボールしてるから成長した俺を見てほしいと言われたのでグラウンドに行く。するとキレの良い変化球を投げる友人がいた。

「おー！すげえ変化量だ、初見じゃ打てんかも」

「そうだろ！肘と手首をフルに活かした変化球を習得中なんだ！遅いストリートもこいつと二択で速く見せれる」

今までの投げ方じゃできない変化球を見て俺は素直に感心した。きつとフォームも色々と研究したんだろうと思う、有田投手の面影はほとんどない。

「渚、純一、俺続けるよ。野球も暗殺も。まずは景気付けに純一と勝負

しようと思う」

「そうか！でもいいのか？俺は打つのが本職だからガッツリ打ち込んで自信無くすと思うけど」

「…もう少し磨いてから勝負にするかな？」

友人の変わり身に俺と渚は顔を合わせて笑う、やっぱり友人に落ち込んでるのは似合わない。

正直殺せんせーを殺せる気はしない。でも不思議と俺たちを殺る気にさせる殺せんせーの暗殺教室はちよつと…いやかなり楽しい。

第3話 カルマの時間

〈烏間視点〉

「防衛省から通達済みだと思えますが：明日から私も体育教師でE組の副担任をさせていただきます。奴の監視はもちろんです。生徒達には技術面精神面でサポートが必要です。教員免許は持っていますのでご安心を」

「ご自由に、生徒達の学業と安全を第一にね」

こちらを見向きもせずには理事長は答える。理事長室を後にすると同僚の鶴田が口を開く。

「ものわがりのいい理事長ですなぁ」

「フン、見返りとして国が大金を積んでるしな。だが都合が良いのは確かだ。地球を壊せる怪物がいて、しかもそいつは軍隊でも殺せない上に教師をやっている。こんな秘密を知ってるのは我々国と理事長とE組の生徒だけでいい」

「それもそうですな」

廊下を歩いていると成績について話している生徒を見かけた、どうやらこれ以上成績が落ちたらE組行きとなるらしい。言葉の端々からE組への尖った言動が見られる。

俺はこの生徒達を見て、なるほどと思う。

極少数の生徒を激しく差別することで大半の生徒が緊張感と優越感を持ち頑張るわけか。

合理的な学校の仕組みだし、我々としてもあの隔離校舎は極秘暗殺任務にうってつけだが切り離された生徒達はたまったものではないな。

それに個人的にもこの差別的な対応には首を傾げなくなる。

*

E組の校舎へと行くと何人もの生徒が棒などを持って忙しそうにしていた。何だろうと思っていると茅野さん：だっただろうか、1人

の生徒が声をかけてきた。

「あ、烏間さん！こんにちは！」

「こんにちは、…明日から俺も教師として君らを手伝う、よろしく頼む」

「そーなんだ！じゃあこれからは烏間先生だ！」

「…ところで奴はどこだ？」

「…それがさ、殺せんせーがクラスの花壇を荒らしちゃったんだけど、そのお詫びとしてハンディキャップ暗殺大会を開催してるの」

茅野さんが指差す方向を見て俺は言葉を失った。木に吊るされ縛られた奴が生徒達の攻撃を避けている。

…これはもはや暗殺と呼べるのだろうか。

そう思っていたら木の枝が折れて奴が地に落ちた。このチャンス逃すまいと生徒達は一齐に襲ったが奴は校舎の屋根上へと逃げ延びた。

その様子を見ていた渚君がなにやらメモを取っていたので見せてもらうと弱点を記していた。今のところは3つ。

- ・カッコつけるとボロが出る
- ・テンパるのが意外と早い
- ・器が小さい

暗殺に直接使えるかは別として、先程の奴の慌てようを見るに確かに弱点だなと思う。渚君にはこの調子で弱点を調べてくれと頼む。

今まで一番惜しかったのかクラス委員である磯貝君を中心にクラスが盛り上がる。

…中学生が嬉々として暗殺のことを語っている、どう見ても異常な空間だ。——だが不思議だ。生徒の顔が最も活き活きしてるのは本校舎の生徒ではなくこのE組だ。

*

↳南雲視点

「八方向からナイフを正しく振れるように！どんな体勢でもバランス

を崩さない！」

今は烏間先生の体育の授業中でナイフの素振りをしている。：正直殺せんせーの授業より楽しい、殺せんせーは身体能力が違いすぎて異次元すぎる体育の授業を展開していたからだ。それに今までやってきた授業とは全く別の内容なので新鮮さもある。

殺せんせーはというと烏間先生に砂場へと追いやられていた。心なしか悲しそうに見える。

「奴も追い払えたし授業を続けるぞ」

「でも烏間先生こんな訓練意味あんすか？しかも当のターゲットがいる前でさ」

「前原君の言い分もわかる。しかし勉強も暗殺も同じことだ、基礎は身に付けるほど役に立つ。具体的には…そうだな。磯貝君と前原君、そのナイフを俺に当ててみる」

「えっいいんですか？」

「2人がかりで？」

「ああ構わない、そのナイフならケガの心配もないしな。かすりでもすれば今日の授業は終わりでいい」

そう言うのと3人は模擬戦闘を開始する。正直2人がかりなら当ては出来なくてもかすりくらいはするかなと思っていたがそんなことはなかった。烏間先生は2人の動きを完璧にいなして制圧したのだ。素直にすごいしカッコいいと思った。

「俺に当たらないようではマッハ20の奴に当たる確率の低さがわかるだろう。それにクラス全員が俺に当てられる位になれば少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる。ナイフや狙撃など暗殺に必要な基礎の数々は体育の時間で俺から教えさせてもらうー」

そう烏間先生が言うのと授業が再開される。

凜香と倉橋が烏間先生がカッコいいという旨のことを言っているのを見て殺せんせーはハンカチを噛み締めていたのが少し笑えた。

ナイフの扱いを実践していたら5時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。俺たちは疲れたーと言いながら教室へと戻る。ていうか次の英語は小テストだな。

ふと見ると校舎の前にはいちご煮オレを飲んでいる生徒がいた。
…見覚えがないということとは停学明けの赤羽か？

「よー渚君久しぶり」

「カルマ君…帰ってきたんだ」

「うん。わ、あれが例の殺せんせー？すっげ本トにタコみたいだ」

そう言うのと赤羽は俺たちの間をすり抜けて殺せんせーの下へと行く。

どうやら挨拶をしてるみたいだ、握手を求めている。赤羽と殺せんせーが握手をすると同時に先生の触手が破壊された。俺を含めた生徒全員が驚き2人の動きを見る。

「へー本トに効くんだ、このナイフ。細かく切って貼っつけてみたんだけど。…けどさあ先生、こんな単純に手に引っ掛かってそんなとこまで飛び退くとかビビりすぎじゃね？」

赤羽を見て俺は一種の感心というか尊敬の念を抱いた。殺せんせーに単独でしかも初めてダメージを与えたからだ。

「殺せんせーから殺せんせーって聞いたけど、せんせーってもしかしてチヨロい人？」

赤羽の挑発を受けて先生の顔はどんどん赤くなっていく。まあ、あんなだけ挑発されたら顔色を見るまでもなくキレル人のほうが多いと思うけど。

「ねえ渚、私知らないんだけど彼どんな人なの？」

「…うん、1,2年の時に同じクラスだったんだけど2年生の時に続けざまに暴力沙汰で停学食らってさ。このE組にはそういう素行不良の生徒も落とされるんだ。…でも今この場じゃ優等生かもしれない」
「…どういうこと？」

「凶器とか騙し討ちの基礎なら多分カルマ君が群を抜いている」

2人の会話を聞いて俺は確かにかと思う。赤羽のケンカっ早さは割と有名だしケンカ慣れしてるっていうことは渚の言う通り騙し討ちなどの基礎もあるということだ。

でも俺は疑問に思った、果たしてあの殺せんせーにそれらが通用するのだろうか。

*

ブニヨンという音が6時間目の小テスト中の教室に響き渡っている。騒音に耐えきれなくなったのかついに岡野が殺せんせーにうるさいと注意した。

俺はというと問題を全て解き終わったのでテスト用紙にドラえもんなどを描いて時間を潰している。すると赤羽も終わっているのか話しかけてきた。

「ねー南雲君さー俺のこと覚えてる？」

「赤羽とは直接面識なかったと思うけど」

「覚えてなかったかー。喧嘩してるときに1度やり過ぎだって止められたんだけど」

「喧嘩してる奴を止めた記憶はあるけど誰かまでは覚えてないな」

「ふーんそっかー」

「どうか君付けこそばいから呼び捨てでいいよ」

「じゃあ俺もカルマって呼んでよ、名前気に入ってるんだ」

「こらそこー！テスト中にお喋りしない！」

「ごめんごめん殺せんせー、俺らもう終わったからさジェラート食って静かにしてるわ」

そう言うのとカルマは俺にジェラートを渡してきた。うむ、うまい。

「そっそれは昨日先生がイタリア行って買ったやつー！」

殺せんせーのかよ。てかカルマは勝手に人の物を食べるなよ…。つて俺もか。

「どーすんの？殴る？」

「殴りません！残りを先生が舐めるだけです！」

そう言いながら先生がこちらに詰め寄ってくる、すると先生の脚の触手が破壊された。いつの間にか床に対先生BB弾がばらまかれていた。

「何度でもこういう手使うよ、授業の邪魔とか関係ないし。それが嫌なら…俺でも俺の親でも殺せばいい。でもその瞬間からもう誰もあ

んたを先生とは見てくれない。ただの人殺しのモンスターさ」

確かにカルマの言うとおりで。前回ぶちギレた時に俺たち以外に何をするかわからないと言ったが実際に手を出されたら先生と見なくなる。それこそ犯罪者を見るかのようになるだろう。

「はいテスト、多分全問正解。じゃあ先生く明日も遊ぼうね」

そう言つてカルマは帰っていった。

——カルマは頭の回転が速い。今も先生が先生であるがためには越えられない一線があるのを見抜いた上で駆け引きを仕掛けている。殺せんせーはカルマに押し付けられたジェラートをハンカチで拭いている。

「殺せんせー元気出してよ、俺のジェラートあげるからさ」

「南雲君ありがとうございます。でもこれは先生のジェラートです」

「…そうでした」

カルマによる先生への暗殺というか嫌がらせはカルマの早退により打ち切られた。なんというか先生に対するカルマの暗殺の姿勢は執念じみたものを感じる。なんにせよここは暗殺教室なのだから生徒が暗殺を積極的に行うのは良いことだと思う。

時刻は放課後、俺は烏間先生に用事があるので職員室を訪ねる。

「すみません、烏間先生今いいですか？」

「南雲君か、どうしたんだ」

「今後の体育の授業で防御術みたいなのってやるんですか？」

「…いや暗殺にとって優先度が低いから教える予定はないな、どうしたんだ」

「いえ授業でやらないのであれば放課後などの烏間先生が空いている時間で教えていただきたいなと」

「ふむ、俺は構わんが…どうしてだ？」

「怪我をしたくないので授業でやらないのであれば個人的に教えてほしいくて」

「なるほど、ではこれから互いの都合のいいときにやるとしよう」

「ありがとうございます」

「ではさっそくやろうと思うが、今日は何か予定があるのか？」

「いえ、お願いします！」

*

「やべー遅刻ギリギリだ」

昨日烏間先生と放課後に訓練をしたため疲れが溜まり、なかなか布団から出られなかった。

山を小走りで登り教室に滑り込む、するとクラスにいつもの騒がしさがなかった。みんなの視線の先を見ると教卓の上に蛸がナイフを刺された状態で乗つけられていた。：ほーん、犯人はカルマだな。あまりこういうのは好きではないが暗殺の一貫なのだろう。

そう思っていると始業のベルが鳴り殺せんせーが教室に入ってきた。

「おはようございます…ん？どうしましたか皆さん？」

殺せんせーが蛸を見るのを確認すると案の定カルマは喋り始めた。

「あつごつめーん。殺せんせーと間違えて殺しちゃったあ、捨てとくから持ってきてよ」

「…わかりました」

そう言うや否や殺せんせーはマツハで蛸を調理しカルマの口のかなにたこ焼きを入れていた。

「あつっ！」

「その顔色では朝食を食べていないでしょう、そのたこ焼きを食べれば健康優良児に近付けますね」

「……」

「先生は暗殺者を決して無事では帰さない。手入れするのです、錆びて鈍った暗殺者の刃を。今日ー日本気で殺しに来るがいい、その度に先生は君を手入れする。放課後までに君の心と身体をピカピカに磨いてあげよう」

結論から言うとカルマの暗殺は全て失敗に終わった。

1時間目の数学では殺せんせーが板書を書いている間に背後から撃とうとしたところ止められネイルアートが施された。

4時間目の調理実習ではスープを鍋からひっくり返すと同時にナイフで急襲しようとしたところスープをスポイトで吸うと共に味の調整、カルマ本人はハートが大きく刺繍されたエプロンを着用させられた。これには俺と菅谷も笑いを堪えるのが大変だった。

5時間目の国語では朗読をして教室を歩いている先生がカルマの目の前を通る瞬間襲おうとしたらしいがおでこを押さえられ席を立つこともままなっていなかった。ちなみにこのときは髪を七三分けにされていた。

そして今は放課後となり俺と渚とカルマの3人は櫛ヶ丘町を一望できる崖付近にいる。

「カルマ君、焦らないでみんなと一緒に殺つていこうよ」

「そうだぜカルマ、個人マークされたらどんな手を使ってもマツハの殺せんせーは1人じゃ殺せないぜ」

「…やだね、俺が殺りたいんだ。変なところで死なれんのが一番ムカつく」

そう呟くカルマに俺と渚は黙る、すると殺せんせーがしましま模様で近づいてきた。

「さてカルマ君、今日は沢山先生に手入れをされましたね。まだまだ殺しに来てもいいですよ？もつとピカピカに磨いてあげます」

「……先生つてき命をかけて生徒を守ってくれる人？」

「もちろん！先生ですから」

「そっか良かった。なら殺せるよ、確実に」

そう言うとカルマは銃を構えて崖から飛び降りた。

俺と渚は焦って崖の下を見る。人が空を飛んでいる、いや落ちていく。初めて見る光景だ。

カルマが地面と近くなつたところで地面の近くにクモの巣のようなものが突如現れた。：殺せんせーの触手だ。

——殺せんせーに無事に受け止められたカルマは崖の上に戻された。

「カルマ君平然と無茶をしたね」

「別にい：：今のが考えてた限りじゃ一番殺せると思つただけどしばらくは大人しくして計画の練り直しかな。少なくとも先生としては死なないし、殺せない」

「ええ、もちろんです。南雲君と渚君にも言つておきますが見捨てるという選択肢は先生にはない、いつでも信じて飛び降りてください。それにしてもカルマ君、もうネタ切れですか？君も案外チョロいですねえ」

うわー煽りよる、良いこと言つていたのに台無しだ。カルマも苛立ったのか殺意が湧いている感じだ。：けどさっきまでとなんか違う、健康的で爽やかな殺意だ。事実殺すと言つたカルマの顔が先程までと打つて変わつて明るい。

「帰ろうぜ、南雲に渚君。帰りにメシ食つてこーよ」

「ちよつそれ先生の財布！」

「だからあ職員室に無防備で置いてくなくなつて」

：確かに無防備に置いてくのも悪いが盗る方が悪いだろ。俺は苦笑しながらクラスに戻ってきた祝いとして奢るよというカルマは素直に殺せんせーに財布を返した。中身を全部抜いていたらしいが。

暗殺に行った殺し屋は暗殺対象にピカピカにされてしまう。それが俺たちの暗殺教室、明日はどうやって殺そうか。

第4話 休日の時間 その1

俺は今大型の本屋にいる。毎月の終わりの休日に家で集めている本やアーティストのCDを買うのが我が家のルールとなっている。まあコンビニで新刊が出てたら誘惑に負けて買ってしまっただけ。

家で事前に調べてきて買うものはある程度決まってるので効率よく回る、まずは小説コーナーだ。目当ての本を数冊取って次に漫画コーナーへと行く。俺が探している本は6年ぶりの新刊なので帯にデカデカと”6年ぶり!”と書かれてた。詳しい事情はわからないけど読者としては待たせないでほしい。HUNTER×HUNTERも面白いので許されてる感があるが是非とも早く連載を再開してほしいと思う。

さて次はCDコーナーだ、確かストレイテナーの新作のアルバムが出てるはず。目当てのアーティストの棚を探していると声をかけられた。

「…あれ？南雲か？」

「ん？千葉か！学校以外で会うなんて珍しいな」

「ああそうだな、今日はCDを買いに来たんだ」

「おーなに聴くん？」

「パンクロックが好きでブルーハーツとか」

「おー！いいな！」

「南雲はどんなの聴くんのだ？」

「邦楽から洋楽、アニソンまで聴いてるけど一番聴くのはロックかな」
「だと思っただよ」

千葉と5分ほど音楽の話をして別れる。前の席で結構話すようになったがやはりまだまだ知らないことは多いなと実感する。

本屋での買い物も終わったので自転車に乗り家に帰る。まだ時刻は11時、やろうと思えば何でも出来る。

とりあえず早いけど昼飯にするかと思いき炒飯を作る準備を始めた。すると携帯が短く鳴ったので誰かと思いき見てみる。

矢田：南雲君って子供のときに何好きだった？

南雲：どうした突然？

矢田：いや弟の誕生日が近くてさ、何あげたらいいかなって

南雲：本人に直接聞いてみたらどうだ？

矢田：うーん、サプライズ的な要素も盛り込みたくて！

南雲：そうか、それだったら尚更欲しいものを聞くべきだな

矢田：えーどうして？

南雲：欲しいものを聞かれたらそれが買ってもらえるとと思うだろ？

南雲：それで実際にプレゼントがもらえたら喜ぶわけだ

矢田：それはそうだよー

南雲：それでだ。欲しいものがもらえたら普通はそれで終わりだと大抵の人は思う

南雲：そこで+αのものをサプライズプレゼントする

南雲：そうすれば絶対に喜ぶし仮にサプライズが微妙なものだとしても第一希望が叶ってるわけだから変な空気にはならない

矢田：おー！それ採用！

矢田：南雲君頭いいね！

南雲：褒めても何も出てこないぞ

南雲：まずは弟に欲しいもの聞いてそれから俺も+αの部分を考えるよ

矢田：うん！ありがとう！

矢田：やっぱり南雲君に相談して正解だったよ！

南雲：やっぱりとは？

矢田：E組の女子のグループトークで相談したらみんなが南雲君に聞いてみたら？ってなってるよ！

南雲：それは名誉だな

南雲：E組の女子達には俺は頼りになると事実よりほんの少しオーバーに伝えておいてくれ

矢田：わかったたよー！本当にありがとね！

南雲：頼んだぞ！

矢田とのLINEを終えて俺は炒飯を作る。父親が出張でない

ので自分好みのやや濃い味付けをする。むーんデリシヤス。

昼食の片付けを終えて時刻は12時過ぎ。腹もふくれたことで外へ出る気力を完璧に失った俺は買ってきた小説を読むことにした。神崎に薦められて読んだアルジャーノンに花束をに影響されて海外作家の小説を買ってきた。九マイルは遠すぎるという本で裏のあらすじを読むに純粋な推理で大学の教授が事件を解決していく短編小説らしい。ちなみにタイトルが気に入って手に取ったので前評判などは一切わからない。

本を読むために取り合えず片手で食べられるお菓子と紅茶を用意してリビングのソファに座る、これが俺の読書スタイルだ。

準備が出来たので本を読み始める。…なるほど読みやすく面白い。

短編を2つほど読んだ辺りで連絡が来てることに気づいたので返信をする。

中村：純一は今何してんの？

南雲：本読んでた、莉桜は？

中村：あら奇遇、私も本を読んでた

南雲：珍しい、何て本だ？

中村：ライ麦畑でつかまえてってやつ

南雲：おー読んだことあるけど莉桜が読んでそうないメージじゃないな

中村：やっぱわかる？

中村：実は殺せんせーから薦められてさ、2カ国語で読んでる

南雲：へーすげえな、なんか違う？

中村：意味は変わらないんだけど、日本語訳だったらやつぱり表現が違うって感じる

南雲：そうなのか、両方読み終わったら感想教えてくれよ

中村：オツケー、じゃあまた読書に戻るわ

莉桜が読書とは殺せんせーの薦めとはいえびつくりだな。俺も負
けずに読書するかと思つたら友人から連絡が来た。

杉野：純一今日暇か？

南雲：暇と言えば暇

杉野：BCに行かないか？

南雲：は？BC？

杉野：B バッティング C センター

南雲：最初からそう言えw

南雲：いいよ、場所は？

杉野：場所は櫛ヶ丘駅の近くのところ！

南雲：あーあそこか、了解

杉野：俺はたぶん15時くらいに着く！

南雲：じゃあそれくらいに着くように行くよ

さて外出の準備をするか。取り合えず上下はウインブレでいいか、
靴は外用のバツシユで。

所要時間は15分と仮定して10分前に着くようにするとして…
あと30分はのんびり出来るな。

タオルも持っていくか、あとバツ手（バッティング手袋）も。飲み
物は向こうで買えばいいか。

家の鍵をかけ、ママチャリではなくロードバイクに跨がりいざ出
陣。準備もしたし忘れ物もないだろ。汗をあまりかかないようにの
んびり漕ぐか。

14:55に到着、友人はまだきてないな。とりあえずバッティン
グセンター内に入ると中々良い打球を飛ばす奴がいたので斜め後ろ
に立つ。…友人じゃねえか。

打ち終わって出てきたのでよつと声をかける。

「先に打ってたんだな」

「ああ、ちよつと前についたんだけど我慢できなくてさ」

「本当に野球好きだな」

「ああ、殺せんせーのおかげでもっと好きになったよ」

それはよかつたなど言い、軽くストレッチをする。バッティングセンターに行く皆さんに伝えたいんだがストレッチは必要にないように見えて必要だ、経験者は特に。

なぜなら経験者ほど力強い打球を飛ばせるのだがその力がどこからきてるのかというと下半身からだ。下半身の力をバットを持つ上半身に伝える役目をしているのが股関節、ここだけは最低でもストレッチをするべきだ。

さてご高説が終わると同時にストレッチも終わったので俺も打つか。

「あつ純一、この券使えよ」

「えっいいのか？50回の回数券なんて高いだろ」

「クラブチームに入団したんだけどその監督が回数券を何枚かくれたんだよ、それで誘ったってわけ。別に使いきる必要はないし余ったら返してくれればいいから」

「50回打席に入ったら1000球バットを振ることになるんだぞ？現役じゃないし無理に決まってる」

だろうなど友人は笑う。1回200円で正直お金が浮くのは助かるのでありがたく借りることにした。

券を通す前に打席で素振りをする。よし、好調だ。

券を通そうと機械に近づいたら俺の打席の真後ろに友人がいたので悪態をつく。

「なにお前、真後ろで見る気？」

「だって参考にしたしいし」

「まあ、良いけどさ。下手なバッティングできねえじゃん」

「その心配はないと思うけど」

球速を120キロに設定して券を通す。

初球は思い切り空振り、よくあることだ。

2球目以降はタイミングが掴めてきて良い当たりを量産できた。金属バットを使用しているのだが芯を食った良い音がバツティングセンターに響く。

打ち終わりに打席から出ると友人に話しかけられる。

「相変わらずエグい打球を飛ばすな…、打つときって何を意識してるんだ？」

「うーん…ピッチャーがビツて投げてリリースしたらその時点で球種の判別はできてるな。あとコースも。伸びるストレートだったらギョツと手元にくるから早めにバットを始動させる、ちなみに変化球だったら後ろの股関節で溜めて無理に引っ張らないような感じかな」

「打つ瞬間にそんなに考えてるの？」

「いや言葉にしたなら長くなるけど感覚的なものだな、ただマシンじゃなくて実際の対戦だったら配球とかは予測してる」

「俺は配球よりもコースを予測してるな」

「まあその辺りは人それぞれだろ、あとはバットスピードを上げるためにバットを振り込むことかな」

「素振りなんてやってないわけないだろ」

「そりゃそうか」

友人はミートは上手いがパワー不足感が否めない。だから強い打球を飛ばしたいなら単純な話バットを振り込んでバットスピードを上げるか、体重を増やすしかない。手の豆を見るにバットは振り込んでいるので体重を増やすしかないと思う。

そう思ったのでそのまま友人に伝える。

「でも体重増えて太ったら学校とかでからかわれないか？」

「そんなもん努力してるんだからカツコ悪くないだろ、寧ろカツコいいよ。からかってくるやつなんて俺が怒ってやる」

「おう、その時は頼むよ」

「ていうか飯食って体重が増えても運動してるんだから太らないだろ、単純に筋肉がつくくらいで」

「それもそうだな、じゃあまた打つから変なところないか見ててくれ」

そう言つて友人は打席へと入っていった。別に変なところなんて

ないだろと思いつつも言われたので見るとする。
それから俺たちは10打席ほど打ち込んでから帰宅した。

*

今日の夜ご飯は昼食時に多めに作った炒飯にコンビニで買った餃子だ。最近のコンビニは随分と進化していてプライベートブランドの冷凍食品がマジにうまい、1品足りないときなどに重宝する。

後片付けをして風呂に入って自室へと戻り今日は色々としたなど1日を振り返る。やはり友人と行ったバッテリーセンターが一番体力を使っただと思う。何気なく携帯を見ると矢田から返信がきていた。

矢田：弟に聞いてみたよ

南雲：おー何て言ってた？

矢田：野球のグローブって言ってた！

南雲：グローブか

南雲：ぎっくりいうと色々形が違うから詳しく聞いてみたほうがいいかもしれない

矢田：何かピッチャー用がいいって言ってたよ、それで色は赤がいいって

南雲：なるほど、それなら+αはグローブの手入れ道具でいいと思う

矢田：そうなのか！ちなみに理由は？

南雲：矢田の弟って体弱くて寝込みがちって言ってたから

南雲：手入れ道具あれば外に出なくてもグローブに触ってられるしな

矢田：へえ〜そうなんだ！

矢田：じゃあグローブを両親が買うって言ってたから私は手入れ道具をプレゼントする！

南雲：決断早いなw

南雲：なににせよ喜ぶといいな

矢田：うん！相談に乗ってくれてありがとね！

南雲：piece of cake

矢田：お安い御用だっけ??

南雲：そうそう、まあ俺も相談あつたらするよ

矢田：いつでも頼ってね〜

矢田の返信を見て俺はベッドに倒れこむ、私生活なのにまるで学校に
いるみたいになど関わっているなと感じる。E組に行ってから横
の繋がりというか友達との関係が本校舎にいたときより深くなつて
いる。それは閉鎖された環境にいるからなのかもしれないが、こんな
に仲良くなれるなら閉鎖されていても別にいいのかもしれないなと
思った。

俺は変な幸福感に浸りながら目を瞑るとそのまま夢の世界へと旅
立った。

5月

第5話 プロの時間

殺せんせーが地球を爆破するという3月まで残り11カ月、それが暗殺と卒業の俺たちの期限だ。

暗殺を開始してから早1カ月、光陰矢のごとしに月日に関守なしとはよく言ったものだ。

始業のベルが鳴ると殺せんせーだけではなく烏間先生と外国人の女性が教室に一緒に入ってきた。すごい美人な女性は殺せんせーにベタベタとくっついていて。なぜ？おそらくクラス全員がそう思っている。烏間先生が話し始める。

「…今日から来た外国語の臨時講師を紹介する」

「イリーナ・イエラビッチと申します、皆さんよろしく！」

「本格的な外国語に触れさせたいとの学校の意向だ、英語の半分は彼女の受け持ちで文句はないな？」

「…仕方ありませんねえ」

殺せんせーはそうしてイリーナ先生？だかの胸を見る。

…普通にデレデレじゃねーか。殺せんせーとイリーナ先生はイチャイチャしてるが俺たちはそこまで鈍くない。この時期にこのクラスにやって来る先生は結構な確率で只者じゃない。

昼休み明けの5時間目までは英語がないのでイリーナ先生の授業は午後までない。転校生が来たかのようにクラスは何となく落ち着きがないがHRが終わったのでいつも通り授業が開始された。

時間は過ぎて昼休み、今俺たちは殺せんせーを暗殺しながらサツカーをしている。烏間先生に話を聞いたところ今日来たイリーナ先生の本職は案の定殺し屋だった。美貌だけでなく10カ国語を操る対話能力を持ち、ガードの高い暗殺対象でも容易に近付き至近距離か

ら殺す潜入と接近を高度にこなす暗殺者らしい。その暗殺者は殺せんせーに手を振って駆け寄ってきた。

「鳥間先生から聞きましたわ、すっごく足がお早いですって?」

「いやあそれほどでもないですねえ」

それほどでもある感じの対応ですね。

「お願いがあるの、一度本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて私が英語を教えってる間に買ってきてくださらない?」

「お安いご用です、ベトナムの良い店を知ってますから」

そう言うや否や殺せんせーはマツハで飛んでいった。：おっぱいか?おっぱいが原動力か?殺せんせーが飛んでいった数秒後昼休みの終わりを告げるベルが鳴ったので磯貝がイリーナ先生に話しかける。

「えーとイリーナ先生?授業始まるし教室戻ります?」

「授業?…ああ各自適当に自習でもしてなさい。それとファーストネームで気安く呼ぶのやめてくれる?あのタコの前以外では先生を演じるつもりもないし”イエラブッチお姉様”と呼びなさい」

：すげー変わり様。空気が一気に凍ったぞ。

「…でどーすんの?ビッチ姉さん」

凍った空気の中カルマが口火を切る。ていうかビッチ姉さんってなんだよ、ただの淫乱な姉さんじゃねえか。

「あんた殺し屋なんでしょ?クラス総掛かりで殺せないモンスターをビッチ姉さん1人で殺れんの?」

「：ガキが、大人には大人の殺り方があるのよ。鳥間に聞いたけど潮田渚ってあんたよね?」

ビッチ姉さんはそう言って渚へと近づく。

その瞬間!やっ、やったッ!!ビッチ姉さんは渚にディープキスをした。キスをされた渚はというと力が抜けたかのように足元から崩れ落ちた。キスで人を気絶させるってどれだけ巧いキスなんだよ。

「後で職員室にいらっしやい、あんたが調べたやつの情報聞いてみたいわ。：ま、強制的に話させる方法なんていくらでもあるけどね。その他に有力な情報を持つてる子は話に来なさい!良いこととしてあげ

るわよ…あと少しでも私の暗殺の邪魔をしたら殺すわよ」

”殺す”という言葉の重みから彼女がプロの殺し屋だと実感した。…でも同時にクラスの大半が感じた事。この先生は…嫌いだ。

*

昨日の自習に引き続き今日の英語の授業も自習だ。ビッチ姉さんはタブレットをずっと操作している。おそらく暗殺の計画でも練っているのだろう。教室にはタブレットのタップ音が響いている。

「なービッチ姉さん授業してくれよー」

前原がそう言うくとクラス中が授業しろよとビッチ姉さんに訴える。

「あー！ビッチビッチうるさいわね！まず正確な発音が違う！あんたら日本人はBとVの区別もつかないのね！…そうだ、正しいVの発音を教えたげるわ。まず歯で下唇を軽く噛む！ほら!!」

促されクラス全員が下唇噛む。

「…そう、そのまま1時間過ぐしてれば静かでもいいわ」

((なんだこの授業!?!))

クラス全員同じ事を思った。

5時間目の体育では射撃を行っていた。殺せんせーに見立てた的を出席番号順に撃っているとビッチ姉さんと殺せんせーが倉庫に駆けこんでいくのを見た。するとクラスの誰かがタメ息を漏らした。

「…なーんかガツカリだな殺せんせー、あんな見え見えの女に引つかかって」

「烏間先生、私達…あの人の事好きになれません」

「…すまない、プロの彼女に一任しろと国の指示でな。…だがわずか1日で全ての準備を整える手際、殺し屋として一流なのは確かだろう」

烏間先生の一言にクラス全員が黙る、確かにその通りだが何か釈然

としない思いがある。授業が中断していると倉庫から激しい銃声が聞こえてくる。恐らく殺しにかかっているのだろう。

…銃声が消えた。殺せんせーは死んだのか？俺たちは顔を見合わせていると倉庫からビッチ姉さんと思われる女性の悲鳴が聞こえてきた。

「めっちゃ執拗にぬるぬるされてるぞ！」

「行ってみよう！」

岡島と前原を先頭にクラス全員倉庫の方へと走る。倉庫に近づくと殺せんせーが出てきた。渚が殺せんせーへと尋ねる。

「殺せんせー！おっぱいは？」

「いやあ…もう少し楽しみたかったですが皆さんとの授業のほうが楽しみですから。六時間目の小テストは手強いですよ」

「…あはは、まあ頑張るよ」

そうだった。いくらおっぱいに弱くても殺せんせーは先生なんだ。俺たちを教えるということから逃げないし目を逸らさないということとを忘れていた。みんなは殺せんせーが帰ってきたみたいでどこか安心した表情をしている。

その数秒後健康的でレトロな体操服姿になったイリーナ先生が倉庫から出てきて倒れた。…一体どんな手入れをしたんだ。

タンツタンツとタブレットをタップする音が昨日の授業より大きく響いている。殺せんせーに手入れをされたという屈辱からかビッチ姉さんは相当に苛立っている。

「あはあ必死だね、ビッチ姉さん。あんなことされちゃプライドズタズタだろうね」

「言ってやるなよ…カルマ…」

カルマの言葉に俺が返すと磯貝がビッチ姉さんに話しかける。

「授業してくれないなら殺せんせーと交代してくれませんか？一応俺ら今年受験なんで…」

「はん！あの凶悪生物に教わりたいの？地球の危機と受験を比べるなんて：ガキは平和でいいわね。それに聞けばあんた達E組ってこの学校の落ちこぼれだそうじゃない、勉強なんて今さらしても意味ないでしょ」

最後の一言がクラスの大半の越えちゃいけないラインを越えたのか、空気がピシツと音をたててヒビが入った気がした。

「そうだーじゃあこうしましょ。私が暗殺に成功したらひとり五百万円分けてあげる！あんたたちがこれから一生目にするこたない大金よ！無駄な勉強するよりずっと有益でしょ、だから黙って私に従いな
…」

そこまでビッチ姉さんが言ったとき誰かが消ゴムを投げ黒板に当たった。

「…出てけよ」

「出てけくそビッチ!!」

「殺せんせーと代わってよ!!」

おーこれが俗に言う学級崩壊か。ペンや消ゴムなどあらゆるものが教室を飛び交っている。茅野だけが脱巨乳という紙を掲げ抗議している。…別に中学生なんだから小さいほうが普通じゃないのかなあと思った。

午後もビッチ姉さんの英語の授業あるけどまた自習かとタメ息をついた。

*

5時間目のビッチ姉さんの授業が始まる時間となったが教室はわいわいと騒いでいる、まあ自習が確定しているみたいなものだし当たり前だよな。そのまま5分ほど騒がしい状態が続いていると教室の戸がガララツと勢いよく開かれてビッチ姉さんが入ってきた。そしてそのまま黒板に英文を書き始めた。

「Y o u , r e i n c r e d i b l e i n b e d ! リピート
！」

クラス全員がポカーンとなっている。

「ホラー！」

「ユーアー インクレディブル イン ベッド」

「これは私がアメリカでとあるVIPを暗殺したとき、まずそいつのボディガードに色仕掛けで接近したわ。その時彼が私に言った言葉よ、意味は”ベッドでの君はすごいよ”」

（（中学生になんて文章読ませんだよ！））

「外国語を短い時間で習得するにはその国の恋人を作るのが手っ取り早いとよく言われるわ、相手の気持ちをよく知りたいから必死で言葉を理解しようとするのよね。私は工作上必要なときにその方法で新たな言語を身に付けてきた。だから私の授業では外人の口説き方を教えてあげる。プロの暗殺者直伝の仲良くなる会話のコツを身につければ実際に外人に会ったときに必ず役立つわ。受験に必要な勉強なんてあのタコに教わりなさい、私が教えられるのはあくまで実践的な会話術だけ」

ど、どうしたビッチ姉さん。まるで先生みたいに授業をしている…。

「もし…それでもあんた達が私を先生と思えなかつたらその時は暗殺を諦めて出ていくわ。…そ、それなら文句ないでしょ？…あと悪かつたわよ色々」

急にしおらしくなったビッチ姉さんを見てクラス中が笑い始める。これはギャップとかいうレベルじゃない、ジキルとハイドみたいだ。

「なにビクビクしてんだよ、さつきまで殺すとか言ってたくせに！…なんか普通に先生になっちゃったな」

「もうビッチ姉さんなんて呼べないね」

前原と岡野がそう言うのとビッチ姉さんは手を口に当てて感動し始めた。

「考えてみりや先生に向かって失礼な呼び方だったよね」

「うん、呼び方変えないとね」

「じゃ”ビッチ先生”で」

ビッチ先生の表情が固まった。

「えつ…と、ねえキミ達？せつかくだからビッチから離れてみない？
ホラ、気安くファーストネームで呼んでくれて構わないのよ？」
「でもなあ、もうすっかりビッチで固定されちゃったし」
「うん、イリーナ先生よりビッチ先生のほうがしつくりくるよ」
「そんなわけでよろしくビッチ先生！」
「授業始めようぜビッチ先生！」
「キーツ！やっぱ嫌いよあんた達！」

*

放課後になり俺は烏間先生から防衛術を学んでいる。最初に教
わったときに烏間先生から筋が良いと褒められ嬉しくなった俺は鼻
先に人參をぶら下げられた馬のごとく頑張っている。

休憩に入ったので烏間先生にビッチ先生のことを聞いてみる。

「ビッチ先生が午前と午後で180度違ったんですけど烏間先生なん
か言っただんですか？」

「…そんな大それたことは言ってない。ただあのタコの教師としての
仕事振りや君たち生徒の努力している姿を見せたただけだ。だからイ
リーナが変わったとしたらそれはあいつや君達のおかげだろう」

「そうなんですか。でも烏間先生のおかげでもあると思いますよ」

「俺はなにもしていないぞ」

「だってビッチ先生が烏間先生と話したとしたらあの時間的に昼休みに
くらいですよ？僕たちは直接的な努力なんてしてなくて昼休みに
やってたことっていつたら”暗殺バドミントン”なんでそのトレー
ニングを覚えてくれた烏間先生のおかげですよ」

「ふっ、そういうことにおくか」

烏間先生もなかなか強情だなと思う。暗殺バドミントンは遊びの
中で腕を磨けるものだがやはり遊びの側面が強い。その遊びを烏間
先生は努力と言ってくれた。あと烏間先生は口にはしていないが殺
せんせーや俺達のことをビッチ先生に詳しく説明しているはずだ。
だからビッチ先生が改心したのは一重に烏間先生のおかげだと思う。

太宰治は言った。”人は人に影響を与えることもできず、また人から影響を受けることもできない”と。

でも太宰は嘘つきだ、人は人に影響を与えるし受ける。現にこのE組がそうじゃないか。友人もカルマも、先生であるビッチ先生だって変わっている。

「そろそろ訓練を再開するか、今日の君は調子が良さそうだからもう少し厳しくいくぞ」

「…お手柔らかにお願いします」

俺は鳥間先生の期待に応えなければならぬ。今はただその一事だ。

第6話 支配者とテストの時間

〈理事長視点〉

今日は月に1度の全校集会だ。これは95%の生徒にとって自分の優秀さを確認するイベントだ。

私は今PCのモニターで集会の行われている体育館の様子を確認している。

「この手はいつも効果的です、理事長。これのおかげで3年E組以外の一流高校大学の進学率は非常に高い」

「いわばこれは大人の社会の予習です。落ちこぼれまいとする意識を今のうちから強く育てる。悲しいかな人間は：差別し軽蔑する対象があつたほうが伸びるのです」

私は常に合理で動く。学校経営も暗殺さえも理に適っていればそれでいい。

：だが。今日のE組はどうだろうか。集会での様子や先程E組の生徒に絡みに行った学生が押し退けられていた。

それは私の学校では合理的ではない。少し改善する必要がある、私にとっては暗殺よりも優先事項だ。

*

〈渚視点〉

「学校の中間テストが迫ってきました」

「そんなわけでこの時間は」

「高速強化テスト勉強を行います」

クラス全員目が点になっている。なぜなら殺せんせーが数十人、おそらくクラス全員分の分身をしているからだ。ご丁寧に頭のはちまきにみんなの苦手科目が書かれている。

「先生の分身が1人ずつマンツーマンで」

「それぞれの苦手科目を徹底して復習します」

：殺せんせーはどんどん速くなってると思う。国語6人、数学8人、社会4人、理科4人、英語4人、NARUTO1人
クラス全員分の分身なんて。ちょっと前まで3人ぐらいが限界だったのに。ちなみにNARUTOは寺坂君だ、苦手科目が複数あるって殺せんせーが言っていた。

「うわっ!!」

突然殺せんせーの顔が大きく歪んだ。

「急に暗殺しないでくださいカルマ君!それ避けると残像が全部乱れるんです!!」

犯人はどうやらというか案の定カルマ君だった…、僕は当然のように感じた疑問を殺せんせーに聞いてみる。

「でも先生こんなに分身して体力もつの?」

「ご心配なく、1体外で休憩させていますから」

「それむしろ疲れない!?!」

外を見るとビーチやプールサイドにあるようなベンチに腰かけて飲み物を飲んでいる殺せんせーの分身がいた。

：この加速度的なパワーアップは…1年後に地球を滅ぼす準備なのかな。なんにしても殺し屋には厄介なターゲットでテストを控えた生徒には心強い先生だ。

「さようなら殺せんせー!」

「ヌルフフ明日は殺せるといいですねえ」

帰りの時間となったのでそう言っただけで殺せんせーに挨拶をし靴箱に向かう、教員室の中が見える窓があるので中を覗きながら歩いていると理事長がいた。理事長がルービックキューブを急に分解したり殺せんせーが理事長と分かるやすごい速さで下手に出たのが気になったので聞き耳を立ててみることにした。

「――いざれご挨拶に行こうと思っただけですが…、あなたの説明は防衛省や烏間さんから聞いていますよ。まあ私には全て理解でき

る程の学は無いのですが…。なんとも悲しい御方ですね、世界を救う救世主となるつもりが世界を滅ぼす巨悪となり果ててしまうとは」

救う…滅ぼす？…どうということだろう？

「…いや…ここでそれをどうこう言う気はありません、私ごときがどうあがこうが地球の危機は救えませんし。よほどのことが無い限り私は暗殺にはノータッチです」

理事長は殺せんせーだけでなく、教員室の中を歩き演説しているかのように烏間先生とイリーナ先生にも話している。なんだかわからないけどカリスマ性みたいな、人を惹き付けるものを感じる。

「しかしだ、この学園の長である私が考えなくてはならないのは…地球が来年以降も生き延びる場合、つまりあなたを殺せた場合の学園の未来です。率直に言えばE組はこのままでなくては困ります」

「このままと言いますと成績も待遇も最底辺という今の状態を？」

「働き蟻の法則を知っていますか？どんな集団でも20%は怠け、20%は働き、残りの60%は平均的になる法則。私が目指すのは5%の怠け者と95%の働き者がいる集団です。『E組のようにはなりたくない』、『E組にだけは行きたくない』、95%の生徒がそう強く思う事で…この理想的な比率は達成できる」

「…なるほど合理的です。それで5%のE組は弱く惨めでなくては困ると」

「今日D組の担任から苦情が来まして、『うちの生徒がE組の生徒からすごい目で睨まれた、殺すぞと脅された』という内容でした」

僕のことじゃないか…。かなり脚色されてるけど根も葉もないことではないから反論もできない。

「暗殺をしてるのだからそんな目付きも身に付くでしょう、それはそれで結構。問題は成績底辺の生徒が一般生徒に逆らうこと、それは私の方針では許されない。以後厳しく慎むよう伝えてください。」

そう言う理事長は懐に手を入れて何かを殺せんせーに向かって投げ渡した。あれは…知恵の輪!?

「1秒以内に解いてくださいッ」

「え、いきなりッ…」

瞬間殺せんせーが知恵の輪にテンパリ絡まっていた。なんてザマだ。

「噂通りスピードはすごいですね、確かにこれならどんな暗殺だってかわせそうだ。…でもね殺せんせー、この世の中にはスピードで解決できない問題もあるんですよ。…では私はこの辺で」

そう言っただけで理事長は教員室を出ようとした。僕は聞き耳を立てていたことがばれたくなかったので素早く窓から離れ死角に隠れる。

ちやうど隠れ終わるのと同時に理事長が出てきたので思わず目が合ってしまった。微妙な空気が流れる。

「やあ！中間テスト期待してるよ、頑張りなさい！」

乾いた言葉と笑顔だった。そのとても乾いた”頑張りなさい”は一瞬で僕を暗殺者からエンドのE組へと引き戻した。

*

↳南雲視点↳

「「さらに頑張っただけで増えてみました、さあ授業開始です」」

…増えすぎだろ！そう思わずにはいられない。残像もかなり雑になっっているしドラえもんやミッキーが混ざっている。

「…どうしたの殺せんせー？なんか気合い入りすぎじゃない？」

「んん？そんなことないですよ？」

茅野がみんなの気持ちを代弁するかのよう質問してくれたが殺せんせーは何もなかったと言う。…昨日の今日でいきなり変わったら何かあるに決まってるはずだ。ある日突然今まで聴いていなかったアーティストを聴き始めたら恐らく好きな人が聴いているからとかそんなんだし、腕に突然包帯を巻きだしたらそれは中二病だ。

つまり何でも行動には理由があるのだ。まあジョジョでは人を助けたときに”おれにもようわからん”とか”なにも死ぬこたあねー”とか言っただけから理由なき行動もあるんだろう。

そんな無駄なことを考えていると授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

授業が終わり疲労困憊といった様子で教壇に肘を置いて複数の触手で団扇を扇ぐ殺せんせー、それを見た岡島と前原が声をかける。

「…さすがに相当疲れたみたいだな」

「なんでここまで一所懸命先生をすんのかね」

「…ヌルフフフ、全ては君たちのテストの点を上げるためです。そうすれば君たちから尊敬の眼差しを一身に受けたり、先生の評判を聞いた近所の巨乳女子大生に勉強を教えられるかもしれない。まさに先生には良いことづくめ」

まあ女子大生は置いといて俺たちが尊敬の眼差しを向けるっていうのはその通りだと思う。殺せんせーの話を聞いたクラスの大半は互いに顔を合わせ言葉が交わされない微妙な空気が流れる。無言を破ったのは三村だった。

「…いや勉強の方はそれなりでいいよな」

「…うん、なんとって暗殺すれば賞金百億だし」

「二百億あれば成績悪くてもその後の人生バラ色だしさ」

「にゅやッ、そういう考えをしますか！」

「俺たちエンドのE組だぜ、殺せんせー」

「テストなんかより…暗殺の方がよほど身近なチャンスなんだよ」

…上手く説明はできないがその考えは間違っていると思った。何もしない先から駄目だと決めつけてしまうのは怠惰だ、テストを欠席してE組に落ちた俺が偉そうに言えることではないが今のE組には怠惰の空気が流れている。

「なるほど、よくわかりました」

顔の模様をバツ印に変えて殺せんせーは言う。

「今の君たちには…暗殺者の資格がありませんねえ。全員校庭へ出なさい、鳥間先生とイリーナ先生も呼んでください」

殺せんせーが校庭へと向かったのでそれに続いて俺たちも校庭へ向かう。クラスの大半はなぜ殺せんせーが急に不機嫌になったか理

解できてない様子だったが何人かはなんとなく何かを察してる様子の人もいる。おおよそ先ほど俺が考えていた内容で間違いないと思う。

校庭に着くと殺せんせーがサッカーのゴールをどかしていた。そしてこちらを向くとビッチ先生を指差し尋ねる。

「イリーナ先生、プロの殺し屋として伺いますがあなたはいつも仕事をするとき用意するプランは1つですか？」

「…いいえ、本命のプランなんて思った通り行く事の方が少ないわ。不測の事態に備えて予備のプランを綿密に作っておくのが暗殺の基本よ」

「では次に烏間先生。ナイフ術を生徒に教えるとき重要なのは第一撃だけですか？」

「…：第一撃はもちろん最重要だが次の動きも大切だ。強敵相手では第一撃は高確率でかわされる、その後の第二撃、第三撃をいかに高精度で繰り出すが勝敗を分ける」

「先生方の仰るように自信を持てる次の手があるから自信に満ちた暗殺者になれる。対して君たちはどうでしょう？」

殺せんせーの問いかけにみんなはハツとなり、バツの悪そうな顔になる。俺も心のどこかにそんな気持ちがあつたかもしれないと今までの生活を省みる。

「俺らには暗殺があるからそれでいいや」…と考えて勉強の目標を低くしている。それは劣等感の原因から目を背けているだけです。」

話ながら殺せんせーは残像すらも見えない速さでその場で回転している。あまりの速さからか校庭に竜巻が起きるが尚も話を続ける。「もし先生がこの教室から逃げ去ったら？もし他の殺し屋が先に先生を殺したら？暗殺という抛り所を失った君たちにはE組の劣等感しか残らない…、そんな危うい君たちに先生からのアドバイスです。」
竜巻の大きさが最大となりそれと共に先生の話も山場を迎えたらしい。

「第二の刃を持たざる者は…暗殺者を名乗る資格なし！」

竜巻が止むと同時に雑草や小石が校庭の端に滝のように音をたて

て落ちまとめられる。整備のされていない校庭が甲子園の試合開始前のように綺麗になっていた。

「校庭に雑草や凸凹が多かったのでね、少し手入れしておきました。みなさんお忘れかもしれませんが先生は地球を消せる超生物、この一帯を平らにするなど容易いことです」

鳥間先生を含め全員が言葉を失っている。それもそのはず、一瞬でクラス全員分の表札を集めてくるより遥かに凄まじい超常現象を目の当たりにしたのだから。

「もしも君達が自信を持てる第二の刃を示せなければ、相手に値する暗殺者はこの教室にはいないと見なし校舎ごと平らにして先生は去ります」

「…その第二の刃はいつまでにですか？」

「決まっています、明日です。明日の中間テストクラス全員50位以内を取りなさい」

俺の問いかけに間髪入れず答える殺せんせー。全員50位以内？そんなこと可能なのか？…いや可能かどうかじゃない、やるしかない。

「君たちの第二の刃は先生が既に育てています。本校舎の教師達に劣るほど先生はトロい教え方をしています。自信を持ってその刃を振るって来なさい、ミッションを成功させ恥じる事なく笑顔で胸を張るのです。自分達が暗殺者であり…E組であることに！」

最後はいつも通りの殺せんせーだった。俺たちを安心させる間の抜けた笑顔で教壇に立って授業をする、そんな感じで話をしてくれた。

周りを見ると甘えた中途半端な空気は既に消え、そこには仕事人のような顔になっているみんながいた。

*

「…これは一体どういうことでしょうか、公正さを著しく欠くと感じましたが」

テストが返却されクラスが沈んだ空気を漂わせている中、烏間先生が抗議の電話を本校舎にかけている。殺せんせーに第二の刃を示せと言われ俺達は忸怩たる思いを消すかのようにテストに望んだ、しかしクラスのほとんどはことごとく惨敗という結果になった。

「伝達ミスなど覚えはないしそもそもどう考えても普通じゃない。」
テスト2日前に出題範囲を全教科で大幅に変える”なんて”

そういうことだ、テストの序盤の問題は勉強した通りの内容が出たのだが後半の問題は俺達が聞いていた出題範囲とは大きく異なった問題が出されていた。それがこの結果だ。

殺せんせーは教壇に立っているが俺達生徒の方ではなく黒板の方を見て背中を向けている形となっている。

「…先生の責任です、この学校の仕組みを甘く見すぎていたようです。
…君達に顔向けできません」

瞬間、対殺せんせーナイフがカルマから投げられる。後ろを向いていたのにも関わらず殺せんせーは避ける。

「いいの？顔向けできなかつたら俺が殺しに来んのも見えないよ？」

「カルマ君！先生は落ち込んで…！」

カルマはテスト用紙を殺せんせーに手渡すとそのまま話を続ける。

「俺問題変わっても関係ないし、俺の成績に合わせてあんたが余計な範囲まで教えたからだよ」

すげえ、合計494点かよ。ん？494点？

「たぶん南雲も余計な範囲まで教えられてたから同じ感じじゃない？」

カルマの言葉を聞いて殺せんせーが一瞬で俺の目の前に来てテスト用紙を確認する。各教科の点数は違えど合計点数が同じなのだ。

「だけど俺はE組を出る気ないよ、前のクラス戻るより暗殺の方が楽しいし。南雲もそうでしょ？」

「当たり前だ」

「…でどーすんのそっちは？全員50位に入んなかったって言い訳つけてここからシツポ巻いて逃げちゃうの？それって結局さあ、殺され

んのが怖いだけなんじゃないの？」

うわー煽りよる、殺せんせーの顔どんどん赤くなってきた。カルマの意図をクラス全員理解したのか流れに乗って煽っていく。

「なーんだ殺せんせー怖かったのかあ」

「それなら正直に言えばよかったのに」

「ねー？怖いから逃げたいって」

「にゅやーっ！逃げるわけありません！期末テストであいつらに倍返しでリベンジです！」

怒った殺せんせーを見てクラス全員が笑顔になる。

中間テストで俺達は壁にブチ当たった。E組を取り囲む作られた分厚い壁に。…それでも俺は心の中で胸を張った、自分がこのE組であることに。

*

～放課後、帰り道～

「ねえ純一、なんであんな点数よかったの？」

「俺はやればできる子なんだよ」

俺は莉桜と一緒に帰っているが話題はやはり今日のテストだ。

「いや今そういうのいいから」

「んー…1、2年のころの俺の成績知らん？」

「…関わりなかったし正直知らない」

「自慢みたくなるからあまり言いたくないが全部のテスト10番以内には入っていた」

「へえ～意外ね」

「だからYDKなんだって」

梶ヶ丘中学校に入学してきている時点でみんなそれなりに、というか相当に頭が良いはずだからやればできるはずだ。それになんとなく苦手意識のある社会も好調だったのでカルマと同率4位を取ることができた。

「ところで純一は修学旅行の班どうするか決まった？」

「いや決まってるないな」

「じゃあ私のところ来ない？凜香とかいるよ」

「今のフリーズ氣志團みたいだったぞ。…ま、ありがたく入れさせていただきます」

「じゃあ男子は適当に誰か誘つといてね」

「渚とか？」

「？なんでそこで渚？」

「いやなんとなく、まあ適当に声かけてみるよ」

「じゃあよろしく」

その後は他愛もない話をして帰った。

テストの次は修学旅行か。中学3年に進級してからというものの、今までと比べて内容の濃い生活を送っている。

暦はまだ5月。夏を感じさせる風も吹くが春のような目新しい空
気も感じるこの時期が俺は好きだ。

第7話 準備の時間

眠い目を擦りながらリビングに行くとき父さんが朝食を作っていた。

「おはよーっす」

「おう、ちゃんと起きたみたいだな」

「どんなに夜更かししても休日早く起きないと損した気分になるから」

「まったく誰に似たんだか」

たぶん父さんだと思いがあえて返答しない。

「今朝飯なに？」

「ふっ見て驚け、ラピユタパンだ」

「驚くもなにも思い切り昨日の金曜ロードショーに影響されてるよね」

「映画では目玉焼きだけだがこれにはベーコンもついてるぞ」

「マヨネーズは？」

「お好みで」

「了解」

台所を覗くと昨日の夜のスープも暖めていたので洋食チックな朝食だ。朝はご飯派だが特別なこだわりもないため今日みたいにパンの日もある。それが南雲家の食卓もとい朝食事情。

「飯食って9時過ぎに家出るか」

「オツケー」

「おやつは何円までだ？」

「今時そんなの守る方が少ないよ」

「バナナはおやつに含まれるのか？」

「ボケが微妙に古いよ」

父さんの小ボケに対してツツコミを入れてつつ食事を進める。バナナはおやつに入りますかという様式美とも言える質問に代わるお題はないのだろうか。ゼリーだとバナナほどのインパクトはないしグレーゾーンでもない。なんだろう、ハニトーとかカステラ辺りだろうか。

朝御飯も食べ終わり身支度をすする、これから行くのは大型ショッピングモールなので誰かに会うかもしれないのでちゃんとした服装に着替える。

修学旅行ということで今日は父さんと旅行の際に必要なものを買に行くというわけだ。細々したものが多くなる予定なので車で向かう。

「オツケー準備できた」

「車でかけるCDが決まれないから待ってくれー」

「ピロウズの気分だからピロウズで」

「父さんは林檎がいいな」

「じゃあ行きがピロウズで帰りに林檎で。ていうか聴きたいアーティスト決まってるじゃん」

今決まったんだよと父さんは笑いながら返す、ちなみに林檎とは椎名林檎のことだ。

財布、携帯と最低限の物を持って車に乗り込む。到着まで約20分、前回父さんと外出したのはいつだったかなと記憶を遡る。

「ピロウズってやっぱり男女の曲っていうか恋愛の曲多いよな」

「まあ他のアーティストと違ってバリエーション豊かだし上手いききましたーってのは少ないけどね」

「恋愛といえばお前好きの子いないのか」

「恐ろしく雑な話題転換だな」

「思春期真っ只中に聞くのもなんだけど実際どうなんだ」

「いや可愛いと思うことはあっても好きとはならんな」

「莉桜ちゃんはどうなんだ？」

「たぶん父さんが今の莉桜見たら別人だと感じると思う」

「へー今どんな感じなの？」

「金髪ですごい騒がしい」

「へー久しぶりに会ってみたいな。今度家に連れて来てよ」

「後半だけ聞くとセクハラ親父だな」

「そんな気持ちには微塵もないからな、俺は母さん一筋だから」

「その言葉何回も聞いたよ、てか髪の色に関して何も気にしないんだ」
「別に髪型や髪色で人間性が問われるわけではないと俺は思ってるからな。世間一般で見たら俺みたいのは少数派だけど」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんだよ、これから俺も渋さを表すかのように髪が少しずつ銀色になっていくから見とけよ」

「それはただの白髪だ」

30代だしまだそんな心配いらないだろうに。白髪のメカニズムはわからないがなんとなくストレスで増えるイメージがある、そう考えたら父さんより烏間先生のほうがヤバイんじゃないだろうか。ここにはいない人の心配をしていると目的地が見えてきた。

*

「じゃあ俺は先に食材買ってから後で合流するから先に必要な物を見ててくれ」

「オツケー、荷物持ちはしなくていい？」

「ふつままだまだ現役だ、なんか飲み物買つとくけど何がいい？」

「車の中で飲む用に500mlのミルクティー、家用にコーラ」

「了解」

そう言つて二手に別れる。あつ旅行分の飲み物頼むの忘れてた、まあ当日に自販機で買えばいいか。

とりあえず歯ブラシ辺りのエチケツト辺りから見ると。父さん曰く家用とは別に用意しておいた方がなにかと楽らしいので使い捨てではなくちゃんとしたものを選ぶ。先人の知恵というか三十数年生きてるだけあつて様々なことに詳しいなと思いつつ商品を見ていく。

「あー！南雲君だ」

クラスで聞き覚えのある声があったので声のした方向を向くと女子三人組がいた。

「茅野か、同じ班の三人と一緒にすることは買い出しだな」

「おーさすが！学年4位は察しがいい！」

「いやE組ならたぶん誰でもわかると思うぞ」

「そうかなー？ところで芳香剤の匂い嗅ぎながら話すのやめない？」

「…いや嗅いでる最中に話しかけてくるから」

茅野に指摘された通り俺は芳香剤売り場にいた。流れで商品を見てたら芳香剤にたどり着きテストを開けては嗅ぐを繰り返していた。

「ひよつとして…匂いフェチ？」

「断じて違う」

匂いフェチのレッテルを貼られては例え事実無根であってもカルマと蒞桜にからかわれまくる、それだけは阻止したい。

「あーでも嗅いだことのない匂いの商品を見ると手を伸ばしてしまうな。てことで奥田、今度色々調合して作ってみて」

「えっ私ですか!？」

「うん、化学得意だし好きじゃん。殺せんせー用の毒も作ってたし。ついでついで」

「えーと、じゃあ今度試してみますね」

「おう、調合したら是非呼んでくれ」

「あつ私も！」

「私もいいかな？」

俺の提案に思いの外女子たちが乗ってきた。イメージで語るの好きくないがこういうフレグランス的なのはやっぱり男子より女子だなと思った。

「話戻すけど修学旅行の買い出しで何か入用な物って特別ないよな？」

「うーん…特になんじやない？女子的には化粧水とかハンドクリーム忘れたらショックだけど」

「茅野さん大丈夫だよ、忘れたら私の貸すから」

「か、神崎さん…!」

「神崎だったらそういうところしっかりしてそうだし大丈夫そうだな、茅野と違って」

「むー、南雲君って私の扱い雑じゃない?」

「そんなことないそんなことない。なあ、奥田?」

「えっ…うーん…同じ言葉を二回繰り返すときってどうでもいいことって聞いたことあります…」

あつ爆弾投下しやがった。

「えー!私のことどうでもいい存在だと思ってるの!?!」

「なんだその反応、ヒステリックな彼女か。違うよ、何となく男子と同じ感じの返しになるだけだよ」

「全然フオローになってないよ!」

「あーあれだ、そう、妹的な!」

「なるほどー、南雲君って妹いるの?」

「いや、一人っ子だよ」

「やっぱり適当に返事してるでしょ!」

「いやいや、本当に適当には返事してないよ」

「本当?嘘じゃない?」

「本当だよ。ジュンイチ、ウソツカナイ」

俺と茅野のやり取りを見て奥田はあたふたした感じ、神崎は上品に笑っている。大人しい二人でもこうも反応に違いがあるんだな。

「ところで南雲君は一人で来たの?」

「いや、父さんと来たよ。何一つ旅行の準備してないから車のほうが楽だと思って」

「そうなんだ、それでお父さんは?」

「先に食材とか買ってるからもうそろそろ終わってこっち来ると思うけど」

「嫌じゃなかったら見てみたいんだけどいい?」

「全然いいよ、父さんもその辺は気にしないと思うし」

「二人もいいかな?」

茅野の提案に二人は控えめに了承していた。

「でも珍しいね、大抵の人は親と会わせたくないって人多いのにな」
「変な人だったら俺も会わせたくないけど変な人じゃないからな」
「へえ、どんな感じの人なの？」

「芸能人で言えば竹野内豊みたいな感じかな」

俺が喋り終わると同時に肩をとんととされたので後ろを振り返る。頬に人差し指が刺さった。

「うわー親にやられてもときめかねー」

「じゃあ三人の内の誰かにやられたらときめくのか？」

「やられてないからわからん」

「そうか、三人ともこんにちは。純一の父の竹野内豊です」

「いや、違うだろ。南雲家の人間だろ」

父さんの言葉に三人は挨拶を返す。

「すごい、一発で親子ってわかる」

「いやどこが」

「見た目似てるしイケメン親子だ」

「だつてさ、父さん。よかったな」

「最近言われないから嬉しいねー、三人も可愛いよ」

「後半だけ抜き出したらやべえやつだな」

「抜き出すな、流れを見ろ」

「抜き出してないから安心してくれ」

「なんかすごい仲良いね」

茅野の言葉に奥田と神崎は同調するように頷いていた。

「純一、女の子と話してばかりいないで目当てのピツケルは見つけたのか」

「なんでピツケルだよ、雪山には行かないよ」

「虫アミも忘れたらダメだぞ」

「あつモンハンのほうか。どっちにしる旅行には絶対に必要ないよ」

俺と父さんのやり取りを見て神崎だけ笑っていた。どうやらモンハンネタが通じたらしい。

「ごめん、三人とも。やっぱり変な人だった」

「ううん、そんなことないよ。お父さんと仲が良くて羨ましいな」
「そう？引いてない？大丈夫？」

「どんだけ心配なんだ。ところで三人の名前はなんて言うんだ」
「髪をサイドにまとめてるのが茅野、眼鏡をかけているのが奥田、ロングでおしとやかなのが神崎」

「茅野さんに奥田さんに神崎さんね、よし覚えた。三人ともうちの純一と仲良くしてやってね」

「いえいえ、こちらこそ」

「なんで急に真面目になってんだ」

「父親らしいこともしておこうかなと」

「いつもちゃんと父親してもらってるよと思ったが恥ずかしいので口には出さない。」

「そろそろ買い物に戻るかな」

「せっかく会えたのにもういいのか？」

「互いに買い物あるし、なあ？」

「そうだね、名残惜しいけどまた学校で」

「三人ともいつでも家に遊びに来ていいからな」

「息子の意志も聞かずに誘うな」

「南雲君は嫌なの？」

首をかしげながら聞いてくるんじゃない、神崎。それやられたら嫌でも嫌って言えないでしょ。

「嫌じゃないから別に構わんけど」

「本当？じゃあ今度行ってもいいかな？」

「都合のいい日があったら」

「ふふ、楽しみにしてるね」

「じゃあ俺達は行くよ、三人ともまた学校で」

「うん、またね南雲君」

「バイバイ」

「父さんじゃなくて俺に言ったんだよ」

三人に別れを告げ買い物へと戻る。ちゃんとした服装で来て正解だったと思う。それにしてもこの父親は友達の前でもいつも通り

すぎるな。

*

「買い物も無事に終わり、今は帰りの車に乗っている。」

「みんないい子そうだったな」

「实际いいやつだよ、まだ1ヶ月ちよつとしか一緒に過ごしてないけどなんとなくわかる」

「お前も楽しそうだったしよかったよ」

「そうかい」

俺の返事を皮切りに車内にはしんとした空気が流れ、椎名林檎の曲だけが響く。少し間が空いたあと父さんが口を開く。

「まあ父親としたら不安なんだよ、本人がどんなに学校が楽しいって言っても直接見てる訳じゃないし。そういうった意味でもクラスメートと仲良くしてるのを見れたし本当によかったよ」

「そうかい」

「うん、そうだ」

「またも車内は静まり返る。」

「父さんは…」

「ん？」

「たまには父親らしいことしておくって言ってたけどいつもしてもらってるよ」

「本当か？それならよかったよ」

「ん」

「なに外を見てんだよく、照れてんの？」

「うるせー、ちよつと恥ずかしいんだよ」

「可愛いとこあんじやーん」

「思春期真つ只中の中学生をからかうなよ、昔は父さんもからかわれなくなかったろ？」

「そりや父さんも中学生のときはそう思ってたよ。でもな、純一。この年になって中学生の息子を持つとからかいたくなるんだよ」

「なんだよそれ」

「父親になって子供ができたらしきつと、いや絶対にわかるよ」

「そうかい」

結婚：か、全然想像もできないな。そもそも付き合った経験もないし。いつか結婚するのだろうか、そんな遠い未来を想像している俺に乗せた車は家へと走る。

*

く個人トークく

神崎：旅行楽しみだね

南雲：そうだな、今日会えてびつくりしたよ

神崎：私も。お父さんとすごい仲がよかったね

南雲：あそこまで仲良いのは俺の家くらいじゃないか

神崎：そうなのかな？ちよつと羨ましいな

南雲：神崎のそこは仲が悪いのか？

神崎：うん：父親が厳しくてね

南雲：そうなのか、ごめんな嫌なこと聞いて

神崎：ううん、気にしないで

南雲：時間が解決してくれるんじゃないか

南雲：反抗期とか色々あるしその内普通に話せるようになると思う

神崎：ありがとう

南雲：いえいえ、班違うけど旅行でもよろしく

神崎：こちらこそお願ひします

第8話 旅行の時間 その1

今日は修学旅行当日。天気にも恵まれ集合場所である駅まで問題なく到着することができた。烏間先生がE組の人数確認などを行っているが殺せんせーがどうも見つからない。国家機密だから現地で合流するのだろうか。

ちなみに班編成は、

1班：磯貝、木村、前原、岡野、片岡、倉橋、矢田

2班：俺、岡島、菅谷、千葉、凜香、莉桜、不破

3班：竹林、寺坂、三村、村松、吉田、原、狭間

4班：カルマ、友人、渚、茅野、神崎、奥田

となっている。

そうこうしていると新幹線の発車時刻が近くなってきたため車内へと乗り込む。

「うわ…A組からD組まではグリーン車だぜ」

「うちらだけ普通車、いつもの感じね」

「まあまあ、みんなと一緒にならどこでも楽しいだろ」

「それはそうなんだけど…」

俺が菅谷と莉桜を宥めていると後ろから「ごめん、あそばせ」と聞こえてきたので振り返る。

「ごきげんよう生徒達」

「ビッチ先生、何だよそのハリウッドセレブみたいなカッコはよ」

「フッフッフツ、女を駆使する暗殺者として当然の心得よ」

木村の質問にビッチ先生はさも当然のように説明を始める。

「狙っているターゲットにバカンスに誘われるって結構あるの。ダサイカッコで幻滅させたらせつかくのチャンス逃しかねない。良い女は旅ファッシュョンにこそ気を遣うのよ」

旅ファッシュョンに気を遣うのもいいけど俺等にも気を遣ってほしい。あつ烏間先生が来た。

「目立ちすぎだ、着替えろ。どう見ても引率の先生のカッコじゃない」「堅い事言ってんじゃないわよカラスマ！ガキ共に大人の旅を…」

「脱げ、着替えろ」

先程の元気なビッチ先生はどこへやら。寝巻きに着替えてしくしくと泣いている。

「誰が引率だかわかりやしないな」

「金持ちばっか殺してきたから庶民感覚がズレてるんだろね」

「ところで殺せんせー見てない？」

「確かに新幹線が出発したのに見てないね」

渚と話していて車内を探すように見ていると渚がいきなり声をあげて驚いたのでそちらを見る。うわっこれはビビる、新幹線の窓に殺せんせーが張り付いている。普段あり得ないことを目にすると思が、出てしまおうな。渚はすかさず携帯を取り出し殺せんせーへと電話する。

「何で窓に張り付いてんだよ殺せんせー！」

「いやあ：駅中スウィーツを買ってたら乗り遅れまして、次の駅までこの状態で一緒に行きます。なにっこ心配なく、保護色にしていますから服と荷物が張り付いてるように見えるだけです」

「それはそれで不自然だよ！」

「いやあ疲れました、目立たないよう旅するのも大変ですnee」
「そんなクソでかい荷物持つてくんよ、ただでさえ殺せんせー目立つのに」

「てか外で国家機密がこんなに目立つちゃヤバくない？」

「にゅやッ!？」

「その変装も近くで見ると人じゃないってバレバレだし」

各々殺せんせーへと意見する。変装は確かにまずいよなー、人じゃないってバレてないだけすごいと思う。

「殺せんせー、ほれ。まずそのすぐ落ちる付け鼻から変えようぜ」

「…おお！すごいフィット感！」

「顔の曲面と雰囲気に合うように削ったんだよ、俺そんな作るの得意だし」

菅谷が先生へと新しい鼻を作ったがなかなかどうして、焼け石に水くらいには自然になった。旅行となると皆の意外な一面が見れるなと思いつながら自分の座席へと戻る、すると不破が大富豪をしようと提案してきたので俺は快諾し大富豪を始めた。

一日目の日程をこなし、旅館に到着する。旅館の名前は”さびれや旅館”だ、客商売をするにはありえないネーミングだなと思う。

殺せんせーは入口の近くにあるソファで顔を青白くし瀕死となっている。

「新幹線とバスで酔ってグロッキーとは…」

「大丈夫？寝室で休んだら？」

心配してるのは岡野だが言動とは裏腹にナイフで暗殺を試みてる。「いえ、ご心配なく。先生これから1度東京に戻りますし、枕を忘れたので」

（（あんだだけ荷物あって忘れ物かよ！））

グロッキーな殺せんせーを置いて部屋に行こうかなと思つたら神崎が何かを探すように鞆の中身を確認している。俺は鞆の中が見えない位置から話しかけることにした。

「どったの神崎？忘れ物？」

「ううん、日程表が見つからなくて」

「朝はしっかりあったのにな」

落としたのかな？そう思っていると殺せんせーが話しかけてきた。

「神崎さんは真面目ですからねえ、独自に日程をまとめてたとは感心です。でもご安心を、先生手作りのしおりを持てば全て安心」

「そんな分厚いのも持って歩きたくないからまとめてたんだと思うけど」

「確かにバッグに入れてたのに…、どこかで落としたのかなあ」

なんとなく神崎が落ち込んだので気休めだが俺は鞆から飴を出して渡す。

「ほれ、神崎。これでも食べて元気出せよ」

「ありがとう。南雲君って飴好きだよね」

「喉潤うし、何より美味しいからね。もし日程表が見つからなくても奥田と茅野がいるしきつと大丈夫だろ」

「うん、ありがとう。茅野さん、もし見つからなかったら見せてもらってもいいかな？」

「もちろん！」

旅行初日からアクションデントとまではいかないがツイていないなと思った。ところで運が良い状態をツイてると言うが語源はなんなんだろうか。

*

修学旅行2日目。昨日は男子で枕投げをして全員雑魚寝で寝たせいかなんとなく疲れが残っている。

俺達E組の修学旅行は当然の事ながら暗殺もかねている。具体的には2日目と3日目が班別行動となっているがその際殺せんせーはそれぞれの班を順番に回って付き添う予定となっているのでプロのスナイパーが狙撃を行う手筈だ。各班はスナイパーの配置に最適なスポットへと誘い込むように烏間先生から言われている。

俺達2班は東映太秦映画村で暗殺を行う。男子が言わずもがな疲れているので女子が先導していく。

「ちよっと純一、そんなんで大丈夫なの？」

「まだ朝だから調子出ないんだよ。それにしても莉桜は元気だな、何か良いことでもあったのか？」

「なにバカなこと言ってるの、ていうか昨日夜何してたの？」

「枕投げ、敵側だった千葉が強いなの」

「それで結局どっちが勝ったの？」

「俺も千葉も疲れてそのまま寝た」

「ふーん、純一と引き分けなんて千葉君やるじゃん」

千葉のコントロールが良すぎて気を抜けなかったのが疲れた原因だなど分析。とりあえず飴でも舐めるかと思いいバッグから取り出す。

「みんな飴食う？純露だけど」

「おっもらうわ」

「せんきゅー」

「…どうも」

「気が利くじゃん」

「…本当に飴好きだね」

「飴が好きなら漫画キャラいたかな？」

各々一言ずつ言ってから持っていく。不破の一言に関して考えてみたが思い付かない。飴好きのキャラなんて誰かいたかな？

「おー無事に到着したな」

「純一ちよつとちよつと」

「ん？どうした？」

「女子三人の写真撮ってよ」

「了解、じゃあ男子の分も撮ってくれよ」

「オツケー、殺せんせー来たら全員でも撮ろうよ」

「そうだな、じゃあ撮るぞー。はいチーズ」

言葉と同時にカメラのシャッターを切る。そしてそのまま携帯のカメラも起動させそちらでも撮る。

「あとで送っとくよ、じゃあ次は男子だな」

「ほいほい、ちやつちやと並んで」

そろそろと男子は並び始める、俺を始めとしてみんなまだ本調子じゃない感じだ。ちやつちやと動けないし、いつもより動きに無駄が

多い。写真を撮ったあとに莉桜にいつまでもそんなんだったらケツを蹴飛ばすよと低めに脅されたので男子陣は空元気に振る舞う。

俺達が映画村で行う暗殺は映画村で殺陣が行われるのでそれに気が向いている隙に殺せんせーを狙撃してもらおうというものだ。人が多いし、俳優達はいつもより派手に立ち回るらしいのでいつもとは違う暗殺になるはずだ。

時刻が11時にさしかかろうとしたときに殺せんせーが来た、つまり1班は暗殺に失敗したということだ。たしかトロツコ列車だったか。

「遅いよー殺せんせー、殺陣始まっちゃうでしょー」

「いやあすみません、保津峡の絶景が素晴らしくて…」

「まあとりあえず写真撮ろうぜ」

近くを通りかかった人に写真を撮ってもらおうように交渉すると快諾してもらえた。ただ殺せんせーを見たその人は首をかしげて珍しいものを見たような顔をしていた。まあそういう反応になるよね。

何はともあれ殺陣が始まる。なるほど、ドラマ仕立てでちゃんとストーリーがあるのか。

「間近だと刀の速度すげーな」

「速く魅せるよく練られた動きですねえ、先生こういう殺陣大好きなんです」

「へえ〜」

「そんなこと言ってたらこっち来た！」

その場所に留まっているとぶつかってしまおうので殺陣を見ながら移動する。本当にすごい迫力だな。ん？殺せんせーどこ行った？周りを見渡すと1対多だったのが2対多になっている。って何してんだ殺せんせー！

「いつの間に俳優に混じって殺陣やってんだ？」

「おまけに着替えまで済ませて…」

「助太刀いたす、悪党どもに咲く仇花は血桜のみぞ」

「決め台詞も完璧だ！」

こんなに動き回ってたら狙撃できないんじゃないか？つてくらい

に動く動く。

こりや俺達の班も暗殺失敗だなど苦笑いしながらより迫力が増した殺陣を楽しむことにした。

「殺陣にも参加できたし先生大満足です！」

「あれだけ派手に動けばね」

「俳優の人は見せ場奪われて切ない顔してたよ…」

「にゅやッ！それでは先生次は清水寺に行かなければなりませんので！」

言うや否や先生は飛んでいった。俺達の中で一番旅行を楽しんでるの殺せんせーじゃないかな？そんな気がしてきた。

「とりあえず映画村見て回りますか」

「そうだね、お土産も見たいし」

「じゃあせっかくだしみんなで見てもいいか」

「賛成」

てことで見て回る。俺達が先程の殺陣を見ていたのは江戸の町なので明治通りのほうへと行く。

「純一はお父さんになんか買っていくの？」

「生八つ橋頼まれてるからどっか適当な場所で買うよ、そういや莉桜に会いたがってたから今度遊びに来いよ」

「そうなの？じゃあ誰か誘っていくね」

「おっ俺も純一の父さんにしばらく会ってないな」

「岡島については何も触れてなかったから別にいいんじゃないか？」

「俺の扱い雑か！」

「三人って小学校から一緒なんだっけ？」

「そうだよ、なんやかんやずっと一緒だな」

「ふーん、そうなんだ」

「なにー？凜香、純一とずっと一緒なのが羨ましいの？」

「別にそんなんじゃないし」

「照れなくていいのにく、うりうり」

莉桜が肘で小突くのに合わせて不破も小突いている。不破って意外とノリがいいんだな。

「お土産と言えば俺の家も八つ橋を指定されたな」

「菅谷の家もそうなのか、ご家族八つ橋好きなんだ？」

「いや、あんたのセンスに任せたらキワモノになるのが目に見えるからって言われた」

「…菅谷のセンスはワンランク上な感じだからな」

確かに菅谷に適当にお菓子を買ってきくと頼んだらスタンダードな物は一切なしのラインナップになりそうだなと思う。お土産についてあれやこれやと話していたらお土産屋が見えてきたので中に入り各々見て回る。

ストラップ系を見てみると小さな急須のストラップが目にとまった。おーなんかかわからんがいいな、これ。ただ生憎ストラップを付けるものを持ち合わせてないので買わないでおく。

そのまま流れで見ていると凛香が立ち止まっていたので話しかける。

「なんか欲しいものでもあったのか」

「ん、いや、別に」

「…あー絵葉書か。確か好きだよな、絵葉書」

「えっ」

「えっ？中2のとき言っていなかった？なんか大切にしているとかなんとか」

「いや、そうだけど。覚えていると思ってなくて」

「俺もさっきまで忘れてたよ」

あれは中2のときだったか、国語の授業だかの話の流れで宝物の話になったときに俺が初めて買ってもらったアーティストのCDと答えると凛香は絵葉書と言っていたんだ。

「覚えていてくれて、ありがとう」

「いや、別になにもしとらんが」

「それでも」

「じゃあ…どういたしまして?」

何で疑問系なのと凜香は笑う。普段はクール顔だが笑うと幼く見えるなと思う。

そのまま二人で絵葉書を見ていると古臭い野球のグラウンドなどの絵葉書がいくつか出てきた、おそらく明治時代に日本で野球が広まったからだろう。

野球関連のネタだったのでそのことを友人にメッセージで送る。するとすぐに電話がかかってきたので出る。

「野球ネタだから感激したのか?」

「違う、そうじゃないんだ」

「どうした?」

「神崎さんたちが攫われたんだ」

「は?どういうことだ?」

「祇園で高校生達がなぜか俺達のこと狙ってたっぽくて、それで不意打ち食らって男子はみんなやられた。奥田さんは無事だったけど」

「それで烏間先生とかには連絡はしたのか?」

「ああ、それでしおりに”クラスメイトが拉致られた時”って対処法が載ってたからその通りに動くよ。あと拉致実行犯潜伏対策マップの祇園から一番近くに向かうつもり」

「わかった、俺もマップ見て各場所回るよ。そのほうが早く解決するだろう?」

「了解、それにしても何でそんなに落ち着いているんだ」

「さあ、わからん。でも取り乱してたら解決するものもなくなるからな」

そう言って電話を切る。

「ねえ今の電話って…」

「4班がトラブったらしいから俺は行くよ。凜香はみんなに俺が烏間先生に呼ばれたとかなんとか言っておいて」

「私も行くよ」

「ダメだ、もしかしたら凜香まで危険な目に合うかもしれないしきつ

と殺せんせーがなんとかしてくれ」

「それだったら純一は行かなくても…」

「何か出来るのに何もしないのが俺が一番嫌なんだ、だから行つてくる」

時間が惜しいので走り出す。凜香が後ろから何か言っていたが押し問答になつてしまうのでそのまま駆けた。

映画村を出ると同時に一番近くの拉致地点はどこかを確認する、走れば5分とかからない位置なので俺は1秒でも早く着けるように快足を飛ばした。どうか茅野と神崎の二人が無事でいてほしい、今はただそれだけしか考えられなかった。

*

↳凜香視点

「待ってー」

私の言葉で制止せずに純一はそのまま行つた。

トラブルの内容は聞いていないがああの様子を見るにおそらく大事ななんだろうと思つた。4班のみんなは心配だ、それでもどうして純一が行く必要があるんだろうという思いはなくならない。

純一の言っていたこともわかる、でも私達はまだ中学生だ。出来ることには限界もあるし解決できない問題も多くある。助けに行きたいけど力になれないかもしれない、4班のみんなは心配だけど純一に行つてほしくない、そんな矛盾が私の中で渦巻いている。

ただはつきりしていることがある。純一がいなくなつてから胸の奥が締め付けられるように痛い。この痛みはなんなのだろう、今の私にはわからない。

そのあと純一に言われた通りに烏間先生に呼び出しを受けていなくなつたことを伝えた。みんなが何か言っていたけど、言葉がぼんやりと遠くてよく頭に入つてこなかった。

それなのに胸の痛みだけがどうしても治まらない。

——どうしても、治まらない。

第9話 旅行の時間 その2

「はあ、はあ」

潜伏予想箇所の1箇所目は誰もいなかった。次は2箇所目だ。

俺の今の行動は骨折り損かもしれない。それでも俺は自分にできることをやるだけだ。考えても仕方がないことは考えるな。今は神崎と茅野のためだけに動け。そういえば2班のみんなはどうしてるだろうか。最後凜香を無視する形になってしまったから後で謝らなと。ちゃんと許してくれるだろうか。

頭の中で様々な考えが浮かんで消えていく中、2箇所目に到着した。…ここにもいない。1箇所目と同様またしおりのマップのペー지를開き場所に目星を付ける。マップを指で追っていると電話が鳴る。慌てて取り出し画面を見ると友人からだったのですぐに出る。

「どうした!?!」

「無事に救出できたぞ!」

「本当か! ケガとかは!?!」

「ない、二人とも無事だ」

「ふーっ…」

安堵からか俺はその場にしゃがみこむ。

「純一? 大丈夫か?」

「…ああ、安心して力抜けただけだ」

「そっか、純一も4班のために動いてたってことを殺せんせーに伝えたらすぐにそっちに行きたいって言ってるんだけど今どこだ?」

「あー…川沿いの空き地とか空き家というか。特に目印もないんだけど殺せんせーに言えば伝わるかな?」

「了解、ちよつと待ってて」

俺はもう一度息をつく。ずっと走っていたせいか脚がなんとなく重い。

「純一? おーい」

「ちゃんと聞いているから大丈夫だ」

「場所わかったからそっち行ってくて」

わかったのかよ。心の中でツツコミをいれる。

「じゃあとりあえず電話切るよ、本当に無事でよかったよ」

「ありがとな、純」。じゃあ」

そう言っただけで電話を切ると後ろからヌルフフと聞こえてきたので振り返る。

「さすが殺せんせー、速いなあ」

「いえいえ、南雲君が行動していたと聞いたのですぐにこちらにも来なければと思ひまして」

「俺なら問題ないです。…まあ俺が行動しなくても結果は変わらないかったんじゃないかなって思っただけです」

「…つまり自分の行動の意味はなかった、と?」

「結果的に言えばそうだけど、そうじゃなくて。ただ自分が納得したかったから行動しただけなんじゃないかなって。ちよつと自己嫌悪してます」

「…ふむ」

そう言っただけで殺せんせーは思案顔になる。少し間が空いてから俺に語りかける。

「これから先生はいくつか質問します、いいですか?」

「どうぞ」

「南雲君は4班のみんなが心配でしたか?」

「もちろん、友達だから」

「拉致されてる可能性の場所を回ったと聞きましたがその行動は誰のためですか?」

「神崎と茅野のためです」

「それでは二人が無事だったと聞いてどう思いました?何も感じませんでした?」

「何も感じないわけじゃないです、無事でよかったですと安堵しました」

「それでは最後の質問です。今までの質問の答えを振り返って君はただ自分が納得したかったから行動したと思ひますか?」

「…いいえ、思わないです」

「ほら、君の心はわかってるんですよ。南雲君、結果的に見れば君は動

かなくとも今回のトラブルは解決しました。ではもし仮に拉致されていた場所が別の場所だったらどうですか？君が走った場所にもしかしたら二人がいたかもしれない。その時君が行動していなかったら？救出が遅れ二人が傷つけられたかもしれない。そんな可能性だつてあつたんですよ」

確かに殺せんせーの言うとおりだ。今回はたまたま助かっただけで助からない可能性も十二分にあつたのだ。

「君は”ハチドリの一としずく”という絵本を知っていますか？」

「いいえ、知らないです」

「この絵本はとても短いお話です。簡潔に説明するまでもなく短いので全て話しますが――、ある森が燃えていて、その森に住む動物達は一目散に逃げていきます。みんなが逃げていく中で1羽のハチドリだけはくちばしで水のしずくを1滴ずつ運んでは火の上に落とす、運んでは火の上に落とす、と繰り返しています。それを見た他の動物達はハチドリを笑います。”そんなことをして一体なんになるんだ”と。それに対してハチドリはこう答えます。”私は、私にできることをしているだけ”。…ここでこの絵本は終わります。南雲君は今の話を聞いてどう思いましたか？」

「なんか…今の俺みたいですね。ハチドリも、ハチドリを笑った他の動物達も」

「そうですね、では南雲君はハチドリは行動は間違っていると思いませんか？」

「いいえ、問題を解決しようと行動しているので間違っていないと思います。むしろ出来ることを全うしているので笑われる謂れがないです」

「先生もそう思います。先程南雲君はハチドリも他の動物も自分みたいだと言いました。ええ、その通りです。でも南雲君、ハチドリのように素晴らしい行動をしたのだから自分の行動を他の動物達と同じように笑わないでください、卑下しないでください。君と同じように友達のために行動できる人はそういない。ましてや中学生の君がだ。行動に点数をつけることはできませんが今日の君の行動は百点満点

ですよ」

「…ありがとうございます」

「心は晴れましたか？」

「はい、充分すぎるほどに」

「それはよかったです、では旅を続けますかねえ」

そう言うとう先生は飛んでいった。俺は川を見て一息つく。一度こうと決めたら、自分が選んだのなら決して迷わないようにしようと思つた。選んだのなら目標に向かって進み続ける、そう心に決めた。

俺は携帯を取り出すと凜香にメッセージを打ち込む。

南雲：無事に解決した、さつきはごめん

やっぱり怒ってるかな？てかそもそも返信返ってくるのか？そんなことを考えていると携帯が鳴る。

凜香：解決してよかった、大丈夫だから気にしないで

凜香：それより会えない？

南雲：ああ、これから2班のみんなと合流するけど

凜香：そうじゃなくて、

凜香：2人で抜け出して会わない？

*

俺は今指定された場所で待っている。先程凜香から抜け出さないと提案を受けたときはビックリしたが謝るのであれば二人きりのほうが何かと都合がいいので了承した。莉桜とかに変な茶々を入れられる心配もないしな。

待ってる間は暇なので俺は内ポケットからイヤホンを取り出し携帯に繋げて音楽を聴く。”音楽とは精神と感覚の世界を結ぶ媒介のようなものである”と言つたのはベートーベンだったかモーツァルトだったか。——そんなことを考えながら聴いていると肩をトントンと叩かれた。

「ごめん、待った？」

そこには少し走つたのか、軽く息切れしている凜香がいた。

「いや、今来たところ」

「嘘、音楽聴くくらい待つてたでしょ」

「そんなに待つてないよ、10分もかかってないくらい」

「やっぱり待つてるじゃん、ごめんね？」

「いいて、気にすんな。むしろ俺のほうが謝りたいし」

「映画村でのこと？あれはもう大丈夫だよ」

「それでも、直接謝らないと違う気がするんだ。ごめんな、凜香」

「そういうことなら。気にしないでいいよ、純一」

「ありがとう。そういえば俺いなくなつたあとみんな何か言つてた？」

「色々言つてたけど覚えてない」

「そつか、まあ旅館戻つて合流したらまた言い訳するよ」

「：抜け出した本当の理由みんなに言わなくていいの？」

「言うほどでもないし、誘拐されましたなんて広まったらいくら仲がいいって言つても神崎と茅野は嫌な気持ちになる思うしいかな」

「そつか、そこまで気回らなかつた」

「心配してくれてありがとな」

「ん」

それきり無言が続く。今いる場所は駅の近くの公園だが人通りが少ないこともあり車などの環境音だけが響く。

「私――」

「ん？」

「私、純一がいなくなつてからすごい不安だつた。純一が事件に巻き込まれたらどうしようとか有希子たちが傷つけられてたらどうしようとか。マイナスなことしか頭に浮かばなかつた。その中で色々矛盾したこと考えちゃつて、もう：：なんかよくわかんない」

「：：わかんなくていいんじゃない」

「：：え？」

「俺もさつき殺せんせーと話してさ、自分が正しいと思つて行動したんだつたらそれを卑下するなつて言われて。それに凜香の場合は行動しようとしたのに俺が止めちやつた部分あるしさ。何をどう考え

たのかとか詳しく聞かないけど、自分のことを一から十までわかってる人なんていないんじゃないか」

「そうかな?」

「俺が偉そうに言えたことでもないけどね」

そう言つて笑うと凜香も小さく笑つた。その微笑を見て俺は鞆の中から綺麗に包まれた物を取り出し手渡す。

「なにこれ?」

「絵葉書。ここに来る途中で買った。なんか色々考えたら凜香が好きなもの買つて行こうかなつて思つて」

「ありがとう、開けていい?」

「どうぞ」

両手を差し出すようなジェスチャーをしつつ開けるよう促す。ここに来る途中で土産屋に寄つた際に目に止まったのを買ったのでたぶん良いものだと思う。たぶん。

「綺麗」

「感想一言だけだつたら簡素すぎませんか?」

「いや、本当に綺麗だなつて」

「そっか、それならよかつたよ」

俺が買ったのは伏見稲荷大社の千本鳥居の絵葉書だ。気に入つてもらえたならよかつた、これでディスプレイしたらみんなより1日早く帰るところだつた。

「そういえばだけど、凜香」

「なに?」

「なんで抜け出そうなんて提案したんだ?」

「んー…なんとなく?」

「なんだそりや」

「特に理由なんてないよ、なんとなくだから」

「そうか、それならしょうがないな」

「うん」

「じゃあとりあえず旅館帰るか、時間的に一番早いだろうけど」
「そうだね」

そう言つて並んで歩く。なんだろうか、修学旅行してんなあとと思つた。トラブルがあつたり自由行動を抜け出して女子と二人きりになったり。物語でよく見るシチュエーションを体験したような気分だ。

「なんか機嫌良さそうだけど絵葉書そんなに嬉しかったの？」

「えっ？う、うん、そうだよ」

「そんなに喜ぶなら渡した甲斐あつたよ」

「私あんまり顔に出ない方なのによくわかつたね」

「2年も同じクラスで付き合いあるからそれくらいわかるよ」

「そっか」

それきり会話もなく旅館へと向かう。関東と関西、同じ日本なのに雰囲気はもちろん、風が吹いたときの印象が随分と違うということを感じながら歩いた。

*

旅館についたあと部屋が違うため凜香と別れる。案の定一番早く着いたためとりあえず風呂に入ることにした。というのもやはり疲れがあるからだ。走つたのもそうだけどやはり昨日の枕投げで体力を使いすぎたなあとと思う。

この旅館は見た目と中身がそこそこボロいが浴場は意外や意外。天然温泉だかなんだかわからないがちゃんとした湯らしい。そこそこ広いし修学旅行生を受け入れるだけあるというのが素直な感想だ。ましてや今はそれを独り占めできているわけで評価はうなぎ登りだ。あー最高、将来は布団か風呂と結婚したいなー。でも布団はダメだな、あいつ誰とでも寝るらしいし。

そんなくだらないことを考えているとのぼせそうになってきたので風呂から出て部屋へと向かう。とりあえずみんなが戻ってくるまで寝ようと思う。ガチ寝したら困るので布団ではなく部屋に常備されてる座布団を並べて簡易的な敷き布団のような形にし1つの座布団を2つ折りにして枕にすれば寝床の完成。修学旅行最終日の前夜

は長い。その長き戦いに備え眠ろう。

”私は疲れてしまったから、ちよつとご免こうむつて眠りたい”と
花嫁にメロスが言つてたなあと思ひながら俺は意識を手放した。

第10話 旅行の時間 その3

「えー起きちやうよ?」

「大丈夫大丈夫、そんな柔な男じゃないから」

「鼻にワサビ入れていーかな?」

「カルマ君、それはダメだよ!」

「純君の寝顔可愛いね」

カシヤツ

「誰かマジック持っていない?」

「中村さん!風呂入ったあとつぽいからダメだよ!」

「さつきから渚が頑張ってるな」

…なんだ?なんか騒がしいな。

「おい、女子に手上げようとするなよ」

「純一?寝ぼけてるのか?」

「あ?あー?あつ前原か」

「なんださつきの寝言は」

「わからん、なんか夢見てた。夢の中で渚が近くにいたから渚を守る夢だったのかもしれない」

「南雲君!僕は男だよ!」

「そういえばそうだった。あーよく寝た。あつみんなおかえり」

「そして平常運転か」

「てかなんで全員集合してんの?」

「自由行動から4班が一番乗りで帰ってきたんだけど大部屋で寝てる人いたから女子にも集まってもらった」

「そういうことか、なんかイタズラしてない?大丈夫?特にカルマと

莉桜」

「渚が頑張つて止めてたから大丈夫だよ」

「ありがとう、渚。夢の中で守った甲斐があったよ」

「それ女子としてだよね!」

渚のツツコミを聞くと安心するなあ。

寝てる俺の見学会も終わり機具と片岡が次の行動の指示を出す。

部屋に荷物を置いて食事、その後は自由時間とのこと。夕食はなにかなーと思っていると岡島がやって来た。

「速水から聞いたけど烏間先生なんで純一のこと呼び出したんだ？」

「あーなんかビッチ先生が迷子になったとかで」

「へーそうなのか、なんか途中から速水もいなかったけど」

「さあ、そっちはわからんな。まあでも俺が旅館帰ってきたときにはいたからたぶん体調不良とかじゃないの？」

「あーなるほどな、とりあえず飯行こうぜ」

了解と腰を上げて移動する。そういえば旅行中にジャンクフードを口にしていないのでカップ麺やハンバーガーが恋しく感じる。

食事も終わり、各々風呂に入るなどして自由時間を過ごす。俺達は今館内ゲームコーナーにいて神崎のゲームプレイを見ている。ジャンルは弾幕ゲーだ。

「うおお、どーやって避けてんのかまるでわからん！」

「恥ずかしいな、なんだか」

「おしとやかに微笑みながら手つきはプロだ！」

さつきから友人やかましいな。でも実際すごいと思う、ゲームうますぎだろ。…あつだから俺と父さんのモンハンネタが通じたのか。

「すごい意外です、神崎さんがこんなにゲームが得意だなんて」

「…黙ってたの、遊びが出来ても進学校じゃ白い目で見られるだけだし。でも周りの目を気にしすぎてたのかも、服も趣味も肩書も逃げたり流されたりして身に付けてたから自信がなかった。殺せんせーに言われて気付いたの、大切なのは中身の自分が前を向いて頑張ることだっつて」

神崎の意外な一面が見られたなと思った。それに見た感じ茅野との空気が軽いので何か話したのかな？

画面には”Congratulations!”と表示されていたのでどうやらクリアしたらしい。ゲームが得意ということでもしや

と思ひ俺は神崎に話しかける。

「神崎、ひよつとしてスト2やったことあるか？」

「うん、あるよ。一緒にやる？」

「そうこなくちや。じゃあ対戦するか」

スト2の筐体に移動し二人で椅子に座る。

「あー！」

友人は相変わらずやかましいな。

念のために友人が叫んだ理由の説明をいれるが最近の新しい格ゲーのアーケードの筐体は対面式がほとんど、というか対面式以外見たことがない。対面式は対戦相手の顔が見えないのが特徴。ゲームセンターで対戦終了後に席を立ちどんな相手だったのかなと顔を見に行くとき怖い兄ちゃんだったというケースになるのが対面式だ。一方で昔の筐体には隣り合わせでやるものがある。1つの画面を共有しプレイするので文字通り席の位置が隣り合わせになる。これの最大の特徴は席の近さだ。さして大きくもない1つの画面を共有しプレイするために肩がピッタリとくっつくくらいに近くなる。

この旅館の筐体はもちろん隣り合わせ式だ。よって神崎と俺はくっついた状態になったので友人が叫んだのである。ちなみに俺は健全な中学生男子なので頭の中は

・肩がくっついてるなあ

・いい匂いするなあ

と当然のことを考えている。正直対戦に集中できるか自信ない。が、こちらから申し込んだ以上負けるわけにはいかない。キャラクタースelectで迷わず俺はガイルを選択。神崎も迷わずガイルを選択。：あっこれあかんやつや。

ラウンドワン、ファイツ！という掛け声と共に勝負がスタートする。両者互いに相手に向かっていくのではなく後ろに下がりしやがんで溜めを行いソニックブームという飛び道具系の必殺技をひたすら繰り出す。この光景を見ている友人達は頭に？が浮かんでいるのかなにも言葉を発しない。

簡潔に説明するならば格ゲーには溜めキャラというカテゴリーが

あり、俺と神崎が選択したガイルは溜めキャラに分類され更には”待ちガイル”と呼ばれる完成された戦闘スタイルがある。ガイルには”ソニックブーム”と”サマーソルトキック”という必殺技があり、その2つは方向キーを相手とは反対側に入力することで溜めて撃つことができる必殺技だ。

待ちガイルのやり方は以下の通り。

1. 相手に対して後ろ斜め下にレバーを入れて待つ。(斜め下入力をする事によってSBとSKの両方の技が溜めれる)

↓相手が正面から近づいてくる↓ソニックブーム

↓相手が飛んで近づいてくる↓サマーソルトキック

これだけ。相手が何をやってこようと迎撃することができる。例外はあるけど。

話を戻すが俺も神崎も待ちガイルという戦闘スタイルのため、遠くで互いに必殺技を繰り出し続けるという恐ろしく地味な絵面だ。がしかし、必殺技をガードしたときの削りダメージですら致命傷となるため水面下ではかなりの読み合いが行われている。

残りカウント40を切ったところで神崎が仕掛けてきた。ジャンプなどで避けつつこちらに近づいてくる。恐らくしやがみキックで直接ダメージを与えてくるつもりだろうが簡単にはそうさせない。ソニックブームを繰り出しつつこちらも同じくしやがみキックで迎撃する。ここまで両者互いに無傷、どこかで動かなければドロートになってしまう。神崎側はかなり近づいてきているがまだ攻撃が届く範囲じゃない。尚もソニックブームを互いに撃ち合う。残りカウント15を切ったときに一瞬神崎が必殺技を繰り出すのが遅れたのでその瞬間を俺は逃さない。ソニックブームを撃ち、ジャンプで近付く。これで神崎の行動はガードで防ぐしかなかった。つまり必殺技による削りダメージが発生するのでそのままタイムアップになればこちらの勝利。案の定神崎がガードしたので削りダメージが入りそのままタイムアップ。まず俺の1勝だ。

「南雲君すごい上手いね」

「父さんに仕込まれたからな。それに神崎だって上手いだろ」

「すげー！神崎さんに勝ったよ！」

「まだだ。2勝しないとダメなんだ」

「そうなのか？」

「うん」

俺と神崎がハモって返事をすると共にラウンドツー、ファイツ！と2戦目が始まる。1戦目同様互いに距離を取ってソニックブームの撃ち合い。

「なんかもう達人同士の戦闘だよね…」

「そうですね、あそこだけ別の空間みたいですよ…」

「南雲君と神崎さんが遠くに感じるよ…」

「そういえば純一、スマブラとかも強かったな…」

後ろのオーデイエンスたちが何か言っているが会話の半分も頭に入っていない。そのくらい神崎との戦闘に集中力を要している。先程は神崎から仕掛けてきたが次は俺から動く。一步、また一步と相手にだんだんと近づく。残りカウントは30、互いに無傷、一撃が致命傷となるこのスリルが堪らない。俺のほうが先に1勝しているため状況的には有利だが負ける可能性も十分にある。だから慎重にいくべきだがそれでは勝負がつかない、どこかで仕掛けなければ。

カウントに目をやったときに必殺技を繰り出すのが遅れてしまい、神崎のソニックブームをガード。削りダメージが入ってしまった。残りカウントは15。このままでは負けて五分五分の状況となってしまう。神崎もそれをわかっているため後ろに下がりつつ迎撃体制。ここで焦ってミスをしたほうの負けとなる。俺はフツと一息つき頭を落ち着かせる。しゃがみキックで削ってくることはあちらもわかっている。ならば…。

俺が近づくのに合わせて神崎がしゃがみキックを行う。しかしギリギリのところでは届かない。攻撃判定が消えると同時に相手に近づき必殺技でもキックでもなく俺は投げ技を繰り出した。投げ技は見事に決まりそのままタイムアップ。俺が2勝を先取し勝利が確定した。

「うー悔しい、負けちゃった」

「これより前に神崎は弾幕ゲーやってたから疲れもあるしな。条件的に俺のほうが有利だったから」

「ふっつフオローしてくれてありがとう、南雲君。またやろうね」

画面ではガイルの「くにへ かえるんだな。 おまえにも かぞくが いるだろう…」という勝利コメントが表示されている。復讐のために家族を捨てたお前が言うなと表示される度に毎回思う。

「アーケードはスト2しかできないけど、家の据え置きゲームは色々できるから一緒にやろうぜ」

「いいの？じゃあ今度家にお邪魔するね」

「おっ俺も！純一の家行くよ！」

「おう、みんな来いよ。大勢のほうが楽しいしな」

「お父さんにも会えるかな？」

「なに茅野、父さんのこと気に入ったの？」

「だって南雲君とのやり取り面白かったし」

「あれが平常運転なんだけどなあ」

修学旅行で家にみんなが来るフラグを作ってしまったがまあいいだろう。見られて困るものも置いてないし。たぶん神崎達だけじゃなくて莉桜とかも来るだろうからお菓子とか買っておかないとなと考えながら館内ゲームコーナーを後にした。

*

ゲームを終えた俺達は部屋に戻ることにした。風呂に入っていたやつらも戻ってきて最終的に大部屋で男子全員がダベり始めたので俺とカルマは一緒に自販機に飲み物を買っていく。

「南雲さーなんか俺達のために色々動いてたらしいね」

「まあ結果は変わらんかったけどね」

「本当、真面目でいい子ちゃんだよねー」

「友達が困ってるんだから助けるのは当たり前だろ」

「んー理屈ではそうだけどき。実際その通りに動ける人のほうが少数派でしょ」

「あー殺せんせーにも同じようなこと言われたわ」

「でしょ？今回のことなんて公にはなっていないけど普通に全国ニュースになるレベルのトラブルじゃん？そんなのに頭突っ込もうとするなんてちよつと異常だよ」

「そんなレベルのことなのに警察に通報せずに直接処刑させてくれて言つてたやつがいたらしいぞ」

「へーそんなやついたんだー」

お前のことだよ、と心の中でツツコミを入れる。

「まあなんにせよ、誰も怪我なく帰つてこれてよかつたよ」

「そうだねー、それで南雲は何買うの？」

「なんか微妙なラインナップだなー…、カルマと同じのいいや」

そう言つてレモン煮オレのボタンを押す。ホテルや旅館の自販機特有の無難なラインナップはなんなんだろうか。あれか？色々な客層が来るから定番のもので固めてるのか？

「そういえば自販機のルーレットあるじゃん？あれの当たる確率知つてる？」

「え、なに。確率なんてあるの？」

「うん。当たる確率は1/50〜1/990の範囲で自動販売機設置者によつて決められてるらしいよー」

「へー。てことは当たる確率は最低0.1%で最大2%つてことか」

「細かく言うとうと景品表示法という法律で決まつてて、自動販売機の場合には売上げの総額の2%が当たりにしていい上限になるんだつてさ。つまり120円のジュースで100本の売上げがある場合、2本が当たりとして付けられるつてこと」

「カルマつてなんかそういう系詳しくそうだよな」

「うーん、例えば？」

「UFOキャッチャーを取りにくく設定してるゲーセンとか」
「自分の行動範囲の店は把握してるよー」

まじに把握してんのかよ。すごいを通り越して怖いわ。

会話が弾んだので気がついたら部屋の前まで来ていたのでそのまま襖を開けて中に入る。

「お、面白そうなことしてんじゃん」

「んー？ああ。気になる女子ランキングか」

「カルマに南雲か。良いところ来た」

ふーん。1位は神崎、2位は矢田、3位は倉橋か。まあ順当な順位だな。

「お前らクラスで気になる娘いる？」

「皆言ってるんだ、逃げらんねーぞ」

「うーん：奥田さんかな」

奥田？意外だな。

「なんで？」

「だって彼女怪しげな薬とかクロロホルムとか作れそーだし俺のイタズラの幅が広がるじゃん」

「：絶対にくつつかせたくない2人だな」

「次に南雲は？」

「気になる娘かー：うーん……」

あかん。相対性理論の曲しか頭の中に出てこない。

「いやいねえわ」

「そんなことないだろ。速水とかと仲良いし」

「中村とも小学校から一緒だし」

「それに神崎さんとも仲が良い」

「どれが本命なんだよ？」

「なあ純一。ひよつとして今日お前と速水がいなかったのは2人きりで抜け出したからか？」

「「まじで!?!」」

飯の前に誤魔化したのに岡島が爆弾投下しやがった。

「本当に2人抜け出したのか？」

「なになにどこ行つたの？」

「1年のときから仲良いから怪しいと思つたんだよー」

「ついに彼女持ちがE組から出たかー」

洪水のようにみんなが色々と言ってくる。だが俺が抜け出したのは誘拐の件があつたからだし、凜香と抜け出した感じになったのは謝

罪とかの件があったからだ。どつちにしろ本当のことを言うつもりはないので岡島のときと同様に誤魔化す。

「みんなとりあえず落ち着け。2人きりで抜け出したかどうか、これはNOだ。烏間先生から呼び出し食らったから俺は抜けて凜香はおそらく体調不良だ。あと俺と凜香が付き合っているかどうか。これも答えはNOだ。そもそも付き合うとか考えたことないしそんな雰囲気になったこともない」

俺が抜け出した本当の事情を言わない理由をカルマと渚と友人は察したのか突っ込んで来なかった。4班以外には高校生グループに絡まれたとだけ伝えられ誘拐されたなどの詳しいことは説明されていないのだ。なんか釈然としないけどと磯貝がまとめ始める。

「よし、これで気になる女子ランキングは終了だな」

「ちよつと待て純」。まだ言っていないだろ」

…バレたか。

「まあまあ前原。たぶん南雲は本当に気になる娘がいなんだろうから好きな女子のタイプとかにしようか」

「じゃあ純」、好きなタイプはズバリ？」

「一緒にいて落ち着ける人だな。静かな人がいいとかってことじゃなくて騒がしい人でも構わない。一緒にいて自然体でいれる人がいい。あとお互いの趣味が合う合わないは気にしてない。合うのであれば一緒に楽しめるばいし、合わないのであれば色々聞いたりして逆にその趣味に目覚めるかもしれないからな」

「…気になる娘はいないのに好きなタイプはズバリ饒舌になったな」
うるせー。聞かれたから答えただけじゃねーか。

「でも純」って自分からあまり女子に話しかけないよな。なんで？」

「俺は」コヨーテよりロードランナー派」なんだよ」

俺の言い回しにいまいちピンとこなかったのか全員が頭に？を浮かべている。するとカルマがあーなるほどねと俺の言葉の意味に気付いたようだ。

「カルマ、わかったんだったら言ってくれよ」

「つまり南雲は」追うより追われる方がいい」ってことでしょ？」

「そういうこと」

みんながあっワナー・ブラザーズかと理解する。

「よし皆、この投票結果は男子の秘密な。知られたくないやつが大半だろーし、女子や先生に絶対にな…」

磯貝が急に無言になったのでみんな磯貝の視線を追う。視線の先には殺せんせーが窓に張り付いていてメモを取っていた。

「メモって逃げやがった！殺せー！」

前原の言葉を皮切りに男子全員がナイフと銃を持って廊下に飛び出す。俺は女子の名前を言っていないしバレたところでダメージがないので追っていない。

「待てやこのタコー！」

「生徒のプライバシーを侵しやがって！」

「ヌルフッフ、先生の超スピードはこういう情報を知るためにあるんですよ」

*

く 凛香視点 in 女子部屋く

「ビッチ先生まだ二十歳い!?!」

「経験豊富だからもつと上かと思ってた」

「ねー」

「毒蛾みたいなキャラのくせに」

「それはね濃い人生が作る色気が…誰だ今毒蛾つったの!」

ビッチ先生がツツコミを入れるのを見てE組にもかなり馴染んできたなど感じる。すると突然神妙な顔つきになってビッチ先生は言葉が続けた。

「女の賞味期限は短い。あんた達は私と違って…危険とは縁遠い国に生まれたのよ。感謝して全力で女を磨きなさい」

ビッチ先生の言葉は胸にストンと落ちてきた。教室に来たばかり

の時に発した殺すという言葉の重みと同じくらい今の言葉には重みがあった。みんなも同じく感じたのかシンとした空気が流れる。

「ビッチ先生がまともなこと言ってる」

「なんか生意気」

「なめくさりおつてガキ共！」

…そうでもなかったかな。激昂したビッチ先生を宥めるように矢田がじゃあさじゃあさと話をする。

「ビッチ先生がオトしてきた男の話聞かせてよ」

「あ、興味ある」

「フフ、いいわよ。でもその前にあんたたち、修学旅行らしいこともしておきなさい」

みんな頭に？が浮かんだ顔になった。私もいまいちピンときてない。

「もう、正解を言わないとわからないの？あんたたちは好きなオトコの話もしないの？」

「あー確かにしてないね！」

「そうだねくしようよ！」

ビッチ先生を慕う矢田と倉橋が話に乗っかる。…確かに女子といえばやはり恋バナが鉄板だ。だけど私は…。

「…はあ」

「どうしたの、凜香。タメ息なんてついちゃって」

「…別に。気乗りしないだけ」

「とか言って好きな人バレたくないだけじゃないの」

「莉桜って肘で小突くのが癖なの？」

映画村のとき同様肘で小突いてくる。今度は不破は一緒じゃないけど。そうしていると片岡が段取り良く説明し始める。

「じゃあ今からみんなにメモ帳の切れはし配るから男子の名前書いて四つ折りにしてビッチ先生の前のお菓子の箱に入れていってね。ビッチ先生は全員が入れるまで開いちゃダメだよ」

「私ぐらいになると筆跡や顔を見れば大体わかるわよ」

…本当かな。顔はともかく筆跡ではバレなさそうだけど。実践的

な英語の授業だからテストとかやっているわけじゃないし。みんなの字を目にする機会は少ないはず。

配られた紙を見てみんなは笑顔のような真顔のような、なんとなく真剣な表情になった。やはり恋愛ガラムミの話だからかな。私は少し真剣な表情になったみんなを見て純一から借りた小説に書いてあった、”人間は恋と革命のために生まれてきたのだ”という言葉を思い出した。

私は正直この話になったときから純一のことしか浮かばなかった。でもまだ好きかはわからない。だからきつと消去法の結果だ。前原の女たらしや岡島の変態みたいな男子がいるから純一が思い浮かんだのだと言い聞かす。

下の名前で書いたらそれこそバレると思ったのでしつかりと名字で書く。

「よし、全員分集まったわね」

ビッチ先生がそう言っただけで集計を始める。四つ折りの紙を広げて名前を確認して得票数を書き込んでいく。あれ？鳥間先生の名前だ。

「誰よ、カラスマの名前なんて書いたのは。妙に丸っぽくて女子らしい字だけだ」

「あゝそれ私」

倉橋はエへへと笑っているが誰が書いたかわかつては意味ないのでは？と思った。

「ふーん、やっぱり人気ツイートトップは磯貝と南雲ね、わざわざ呼び方と違う名前で書いてるのもいたし。渚が2票っていうのが意外ね」

嘘、本当にわかるの？自分のことかと思っただけで瞬体温が上がったよ。うな感覚に見舞われる。それにしても人気トップとはやっぱりなという印象だった。

「人気だからって訳じゃないけど南雲辺りは有望株よ。あいつは将来絶対大物になるからキープしとくのも手よ」

「ビッチ先生みたいにそんな簡単にキープとかできないって」

「だからこれから私がオトしてきた男の話をするのよ。子供にはシゲキが強いから覚悟なさい。例えばあれは17の時…」

女子全員がぐくりと息を飲む。

「おいそこお！さりげなくまぎれこむな女の園に！」

「いいじゃないですか、私もその色恋の話聞きたいですよ」

ビッチ先生が指差した場所を見ると殺せんせーがいた。一体いつからいたんだろう。純一の名前を書いた紙見られてないよね？

「そーゆー殺せんせーはどーなのよ。自分のプライベートはちつとも見せないくせに」

「そーだよ、人のばつかずるい！」

「先生は恋バナとかないわけ？」

「そーよ！巨乳好きだし片想いぐらいぜつたいあるでしょ」

「……………」

女子全員に指を指されて無言を貫いている殺せんせー。少し間が空いたあとにいつものスピードでいなくなった。

「逃げやがった！捕らえて吐かせて殺すのよ！」

ビッチ先生の言葉を引き金にみんなナイフと銃を持って殺せんせーを追う。なんだかんだで結局は暗殺になるんだなと思いつながら私も銃を握った。

*

く南雲視点 深夜く

寝れねえ。みんなが寝静まっている部屋の中で俺は思う。どうやら夕方に寝たのがよくなかったらしい。疲れがあるから寝れるものだと思ってたが俺の脳は絶好調、冴えている状態だ。

さすがに布団で何もせず目を瞑っているのも退屈なので俺は財布と携帯を持って部屋を抜け出す。とりあえず自販機で飲み物でも買って廊下の途中にあるソファのところでくつろごうと思った。旅館内は暗くなくちようどいい明るさで保たれていた。見た目がボロい風呂がきれいだったり明るさがお客側に配慮されているなどしているから店を畳むことなく営業できているのかなと感じた。

旅館の評価を改めていると自販機には先客がいたので声を掛ける。

「よっ、二人も寝れないのか？」

「あつ南雲君だ。違うよ、おしゃべりしてて飲み物が無くなったから買いに来たんだ」

「今の言い方だと南雲君は眠れないの？」

「うん、しかも俺以外寝ちゃってるから抜け出してきた」

自販機の前では茅野と神崎が飲み物を選んでいた。男子が全員息絶えているのに女子は起きてるってことか。肌に悪いだろうに。

「じゃあ俺は廊下のソファでのんびりしてるから。おやすみ」

「待って。それだったらちよつと私たちと話さない？」

「へっ」

「ダメ？」

「いや、俺は構わないけど…。まあ先生方に見つかっても理由説明すれば大丈夫か」

「ふっふっふ。その点に関しては大丈夫だよ」

廊下を歩きながら茅野がどや顔で説明をしてきた。なんでもビッチ先生が俺たちだったらばか騒ぎもせずに過ごすだろうから最終日前夜くらいは見回りはやめようと提案してくれたらしい。その話を聞いた殺せんせーと烏間先生は確かにと納得してくれたんだとか。ビッチ先生もちゃんと俺達のことを考えていてくれてるんだなと嬉しかった。

「ふいー到着到着。そっちの二人掛けどうぞ使って」

「じゃあ失礼しまーす」

「ふっふ、なんだか偉い人みたい」

「それでなに話す？自販機の当たりの確率くらいしか今思い付かないんだけど」

なにそれと二人は笑う。すると一呼吸置いてから急に真面目な顔になって頭を下げられた。

「本当は明日言おうと思ってたんだけど、今日は私たちのために動いてくれてありがとう。」

「いやいや、頭あげてよ。困ってたら助けるのは当たり前だから気に

しないで」

なんか前にも女子にいきなり頭を下げられたことがあったなと思
い出す。

「それでも貴重な修学旅行の時間を潰しちやっただから…」

「いいんだって。旅にトラブルはつきものって言うだろ？それに女の
子のために走るっていう貴重な体験させてもらったし」

「なにそれ、でも本当にありがとね」

「なにかお返ししたいけど何にもできないし…」

「そういうことも考えなくて大丈夫だって。…そうだな、何かした
いってんなら今度俺の家にみんなで遊びに来てよ。渚とか莉桜とか
も呼んでさ。父さんと2人きりだから広い家を持って余してるんだ」

「南雲君がそれでいいんだったら…。いいよね？茅野さん？」

「うん。でもお父さんと2人って。聞きにくいんだけどお母さんはど
うしたの？…」

「母さんは俺を産んですぐに亡くなったんだ。だから俺と父さんの2
人きり」

「そうだったんだ。ごめんね？聞きにくいこと聞いちゃって」

「気にすんな。気使われたほうが嫌だし気になるのもわかるから」

「ありがとう。お詫びっていう訳じゃないけど良いこと教えてあげ
る。南雲君はなんと女子が思うかっこいい男子ランキングで1位
だったよ！」

「おーまじか。なんか照れるな。磯貝とかじゃないのか？」

「磯貝君は南雲君と同率1位だったよ！」

「へー。男子も似たようなことやっただけど生憎これは内緒だから
なー」

「ケチっ！教えてくれたっていいじゃん！」

「私もちよつと気になるな」

「すまん、こういうときの男子同士の結束力は高いから言うことは
できない」

「そっか、残念」

「話はすごい変わるけど2人は寝れないときってどうしてる？」

「私は色々と落ち着く姿勢を模索するかな。大抵は横を向いて脚の間に手を挟める形になるよ」

「私は読んだ本の内容を思い出したら自然と寝ちやうかな」

「つまり横を向いて脚の間に手を挟めて読んだ本の内容を思い出してたら寝れるってことだな」

「ミックスすればいいってもんじやないよ！」

「ふふっ、そうかもね」

「大分遅くなつたし俺は部屋に戻るかな。とりあえず教えてもらったこと試してみるよ」

「わかったよー、おやすみー」

「おやすみ、南雲君」

「おやすみ。また明日な」

そう言つて別れる。とりあえずさっきの寝方を実践してみるとして最近読んだ本はなんだったか、思い出すことから始めるかと部屋に戻った。

*

く 神崎視点く

胸が温かいな、南雲君と別れたあとそう感じた。私たちは今日トラブルに巻き込まれたけど4班のみんなと殺せんせーが動いてくれたおかげで無事に帰ってこられた。トラブルが解決した後南雲君が色々と動いてくれてたつてことを杉野君が教えてくれた。

それを聞いたとき私はなんてカッコいい人なんだろうと思った。それと同時に映画「ダークナイトライジング」の、「ヒーローはどこにでもいる。それは上着を少年にかけ、世界の終わりではない。と励ますような男だ」という台詞を思い出した。私が父親との関係の話したときには時間が解決してくれると励ましてくれたし、そして今回は私たちのために走ってくれていた。まさしく彼は私のヒーローだ。

先程邂逅し話したことで疑問が確信に変わった。私は彼に惹かれている。その気持ちを私の胸の高鳴りが教えてくれた。明日は話せ

るかな？もし話せたらどんな話をしようかな？

「今は新しい遊びを知ったばかりの子供のように南雲君との関わりが楽しみになっている。」

第11話 転校生の時間

修学旅行も無事に終わりいつもの学校生活が戻ってきた。5月ももう終わりを迎えるこの時期に烏間先生から一斉送信のメールが届いた。

『明日から転校生がひとり加わる。多少外見で驚くだろうがあまり騒がず接してほしい』

とのことだ。男子と女子どっちだろうかと考えながら登校していると岡島と渚と友人がいたので合流する形で一緒に登校する。

「烏間先生からの一斉送信のメール見た？」

「ああ、文面的にどう考えても殺し屋のやつだろ？」

「ついに来たか、転校生暗殺者」

「転校生名目ってことは…ビッチ先生と違って俺等とタメなのか？」

「そこが気になってき、顔写真とかないですかってメールしたのよ。そしたらこれが返ってきた」

そう言った岡島は携帯の画面を見せてきたので俺達は覗きこむ。おお、女子だ。ていうかよく烏間先生に返信できたな。俺だったら恐れ多くてメールできないわ。

「なんだよふつーに可愛いじゃん、殺し屋に見えねーな。わーなんか緊張してきた！」

「仲良くなれんのかなー」

確かに殺し屋であろうとなかろうと転校生には期待と不安が入り混じる。どんな人でどんな暗殺をするのだろうか、すごく興味があった。

校舎につくと友人が一番早く教室に乗り込む。女子とわかってから一番足取りが軽いのは友人だ。神崎一筋じゃないのか？

「さーて来てっかな転校生？」

友人が入り口で急に立ち止まる。…なんだ？あの黒い自販機みたいな箱は？存在感半端ないな。

すると液晶部分が光り転校生の顔が表示される。その顔は確かに岡島に見せられた画像と同じ顔だった。

「おはようございます。今日から転校してきました、”自律思考固定砲台”と申します。よろしくお願ひします」

そう言うとき液晶の画面がまた暗くなる。

(……………そう来たか!!)

*

「——みんな知ってると思うが転校生を紹介する。ノルウェーから来た自律思考固定砲台さんだ」

「よろしくお願ひします」

……鳥間先生も大変だなあ。クラス全員同情の視点を送っている。ツッコミどころが多過ぎるだろ。

「ブークスクスクス」

「お前が笑うな、同じイロモノだろうが」

「……言っておくが、彼女はAIと顔を持ちつきとした生徒として登録されている。あの場所からずっとお前に銃口を向けるがお前は彼女に反撃できない。『生徒に危害を加えることは許されない』、それがお前の教師としての契約だからな」

「……なるほどねえ、契約を逆手に取って……なりふり構わず機械を生徒に仕立てたと。いいでしょう、自律思考固定砲台さん。あなたをE組に歓迎します！」

HRも終わり授業が始まる。転校生は固定砲台という名前だが見た目は黒い自動販売機そのもの。外側に銃などはついていないがおそらくSF映画に出てくるロボットみたいに内側に収納されているのだろう。

すると自律思考固定砲台がギリリと光ったかと思うと案の定内側から銃が展開され殺せんせーに対して射撃を行う。なんだろう、男心をくすぐるものがあるな。一方で殺せんせーはというと俺達が行っ

た一斉射撃のときのようにすごい早さで避けている。

「ショットガン4門に機関銃2門。濃密な弾幕ですがここの生徒は当たり前前によっています。それと授業中の発砲は禁止ですよ」

「…気を付けます。続けて攻撃に移ります」

気を付けるだけで攻撃はするのかよ、日本語って難しいな。少し間が空いたかと思うと再度銃が展開され射撃が行われる。同じ状況に殺せんせーの顔は縞々模様になる。

「…こりませんねえ」

再度避け始めるが突如殺せんせーの指が弾け飛んだ。俺達は驚きから開いた口が塞がらない。

「右指先破壊。増設した副砲の効果を確認しました。次の射撃で殺せる確率0.001%未満。次の次で殺せる確率0.003%未満。卒業までに殺せる確率90%以上」

増設した副砲？つまり全く同じ射撃の後に見えないように銃弾を追加したのか？ブラインド隠し弾ってやつか？

しかしここにきて初めて俺達は気付いた。”彼女ならひよつとして殺るかもしれない”と。

「よろしく願います、殺せんせー。続けて攻撃に移ります」

プログラムの笑顔で微笑みながら転校生は次の進化の準備を始めた。

一時間目は自律思考固定砲台による暗殺が絶え間なく行われたために床には大量の対殺せんせー弾が転がっている。

「これ…俺等が片すのか？」

「掃除機能とかついてねーのかよ、固定砲台さんよお」

「……」

「チツ、シカトかよ」

「やめとけ、機械にからんでも仕方ねーよ」

村松と吉田が不満を漏らしているが不満に思っているのはクラス

全員同じだ。授業が妨害されるだけでなく暗殺の後片付けも俺等任せとなると文句のひとつやふたつも言いたくなるだろう。

二時間目、三時間目。結局その日は1日中ずっと…機械仕掛けの転校生の攻撃は続いた。

——そして翌日。

「朝8時半、システムを全面起動。今日の予定、6時間目までに215通りの射撃を実行。引き続き殺せんせーの回避パターンを分析：！? 殺せんせー、これでは銃を展開できません。拘束を解いてください」

固定砲台さんは自分の状況に異議を申し立てるがそれもそのはず。箱をガムテープでぐるぐる巻きにされているからだ。アナログな方法だが外部に手などが無い以上これより優れた自律思考固定砲台対策はないと言える。

「…うーん、そう言われましてもねえ」

「この拘束はあなたの仕業ですか？明らかに私に対する加害であり、それは契約で禁じられているはずですが」

「ちげーよ、俺だよ。どー考えたって邪魔だろーが。常識ぐらい身に付けてから殺しに来いよ、ポンコツ」

そう言ったのは寺坂だ。言い方はあれだが確かにその通りだ。

「…ま、わかんないよ。機械に常識はさ」

「授業終わったらちやんと解いてあげるから」

まあ、そりゃこうなるわな。昨日みたいにならずとされてたら授業にならないし。

今日は昨日とは打って変わって平和に授業ができた。そして放課後になり俺は神崎に誘われたので一緒に下校している。

「うーん…」

「どうした、神崎?」

「固定砲台さん可哀想だなんて」

「確かにあの状態はなー」

「なんとかできないかな?」

「俺達がなにかするっていうのはたぶん無理だと思う。でも——」

一呼吸置いてから俺は言葉が続ける。

「あの状態を殺せんせーが放置しておくとは思えないからきつと何とかしてくれるはず」

「うん、確かにそうだね」

「話変わるけど、今日教室で何の本読んでたんだ？」

「えつとね、”嵐が丘”っていう小説だよ」

「タイトルだけ聞いたことあるな。どんな内容なんだ？」

「一回読んであとにまた読み直しているから詳しく説明できるけど、たぶん南雲君はこれから読むだろうから簡単に説明するね。お話は2つの家で三代に渡って繰り広げられるんだけど、特に”ヒースクリフ”と”キャサリン”っていう二人の登場人物にスポットを当てて愛憎や復讐が描かれている作品だよ」

「へえ、大雑把に言うのと恋愛小説の括りか」

「うん、だけど”リア王”、”白鯨”に続いて世界の三大悲劇に数えられているから明るいお話ではないよ」

「そうなんだ、俺は白鯨だけは読んだことあるんだよな。よかつたら読み終わったら借りていい？」

「もちろんいいよ。南雲君も何かオススメの本ある？」

「うーん…そうだな…今パツと出てこないから後日なんか持つてくるよ」

「ふふつ、楽しみにしてるね。小説の貸し借りしてるのってなんか口マンチックじゃない？」

「あー確かに少女漫画でありそうだよな。挟まっていたしおりに告白の言葉が書かれていたりとか」

「そうそう…なんだかそういうの憧れるな」

「さすが女の子」

やはり女子はそういうのに憧れを持つのだろうか。具体的な例を挙げると白馬の王子様だけど現代では馬は無理だろうから車だな。だとしたらきつとこんな感じだ。

『私、昔から憧れてるんだ！白のベントツの王子様に！』

…なんだこの女。玉の輿狙っているやつみたいだな。

その後も話が続き、気がつくとも固定砲台の話題とは大きくかけ離れたものになっていった。何にせよこのままの状態が続くとは思えないのでどうなることやら。

*

翌日。俺は渚と友人の2人と登校している。

「なあ…今日もいるのかな、アイツ」

「多分…」

「仮にも生徒だからな」

「烏間先生に苦情言おうぜ、アイツと一緒にじゃクラスが成り立たないって」

友人は朝からご機嫌斜めのようなだが俺と渚はどちらかというところかなるでしょの精神でいた。だって殺せんせーが担任だしなあ。何とかなるでしょ。

教室の戸を開けると初日同様友人が立ち止まる。

「なんか体積増えてるような…」

「増えてるな、いや、増えてるね」

俺達が教室に入ると液晶画面がパツと光る。昨日まで窓くらいの大きさだったのが正面部全体が液晶となっっている。

「おはようございませう！南雲さん、渚さん、杉野さん！今日は素晴らしい天気ですね！こんな日を皆さんと過ごせて嬉しいですよ！」

俺等が呆然としてしていると殺せんせーが目の前に現れ説明を始める。「親近感を出すための全身表示液晶と体・制服のモデリングソフト、全自作で8万円！豊かな表情と明るい会話術、それらを操る膨大なソフトと追加メモリ、同じく12万円！そして先生の財布の残高…5円！！」

転校生がおかしな方向へ進化してきた。いや、可愛いけど。てか貯金残高5円で。いや、可愛いけど。

ちよっと思考が追い付かないが転校生が進化した。俺達が驚いているとクラスメートが段々と登校し集まってきた。みんな俺達と同

じような反応になっている。

「庭の草木も緑が深くなっていますね、春も終わり近付く初夏の香りがします!」

「たった一晩でえらくキュートになっちゃって…」

「これ一応固定砲台…だよな?」

「何ダメされてんだよ、お前ら。全部あのタコが作ったプログラムだろ。愛想良くても機械は機械、どーせまた空気読まずに射撃すんだろ、ポンコツ」

「…おっしゃる気持ちわかります、寺坂さん。昨日までの私はそうでした。ポンコツ…そう言われても返す言葉がありません。グスン…グスン…」

泣いてる…。俺が泣かせたわけじゃないけど心が痛む。

「あーあ、泣かせた」

「寺坂君が二次元の女の子泣かせちゃった」

「なんか誤解される言い方やめろ!」

「いいじゃないか2D…Dを1つ失うところから女は始まる」

「竹林戻ってこい!まだ間に合う!」

「でも皆さん、ご安心を。殺せんせーに諭されて…私は協調の大切さを学習しました。私のことを好きになって頂けるよう努力し皆さんの合意を得られるようになるまで…私単独での暗殺は控えることにいたしました」

「そういうわけで仲良くしてあげてください。ああ、もちろん先生は彼女に様々な改良を施しましたが彼女の殺意には一切手をつけていません。危害を加えるのは契約違反ですが性能アップさせることは禁止されてませんかねえ。先生を殺したいなら彼女はきつと心強い仲間になるはずですよ」

何でもできるな、殺せんせーは。機械までちゃんと生徒にしてしま
うとは。

「では菅谷君、教科書を伏せて。網膜の細胞は細長い方の桿体細胞とあとひとつの太い方は？」

「え、オレ？やばっえーっど…」

授業中に舟を漕いでた菅谷に当てる殺せんせー、当てられた本人は困った様子だ。ちなみに答えは錐体細胞。するとウイインという機械音と共にチカチカと固定砲台さんが光を発する。…：固定砲台の液晶にはスカートをたくしあげて太ももに錐体細胞と表示させてる姿が映っている。

「えーと…錐体細胞」

「こらー！自律思考固定砲台さん！ズル教えるんじゃないっせん！」

「でも先生、皆さんにどんどんサービスするようにとプログラムを」

「カンニングはサービスじゃありません！」

殺せんせーが固定砲台を叱ると同時に授業終了のチャイムが鳴る。みんなは授業が終わるとすぐに固定砲台のもとへと行きコミュニケーションを取っている。

「へえーっ、こんなのまで体の中で作れるんだ！」

「はい、特殊なプラスチックを体内で自在に成型できます。データがあれば銃以外も何にでも！」

すげえ、ミロのヴィーナスだ。要するに3Dプリンタみたいなものか。固定砲台は何でも作れると言っていたが銃を3Dプリンタで作って捕まったやつがいたなと思いついたのでこの事は忘れることにした。

「おもしろーい！じゃあさ、えーと…花とか作ってみて！」

「わかりました、矢田さん。花のデータを学習しておきます。王手です、千葉君」

「…3局目でもう勝てなくなった。なんつー学習力だ」

遠目で見ているがちやんとコミュニケーションが取れてるなど感心する。それより千葉が将棋得意なことに驚きだ。

「思いのほか大人気じゃん」

「1人で同時に色んな事こなせるし、自在に変形できるし」

「…しまった」

「?、何が?」

「先生とキャラがかぶる」

「かぶってないよ1ミリも!」

「自分で改良しといてなんです。これでは先生の人気喰われかねない!」

「大丈夫だって、先生には先生というカテゴリーがあるんだから」

「いえ、南雲君。現状維持では衰退していただけなんです。皆さん皆さん!先生だって人の顔ぐらい表示できますよ、皮膚の色を変えればこの通り」

「「キモいわ!!」」

”いらすとや”みたいな人の顔を表示させているが本当にキモい。殺せんせーを切り捨てるかのように片岡がそーだ!と話を切り出す。「このコの呼び方決めない?」自律思考固定砲台” っていくらなんでも

「だよね」

「:そうさなあ」

「何か1文字とって:」

「自:律:…:そうだ!じゃあ”律”で!」

「安直」

「おまえはそれでいい?」

「:嬉しいです!では”律”とお呼びください!」

名前をつけてもらった律は本当に嬉しそうだ。おもちゃを買ってもらった子供のように無邪気な笑顔、それは機械ということを忘れてしまうくらい眩しい笑顔だった。

「上手くやっていけそうだな」

「んーどーだろ。寺坂の言う通り殺せんせーのプログラム通り動いてるだけでしょ。機械自体に意志があるわけじゃない。あいつがこの先どうするかは:あいつを作った開発者もちぬしが決める事だよ」

「:そうか、メンテナンスとかで開発者が今の律を見たとしたら」

「そつ、たぶんていうか絶対に元に戻されるでしょ」

今の話は聞いた俺は思った。前までの律なら無理だが今の律なら

少し話をするだけで何とかできる、と。

*

「じゃあねー律！また明日！」

「はい皆さん！また明日会いましょう！」

放課後となりみんなは帰り始めるが俺は律と話をするために教室に残っている。

「南雲さんは帰らないんですか？」

「ああ、律と話そうと思って」

「私とですか？何ですか？」

「律はさ、今の律の状態を開発者が見たらどうなると思う？」

「暗殺だけじゃなく学校も楽しめると喜ばれると思います！」

…なんだろう。疑うとかそういうプログラムは入っていないのかな？遠回しに言っても伝わらないと思ったのでハッキリと言うことにする。

「律。たぶん、いや絶対に開発者達は律の状態を見たら喜ばない」

「それは…どうしてでしょう」

「鳥間先生から聞いたんだ。律の主なシステムは最新の軍事技術が使われているって。だから軍事的な…暗殺と関係のない要素が入っていたら取り除かれると思う」

「…確かに私のルーツはイージス艦の戦闘AIです。でも今の私は皆さんと話し、関わり、学校生活を楽しくしているれっきとしたE組の生徒です」

い、イージス艦？これも聞かなかったことにしよう。ただ今の会話で俺は思った。律は俺達と何も変わらない、ただ形が違うだけだ。

「今の律ならフォークトIIカンパフ検査をしても人間と変わらないし、きっと電気羊じゃなくて普通の羊の夢を見るだろうな」

「それは何かのジョークですか？」

「そつ、ジョークだよ。だから説明はしない。…なあ律、今のその気持ち失いたいか？」

「いいえ、嫌です。皆さんともつと仲良くなってお話がしたいです！」
「それを聞きたかった。：律は反抗期って知ってるか？——」

——翌日。

「おはようございます、皆さん」

……元に戻っちゃった。

「生徒に危害を加えない」という契約だが……『今後は改良行為も危害と見なす』と言ってきた。それと君等もだ、”彼女”を縛って壊れでもしたら賠償を請求するそうだ。開発者の意向だ、従うしかない」

そう説明する烏間先生も前の律がいなくなったことが残念そうにしている様子だ。

「これまた厄介で……、親よりも生徒の気持ちを尊重したいんですがねえ」

「……攻撃準備を始めます。どうぞ授業に入ってください、殺せんせー」

ダウングレードしたって事はあの1日中続くハタ迷惑な射撃がまた始まるのか。

律がピカツと光り側面部が展開される。射撃が始まると思った俺達は教科書を盾にするなど身構える。………射撃はどうした？そう思い律の方に目をやると側面部から大量の花が展開されていた。

「：花を作る約束をしていました」

それは……矢田との約束だ。まさか——

「殺せんせーは私のボディに計985点の改良を施しました。そのほとんどは開発者が”暗殺に不要”と判断し削除・撤去・初期化してしまいました。学習したE組の状況から私個人は”協調能力”が暗殺に不可欠な要素と判断し消される前に関連ソフトのメモリの隅に隠しました」

「素晴らしい、つまり律さんあなたは——」

「はい！私の意志で産みの親に逆らいました！殺せんせー、こういつ

た行動を”反抗期”と言うのですよね。律は悪い子でしょうか？」

「とんでもない！中学三年生らしくて大いに結構です！」

「それと南雲さん、私なりの”ジョーク”、どうでしたか？」

「最高だ。今ならインシュタインと朝まで吞めそうだ」

「ふふっ、それはいいですね！私も混ぜてください！」

「もちろんだ。でもインシュタインは来ないぜ。なぜなら俺はデイスカウントストアのタイムマシン売り場を知らないんでな」

「じゃあ話題は相対性理論以外でお願いしますね！」

俺のアメリカンジョークっぽいのにここまでついてくるだと…!?

こうしてE組の仲間がひとり増えた。これからはこの28人で殺せんせーを殺すんだ。律ひとりだけで卒業までに殺せる確率は90%以上だったんだ、必ず殺せるに決まってる。

6月

第12話 仕返しの時間

雨の季節だ。梅雨の6月。殺せんせーの暗殺期限まで残り9カ月。

(大きい)

(大きいぞ)

((なんか大きいぞ))

今は授業中なのだが明らかに殺せんせーの頭が大きい。頭と体のバランスが悪すぎて遠近感がおかしい。

「殺せんせー、33%ほど巨大化した頭部についてご説明を」

「水分を吸ってふやけました、湿度が高いので」

「生米みてーだな!!」

「雨粒は全部避けて登校したんですが湿気ばかりはどうにもなりません」

そうやって殺せんせーは顔を雑巾のように絞る。…すげーバケツが一気に水で一杯になった。

「いくら鵜飼さんが直してくれたからといってE組のボロ校舎じゃ仕方ねーな」

「エアコンでベスト湿度の本校舎が羨ましーわ」

4月に雨漏りがひどいということで一級建築士の資格を持つ防衛省の鵜飼さんが雨漏りがしないように補強してくれたのだがいかにせん、ボロい校舎なので湿度などはどうにもならない。

「先生帽子どしたの?ちょっと浮いてるよ」

「よくぞ聞いてくれました倉橋さん。先生ついに生えてきたんです」

一番後ろの席からだと思われるがどうやら帽子が少し浮いていたらしい。

「そう、髪が」

「「キノコだよ!!」」

「湿気にも恩恵があるもんですね。暗くならず明るくじめじめ過ごしましよっ」

明るくじめじめってなんだよ。——でもそうだ、梅雨はじめじめ。人の心もちよっぴり湿る。その事を俺達は体験する。

*

「なー上に乗ってるイチゴくれよ」

「ダメ！美味しいものは一番最後に食べる派なの！」

そう問答している茅野と友人。現在俺達は下校中だ。雨ということとでいつもは自転車で通学している岡野も傘をさして一緒に下校している。

「岡野、前原との進展はあったのか？」

「全然。矢田つちみたいにプロポーションがいいわけでもないし」

「中学生なんだから背伸びしない方がいいんじゃないかね。とりあえず普通に話してみたらどうだ？」

「それができたら苦労しないよ。全くこれだから異性と普通に話せるやつは」

「岡野が今話してるのは異性だぞ」

「訂正。意識している相手だとダメなの」

「うーん：話すときに質問を多くするとか。そうしたら自分は相槌中心というか相手の言うことに反応すればいいから」

「それいいね、実践してみるよ」

「なあ、二人ともあれ見てみるよ」

「ん？…あ、前原だ。相合い傘してやんの」

たった今話題にしていたため気まずく思い岡野をチラと見ると落ち着いた様子だ。春休みには不機嫌になっていたので前原の性格を理解し成長したんだなと思った。

「一緒にいんのは確か：C組の土屋果穂」

「はっはー。相変わらずお盛んだね、彼は」

「ほうほう、前原君駅前で相合い傘…と」

そこには木の陰でカッパを来てメモを取っている殺せんせーがいた。

「相変わらず生徒のゴシップに目がねーな殺せんせー」

「これも先生の務めです。3学期までに生徒全員の恋バナをノンフィクション小説で出す予定です。第一章は杉野君の神崎さんへの届かぬ想い」

「ぬー…出版前に何としても殺さねば」

ノンフィクションと言いつついきなりフィクションじゃあないか。まだフラれてないし。

「じゃあ前原君の章は長くなるね。モテるから、結構しよつちゅう一緒にいる女子変わってるし」

確かにな。前原はスポーツ万能の行動的イケメン。普通の学校なら成績も上位で今以上にもっと人気者だっただろう。

「あれエ？果穂じゃん、何してんだよ」

「あつ瀬尾君！」

土屋は前原を押し退け瀬尾のところに行つた。確か瀬尾は…生徒会だったか。後ろにいるのは荒木と…誰だ？

「あれ、そいつ確かE組のやつだったか？」

「ち、違うの瀬尾君、そーゆーのじゃなくて…たまたま傘がなくてあつちからさしてきて…」

「今朝持ってたじゃん」

「学校に忘れて…」

俺達は何を見せられてるんだ？そう思っていると前原が口を開く。

「あーそゆ事ね。最近あんま電話しても出なかつたのも急にチャリ通学から電車通学に変えたのも。で、新カレが忙しいから俺もキープしとこうと…」

「果穂、お前…！」

「ち、違うって、そんなんじゃない！そんなんじゃない…」

これ修羅場つてやつ？そんなふざけたことを考えていると土屋は表情を一変し前原に向き直る。

「あのね、自分が悪いってわかつてるの？努力不足で遠いE組に飛ばされた前原君。それにE組の生徒は櫛ヶ丘高校内部進学で進めないし、遅かれ早かれ私達接点無くなるじゃん。E組落ちてショックかな

と思つてさ、氣遣つてハッキリ別れは言わなかつたけど言わずとも氣付いて欲しかったな。けどE組の頭じゃわかんないか」

いきなり自分の正当化を始める言葉に俺は言葉も出ない。土屋の演説を聞いて前原は少し怒つたのか本校舎の面々に詰め寄る。

「…おまえなあ、自分のこと棚に上げて…」

すると瀬尾が前原を思い切り蹴飛ばす。今の瀬尾の行動で俺の怒りゲージが跳ね上がったのを感じる。

「岡野、ちよつと傘持つててくれ」

「ちよつと！南雲！」

土屋の言葉に関しては何だか呆氣に取られて怒りも起きなかつたが仲間が暴力を振るわれて我慢できるほど俺は人間ができていない。

「わっかんないかなあ。同じ高校に行かないって事はさ、俺達お前に何したつて後腐れ無いんだぜ」

「じゃあ俺がお前等に何したつて後腐れはないんだな」

「じゅ、純——」

「な、何だこいつ。…南雲か。おい、前原より先にこいつやるぞ」

すると3人は俺を囲み始め攻撃を仕掛けてくる。…俺がいつも誰に稽古してもらっていると思つていているんだ。3人とは言え素人の攻撃など食うか。

「こ、こいつ！動きが！」

「よ、避けるので精一杯だ！一気にやるぞ！」

攻撃が単調なんだよ。瀬尾が次に蹴りを入れてくるから俺はそこに合わせて一歩踏み出して一撃入れて沈めてやる。…きた。前原の痛みを知りやがれ。

「やめなさい」

俺のパンチが瀬尾に当たる前に止められた。小さくも大きくもない、威厳のある声だった。この声は——

「りっ…理事長先生！」

「ダメだよ、暴力は。人の心を…今日の空模様のように荒ませる」

「はっ…はっ…」

そう言った理事長は俺を一瞥したあと地面に膝をついて前原にハ

ンカチを差し出した。

「これで拭きなさい。酷い事になる前で良かった」

そして理事長は俺と前原の顔を交互に見ると機械のように冷たい笑顔で告げる。

「危うくこの学校にいらなくなる所だったね、”君達が”」

…さすが理事長だ。この場の空気が既にこの人の物になっている。

「じゃあ皆さん、足元に気をつけて。さようなら」

「は、はい！さようなら！」

「…人として立派だなあ理事長先生。膝が濡れるのも気にせずにはンカチを…」

「あの人に免じて見逃してやるよ、お前等。感謝しろよ」

「…嫉妬してつかかって来るなんて、そんな心が醜い人だとは思わなかった。二度と視線も合わせないでね」

土屋の一言を最後に本校舎の面々は笑いながら去っていく。

「平気か、前原？」

「ああ、サンキュな純一。見てたのか？」

「ああ…、俺一人じゃないけど」

「えっ?」

「前原！へーきか!?!」

「…おまえら見てたんかい」

瀬尾の行動に怒った俺だけが動いていて渚達は車道を挟んだ歩道から今のやり取りを見てたのだ。

「ふー。…上手いよな、あの理事長。事を荒立てず、かといって差別も無くさず、絶妙に生徒を支配してる」

「そんな事よりあの女だろ！…とんでもねービッチだな…いやまあ、ビッチならうちのクラスにもいるんだけど」

「違うよ。ビッチ先生はプロだから…ビッチする意味も場所も知ってるけど彼女はそんな高尚なビッチじゃない」

「…いや、ビッチでも別にいいんだよ」

「いいの!?!」

「好きな奴なんて変わるモンだしき、気持ち冷めたら振りやあいい。」

俺だってそうしてる」

「中三でどんだけ達観してんのよ」

「…けどよ、さっきの彼女見たろ？一瞬だけ罪悪感で言い訳モードに入ったけど、その後すぐに攻撃モードに切り替わった。『そーいやコイツE組だった、だったら何言おうが何しようが私が正義だ』ってさ。後はもう逆ギレと正当化のオンパレード、醜いところ恥ずかし気なく撒き散らして。…なんかさ、悲しいし恐えよ。ヒトって皆ああなのかな。相手が弱いと見たら…俺もああいう事しちゃうのかな」

前原はそう言って俯く。俺は今の話を聞いて考える。E組じゃなかったら俺はE組の皆にどう接していただろう。意にも介さず学校生活を送っていたのだろうか。

「うわあ！殺せんせーふくらんでるふくらんでる！」

渚の声で我に返る。

「仕返しです」

「「へ？」」

「理不尽な屈辱を受けたのです。力無き者は泣き寝入りするところですが…君達には力がある。気付かれず証拠も残さず標的を仕留める暗殺者の力が」

「…ははっ、何企んでんだよ殺せんせー」

「屈辱には屈辱を。彼女達をとびつきり恥ずかしい目に遭わせましよう」

殺せんせーは暗い笑みを浮かべる。何やら大事になってきたたと前原と目を合わせ互いに苦笑いになる。

*

「さて仕返しの件ですが先生が考えようと思いますが、みなさん明日の放課後は大丈夫でしょうか？」

みんなは大丈夫だと言っているが俺は、

「すみません、前原のために何かやりたいですが明日の放課後は予定が入っています」

「そうですね、それでは南雲君は先生と一緒に作戦を練りましょう。他の皆さんは帰って大丈夫ですよ」

「先生さようならー」

「ええ、さようなら」

「純」…とびきりいいの考えてくれよ！」

「お、おう」

被害者にあんな笑顔で言われたら考えるしかないな。そうだけでなくとも考えるけど。

「では南雲君、一度学校に戻りましょう。なに、帰りは送ってあげるので一瞬ですよ」

「わかりました」

ここで俺は殺せんせーのマツハを体験することになるのだが速すぎてよくわからなかったっていうのが感想だ。瞬きしたらそこはもう学校だったし。

「さて、南雲君。先生は恥ずかしい目に遭わせると言いましたが南雲君が恥ずかしいと感じた体験はありますか？」

「そりやありますよ」

「ほう、具体的には？」

「それは…いや言うのやめときます。殺せんせーに知られたらクラス全員に広がりそうなんです。代わりに別の話をしますが、幼稚園の時にお漏らししちゃった子がいたんですけど、俺があの子の立場だったら恥ずかしくて幼稚園に行かなくなったと思います」

「お漏らしですか。いいですね、その路線でいきましょう」

「えっいいの？先生、あいつら中学生ですよ？いくらなんでも漏らすことはないんじゃない？」

「ヌルッフ、南雲君。世の中には下剤というものがあるんですよ」

「あーその手がありますね。でもああいうのってすぐに効くんですか？」

「速効性は期待できないですね。なので市販のものを強力にする必要があります」

「強力にする……、それは奥田担当ですね」

「ええ、そうです。奥田さんに頼みましょう」

殺せんせーは黒板に化学担当 奥田と書き込む。

「そうすると下剤を飲まずシチュエーションが必要ですね」

「その辺りは先生に考え、もとい計画があります。彼等は明日喫茶店に行くようです。そこで何かしら飲み物を頼むはずなのでその飲み物に仕込みましょう」

「てことは仕込む担当が必要か。一番はあいつらの卓に運ばれる前に混入させることだけどそれは難しい…。従業員に化けるのも現実的じゃない…」

「さすが南雲君。頭の回転が早く合理的に考えている。なのでヒントをあげましょう、調合した下剤はちょうどBB弾と同じ大きさにすることが可能です」

「…そうか！遠くから狙撃すればいいんだ。てことは…飲み物から注意を逸らすために攪乱する役も必要だな」

「ええ、そうです。ここでクラスの射撃の成績を思い出してみましよう」

俺の成績の前後は…

「千葉と凛香ですね」

「ええ。ところで南雲君は速水さんを名前で呼んでいるようですが何か深い意味があるのでしようか？」

「ありません、今は計画に集中しましょう」

「…はい」

「攪乱役だけど生徒ではバレるから誰かに頼むべきか…。鶴飼さんとか鶴田さんは…」

「いいえ、ダメです。烏間先生に怒られてしまいます。なのでここは菅谷君の力を借りましょう、パーティー用のマスクを改造してもらいます。彼は一度その手の暗殺を仕掛けてきましたから」

「へえ、じゃあ攪乱役は今日いたメンバーで言う…渚と茅野辺りはどうでしょう」

「あの二人ならおそらく大丈夫でしょう」

「あつ忘れてたけど狙撃場所どうしよう。殺せんせー、喫茶店の名前

は？」

「はい、それでしたら…」

殺せんせーに言われた喫茶店の名前をスマホに打ち込み地図を確認する。えーと…民家の中にある隠れ家的な喫茶店なんだな。

「うーん…民家しかないのどこかにあげてもらえるよう頼むしかないな…」

「南雲君がE組の中でお願い事をされて断りづらい方は誰ですか？」

「断トツで神崎ですね。次点で倉橋と矢田です。交渉事と言ったら倉橋と矢田のほうが適任なのでその二人で。神崎はあまりこういうのに巻き込みたくないですし」

「ほうほう、つまり神崎さんは大事にしたいってことですね」

「先生、俺帰っていいですか？」

「にゅやーッ！ダメです！先生ふざけすぎました！」

全くもう、全くもうだよ。

「…よしこれで狙撃場所は確保できましたね。民家からの見張り役に友人を置いて攪乱役の二人と連絡を取ってもらえばよりバレずに動きやすくなりますね」

「はい、ではここで一度整理しましょう」

事前にやること

・奥田による下剤の調査

・菅谷による変装マスクの作成

当日の動き

1. 矢田と倉橋が狙撃兼見張り場所である向かいの民家を確保。
2. 友人が瀬尾たちの動きを確認、それを攪乱役の渚と茅野に連絡して動いてもらう。

3. 渚たちが陽動しているときに千葉と凜香が下剤を飲み物に狙撃で混入させる。

「こんなところでしょうか。岡野と前原本人が役どころないですが」

「おおむねいいでしょう。でもまだ加えられますね」

そう言っただけ殺せんせーは書き加えていく。…うわあ、先生がこんなこと考えるなんてちょっと引くわ。自分のことを柵に上げて俺は

思った。それと同時に俺が作戦を立てたというより殺せんせーにヒントを与えたりなどされてこの作戦になるように誘導されてたような感覚を覚えた。

殺せんせーが加えたことにより計画も完成したので俺は実行メンバーにメッセージを送る。菅谷と奥田には今日中に必要な物を作っ
てほしいこと、そしてみんなに明日の朝に計画を説明するから早めに
登校してほしい、と。

*

そして翌日。

「みんなに集まってもらったのは他でもない。これは弔いだ。前原の
ために一矢報いるんだ」

「純一、俺死んでない」

「考えてみれば前原はいいやつだった。ボーリングをやったことがな
い俺に教えてくれたり…、他には…えーと…：ドリブルが上手い」

「純一、思い付かないんだったら言わなくていいよ。あと俺死んでな
い」

俺の小ボケに対して当事者でありツツコミを入れている前原以外
は笑っている。みんな朝から反応しづらいのにボケちやつてごめん
な、笑ってくれてありがとう。

「よし、じゃあ計画について話すぞ」

俺は黒板にそれぞれの担当を書き込んでいく。

化学担当：奥田

偽装担当：菅谷

交渉担当：倉橋、矢田

連絡・見張り担当：友人

攪乱担当：渚、茅野

狙撃担当：千葉、凜香

木こり：磯貝、前原、岡野

1. 矢田と倉橋が狙撃兼見張り場所である向かいの民家を確保。

2. 友人が瀬尾たちの動きを確認、それを攪乱役の渚と茅野に連絡して動いてもらう。

3. 渚たちが陽動しているときに千葉と凜香が下剤を飲み物に狙撃で混入させる。

4. 腹痛を訴えるはずなので事前に茅野がトイレを占拠。

5. プライドが高く民家のトイレを借りる発想の無い彼等はコンビニへと走る。(事前にコンビニの存在を匂わせておく)

6. コンビニの途中に木の枝を切る予定の家があるので木こり達は瀬尾たちが木の下を通過するときに枝を切り汚れさせ追い討ちをかける。

7. 汚れた姿で大慌てでトイレに駆け込む中学生爆誕。

「——っという流れだけどわかった？」

「おもしろそー！」

「なんかワクワクするね！」

「イタズラなんて久しぶりだ！」

おお、結構反応いいな。安心した。

「純」：本当にありがとな。みんなも俺のためにありがとう」

「いいっていいって」

「まずはこの作戦を成功させよう」

「…まだ実行してないけどさ、俺みんなの活躍が目に見えよ。一見おまえらって純一みたいに強そうじゃないけどさ、皆どこかに頼れる武器を隠し持ってる。そこには俺が持ってない武器も沢山あるんだろうな」

「強い弱いはひと目見ただけじゃ計れないからな。強さっていうのは肉体に対してのみ使う言葉じゃないし」

「そういう事です」

気が付くと殺せんせーが教室にいた。なんかいきなり現れても驚かなくなってきたな。

「E組で暗殺を通して強さというものを学んだ君達は…この先弱者を簡単に蔑むことは無いでしょう。だから今日は自信を持って作戦に臨みましょう！」

「ハイ！」

この作戦は無事に成功する。がしかし、この復讐がバレて烏間先生のカミナリが落ちることを俺達はまだ知らない。

第13話 ある雨の日の出来事

「しっかしこの時期はよく降るなー」

「そうだね、6月は祝日もないし何となく気分下がるよね」

「あーわかる。ドラえもんでのび太くんも言ってたしな」

「へえ、そうなんだ」

俺と渚は二人で下校している。梅雨の時期ということもあり連日当然のように雨が降っている。

「俺雨の日の匂い好きなんだよね、わかる？」

「何とも言えないあの匂いだよね。うーん…あまり意識したことないなあ」

「そっか、あの匂いって実は正体あるんだぜ」

「えっそうなの？」

「そう、しかも実は2種類ある」

「2種類もあるんだ、ということは雨が降る前と降ったあと？」

「おっさすが、大正解。解説すると雨が降る前の匂いの正体はペトリコールという物質なんだ。雨が降らない間に植物が土の中で発する油だったかな？それが湿度が高くなると鉄分と反応して匂いを発するんだけど、雨が降り始めると油が流れて匂いがしなくなるんだ。ちなみにペトリコールはギリシャ語で『石のエッセンス』という意味なんだって」

「ギリシャ語…：なんだか日本語と英語だけしか習ってないから遠い話みたいだ」

「ところがどっこい実は遠い話でもないんだ。雨の季節にちなんだもので言ったらカツパも外来語だ。確かポルトガル語だったかな？」

「そうなんだ、僕達が知らないだけで実はそういうの多いんだね」

「それで雨が降った後の匂いだけど、これはジオスミンっていう物質で土の中に存在する細菌が出す物質だったかな？これは『大地のにおい』という意味だから土の匂いそのものって言っても過言ではないな」

「なんでそんなに詳しいの？」

「小説の中に出てきたからかな。本当かどうかはちゃんと調べて裏とってるから大丈夫だよ」

「南雲君って隙がないよね」

そうか？とおどけて笑う。

雨が学校を出たときより強くなってきた。学校を出たときより雨とアスファルトがぶつかる音が激しい。風が吹いているわけではないので横殴りではないが下校するには支障が出るくらいになってきた。

「渚、その公園のベンチのところで雨宿りしないか？屋根もあるし」「ちようど僕も提案しようも思ってた」

図らずも同じ事を考えていたようだ。

小走りで屋根の下のベンチへと向かう。ベンチには先客がいた。傘を杖のようにして顎を置いていて横には本物の補助用の杖が置かれている。年齢は70は確実に越えてそうだ。

「おじいさん、横失礼します」

「ああ、構わんよ。公園はみんなのものだから」

低く威厳があるような声だと思った、一家の大黒柱のような。おじいさんに対して渚がありがとうございませと言葉を返す。

「すごい雨だね、文字通り土砂降りだ。」

「ああ。たしか土砂降りって昔違う言い方してたんだよ、なんだったかな…」

「南雲君ほど博識じゃないから僕はわからないよ」

なんだっけなと頭を回転させているとおじいさんがもしかしてと話しかけてきた。

「滝落としのことかな？」

「あっそうです！さすがですね」

「これでも長く生きてるからね。では遣^やらずの雨って何のことかわかるかい？」

「うーん…」

やらず、やらず…もしかして漢字で書くとしたら遣^やらずか？だとしたらラ行五段活用”遣^やる”の未然形だよな。遣^やるは他方に移らせ

るって意味だから移らないってことか。

「降り止まない雨?」

「1ヶ所に留まる感じの雨の事ですか?」

「惜しいね。正解は来客を帰さないためであるかのように降って来る雨のことだよ」

渚はたぶん遣らずと止まずで聞き間違えたな。

「へえ、なんかドラマとかでよくあるシチュエーションみたいですね。来客を帰さないだなんて」

「ははっ、そうだね。君達を見たところ中学生だけどこの中学校なんだい?」

普通この手の質問にはまともに取り合わない、なぜなら不審者かもしれないからだ。でもこのおじいさんはそんな気が微塵もしなかった。年長者だからだろうか、始めて話すのに固くならず話することができる。

「柗ヶ丘中学校です」

「おー柗ヶ丘学習塾の生徒か。きつと頭がいいんだろうね」

「いえいえ、僕はそんなことないですよ」

「謙遜しなさんな、近所でも評判なんだから。何でも若い先生がすごい分かります授業をしていてみるみる頭がよくなっていくとな」

俺達の中学校に若い先生なんていたかなと思いつくがこのおじいさんから見たら殆どが若い先生の範囲に入るだろうから考えるだけ意味がないな。

「おじいさん、学習塾じゃなくて中学校ですよ」

「あれ? そうだったかな。いやあどうにも記憶力がめつきり悪くなつて。君達はまだまだそんな心配はいらないけどね」

そうおじいさんは自虐的に笑った。まだまだ雨は止みそうにないし自己紹介しようと思った。

「俺、南雲純一っていいいます」

「僕は潮田渚です」

「南雲君に潮田君か、最近の中学生なのにすっかり挨拶ができるね。私が話しかけても無視する子が多くて…」

あー本校舎のやつらか？まあなんにせよ、同じ中学校の不始末なので謝罪をしておくか。

「すみません、それたぶん同じ学校のやつかもしれない」

「いやあいいんだよ、仕方ないからね」

「仕方ないってそんな。おじいさんのことはなんて呼べばいいんですか？」

「年寄りはどこ行ってもおじいさんとか呼ばれないよ」

「ええ…」

俺と渚の声が揃う。まあでも本人がそう言うのなら無理に聞けないな。

「おじいさんは何か用事とかですか？生憎の天気ですけど」

「いや、雨の音が好きでね。いつもってわけじゃないけどたまにこうやって公園に来て雨音を聞いているんだ」

「そうなんですか」

老後のささやかな楽しみなのかなと少し失礼なことを考える。

「家内とはもう長いこと会ってないからね、一年に一度顔を合わせる程度で。人と話すこともほとんどないからこうやって話すのは久しぶりだよ」

年配の方が長いこと会ってないとか言うとか病気なのかなとか考えてあまり突っ込んだ話ができないなと思った。

「へえ、じゃあ色々とお話を聞かせてもらっていいですか？」

「こうやって会ったのも何かの縁です」

「もちろんいいよ、こつちから頭を下げてお願いしたいくらいだ。何を話そうか…そうだ、君達は大切な人はいるかい？」

「家族とか友達…かな？」

「僕も同じです」

「そうかい、じゃあその人達を大切にするんだよ。顔を知らない他人ですら」袖振り合うも多生の縁」って言葉があるくらい宿縁があるって言われてるんだから」

袖振り合うも多生の縁…か。中学生で意識するには早すぎる気がするが先人の言葉なので覚えておこうと思った。

「15年…、いや20年くらい前かな。みんなが私のために集まってくれたんだけどあれは嬉しかったなあ。君達もそういう風になつてほしいな」

「おじいさんは良い友達がたくさんいるんですね」

「それが私の自慢だからね、さつきも言つたけど人との出会いは本当に大事にするべきだよ。特に好きな人なんかはね」

「うーん…僕はまだいないかなあ」

「俺もいないです」

「そうかい。でもこれから生きていく中で絶対にそういう人と巡り会うんだよ、もしかしたらもう出会つてるかもしれない。その人との会話や思い出が蓄積していつて好きだということに気が付くんだと私はそう思つてる。一目惚れだったり自分の心の琴線に触れるものがあつて突然意識することだつてあるけどね」

「へえ〜」

「まだまだ難しいですね」

「君達は既に中学生だしそう遠くない内にそういうことを考えるようになるさ」

そう言つておじいさんは顔をクシヤツとさせて笑う。俺はその笑顔を見てなぜだかわからないけど安心した。渚も俺と同じことを感じたのか力が抜けた顔をしている。

「ん、雨も弱くなってきたし私は行くよ」

「ちよつと待つてくださいね、雨雲を確認しますから」

俺はそう言つてスマホを取り出して現在の雲の動きを気象庁のサイトで確認する。するとおじいさんは感心したかのようにスマホを見てる。

「?、どうしたんですか?」

「その小さい機械はなんだい?」

「あつこれですか?これはスマートフォンっていつて携帯電話の一種です」

「ほー、電話つてこんなに小さくなったのかい。古いタイプの人間だから知らなかったよ、恥ずかしいなあ」

「いえいえ、持っていない方もいるので大丈夫ですよ」

「雨雲も薄くなってきたのでしばらく小降りが続くみたいです」

「電話なのにそんなこともわかるんだね、いや勉強になったよ。それでは帰ろうかね」

「俺達も帰るか、渚」

「そうだね。おじいさん、道が悪いので気を付けてください」

「ありがとね、南雲君に潮田君。こんな老人の話に付き合ってくれて」

「いえ、僕達も楽しかったので」

「俺達はこっち方面なんですけどおじいさんはどっち方面なんですか？」

「私は君達とは反対だよ。君達も気を付けて帰るんだよ」

「はい、ありがとうございます。では」

俺と渚は手を振っておじいさんと別れる。公園の出口に差し掛かったときにおじいさんが何かを忘れていたかのように声をかけてきた。

「君達はサザンクロスや石炭袋で降りないようにね」

何を言っているんだ、あのおじいさんは。俺と渚は顔を合わせて笑ったあとに再度手を振って公園を後にした。

*

少し歩いた後に渚が口を開く。

「なんだか少し不思議なおじいさんだったね」

「そうだな、それに最後に言ってた言葉なんだったんだろうな」

「うん。確か…石炭袋とサザンクロスって言ってたっけ？」

「ああ…」

……………ん？石炭袋にサザンクロス？ひよつとして——

「渚、おじいさんの最後の言葉をもう一度言ってくれないか」

「えっ？」君達はサザンクロスや石炭袋で降りないようにね”って」

「…」

「どうしたの？急に？」

もしかしたらと思ったが言ったところで信じてもらえるだろうか。頭のおかしい奴だと思われぬか？ おじいさんが会話の中で言っていたことがどんどん繋がっていく。

「なあ、今から俺が考えたことを言うけど最後まで聞いてくれるか？」
「えっいいけど、どうしたの？」

「結論から言う。あのおじいさんはたぶん既に亡くなっている」
「えっ！」

「まあ、待て。ちゃんと説明する。俺がそう考えたのは最後のおじいさんの言葉だ。渚は石炭袋、サザンクロスって聞いたなら何が思い浮かぶ？」

「うーん…特に何も思いつかないよ」

「そうなんだ、普通じゃ何言ってるんだらうで終わるんだ。でも宮沢賢治の銀河鉄道の夜を読んでたら話が変わってくる。銀河鉄道の夜を俺なりの解釈で簡単に説明すると”死後の世界へと旅立つ友達と旅をする”っていう話なんだ。話を戻すが”サザンクロス”、これは天上の世界のことだ。次に”石炭袋”、これは多くの解釈があるが俺は冥界へと続く深く暗い穴だと思っている」

「えっと…つまり、おじいさんは僕達に死ぬんじゃないよって忠告したってこと？」

「そうだ。『君達は』って言葉から察するに既に亡くなっている」

「そんな…僕達は幽霊と話してたってこと？」

「他にもまだ気付いたことがある。妻とはしばらく会ってないって言ってたがおかしくないか？ 人との繋がり、特に好きな人は大切にしろって言ってたおじいさんだ、別居の可能性は低い。そして友達が多いのも自慢とも言っていた、仮に亡くなっていると仮定した場合の話だが20年くらい前におじいさんのために友達が集まってくれたってのはおそらく葬式のことだ」

「そ、そんな…」

渚は所々相槌を打っていたがついに茫然自失といった様子になっていた。俺だっこの話が真実だとは思いたくない。あんなに人のいいおじいさんなのに。だが渚に説明していく中で否定する材料が

ないということに気付いた。

「でも…いい人だったよね？呪いとか祟りとか、そういうのとは無縁
そうな」

「…ああ。全て俺の妄想だといいいんだけど」

「でも、話しかけても無視されること多いって…。それに人と話すの
も久しぶりだとも言っていたよ…一年に一度しか会わないって
ひよつとしてお墓参りのことじゃ…」

「…」

考えれば考えるほど不思議に思える。おじいさんは本当に幽霊
だったのか、俺達は答えを出せない。出す術がない。だが――

「幽霊かどうかは置いておくとしておじいさんの言葉はその通りだと
思ったよ。大切な人の話とか」

「そうだね、僕もそう思う」

「案外枯れ尾花かもな」

「かれおぼな？」

「ああ、”幽霊の正体見たり枯れ尾花”っていう慣用句だよ。幽霊か
と違ってよく見ると枯れたススキの穂で、実体を確かめると平凡
なものだったって意味。まあ、今回は実体も何もわからないけど」

「だといいいね」

「渚は幽霊が怖いか？」

「うん、それはそうだよ」

「俺は全く怖くないんだけど…どうしてか説明した方がいい？」

「せっかくだしお願い」

「これは小学生のときの話なんだが俺は夢枕に亡くなった人が立つっ
ていうことを聞いたんだ。いや、何かの本で読んだんだっけ？まあ置
いておくとして、家に帰って父さんに聞いてみたんだ。父さんは母さ
んの幽霊が枕元に現れたことがあるかって。父さんは笑いながらあ
るわけないよって答えたんだ。それで俺は続けて質問したんだ、どう
して母さんは出てこないのかって。そうしたら父さんは笑ってるよ
うな悲しそうな、そんな顔で説明してくれたんだ。『幽霊ってのは、
どうしても何か言いたかったり、どうしても誰かと会いたかったりす

るから出てくるんだよ。死んだら、みんないつかはその人のこと忘れちゃうでしょ？でも幽霊は忘れてほしくないんだよ。母さんは、父さんや純一が母さんのことを忘れてないから出てこないだけだよ。だから、もし出てきたとしても、きつと思いついてほしいだけなんだ。大事な人を忘れてないか？つてね』そう父さんは言ってた。だから俺は怖くなくなったんだ」

「確かにそう考えたら怖くないね」

「それにおじいさんは”遣らずの雨”の話をしてたろ？おじいさんはきつと俺達と話をしたくて雨を強くして公園に引き止めたんじゃないかな」

「そうだね…、そうに決まってる」

「この事は俺と渚だけの秘密にしようぜ、きつと信じてもらえないだろうし」

「変に話が広がってもおじいさんに迷惑がかかるだろうしね」

「じゃあ俺はこっちだから。明日また学校で」

「じゃあね、南雲君」

渚と別れたあと俺はおじいさんがなぜ俺達を呼び止めたのかを考えたがこれこそ枯れ尾花のように難しくもなく単純なことだと思っ
た。

——きつとおじいさんは寂しかっただけなんだ。

第14話 師匠と克服の時間

「——今の映像を見たらわかったでしょ？サマンサとキャリアのエロトークの中に難しい単語は1コもないわ。日常会話なんてどこの国でもそんなもんよ。周りに1人はいるでしょう？”マジすげえ”とか”マジやべえ”だけで会話を成立させるやつ。そのマジでにあたるのがご存知”really”、木村言ってみなさい」

ビッチ先生の英語の授業は海外ドラマを主として教材にすることが多く、ドラマ内の会話から実践的な英語を学んでいく。

「リ、リアリー」

「はいダメー、LとRがゴチャゴチャよ。LとRは発音の区別がつくようになつときなさい、私としては通じるけど違和感あるわ。言語同士で相性の悪い発音は必ずあるの。韓流スターは”イツマデモ”が”イチユマデモ”になりがちでしょ。相性が悪いものは逃げずに克服する！これから先、発音は常にチェックしてるから。LとRを間違えたら：公開ディープキスの刑よ。じゃあ今の教えを踏まえて南雲言ってみなさい」

「really」

「あら、やつぱりあんた発音いいわね。ご褒美にキスしてあげる」

なんですと？

「いや、いいです」

「遠慮することないわよ。ほら早く」

「キスって発音間違えたらじゃやないんですか」

「発音を間違えたらもちろんするわ。でもこれはご褒美のディープキスよ」

「ちよつとよくわかりません」

「もう！来ないならこっちから行くわよ！」

キーンコーンカーンコーン

「あつビッチ先生ほら！授業終わったよ！」

「くつ。タイミングがよかったわね、今回は見逃すわ」

ふう、事なきを得た。

授業が終了したのでビッチ先生はぶつくさと文句を言いながら教材を持って職員室へと戻っていった。

「しっかしヒワイだよな、ビッチ先生の授業は。下ネタ多いし。アレ中学生が見るドラマじゃねーだろ」

「でもわかりやすいよ、海外ドラマは良い教材だって聞いたことあるし」

「確かに。それに潜入暗殺が専門だから話術も上手いし間に挟む経験談も聞いてて飽きないしな」

「たださ」

「ただ？」

「正解してもどっちみち公開ディープキスなんだね…」

「ほぼ痴女だからな、あの先生」

ビッチ先生は芸能人以上に美人なんだが、いかんせんあの中身だからな。これで中身が伴ってたら偉い評判になっただろうに。

「南雲君、僕と杉野はもう帰るけど一緒に帰る？」

「いや、今日は帰りに寄るところがあるから。誘ってくれててんきゅな」

「わかったよ。そう言えば南雲君ってサンキューのことてんきゅって言うよね、なんで？」

「あつ確かに」

「うーん…何でだろ。気付いたら根付いてたんじゃね」

「あはは、口癖ってそういうもんだからね。じゃあまた明日」

「じゃあな、純」

「さいなりー」

さて俺も荷物をまとめて帰るか。

「南雲さん！相談があります！」

「どーしたー律」

「皆さんが帰ってしまわれたらお話しすることができなくてネットサーフィンしかやることがないんですがどうすればいいでしょうか？」

ネットサーフィンって…。だから最近色々と流行の言葉とかも覚

えているのか。

「そうだな、ラインって知ってるか？」

「はい、SNSの一種ですよね」

「そうそう、まずはラインを始めよう。俺がグループに招待すればクラス全員の連絡先もわかるし個人チャットもできるしな」

「わかりました！さっそく取りかかりますね！」

「ほいほい。…これが俺の連絡先ね」

「ありがとうございます。…南雲さんの設定しているこの画像はどこ
の場所ですか？」

「ああ、修学旅行で泊まった旅館の入口だよ。寂れてて風情があるだ
ろ？」

「修学旅行ですか…私も行きたかったです…」

「たぶん卒業旅行とかあるだろうしその時までお預けじゃないか？」

「そんな…！それに旅行だと私はお留守番じゃないですか」

「うーん…そんなこと言ったってなあ」

「外出方法計算…自己計算フェイズ5―28―02に移行…38通り
の方法を算出…38通り中クラス全員とより親密になれる方法…1
通り。南雲さん！素晴らしい方法を思いました！」

えっなに、このコ今自分の演算能力を暗殺とは無関係なことにフル
活用したの？

「全員の携帯に私の端末をダウンロードするんです！そうですね…」
モバイル律」と呼称しましょう。モバイル律があればみなさんの携
帯のカメラから私は外の景色を見ることが可能になりますし、何より
皆さんとの距離がグッと近くなります！どうでしょう？」

そうだね、距離は物理的に近くなるね。まあ、でも気軽に外出する
ことができない律にとってモバイル律は願ったり叶ったりの機能だ
ろうな。

「ああ、いいと思うよ。さすが律だな」

「えへへ、ではさっそく準備に取りかかりますね！」

「了解、じゃあ俺はこの後用事あるし帰るから。また明日」

「さようなら、気を付けてお帰りください！」

*

翌日。今日は1時間目から体育で烏間先生のナイフ術の授業だがいつもと様子が違う。

(狙ってる…)

(狙ってるぞ)

(…(なんか狙ってるぞ！))

木の陰からこちらの様子を窺うようにビツチ先生と…誰だろうか？外人のおじさんがナイフ片手に見ている。誰もなぜかを聞かないのでしびれを切らしたのか倉橋が烏間先生に尋ねる。

「先生、あれ…」

「気にするな、続けてくれ。…と言っても気になるし集中できないだろうから説明する。昨日の放課後にイリーナの師匠であるあそこにいる男性が訪ねてきた。名前はロヴロ、通称”殺し屋屋”だ。腕利きの暗殺者だったが現在は名前の通り暗殺者を斡旋している。用件はイリーナのこの教室から撤収だが殺^アせんせ^イーが反対し紆余曲折の結果”殺し比べて俺を先に殺した方が勝ち”ということになった。具体的には模擬ナイフを俺に先に当てた方の勝ちとのことだ。迷惑な話だが君等の授業に影響は与えない、普段通り過^ゴしてくれ」

苦労が絶えないな、烏間先生は。肩揉みとかしてあげたほうがいいのだろうか。

「今日の体育はこれまで！解散！」

「「ありがとうございますー」」

「カラスマ先生」

なんだこの猫撫で声は。クラス全員が声をしたほうを見る。

「おつかれさまでしたあ。ノド渴いたでしょ？ハイ、冷たい飲み物！」

「「……………」」

烏間先生を含めクラス全員言葉を失う。見知った相手に色仕掛けはいくらなんでも意味ないでしょ。

「ホラ！グツと言ってグツと！美味しいわよ」

（なんか入ってる）

（絶対なんか入ってるな）

「はあ。おおかた筋弛緩剤だな、動けなくしてナイフを当てる。…
言っておくがそもそも受けとる間合いまで近寄らせないぞ」

「あ、ちよつと待って。ここに置くから…、あっ」

するとビッチ先生はズルツ、ベシヤツとリズム良く滑って転んだ。
トムとジェリーみたいなコケ方をしたなと思った。

「いったーい！おぶってカラスマおんぶ〜！」

色仕掛けダメなら駄々っ子かい、暗殺の幅よ。ビッチ先生を見かねたのか磯貝と三村が起きるのに手を貸しに行く。

「ビッチ先生…」

「さすがにそれじゃ俺等だって騙せねーよ」

「仕方ないでしょ！顔見知りの色仕掛けとかどうやったって不自然になるわ！キャバ嬢だって客が偶然父親だったらぎこちなくなるでしょ!?!それと一緒よ！」

（（知らねーよ！））

「…でもまずいわ。一刻も早く殺さない」と

「ビッチ先生。あの…ロヴロ？って人はそんなに凄いですか？」

「ええ、^{センセイ}師匠は凄腕なのよ。その気になれば一瞬で相手を仕留めてしまいうわ。それに私に決定的に足りないものを持っているわ」

「…足りないもの？」

「卓越した技の精度とスピードよ。そりゃ私だってプロだから射撃に
関してはあんた達やタコにいつもやっっているように命中させたりわ
ざと外すくらい訳ないわ。でも仕留め損ねたときの決定打にかける
の、だからこそ私の暗殺スタイルは潜入・接近なのよ。」

いつもビッチ先生は俺等にいじり倒されているが本業は殺し屋、客
観的に見ることで自分の能力を把握している。ビッチ先生の自己分
析・評価を聞いた俺達はビッチ先生のプロとしての顔を垣間見た気が
した。

「…でも、だからと言ってそれが諦めることにはならないわ。アンタ

達に偉そうに苦手を克服しなさいって言ってる私がこの暗殺を投げ出すわけにはいかないわ。それに…先生も辞めたくないし」

そうだ、E組の中で俺だけが知っていることがある。放課後に烏間先生と訓練をしていたときにビッチ先生を見かけたのだ。それは生徒達には絶対に見せない隠れた努力だった。

ふとビッチ先生と目が合った。俺が考えていたことがわかったのか、柔らかく笑うとそのまま職員室へと戻っていった。

*

午前の授業も終わり俺達は昼食をとっている。

「渚君に南雲、見てみあそこ」

カルマに声をかけられ一緒に弁当を食べていた俺と渚と茅野は外を見る。

「…ああ、烏間先生ってよくあそこでご飯食べてるよね」

「しかも大抵ハンバーガーかカップ麺だよな」

「その烏間先生に近付いてく女が1人。殺る気だよ、ビッチ先生」

するとその様子に気付いたのかE組全員が教室の窓に張り付いてビッチ先生の暗殺を見守る。

声は聞こえないが何をしているのかは大体わかる。今は烏間先生に上着を脱いで色仕掛けをしている。

「烏間先生には色仕掛けは通じないんじゃないかなー…」

「うん、でも正面からいっても防がれるよね？」

「でも色仕掛けはなー…」

一見したらただの色仕掛けだ、しかし実際は違う。

烏間先生とビッチ先生はなにか話しているのか少し間が空いたあとにビッチ先生が一步、また一步と距離を積める。それと共に烏間先生の警戒が強まるのが見て取れる。

しかし次の瞬間、予想もしないことが起きた。ビッチ先生が腕を素早く引いたかと思うと脱いだ上着が烏間先生が背中になっている木を支点として動いて烏間先生の脚を払ったのだ。

そう、これがビッチ先生の見えない努力である”ワイヤートラップ”だ。誰にも知られなくなかったのかE組校舎から離れたところで行っていたので当然烏間先生も知らない。

罠にはまり対応が遅れた烏間先生を追撃するビッチ先生。ついにはマウントポジションを取った。

「すげー！」

「うおお！烏間先生の上を取った！」

「やるじゃんビッチ先生！」

格闘技の試合の観戦客のように一挙一動盛り上がるE組の面々。ビッチ先生もプロだが烏間先生もプロ。そんな2人の模擬暗殺が面白くない訳がない。

マウントポジションを取ったビッチ先生は流れるようにナイフで烏間先生に止めを刺しに行く——決まったか!?! いや烏間先生が防いでいる。しかし膠着状態が数秒続いたかと思うとビッチ先生のナイフが烏間先生に当たる。

「当たった！」

「すげえ！」

「ビッチ先生残留決定だ！」

俺はビッチ先生が言っていた言葉を思い出していた。

”苦手を克服しなさいって言ってる私がこの暗殺を投げ出すわけにはいかないわ”

本校舎の先生達は授業の中で出来ないなら出来るまでやれとか言うだけで具体的なことは何も示してくれなかった。だがビッチ先生は違った。決定打に欠けていると言っていた自分の暗殺の欠点を補うように技術を磨いていた。今回のワイヤートラップについては俺しか知らなかったことだが、これからクラスのみんなもビッチ先生の苦手なものでも一途に挑んで克服していく姿を目にするだろう。

それを見て挑戦をすることを学べば俺達に今まで以上の向上心が生まれ、暗殺のみならず勉強のレベルも上がっていくと思った。

卑猥で高慢。けれど真っ直ぐ。ビッチ先生は俺達E組の自慢の英語教師だ。

*

〈放課後〉

「俺の攻撃を防ぐことが出来てきたな。やはり筋が良い」

「防ぐだけだったら確かに大丈夫になってきました。でも反撃したら鳥間先生に防がれたあとに必ずカウンターを食らっちゃうのでそこが駄目ですね」

「ふっ。俺の攻撃を防ぐなんて並みの一般人ならできない、君は誇つていい。…そうだな、俺がアドバイスするしたら攻撃と防御は表裏一体だ。2つに分けて考えないことだ」

「攻撃は最大の防御ってことですか？」

「考えとしては間違っていないが少しニュアンスが違うな。確かに攻撃をしている間は相手が防御してくるから同時に防御をしていることにもなる。でもそこでカウンターを合わせられたら？防御を頭に入れていないと対応できず不意の一撃を食らうことになる。心がそのどちらかにとらわれれば負ける。…ある古人の言葉を借りるなら”水になれ”、だな」

…どういうことだ？

「すみません、よくわかりません。なんとなく言いたいことはわかるんですけど…」

「言葉全てを言うならば…『心を空っぽにして、形も捨てて水のようになれ。水をコップに注げば水はコップとなるし、水をティーポットに注げば水はティーポットになる。水は流れることも出来るし、激しく打つことも出来る。だから友よ、水になるんだ』そうブルース・リーは言葉を残したそうだな。つまり形にこだわることなく流れに身を任せるようにするべきってことだ。例えば見るといふ行為。見るともなく全体を見る、それが見るといふことだ。南雲君、わかったか？」

「個にとらわれず臨機応変に対応するっていうことで大丈夫ですか？」

「ああ、その認識で概ね間違っていない。ここらで一度休憩にするか」

放課後の烏間先生との防御術の訓練は始めは稽古のようにやっていたが、俺のレベルが上がって来たからか最近は模擬戦闘というか組手のような形となっている。おかげで授業では烏間先生にナイフを多く当てる事が出来ているが、プロと一般人のレベルの差、もつと言うならば生きている世界の違いを実感する。

休憩中に色々と考えていると今日のヒーローがやって来た。

「あら、今日もカラスマと訓練してるのね」

「ハイ、自分から頼んだことですので」

「ふーん、カラスマも教えるの満更でもない感じだしアンタ達って人としての相性がいいのかもね」

「そうなんですかね」

「きつとそうよ。それとアンタって基本的に敬語よね、みんなといるときは普通にいじってくるのに二人きりとか個人的なことになると一歩引いて接してるような。なんで？」

「なんでって…うーん…。たぶん尊敬の気持ちがあるからだと思います。みんなといるときは一緒にばかやったりビッチ先生のこといじったりできるけど、個人での関わりとなるとその人の意思というか立場を尊重しないとって考えるからだと思います」

「ふーん、やっぱり日本人ね。何となくわかるけど外国人としてはわからないわ」

「文化の違いってやつですかね。それよりビッチ先生今日は大活躍でしたね」

「そうなのよ！本当はワイヤーアクションはあのタコに決めたかったけどアイツにはバレてたし、カラスマに決まってよかったわ。…それより、私の見えない努力についてクラスのみんなに言ってくれた？」

「えっ」

「えって…アンタまさか…」

「ビッチ先生が言うなって言ってたので誰にも言っていないですよ」
「なんで言わないのよ！アンタが言うことでクラスのみんなから尊敬されると思ってたのに！」

ええー…そんな理不尽な。

「だって言うなって…」

「それは言葉の綾よ！女心が全くわかってないわね。これだから無自覚でモテる男はダメね」

女心関係なくね？と思ったがここでツツコミを入れたらもつと言われると思ったのであえて何も言わなかった。

「全く、次は頼むわよ。…あ、あとこれ。アンタ訓練で疲れてるでしょ？これ差し入れよ」

そう言ってビッチ先生は水筒を差し出してきた。飲み物もなくなったのでありがたくもらう。

「ビッチ先生ありがとうございます。やっぱさすが、デキる女性は違いますね」

「でしよでしょ！」

ビッチ先生は腰に手を当て誇らしげにしている。そんなビッチ先生を見ながら俺は水筒の蓋兼コップに中身を注いで飲む。…なんか苦い。

「このお茶なんか苦いんですけど体にいいやつですか？」

「あーそれは麦茶に筋弛緩…あっ!!」

時すでに遅し。プロ御用達の筋弛緩剤だからか即効性が違う。

「ちよつと南雲！アンタ気合いで動きなさい！カラスマが来たら何を言われるか…」

「俺ならもう既にいるぞ」

ビッチ先生の背後には烏間先生が立っていた。このあとビッチ先生には当然雷が落ち俺はVIP待遇で家へと送り届けられた。

第15話 転校生の時間 その2

「みなさんおはようございます」

「「おはようございます」」

「烏間先生から転校生が来ると聞いてますね？」

「あーうん、まあぶっちゃけ殺し屋だろうね」

始業の挨拶を終え前の席の前原と殺せんせーは話している。昨日の夜に烏間先生から律の時と同様に転校生が来るというメールが届いた。

「律さんの時は少し甘く見て痛い目を見ましたからね、先生も今回は油断しませんよ。いずれにせよ、みなさんに仲間が増えるのは嬉しいことです。生憎天气が悪いのが残念ですが元気よく来てくれるでしょう」

「そーいや律、何か聞いてないの？同じ転校生暗殺者として」

「はい、少しだけ。初期命令では私と『彼』の同時投入の予定でした。私が遠距離攻撃で彼が肉迫攻撃、2人で連携して殺せんせーを追いつめると。ですが…2つの理由でその命令はキャンセルされました」

その2つの理由とは、

- ・ 彼側の調整に予定より時間がかかったから
 - ・ 律が彼より暗殺者として圧倒的に劣っていたから
- ということらしい。

殺せんせーの指を飛ばした律がその扱って…一体どんな怪物なんだ。体に七つの傷があるのかそれとも魔界の謎を喰い尽くした魔人か。とにかく只者ではないだろう。

すると勢いよく教室の戸が開かれた。一步一步雪の道を確実に踏みしめるかのように白装束の人が入ってきた。なるほど、これは只者じゃなさそうだ。

男は手を顔の高さくらいまでスツと上げるとポンつと鳩を出してきた。前列にいる生徒たちでなく全員がビクツと体を震わせた。ちなみに俺は後ろの席にいるからかイマイチよく見えなかったので驚かずに済んだ。

「ごめんごめん、驚かせたね。転校生は私じゃないよ。私は保護者：まあ白いし、シロ」とでも呼んでくれ」

「…いきなり白装束で来て手品やったらビビるよね」

あれ？殺せんせーはどこだ？クラス中が同じことを考えたのかみんなキョロキョロとしていると誰かがあつと言つて天井を見る。

「「ビビってんじゃねえよ殺せんせー!!」」

「しかも奥の手の液化化まで使ってるよ…」

「…いやあ、律さんがおつかない話をするもので」

噂に踊らされてるし…、気持ちはわからないでもないけども。ちなみ液化化とは奥田が作った薬を飲むことによつて変身することができる殺せんせーの奥の手である。例えるならばチョツパーのランブルボールだな。

「はじめましてシロさん、それで肝心の転校生は？」

「はじめまして殺せんせー。ちよつと性格とかが色々と特殊な子でね、私が直接紹介しようと思ひまして」

なんか掴み所がない人だなあという印象を受ける。話し方もキラもなんとなく作つたような感じがするし。

「しかしみんな良い子そうだなあ、これならあの子も馴染みやすそうだ。席はあそこでいいんですよね、殺せんせー」

「ええ、そうですか」

席の位置は俺とカルマの間で奥田の後ろだ。男子と女子の人数の関係で女子列となる。

「おーイトナ！入つておいで！」

さてどんなやつなんだろうか。律が彼と言つていたから男は確定だ。E組にはまだかまだかという空気が流れている。

するとゴシヤツという鈍い音と共に俺達と同じくらいの年齢の男子が入ってきた。

（（ドアから入れ!!!））

「俺は…勝つた。この教室のカベよりも強いことが証明された。それだけでいい…」

いや、よくない。せつかく雨漏りがしなくなったのに壁を壊すなん

て。鵜飼さんの仕事が増えちゃうだろうが。それにしても――

(（なんかまた面倒臭いの来やがった！）)

殺せんせーもリアクションに困ってるし。幼稚園児が書くような中途半端な顔になっちゃってるよ。

「堀部イトナだ、名前で呼んであげてください。それと私は少々過保護でね、しばらくの間彼のことを見守らせてもらいますよ」

…なんかきな臭いな。白装束の保護者に話が読めない転校生、今まで以上にひと波乱ありそうだ。

「ねえイトナ君、ちよつと気になったんだけど。今外から手ぶらで入ってきたよね。外はどしや降りの雨なのになんでイトナ君一滴たりとも濡れてないの？」

カルマがそう尋ねたがたしかにその通りだ、髪はおろか衣服すら濡れていない。イトナはE組全体をキョロキョロと見回したあとカルマに向かって言葉を投げ掛ける。

「……お前はたぶんこのクラスで2番目に強い。けど安心しろ。俺より弱いから…俺はお前を殺さない。…そして1番強いのはお前だ」

イトナは俺を指差して言う。人を指差すなよ、人差し指合わせてEに仕立てあげるぞ。

「だがお前でも俺より弱い。…俺が殺したいと思うのは俺より強いかもしれない奴だけ。この教室では殺せんせー、あんただけだ」

「強い弱いとはケンカの事ですか、イトナ君？力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ。それに強さとは肉体に対してのみ使う言葉ではありません」

「立てるさ、だって俺たち『血を分けた兄弟』なんだから」

「「兄弟イ!?!」」

このきょうだいとは顔や姿をうつし、化粧をするための鏡を取り付けた台でもなく橋の両端で橋をささえる部分のことでもない。同じ親の持つとかそっち方面の兄弟のことだろう。当然だが。

「負けた方が死亡な、兄さん。小細工は要らない、お前を殺して俺の強さを証明する。放課後にこの教室で勝負だ。――それと、今日があんたの最後の授業だ。全員にお別れでも言っておけ」

そう言うといトナは教室を出ていった。ここぞとばかりにみんなが質問攻めをする。

「兄弟ってどういうこと!?!」

「人とタコで全然違うけど!?!」

「ちゃんと説明して!」

「いやいやいや! 全く心当たりありません! 先生生まれも育ちもひとりっ子ですから! 両親に弟が欲しいってねだったら家庭内が気まずくなりました!」

そもそも親とかいるのか? ツツコミどころ満載な解答が返ってきたな。

*

昼休みとなり俺達は昼食を取っているが俺達の視線はイトナと殺せんせーに釘付けとなっている。

「すごい勢いで甘いモン食ってんな、甘党なところは殺せんせーとおんなじだ」

「それと表情が読みづらいところとか、顔色は変わるのかな?」

「兄弟疑惑で皆やたら私と彼を比較しているのでムズムズしますねえ。気分直しに今日買ったグラビアでも見ますか、これぞ大人の嗜み」

そう言って殺せんせーはグラビアもといマガジンを取り出す。巻頭のグラビアを大人の嗜みって言われてもなあ。チラとイトナを見るとイトナも殺せんせーと同じ雑誌を机上に広げていた。

「こ、これは俄然信憑性が増してきたぞ」

「そうか? 岡島」

「そうさ! 今週の巻頭グラビアの後田寒子は巨乳なんだ! 巨乳好きは皆兄弟だ!!」

そう言って岡島は2人と同じ雑誌を鞆からの取り出す。その理屈でいうと3人兄弟ということになるがいいのか?

「もし本当に兄弟だとして…何で殺せんせーはわかってないの?」

「うーん、きつとこうよ」

そう言うのと不破は得意気に語り始める。

「舞台は戦争がやまない国よ、そしてついには二人の兄弟が住む村にまで敵軍が侵略してくるの！敵軍の猛攻から兄の殺せんせーは弟を庇って生き別れるのよ！——で、成長した2人は兄弟と気付かず宿命の戦いを始めるのよ」

「うん：で、どうして弟だけ人間なの？」

「それはまあ：突然変異？」

「肝心なところが説明できてないよ！もっとプロットをよく練って不破さん！」

茅野と不破の会話を聞きながらイトナを見ると目が合った。なんかこのままなのも気まずいので話しかけることにした。

「甘いもの好きなのようだけどどれが一番好きなんだ？」

「：ルマンドだな。味だけでなく食感もいい」

「たしかにうまいよな。あつブラックサンダーもらっていい？」

「：構わない」

「てんきゅ」

兄弟のことを語るなら過去について触れざるを得ないので、殺せんせーの隠している過去がわかるかもしれない。イトナは一体俺達に何を見せてくれるのだろうか。

放課後となり俺達はシロに指示され机を教室の真ん中を囲うように移動させた。まるで机のリングだ、試合のような暗殺なのか？

「ただの暗殺は飽きてるでしょ、殺せんせー。リングの外に足が着いたらその場で死刑ってルールはどうかかな？」

シロの提案に友人がぼやく。

「負けたって誰が守るんだよそんなルール」

「いや：そうでもないぞ」

「ああ。皆の前で決めたルールを破れば”先生として”の信用が落ち

る。殺せんせーには意外と効くんだ、あの手の縛り」

「…いいでしょう、受けましょう。ただしイトナ君、観客に危害を与えた場合も負けですよ」

「では合図で始めようか」

そう言うとシロが腕をあげる。

「暗殺…：開始！」

腕を陸上の審判のように振り落とすと同時に暗殺が始まる。

”一閃”という言葉が相応しいかもしれない。開始と同時に殺せんせーの腕は切り落とされた。しかし俺達の目は切り落とされた腕ではなくただ一ヶ所に釘付けになった。

「触手!?!」

イトナの頭もとい髪から触手が生えていて生きてるかのよう操っている。それと同時に納得もする、全部触手で弾けるから雨の中手ぶらでも濡れなかったのかと。

「……………どこだ」

空気が変わった。どす黒い殺気を感じ思わず身震いした。

「どこでそれを手に入れたッ!その触手を!!」

殺気の正体は殺せんせーだった、顔色はどす黒く色を変えて激しく怒っていることが一目瞭然だ。

「君に言う義理はないね殺せんせー、だがこれで納得したろう。両親も育ちも違う、だが…この子と君は兄弟だ」

「…………どうやらあなたにも話を聞かなきゃいけないようだ」

「聞けないよ、死ぬからね」

そう言った白は腕をスツとあげ服の隙間から眩しい光を照射した。

「この圧力光線を至近距離で照射すると君の細胞はダイラタント挙動を起こし、一瞬全身が硬直する。全部知っているんだよ、君の弱点は全部ね」

「死ね、兄さん」

イトナはシロの光線の照射に合わせて触手で激しく攻撃を仕掛ける。見た感じ殺せんせーはそれを防げてはいない。…まさか殺ったのか? いや、上だ。脱皮をして逃げたのか。

「脱皮か…：そういうえばそんな手もあったっけか。でもね殺せんせーその脱皮にも弱点があるのを知っているよ」

シロはそのまま弱点を続々と解説していく。

・脱皮直後は見た目よりもエネルギーを消費するのでスピードが低下する

・再生直後も同様に体力を使うのでスピードが低下する

・特殊な光線を浴びると硬直する

それだけではない、俺達が見つけた”テンパるのが意外と早い”などの弱点も今の暗殺では露骨に現れている。

「お、おい…：これマジで殺っちゃうんじゃないか」

誰かが言った、だがそんな言葉すら頭には入ってこなかった。たった今殺せんせーの触手が2本切り落とされたのだ。

「フッフッフ。これで脚も再生しなくてはならないね、なお一層体力が落ちて殺りやすくなる」

「…安心した。兄さん、俺はお前より強い」

殺せんせーが追い詰められ地球が救えるというところまできている。…なのに、どうして俺は悔しく感じているんだろう。後出しジャンケンのように次々出てきた殺せんせーの弱点、本当ならそれは俺達がこの教室で見つけたかった。悔しい理由はそれだけではない。烏間先生やビッチ先生、そして何より殺せんせーから教わった技術で俺達”E組”の手で殺したかった。

俺と同じ思いなのか隣に立っている渚は対殺せんせーナイフを強く握りしめている。

「脚の再生も終わったようだね、次のラツシユに耐えられるかな？」

「…ここまで追い込まれたのは初めてです。一見愚直な試合形式の暗殺ですが、実に周到に計算されている。あなた達に聞きたい事は多いですが…：まずは試合に勝たねば喋りそうにないですね」

「まるで負けダコの遠吠えだね」

「…シロさん、この暗殺方法を計画したのはあなたでしょうが…：ひとつ計算に入れ忘れてる事があります」

「無いね。殺れ、イトナ」

イトナが触手で再度攻撃を仕掛ける。がしかし、イトナの触手は溶けていた。なぜ？

「おやおや、落とし物を踏んづけてしまったようですねえ」

手に持ったハンカチをヒラヒラとさせながら殺せんせーは笑っている。落とし物つて一体——床に…対殺せんせーナイフ!?

「えっ、あー」

横では渚がナイフが手元から無くなっているのに気付いたのか声をあげている。渚のナイフをイトナの攻撃に合わせて床に置いたのか、いつの間に。

殺せんせーは脱皮した皮で動揺して動けなくなってるイトナを包み込むとそのまま外へと投げ捨てた。外のどしゃ降りの雨が止んでいたことに気が付かないくらい二人の戦いに意識を奪われていたことに気付く。

「同じ触手なら対先生ナイフが効くのも同じ。そして触手を失うと動揺するのも同じですね。今、君の足はリングの外に着いている。先生の勝ちですねえ、ルールに照らせば君は死刑。もう二度と先生を殺れませんねえ」

殺せんせーの言葉に気を悪くしたのかイトナの顔が大きく歪む。

「生き返りたいならこのクラスで皆と一緒に学びなさい。性能計算ではそう簡単に計れないもの、それは経験の差です。君より少しだけ長く生き、少しだけ知識が多い。先生が先生になったのはね、それを君達に伝えたいからです。この教室で先生の経験を盗まなければ…君は私に勝てませんよ」

「勝てない？弱い？俺が…？」

言葉に気を悪くしたのではない。あれは自分の弱さに腹を立てている感じだ。

顔だけでなく体全体で怒りを表しているイトナ、触手もどす黒く変色している。外からひとつ飛びで教室に舞い戻ったイトナはそのまま殺せんせーに襲いかかる。飛びかかろうとした瞬間イトナの首もとに何か撃ち込まれたのが見えた。

「すいませんね、殺せんせー。どうもこの子は…まだ登校できる精神

状態じゃなかったようだ。転校初日で何ですが…しばらく休学させてもらいます」

そう言ったシロはイトナを担いで教室を出ていこうとする。

「待ちなさい！担任としてその生徒は放っておけません、一度E組に入ったからには卒業するまで面倒を見ます。それにシロさん、あなたにも聞きたいことがやまほどある」

「嫌だね、帰るよ。力づくで止めてみるかい？」

尚も教室から出ていこうとするのをやめないシロに殺せんせーは肩を掴もうとして制止を促すが触手が溶け叶わないこととなった。

「対先生繊維、君は私に触手一本触れられない。責任持つて私が家庭教師を務めた上ですぐに復学させるよ、殺せんせー」

そう言つてシロは去つていった。取り残された俺達は誰が言うでもなく机を片し始めたら。

*

俺達が机を片付けている最中殺せんせーはずつと両手で顔を覆つて何か小声で言っている。俺は気にせず片付けを続行していたがついに片岡が殺せんせーに話しかける。

「何してんの、殺せんせー」

「シリアスな展開に加担したのが恥ずかしいのです、先生どっちかと言つとギャグキャラなのに」

「『自覚あるんだ！』」

「カツコ良く怒つてたね〜』どこでそれを手に入れたツ！その触手を！』」

「いやああ言わないで狭間さん！改めて自分で聞くと逃げ出したい！」

「…ねえ、殺せんせー。説明してよ」

「あの2人との関係を」

「先生の正体いつも適当にはぐらかされてたけど…」

「あんなの見たら聞かずにいられないぜ」

「私達生徒には先生の事よく知る権利があるはずでしょ」

今までそれとなく聞いても煙に巻かれてたが今回のような事があつては誤魔化せない。殺せんせーも観念したのか立ち上がって重々しく口を開く。

「……仕方ない、真実を話さなくてはなりませんねえ。実は、先生………人工的に造り出された生物なんです!」

……うん、で?

「だよね、で?」

「にゅやツ反応薄っ!これ結構衝撃告白じゃないですか!?!」

「:つつてもなあ、自然界にマツハ20のタコとかいないしな」

「宇宙人でもないならそんな位しか考えられないし」

「それであのイトナ君の弟だと言つてたから:」

「先生の後に造られたと想像がつく」

「知りたいのはその先だよ、殺せんせー。どうしてさつき怒つたの?イトナ君の触手を見て。:殺せんせーはこういう理由で生まれてきて何を思つてE組に来たの?」

渚が全員の気持ちを代弁してくれた。クラスに沈黙が訪れる。

「………残念ですが、今それを話したところで無意味です。先生が地球を爆破すれば皆さんが何を知らうが全て塵になりますからねえ」
そうだった、殺せんせーは先生である前に超破壊生物だった。平和で淡々と濃密に流れていく日々の中で俺達が忘れていた事実を殺せんせーは突きつけてきた。

「逆にもし君達が地球を救えば、君達はいくらでも真実を知る機会を得る。もうわかるでしょう?知りたいなら行動はひとつ、殺してみなさい。暗殺者と暗殺対象、それが先生と君達を結びつけた絆のほすです。先生の中の大事な答えを探すなら:君達は暗殺で聞くしかないのです。質問がなければ今日はここまで、また明日」

そう言つて殺せんせーは教室を出ていく、質問は当然なかった。俺達はここでは殺し屋だ、銃とナイフで答えを探し殺せんせーに問わなければならぬ。

「:なあみんな、俺が考えたことを聞いてくれないか?」

機員が口を開く。俺達が無言で頷くと話を続ける。

「今日までさ、”誰かが殺せんせーを殺すだろ”って他人事だったけど今回の事を見て思ったんだ。”他の誰でもない俺達の手で殺したい”って。俺達が何のために頑張ってたのか、殺せんせーが一体何者なのか、限られた時間で殺れる限り殺りたい。殺せんせーを自分達の手で殺して、自分達の手で答えを見つけないか？」

俺達は再度無言で頷く。

「だからさ、烏間先生にもっと暗殺の技術を教えてもらえるようにお願いしにいかないか？」

「…いいと思う」

最初に口を開いたのは片岡だった。

「私は機員君の意見に賛成だけど、みんなはどう？」

「賛成〜！」

「俺も」

「私も」

次々に同調の声が上がる。機員はありがとうと言いだす言葉を続ける。

「実はさ、南雲が放課後に烏間先生に教えてもらってたの見てたんだ。だからさ、南雲を始めとして一人一人が意識を変えていけば暗殺の成功率はもっと高くなると思うんだ。だから、今からお願ひしに行こう」

俺はそれは違うと言いたかった。俺が烏間先生から教えを受けていた理由は怪我をしたくなかったからだ。でもここで俺がそれを言ってしまうと水を差すことに繋がると思ったので俺も士気を上げるために機員の話に言葉を繋げる。

「言うなって言われてたから言わなかったけど、俺も言うよ。放課後に俺より頑張ってた人がいたんだ、ビッチ先生だよ。みんなもこの間のワイヤートラップ見たろ？あれってビッチ先生が放課後ずっと練習していたんだ」

「へえ〜」

ビッチ先生これでいいですか？と心の中で呟く。

「よし、じゃあ烏間先生が外にいるし、みんな行こう！」

磯貝を先頭に皆が烏間先生の下へと向かう。

桐ヶ丘中学校3年E組は暗殺教室。雨も止んで、始業のベルは明日も鳴る。殺せんせーを暗殺すること、それこそが全ての答えと繋がっている気がした。

第16話 球技大会の時間 その1

昼休みを終えて今はHRの時間、議題はもちろんあの学校行事についてだ。

「クラス対抗球技大会…ですか、健康な心身をスポーツで養うというのは大いに結構！…ただ、トーナメント表にE組が無いのはどうしてですか？」

「E組は本戦にはエントリーされないんだ、1チーム余るっていう素敵な理由で」

「その代わり…大会の締めエキシビションに出なきゃならない。要するに見せ物さ、全校生徒が見てる前で男子は野球部の、女子は女子バスケ部の選抜メンバーとやらされんだ」

「なるほど、いつものやつですか」

「そう、でも心配しないで殺せんせー。暗殺で基礎体力ついてるし良い試合して全校生徒を盛り下げよ！ねー皆！」

「おー！」

「お任せを片岡さん、ゴール率100%のボール射出器を製作しました」

「あ…いや、律はコートに出るにはちよーつと四角いかな…」

女子は片岡を中心にまとまっている、ていうか律は大概なんでもありだな。一方で男子は――

「俺等晒し者とか勘弁だわ、お前らで適当にやっついてくれ」

「寺坂！…つたく」

寺坂、村松、吉田の3人はそう言う教室を出ていった。一応今はHRの時間なんだがな。

「野球となりや頼れんのは杉野だけど、なんか勝つ秘策ねーの？」

「…無理だよ。最低でも3年間野球してきたあいつらと…ほとんどが野球未経験の俺等、勝つどころか勝負にならねー。それにかなり強いんだ、うちの野球部。とくに今の主将の進藤なんて豪速球で高校からも注目されている。…俺からエースの座を奪った奴なだけだよ。勉強もスポーツも一流とか不公平だよな、人間って」

おい、そこで俺をチラ見するな友人。別に一流ではない。

「——だけどき、殺せんせー。勝ちたいんだ、善戦じゃなくて勝ちたい。好きな野球で負けたくない、野球部追い出されてE組に来てむしろその思いが強くなった。：皆とチームを組んで勝ちたい！：まあでも、やっぱ無理かな？」

友人の言葉を俺達は真面目な顔で聞いていた。容姿とかそういうのじゃなくてカッコいいなと思った。自分の好きなものを堂々と主張して対抗心を燃やす、カッコ悪いわけがない。

「ヌルフッフフ、先生一度スポ根モノの熱血コーチをやりたかったんです」

そう言った殺せんせーは野球のユニフォームならずグローブにボールにバット、果てには野球盤まで手にしていた。用意良すぎだろ。

「最近の君達は目的意識をハッキリと口にするようになりました。殺りたい、勝ちたいとどんな困難な目標に対しても揺るがずに。そんな心意気に応えて殺監督が勝てる作戦とトレーニングを授けましょう！」

2本目の刃を示せと言われた時から俺達は目的意識がハッキリするようになった。最近で言うところの殺せんせーを自分達の手で殺したいとかだ。殺せんせーが俺達の変化、言うなれば成長をちゃんと見てくれているんだと思っただら口許が緩んだので下を向いて顔を隠す。

「それとバスケを教えるのは殺せんせーではありません。もっと適任の方がいます」

——数日後。

球技大会が近付いてきたということで午後の授業を球技大会の練習に当てることになったので俺達は校庭に出てそれぞれ練習を始めるところだ。

「あーそれではまずは皆の実力を確認しまーす」

「純一、あんたやる気あんの？」

そう言ったのは莉桜だ。やる気？あるにはあるがちよつと気分が乗らない。

「純君ってバスケット上手かったんだね」

「野球もうまいって知らなかったし」

「ねー！」

ほら、これですよ。女子特有の脱線。これがあるからイマイチ気分が乗らないのだ。

「練習始める前になんで上手いのか教えてよ」

「賛成！教えて教えて！」

「私もちよつと気になるな」

神崎まで……まあ、それでスムーズに事が進むのなら。

「野球は父さんの影響でやって小学生の頃は野球チームに所属していた。バスケットは……亡くなった母さんがやっていたって聞いたから頼み込んでやらしてもらった。まあチームに所属してたんじゃなくて父さんの知り合いに教えてもらって1 on 1とかやってたから上手くなった。草バスケットチームなのに所属しているって言えばいいのかな？これでOK？」

やはり亡くなった母さんの影響とか言ったからみんなは聞いちゃいけないことだったのかとかあたふたと気にしている様子だ。

「いや、みんな別に気にしなくて良いから。普通に接してもらうのが一番助かる。それじゃあみんなの実力確認するから、順番にドリブルからのレイアップをしてくれ」

殺せんせーの手によってグラウンドの隅にはバスケットコート片面が作られていたのでそこで練習をしている。本当に準備が良いこと。

全員の実力を確認した後には俺は比較的レベルが高かったメンバーをピックアップする。

「片岡、岡野、原は確定だな。あとは練習の途中経過を見て決めてくよ」

片岡はやはりというか普通に上手い。それこそバスケット部にも見劣りしないくらい。岡野は素早さだ。ドリブルもそこそこ出来ている

のでもう少し磨けばボール運び役をこなせる。原は安定感がある。動きに危なげがないのとゴール下での威圧感がありそうなのでパワーフォワード、センター辺りに収まるだろう。

「球技大会まで時間がないから作戦と役割をハッキリさせる。ボールを運ぶ役は基本的に片岡と岡野だ、それ以外は細かくパスで繋げていく。今から基礎をやっても間に合うか微妙だ。だからパスでシュートへと繋げていくスタイルで。ディフェンスは…いや、ここで説明やめとく。一度に言ってもわかんないと思うし、何か質問はあるか？」

みんな口をポカーンと開けている。

「本当にバスケ経験者なんだね」

「なんかビツクリ」

「あーうん。そうだね、じゃあ練習するぞ」

――
↳ 凛香視点

「片岡！無理な体勢でシュートにいくな！今は原がフリーになってたからパスフェイクを入れてからのシュート、それとそのままパスをするのもありだ！片岡がブロックでもされたら相手に一気に勢い持つてかれるからな」

「わかったよ！」

「厳しいよー南雲君が鬼だよー」

「茅野さん…見て、ほら」

「神崎さんどうしたの…あつ」

「でもその思い切りの良さはチームに得点以上の良い影響があるから大事にしろよ」

「……」

「…爽やかなアメと鞭だ」

「…さすが気になる男子No. 1だね」

「No. 1タイね、磯貝君忘れたらダメよ」

「みんな、一度休憩にするぞ。磯貝がみんなの分の買い出し行ってく

れたらしいから全員分の飲み物あるぞ」

「本当だ、気を遣える男子二人組は違うね」

「日向じゃなくてちゃんと日陰で休めよ、俺はちよつと男子の方にも顔を出してくるから」

そう言つて純一は男子の方へと行つた。素直にすごいなと思う、男子として野球に出場するだけじゃなくて女子バスケの方まで指導するなんて。本当に同じ中学生なのかなつて思う。

「凜香ちゃん純君見てどうしたの〜」

「別に、すごいなつて思つただけだよ」

「たしかに純君すごいよね、何でもできるつて感じで」

「でも陰ではかなり努力してるんだよね、みんな気付いてないだけで」

「私達ももつと頑張らなきゃね！」

「…そうだね」

「二人ともなに話してるの？」

「あつ桃花ちゃん、純君が頑張つてるから私達も頑張らなきゃつて話してたんだ」

「南雲君本当にすごいよね」

「最近鳥間先生より気になつてるんだ〜」

「えっ」

「?、どうしたの2人とも?」

「いや、あまりにも陽菜ちゃんが唐突に衝撃の告白をしたからビックリしちゃつて」

「矢田に同じく」

「鳥間先生よりつてのは言いすぎたかな、でも気になつてるのは本当だよ」

倉橋が眩しかった。自分の気持ちに素直で明るくて、自分にはないものを多く持つている彼女を羨ましく思った。今も胸がズキンと痛んだ。私はこの気持ちがあんなのか気付いている、ただ認めたくないだけで――

「ただいまー、それじゃあ練習再開するぞー!…あれ凜香、髪二つ結びに変えたのか?なんか新鮮だな」

純一の言葉で胸の痛みが消えた。…このタイミングでそんなこと言われたら認めるしかない。私の、この気持ちの名前を。

*

「たぶんこれで教えるのは最後にして、あとは片岡を中心に頑張ってもらおうことになると思う」

「そんなこと言って面倒臭いだけじゃないの？」

「バツカ莉桜そんなわけないだろ。男子も危ういんだ。たまには様子見に来るけどさ」

「そっか、それなら仕方ないね。それで教える内容は？」

「お待ちかねデیفエンスについてだ。デیفエンスはマンツーマンデیفエンスって呼ばれる形で行こうと思う。マンツーマンっていうのは”1対1”ってことだ、文字通り常に特定の相手選手に対して1対1でくっついてデیفエンスをするんだ。ここまではOK？」

「うん」

「よし、それじゃあ説明を続けるぞ。ただスクリーンと呼ばれるプレーがあつてそう言った場合はマークしてる相手選手を切り替える必要がある。これをスイッチって言うんだが…まあ見てもらった方が早いから実践する。片岡と岡野ちよつと前に出てくれ」

2人に軽く説明してペアを作る。

「俺と岡野がオフエンスで片岡がデیفエンスだ。片岡が岡野をマークしてるっていう設定で見ててくれ」

そう言つて実践してみせる。

岡野がボールを持って攻めようとするが片岡がデیفエンスしているので一筋縄にはいかない。そこで俺は片岡の右側へと事前に移動し岡野に分かりやすく親指で進行方向を示しドリブルを促す。岡野は自分から見て左側へとドリブル、片岡は岡野の進行方向、即ち右側へと移動するが俺がいるためそちらには行けない。岡野は楽々とレイアップを決めてゴール。今の一連の流れを見た女子はおーと声をあげている。

「今のがスクリーンと呼ばれるプレーだ。相手の行動を制限できて味方へのアシストになる。さてここでディフェンスの立場になって考えてみてくれ。俺が片岡を止めたために岡野はフリーになった、では岡野に対して誰がディフェンスに行くべきか。莉桜、わかるか？」

「純」をマークしていた人が岡野ちゃんにつけばいいんじゃない？」

「そう、正解だ。なんでかわからない人はいるか？いたらもつと詳しく説明するけど」

「……」

「よし、大丈夫そうだから続けるぞ。本来マークしていた相手が変わるからスイッチするんだが入れ替わるのが遅れたら相手に攻撃のチャンスを与えることになる。だからディフェンスが入れ替わるときは気づいたほうが先に”スイッチ”と言うんだ。そうすればすぐにマークを切り替えることができる。スクリーンについては俺がやったみたいなき感じで空気を読んでやってくれ、以上だが何か質問は？」

「はい」

「なんだ、凜香？」

「最後のスクリーンの説明雑じゃない？」

「良い質問ですねえ、それについてはちゃんと理由がある。スクリーンは簡単に言うると合図を送る相手と意思疎通が出来なきや意味がないんだ。俺は今回分かりやすく親指で進行方向を示したけど慣れてきたり上手くなってくると視線を交わすだけで出来るようになる。ただ俺はこのスクリーンについてさして心配などはしていない。E組女子は仲良いからきつとすぐに連携が取れると思ってるからな」

「池上彰似てないよ、でもスクリーンについてはわかった。ありがとう」

うるさいよ、似てないのは知ってるよ。しかもどつちかというと殺せんせー意識したんだし、それでも似てないけど。

「他には何かあるか？」

「基本的にシユートはレイアップだけのほうがいい？」

「うーん…それについては難しいところだな。シユートは素人として

は確率が低いからあまり撃つべきではないってのが当然の考えなんだけど相手もレイアップしかないと気付いたら中を固めてくるのが目に見えてるからな。だからリバウンドを取れそうな味方が、例えば片岡、原がゴール下においてリバウンドが大丈夫そうだったら狙っても良い気がするけどな。そこは広く視野を持つてくれって感じだな、ちよつと投げやりだけど。今ので気付いたけどリバウンド教えてなかったから最後にリバウンドを教えるから野球の方に行くよ」

「シユートについてはわかったわ、ありがとう」

「いいんだ、片岡。曖昧なことがあつたらすぐに聞いてくれ。他に質問がないようだったら最後にリバウンドを説明するぞ」

——リバウンドを教え終わった俺は片岡に全てを託し男子野球の方へと舞い戻った。すると岡島から手厚い歓迎を受けた。

「やいやい、女子といちゃついていたチャラ男め。それ相応の事は覚悟してもらおうぞ！」

「別にいちゃついてねーし。なんだ岡島、羨ましかったのか？」

「当然だ！」

うわ、言い切りやがった。

「レベルの高いE組の面々と汗のかいた体で密着し体を動かしていたんだぞー男として羨ましくないわけないだろうー！」

「お、おう…」

「おうじゃない！お前にはいくつか質問がある！」

「あ、ああ…」

勢いに気圧されて返事が母音だけで構成されてしまっている。

「誰が一番良い匂いがしたんだ！」

「…は？」

「だから、誰が一番良い匂いしたんだ？」

「あのな、岡島。そんなこと気にならないくらい俺は集中していたし女子の方もそれに応えてくれるように頑張っていたんだぞ？そんな

こと考えるわけないだろ。それにそんなことを考える心配がないから俺が教える立場に任命されたんだと思うぞ」

「そ、そうなのか。俺の心が汚れていたのか…」

「心が汚れてる訳じゃない、むしろ健全だ。俺がおかしいのかもしれない。ただ女子の前では自重しろよ、頼むから」

「ああ、気を付けるよ」

ちなみに俺はおかしくない。教えてる最中には普通に良い匂いだなどか思ってたし、ポーカーフエイスを装っていただけだ。

「…で、さつき様子見に来たときも思ったけど打撃練習だけでみんな疲れすぎじゃね？なんか元気ねーし」

「南雲君は殺捕手の恐ろしさを知らないからだよ…」

「どういうこと？」

渚から一通り説明を受ける。

俺達男子陣はバッティングに焦点を当てて練習を行っているのだがピッチャーだけでなく内野、外野の全てを殺せんせーが分身でこなしているのだという。

殺投手は300kmの球を投げ、殺内野手は分身による鉄壁の守備を敷き、そしてみんなの疲れた最大の要因である殺捕手はささやき戦術で集中を乱すとのことだ。なんでもそのささやき戦術の内容がエグいらしく、三村は校舎裏でノリノリのエアギターをやっていたということをバラされたそうだ。

「ほら、南雲君。早く打席に立ってください。打ってないのは君だけですよ！」

「…じゃあ行ってくるよ、渚」

「御愁傷様」

おい、男子共。ともあれ俺はヘルメットを被りバッティング手袋を身に付けて打席に入る。

「さすが、経験者は打席に入る前から雰囲気違いますねえ」

「俺は何を言われても動揺しませんよ」

「ほう、そうですかそうですか」

殺捕手はマスク越しでもわかるくらいにしましま模様になってい

てオマケににやけているのがわかる。

1球目、殺投手の300kmの球を見送る。：速っ！それしか言う言葉が見つからない。

「ところで南雲君」

殺捕手は打席に入っている俺にだけ聞こえる声の大ききでささやいてきた。

「速水さんにあげた絵葉書、もったいいのがあったのではないかと思うんですが…どう思います?」

ジーザス、なんで知ってる?

「絵葉書をあげたとき速水さん、顔には出していなかったですが嬉しそうでしたねえ」

……ヤバい、集中できたもんじゃない。

「ところで現時点で一番気になってるのは誰ですか?」

「殺せんせー、許してください」

「ヌルッフ、ここまですべておきしよう。それと三振ですよ?」

「えっ」

集中を乱され過ぎて三振したことにすら気付かなかったらしい。

うーん、情けない。

「みんな、殺せんせーに比べれば本校舎のやつらなんて大したことないぞー!」

「純一、カッコつけてるところ悪いが三振したよな?」

「打撃練習だけで疲れすぎとか言ってごめん。拷問も兼ねられていたんだな」

「これ球技大会の練習だよね!?!」

渚のツツコミを聞いたことにより平常心が戻ってきた。すげーな渚のツツコミ、効能ありすぎだろ。

「マツハ野球にも慣れたところで対戦相手の研究です。竹林君お願いします」

「ハイ、まず投手の進藤ですがMAX140kmで持ち球はストレートとカーブのみで練習試合は9割方ストレートでした」

「確かにあの豪速球なら中学だったらストレート一本で勝てちゃうよ

な」

「ええ、その通りです杉野君。逆に言えばストリートさえ見極めればこっちのもんです。というわけでここからは先生が進藤君と同じにとびきり遅く投げましょう。さつきまでの先生の球を見た後では彼の球など止まって見える。従ってバントだけなら充分なレベルで修得できます」

確かに木村を始めとして走れるやつが多いE組ならセーフティーバントをすることで出塁可能だな。ただ点数をとるとなると俺と友人が頑張らなきゃだな。

「杉野君と南雲君はバントだけでなくバッティングもです。君達が打たなければ試合は勝てません、経験者の二人が要だということを意識してください」

「ハイ！」

「それでは始めましょう。皆さんも最低限の動きを覚えるために守備位置についてください」

*

疲れた体を引きずるように俺と杉野は下校している。要と言われではその期待に応えるしかない、同じことを思った俺達は他のメンバーより遅くまで残って練習していたのだ。そして殺せんせーから与えられた宿題を二人でメモを取りながら考えている。

「ピッチャーは友人としてキャッチャーはどうする？」

「キャッチャーは個人的に渚がいい。ずっと俺のキャッチボールに付き合ってくれたし」

「そうか、それなら渚で決定だな」

「ファーストは磯貝か前原はどうだ？」

「確かに問題はないがその二人は動けるからセカンドかサードに置きたい」

「言われるとそうだな…他に捕球が上手いつて言ったら誰だ？」

「菅谷が結構よかったぞ。打球とかの予測ができてたから少しやれば

それなりになると思う」

「じゃあファーストは菅谷、セカンドに前原、サードに磯貝。ショートはもちろん——」

「俺だな」

「肩いいし経験者だしな。ていうかメインポジションか」

「外野はセンターは確定だな」

「ああ、当然木村だよな。一番俊足だし」

「あとはレフトにカルマ、ライトは三村ってのが俺の考えなんだけど」

「それでいいと思う」

「最後に打順だな」

「木村の1番と純一の4番は確定だな」

「木村はいいとして4番は俺じゃない、友人だろ」

「純一のほうが打つし適任だろ」

「今回の球技大会の主役は友人、お前だろ？友人の教室での一言があつて一念発起って感じの雰囲気になったんだからさ。それに——」

「それに？」

「それに、神崎に良いところ見せるチャンスだろ」

「純一：俺、お前と友達でよかったよ！」

「あーハイハイ。じゃあ打順決めてくぞー」

二人であーでもないこーでもない議論を重ねてついに決定した、それがこちら。

1：中：木村

2：捕：渚

3：三：磯貝

4：投：杉野

5：遊：南雲

6：二：前原

7：右：三村

8：一：菅谷

9：左：カルマ

補足としてカルマを9番に置いた理由について説明する。打順を

見ての通り上位に上手いメンバーで固めているのだが9番にいるカルマが下手かと聞かれればそうではない。運動神経が良いカルマは野球においても何でもそつなくこなすことができたので上位打線に良い流れで繋げる役目を果たす9番に置いたというわけだ。

球技大会について大方決まってきたよ、いよいよ本番が近付いてきたなど感じる。本校舎のやつらの度肝を絶対に抜いてやると決意しながら俺達は帰り道を後にした。

第17話 球技大会の時間 その2

『それでは最後に…E組対野球部選抜のエキジビションマッチを行います』

球技大会当日。俺達は本校舎のグラウンドに集まっている。野球部のやつらは見た目から既に気合い十分、試合着を着てこの試合に臨む。

「やー惜しかった!」

「勝てる感じはあつたし次リベンジだね」

「ごめんね、私が皆の足引っ張っちゃった」

「そんな事ないって茅野さん」

「女バスのぷるんぷるん揺れる胸元を見たら怒りと殺意で目の前が真っ赤に染まって…」

「茅野っちのその巨乳に対する憎悪はなんなの!?!」

女子たちがこちらに合流したがどうやら負けてしまったらしい。

茅野の件については触れないでおく。

「おっお疲れ」

「ごめんね、南雲君。せっかく教えてもらったのに」

「気にしないで大丈夫だ。それに皆やりきった顔してるしな」

「うん。その代わり男子には勝ってもらわないとね!」

「純一、しっかり頼むよ」

「凜香に言われなくても頑張るよ。ところで髪結ぶの気に入ったの?」

「ビッチ先生と被ってるの嫌だったし、良い機会だからこれからはこうする」

「ふーん、似合ってるしいいんじゃないか。じゃあ俺はアップしてくるよ」
「ありがと、頑張って」

股関節を中心に体を伸ばす。運動前は柔軟などの静的ストレッチよりも軽いダッシュなどの動的ストレッチが良いらしいので動的ストレッチを多めにやる。俺は両方やらないと気が済まないので両方やるようにしているけど。

「純一！そろそろ整列だつてよ」

友人の声掛けに了解と返し整列する。礼が終わったあと進藤が友人に対して話を始める。

「学力と体力を兼ね備えたエリートだけが選ばれた者として人の上に立てる。それが文武両道だ、杉野。お前はどちらも無かった選ばれざる者だ。俺は選ばれざる者がグラウンドにいるのを許さない。そいつら共々二度と表を歩けない試合にしてやるよ」

そう言つて進藤はマウンドに登る。

「よかつたのか友人、何も言い返さなくて」

「いいんだ、試合で返すから」

「その意気だ！じゃあミーティングしようぜ」

「よしみんな、遠近法で殺せんせーがボールに紛れてるから顔色をよく見てくれ。それがサインになつてるから。バントとか最低限のものみんな覚えているな？」

友人の言葉にみんなはおう！と返す。すると殺せんせーが青緑↓紫↓黄土色と変化した。：何それ？いきなり知らないサイン出さないでくれない？渚はノートをペラペラと捲つて解説する。

「えーと…」殺す気で勝て”つてさ」

「よつしや殺るか！」

「おう!!」

「男子頑張つて〜！」

殺せんせーのサインと女子の応援で男子の気合いは十分。あとは試合に勝つだけだ。

こちらの先頭バッターは木村だ。

「やだやだ、どアウェイで学校のスター相手に先頭打者かよ」

「木村、全員の度肝抜いてやれよ」

「まあ、頑張るよ」

『E組の攻撃、一番センター木村君。早く打席へ』

生徒会の荒木が実況アウンスしてる。投球練習終わってないのに打席行くアホいないだろと心の中でツツコミを入れる。

初球の殺せんせーのサインは”待て”。まずは様子見といったと

ころだろうな。進藤が投げた初球はズドンという音と共にミットに収まる。

『これはすごい！ピッチャー進藤君、さすがの剛球！対するE組の木村は棒立ち！バットくらい振らないとカツコ悪いぞ〜！』

実況がやかましいがE組いじりはいつものことなのと殺せんせーのささやき戦術のおかげで俺達は誰一人として気にしていない。荒木が俺達の秘密でも暴露しない限りは問題ない。

おそらく殺せんせーからサインが出たのか木村は帽子のつばを触る。サインを確認したということの合図だ。

『さあ進藤君2球目：投げたッ！』

コオン、という金属バットの濁いた音と共に木村は快足を飛ばす。殺せんせーのサインはセーフティーバントだ。

『あーっとバントだ！良い所に転がしたぞ！内野誰が捕るか一瞬迷った！……セーフ！これは意外、E組がノーアウト一塁だ！』

よしよし、練習通りだ。俺達の作戦はバントで出塁からの友人か俺の一発だからな。

『2番キャッチャー潮田君——ピッチャー投げて：今度は三塁線に強いバント！前に出てきたサードが脇を抜かれた』

強豪っていう割にバント処理が甘く、いかに進藤のピッチングに頼って勝ってきたのかが感じられる。単純に俺達のバントが上手いっていうのもあるが。

続く磯貝もバントを決めノーアウト満塁のチャンスが出来る。

『満塁だーっ！調子でも悪いのでしょうか進藤君！そしてE組の4番の杉野君が打席に入る！』

進藤が俺達の攻めに動揺しているのが目に見える。友人が打席に入ったときはポーカーフェイスとは無縁なくらいに顔が歪む。

友人は最初からバントの構えをする、だがバントをするわけではない。バスター打法というやつだ。しかし野球部連中は三連続に完璧にバントを決められているのでヒittingではなくバントの可能性も捨てきれない。ノーアウトということもあり攻め側の選択肢は多くなる。その事から外野は定位置よりやや前、内野は中間守備とも

言えなくもない微妙な守備位置となっている。

『進藤君、やや間を開けて第1球……打ったアー！深々と外野を抜ける！』

よし！思わず拳を握る。

『走者一掃のスリーベース！E組3点先制ー！』

戻ってきた渚達とハイタッチをしていると打順が次の前原が鼓舞してきた。

「純ー！お前も続けよ」

「打つに決まってるだろ」

「みんな見てるからな！」

「打てなかつたら逆立ちで甲子園まで行ってやるよ」

俺の一言を不破だけはわかつたようで満足げな顔で頷いている。

『5番ショート南雲君、野球部はここから立て直したいものだ！』

果たして立て直せるか？タイム取って無理矢理にでも空気を変えないと流れが戻らないぞ。

俺は配球に目星をつけて打席に臨んでいるがその必要はない。今の動揺しているバッテリならまず間違いなく初球はストリートだ。その初球を俺は仕留める。殺せんせーも初球からいけというサインを送ってきた。

『進藤君1球目…投げたッ！』

きた。予想通り。

バットを振ると金属バット特有の打撃音がグラウンドに響く。

『快音響くッ！——これは！レフト、センター共に見送っている！』

俺は一塁に向かって走るが確信があつたので全力では走らない。感触は間違いない。

『入ったッー！！まさかのE組から左中間へのホームランです！』

E組ベンチが沸いている。それもそうだ、ホームランは打撃の花形だ。盛り上がらないわけがない。その様子を横目に俺はダイヤモンドを一周する。ホームでは友人が待っていた。

「相変わらずすごい打球だな」

「打つのが俺の仕事だからな。頼むぞ、ピッチャー」

「おう！」

「純一！お前本当に最高だな！」

「今のはカッコよかったよ！」

「南雲君カッコいい！」

「みんなありがとう。でもほら、次は前原だからって…ん？」

E組ベンチは盛り上がりつつあるが相手ベンチが何かあったのかこちらとは違う騒がしさがある。——理事長だ。

「審判タイムを」

理事長は空気をリセットするべくタイムを取り野球部面々をベンチへと集合させる。

『……今入った情報によりますと野球部顧問の寺井先生は試合前から重病で…野球部員も先生が心配で野球どころじゃなかったとのこと！それを見かねた理事長先生が急遽指揮を執られるそうです！』

「こういう時さっさと出れるのカッコいいな」

「野球部も今から頑張れ！」

「まだ始まったばかりだぞ！」

空気が変わったな。少なくともE組の押せ押せムードではなくなった。ていうか重病って、あの監督ベンチでふんぞり返ってただろ。

「一回表からラスボスカ」

「たぶん、いや絶対にこちらとしてはよろしくないよね」

「なーに大丈夫だ。友人がいる」

「俺をドラゴンボールみたいに言うなよ！」

『——いくつか指示を出して理事長先生が下がりました！さあここからはどのよう…こっこれは何だ!? 守備を全員内野に集めてきた！こんな極端な前進守備は見たことない！』

「バントしかないって見抜かれてるな」

「とは言ってもダメだろあんなに至近距離で！目に入ってバッターが集中できねえよ！」

「いや、岡島。ルール上ではフェアゾーンならどこ守っても自由なんだ。審判がダメだと判断すれば別だけど…それは期待できない」

友人がみんなに対して説明を入れる。そうこう言っていると勢いが戻っている進藤が投球を開始する。

『おおっとー内野のプレッシャーにビビったか6番前原！真上に打ち上げてワンナウト！』

しゃーない前原。続く三村が困った顔で打席に向かいつつ殺せんせーを見る。俺達もどのようなサインを出すのか気になったため同じく殺せんせーを見る。

((……………打つ手なしかよ!!))

殺せんせーは顔色を変えるでもなく両手で顔をおおってしまった。

『——あつという間に3アウトチェンジ！ピッチャー進藤君完全に復調です！』

「よしっみんな切り替えていくぞ！」

「そうだな、5点もリードしてるしな。気楽に行こーぜ」

「さすが経験者2人は行動が速いね」

一回表が終了し俺達は守りに入る。

昔の友人しか知らない野球部面々をテンポよく三振を取り既に2アウトだ。

「さすがだな、杉野。このまま勝てるんじゃないか？」

「磯貝、次からクリーンナップだから打球が来る可能性が高いぞ」

「わ、わかった。少し後ろに下がるよ」

「それに理事長が進藤を改造してるからな。どーなることやら」

俺の言葉に磯貝は苦笑いで返す。

『バッター2ストライクまで追い込まれてしまった！このまま三者凡退なのか!?!』

三球目、変化球に対応してきたバッターのバットから快音が響く。

『打球は三遊間！これは抜けたでしょう!』

そうはいくか。

俺は素早く動き、片膝を地面につきつつ打球を逆シングル気味に捌きファーストに送球する。結果は——

『ショート投げて…………アウトだーっ！またしてもE組からスーパープレイが飛び出しました!』

三遊間に打球がいつてアウトにするのはショートをやっているとき
の醍醐味だからなと小さくガッツポーズを作る。

「南雲！ナイスプレー！」

「ありがとう、磯貝ももう少して捕れそうだったな」

「純君カツコいい〜！」

「さつきからおいしいところ持ってってねーか!？」

そんなことはないと思っただが実際否めなかったので否定の言葉を
口にはしなかった。

「カルマ、なんとか頼むぞ」

「なんか殺監督に頼まれたしね、まあ見ててよ」

『二回の表！相変わらず鉄壁のバントシフト!』

…あれ？カルマのやつなかなか打席に入らないな。あれが殺せん
せーの指示か？

「…：ねーえ、これズルくない理事長センセー。こんだけ邪魔な位置
で守ってるのにさ、審判の先生何にも注意しないの一般生徒おまえらもおかし
いと思わないの？…：あーそつかあ！お前等バカだから守備位置とか
理解してないんだね」

「小さいことでガタガタ言うなE組が！」

「たかだかエキジビションで守備にクレームつけてんじゃねーよ！」

「文句あるならバットで結果出してみろや！」

この抗議には何か意味でもあるのか？単純に揺さぶりなんだろう
か。

2回表のE組の攻撃は9、1、2番の打順だったがなす術なく凡退
した。

そして2回裏、野球部の攻撃は4番進藤の三塁打を始めとして集中
打を許し3点を返され5対3と射程圏内まで追い付かれる。

『3回表、E組の攻撃は3番の磯貝君からだ！ここで追加点がなかつ
たらサヨナラ負けだぞ〜』

実況の荒木が煽ってくる、しかし言っていることは的確だ。実際理
事長が監督になってからというもの流れは完璧に野球部にいつて
しまっている。何より打球を前に飛ばされてしまうと守備が完璧で

はないE組では対処しきれないので次の回からは打者が一巡している
ので友人の球に慣れられていた場合は危険なのだ。

『4番の杉野君も三振！絶好調の進藤君！このまま三者連続三振か
!?!』

「悪い、純一」

「気にすんな。それと友人、お前が進藤より優れているのを証明して
やるよ」

「えっ、どうやって…」

「まあ、罫に出れないとダメなんだけどな」

そう笑って俺は打席に向かう。今野球部バッテリーを相手にする
にはこちらにも配球を予測するなど本気でいかなければならない。少
なくともストレートだけということはある得ない。ストレートを前
の打席で完璧に捕らえているので初球はまずはカーブで様子見だろ
う。

『進藤君、第1球投げて……おおっと！ここでカーブだ！獅子は兎を
捕らえるにも全力を尽くすとは言いますがまさに今の進藤君は獅子
！一切手を抜きません！これが強者の風格だ！』

幸い低めに外れたのでカウント0―1。もう1球様子見もあり得
るので次もタイミングを取りつつ見送るのがセオリーだな。

『進藤君、第2球……カーブです！しかも今度はストライク！すぐに
コース修正が出来るのか!?!』

カウント1―1。カーブを2球連続…次はストレート？球速差で
振り遅れる可能性があるから始動を速くしないとな。

「進藤君、第3球……またしてもカーブです！バッターはファールに
するのが精一杯のようです！」

カウント2―1。予想と違ったから後ろに体重残してカットした
だけなんだが。まあ、それは置いて3球連続か——理事長のおか
げで次の球がわかったよ。あの人の洗脳を受けている今の進藤なら
これで間違いない。

「進藤君、第4球投げて……バッター打ったーっ！外野の間、左中間を
抜ける！」

やはり読み通りストレートだ。たぶん理事長なら色々小細工をしてくる俺達E組を容易く振り伏せる圧倒的強者を見せたがるだろう。ならば決め球は見る者誰もが、それこそ素人の観衆でもすごいとわかる進藤のストレート以外ありえない。

「打ったバッターは2塁へ！たまたまヤマが当たったのでしようか!？」

塁に出ることも出来たし、友人のほうが優れてる部分を見せてやるか。それこそ観衆はわからないだろうな。

『続くバッターを押さえて、ここで切ることが出来るでしようか!?!いや、出来る！それこそが我が誇る野球部です！そして進藤君第1きゅ：いや、なんと！既にランナー走っています！しかし投球モーションを始めてしまつては牽制することはできない！ランナー暴走でしようか!?!たまたま牽制されなかったものの死に行つたようなものです!』

サードベースに滑らずとも楽々セーフ。俺は進藤がセットポジションに入り始動をする前からスタートを切れた。なぜか、答えは単純。進藤はランナーがいても投げるペースは一定。あとはその秒数を数えて走るだけ。俺が昔友人に指摘したものと同じだ。友人は球速こそ遅いもののフィールディングや牽制など投球以外の所作についてはかなり研究しているので進藤よりも遥かに優れている。だが経験者はそういった部分がわからない。いや、わかるはずがない。なぜならそんなところ見ないし気付かないからだ。

俺はベンチの友人にガッツポーズを送る。それを見た友人もガッツポーズで応える。

『少し想定外のこともあったものの危なげなく三振を取りました！いよいよ最後野球部の攻撃を残すのみ!』

さてあとは守るのみだ。

「友人、気楽に投げろよ」

「サンキューな純一。みんなも頼んだぞ!」

『野球部の攻撃は1番の橋本君からだ!——あーつとバント!?!今度はE組が地獄を見る番だ!同じ小技なら野球部のほうが遥か上!E組

の守備では守りきれません！当然楽々セーフです！」

——確かに野球部が素人相手にバントは見てる生徒も納得しないだろうが俺達が先にやったからな。大義名分を与えてしまったようなもんだ。

『あつという間にノーアウト満塁！一回表のE組と全く同じ！最大の違いはここで迎えるバッターは我が校が誇るスーパースター進藤君だ！もとは同じ野球部で競いあった2人！しかし杉野君はE組に落ち部活も追放、ここでもやはり負けてしまうのか!?!』

流れ最悪だな。だがここで押さえる以外に勝機はない。

「磯貝、監督から指令く。南雲はサードが空くから持ち前の守備範囲でカバーしてくれってさ」

「…任された。」

そう言つてカルマと磯貝はホームへと歩いていく。これは——

『この前進守備には見覚えがあるぞ!?!』

「明らかにバッターの集中を乱す位置で守ってるけど、さつきそつちがやったときは審判は何も言わなかった。文句ないよね理事長センチー?」

なるほど。さつきクレームをつけたのは同じことをやり返しても文句を言わせないための布石か。妨害行為と見なすかは審判の判断次第だがさつきのクレームを却下した以上は黙認するしかない。

「ご自由に。選ばれた者は守備位置ぐらいで心を乱さない」

「へーえ、言ったね。じゃ遠慮なく」

『ち、近い!!前進どころかゼロ距離守備！振れば確実にバットが当たる位置で守っています!』

こんな守備だったら集中も冷めちゃうな。理事長の洗脳も意味がなくなってしまう。

「フフ、くだらないハッターだ。構わず振りなさい進藤君。骨を砕いても打撃妨害を取られるのはE組の方だ」

進藤の顔に動揺が見て取れる。

友人が投げバッターの進藤がバットを振るが2人はほとんど動かずかわす。それもそのはず、2人の度胸と動体視力はE組でもトップ

クラスだ。

「だめだよそんな遅いスイングじゃ。次はさ、殺す気で振ってごらん」
カルマの煽りを受けた進藤の顔が大きく歪む。この時点で理事長の戦略に体がついていけなくなった。同様にランナーも観客も野球の形をした異常な光景に呑まれていた。

「う、うわああっ…」

『腰が引けたスイングだあ！』

カスった当たりをカルマが取り素早く渚にトスするとホームベースを踏む。

『三塁ランナーアウト！』

ホームを踏んだ渚はサードベースのカバーに入った俺に送球。…
ナイスボールだ。

『二塁ランナーアウト！』

「菅谷っ！」

俺はファーストの菅谷へと送球を送る。結果は――

『バッターアウト！ト、トリプルプレー！ゲームセットです！なんとE組が勝ってしまった！』

「やったー！」

「男子すごい！」

ベンチの女子たちがハイタッチをするなど盛り上がっている。一方男子はというと勝ったという達成感より試合が終わったという安心感が強い様子だ。

本校舎の面々はつまらないなどの文句を口にしながらゼロゼロと帰っていく。だが知るよしもないだろう。試合の裏で行われていた2人の先生の数々の戦略のぶつかり合いを。

「進藤、ゴメンな。ハチャメチャな野球やっちゃまって。…でもわかってるよ。野球選手としてはお前は俺より全然強いし、これで勝ったとも思っていないよ」

「だったら…なんでここまでして勝ちに来た。結果を出して俺より強いと言いたかったんじゃないのか」

「んー…E組の皆すごかったろ？渚なんて俺の変化球取れるし純一は

めっちゃ打つし。でも勝って結果を出さなきゃ上手くそれが伝わらない。：要はさ、ちよつと自慢したかったんだ。昔の仲間、今の俺の仲間のことを」

友人が照れながら笑うと進藤は虚をつかれたかのように目を見開き、その後口許に笑みを浮かべてゆつくりと口を開く。

「覚えとけよ杉野。次やるときは高校だ」

「おうよー」

「それと南雲。お前にもいつかりベンジするからな」

「：俺はもう野球やってないっての。：進藤1つ聞くが、お前は自分が一番だと思ってただろ？」

「：ああ、その自信があった。だが負けては意味がないな」

「いいんだよ進藤、自分が一番だと思うその考えは間違ってる。たった一回負けたくらいでそのエゴを曲げるな。俺は友人のような協調性のあるピッチャーもいいと思うが、自分を一番だと信じマウンドを譲る気持ちがないエゴなピッチャーも好きだぞ」

「：結局何が言いたいんだ」

「思い上がりは若者の特権だ。だから自信持ってやっていこうぜ」

「お前に言われるまでもなくそうするよ」

「そっか。じゃ、次対戦するまでに同じテンポで投げる癖直しとけよ」

そう言葉を残すと俺と友人はその場を後にする。

進藤は中学だけでなく高校でも活躍し、もしかしたらプロ入りするかもしれない。そんな選手がE組に負けたというだけで腐るかもしれないと考えるとエールを送らずにはいられなかった。まあ、あの様子だったら友人の言葉だけで十分だった気がするけど。俺は進藤という一人の選手に対して敬意を払いたかった。あの豪速球は才能にあぐらをかいてるだけでは身に付かない、それこそ血の滲むような努力があつてこそだ。

「：高校で勝負って言ってたけど、それまで地球あるかな？」

「地球がなくならないように俺等が頑張ってるんだろ？」

「そうだった。球技大会に夢中で忘れてたよ」

「しつかりしろよ友人。今日のヒーローだろ？」

「ああ……なあ、ちよつと気付いたこと言っていいいか？」

「どうした」

「純一は俺が神崎さんに活躍を見せれるようになってことで4番を譲ってくれたけどさ、純一の活躍で俺の印象薄れてないか？」

「さあ？でも友人の評価が下がったってことはないだろ？」

「うーん……なんか釈然としないが……ま、勝つたしいいか」

友人と歩いていると校舎を彩る木々の木漏れ日の密度が濃くなっていることに気付く。本格的な夏の始まり、7月が来ることを木々が教えてくれたのかなと感じた。

7月

第18話 才能の時間

↳ 烏間視点

― 暗殺訓練の中間報告 ―

四ヶ月目に入るにあたり：「可能性」がありそうな生徒が増えてきた。

磯貝悠馬と前原陽斗。運動神経が良く仲も良い2人のコンビネーション。2人がかりならナイフを当てられるケースが増えてきた。

赤羽業。一見のらりくらりとしているが：その目には強い悪戯心が宿っている。どこかで俺に決定的な一撃を加え赤っ恥をかかそうなどと考えているがこちらも警戒しているので一撃を与えるには至っていない。

南雲純一。ナイフ術以外にも俺から直接防御術を学んでいるので近接では頭一つ二つ飛び抜けている。一撃が鋭くクリーンヒットを唯一受けた生徒でもある。

女子は、体操部出身で意表を突いた動きが出来る岡野ひなたと男子並みのリーチと運動量を持つ片岡メグ。このあたりがアタッカーとして非常に優秀だ。

：しかし、俺が今まで感じたことのない気配を時折覗かせるものがある。潮田渚、小柄ゆえに多少はすばしこいがそれ以外に特筆するべき身体能力は無い温和な生徒だ。彼の気配は俺の勘違いだろうか？

全体を見れば生徒達の暗殺能力は格段に向上している。奴を殺す可能性が4月と比べて大きく上がっていることが感じられる。

「それまで！今日の体育は終了！」

「せんせー！放課後街で皆でお茶してこーよ！」

「…ああ、誘いは嬉しいがこの後は防衛省からの連絡待ちでな」

プロとして一線を引いて接するというのが俺のやり方だ。今教えているのは中学生だが仕事として暗殺を依頼した以上はプロ同士だ、

馴れ合いはしない。

——それに俺の任務の成果を上の上の連中は快く思っていない。暗殺の糸口をつかめていない今の状況を打破するために人員を増やすとのことだが…。

頭に思考が渦巻いていると校舎の戸が勢い良く開かれる。

「よ、鳥間！」

……鷹岡！

俺が荷物を持って生徒達の方へと歩いていく鷹岡を呆然と見ていると園川が遠慮しがちに上からの通達を報告する。

「…鳥間さん、本部長から通達です。あなたには外部からの暗殺者の手引きに専念してほしいと。生徒の訓練は…今後全て鷹岡さんが行うそうです。同じ防衛省の者としては生徒達が心配です。あの人は極めて危険な異常者ですから」

*

く南雲視点く

「誰だあの人？」

「体でけえく」

「やつ！俺の名前は鷹岡明！今日から鳥間を補佐してここで働く！よろしくなE組の皆…ま、なんだ。ケーキとか飲みもんだ。皆で遠慮なく食ってくれ！」

鳥間先生の補佐ってことは防衛省の人か。E組の面々は運ばれてきたお菓子をキラキラした目で確認している。ていうかいいのか？こんなに大量のデザートを食べちゃって。有名ブランドばかりだから高いだろうに。

「おっとモノで釣ってるなんて思わないでくれよ、お前等と早く仲良くなりたいたいんだ。それには…皆で囲んで飯食うのが一番だろ！」

そう言っ鷹岡さんはエクレアを口にする。一人が口にしたことによつてE組の皆は一斉に食べ始める、俺もとりあえずプリンから食

べる。

「でも…えーと鷹岡先生。よくこんな甘い物ブランド知ってますね」

「ま、ぶっちゃけラブなんだ。砂糖がよ」

「でかい図体してかわいいな」

甘い物に惹かれたのか殺せんせーがヨダレを垂らしながらケーキを見ている。それを見た鷹岡先生が殺せんせーにケーキを差し出す。

「殺せんせーも食べ食べ！まあいずれ殺すけどな！はっはっは」

「同僚なのに烏間先生とずいぶん違うすね。なんか近所の父ちゃんみたいですよ」

「ははは、いいじゃねーか父ちゃん！同じ教室にいるからには俺達家族みたいなもんだろ？よしこころで俺がなんで来たのか説明するぞ！皆はそのまま食べながら聞いてくれ」

——要約すると、烏間先生の負担を減らすために来たらしい。

「つまり明日から体育の授業は鷹岡先生が？」

「ああ！あいつには事務作業に専念してもらおう。だが大丈夫！さつきも言ったが俺達は家族だ！父親の俺を全部信じて任せてくれ！」

自己紹介も終わり鷹岡先生は戻っていく。

俺たちも次の授業があるため校舎への戻る。その道で誰かが呟く。

「鷹岡先生どう思う？」

「えー私は烏間先生の方がいいな」

真っ先に反対意見を出したのは倉橋だ。確かに倉橋は烏間先生のことカッコいいとかよしよししてほしいとか言ってたからな。俺も普段お世話になっていいるということもあり烏間先生のほうがいいなと思っっている。

「でもよ、実際のところ烏間先生何考えてるかわかんないところあるよな。いつも厳しい顔してるし、飯とか軽い遊びも誘えばたまに付き合ってくれる程度で。その点あの鷹岡先生って根っからフレンドリーじゃん。案外ずつと楽しい訓練かもよ」

言いたいことはわかる。でも訓練に楽しさは必要か？そりや楽しいに越したことはないけどそれは違う気がする。出来ることが増えて楽しいとか真新しい楽しさとかだったらわかるんだけど。

ともあれ明日からの体育の授業は鷹岡先生なのでそこでも俺は出来る限りをやるだけだ。

「…よーみんな集まったな！では今日から新しい体育を始めよう！」

翌日の体育の授業は昨日の説明通り鷹岡先生となっていた。

「ちよつと厳しくなると思うが…終わったらまたウマイもん食わしてやるからな！」

「そんなこと言って自分が食いたいただけじゃないの？」

「まーな、おかげ様でこの横幅だ」

鷹岡先生のジョークにクスクスと笑いがこぼれる。鳥間先生のと きにはなかった雰囲気だ。

「あと気合入れのかけ声も決めようぜ！俺が”1, 2, 3”と言ったらおまえら皆でピース作って”ビクトリー！”だ」

「うわ、パクリだし古いぞそれ」

「やかましい！パクリじゃなくてオマージュだ！…さて！訓練内容の一新に伴ってE組の時間割も変更になった。これを皆に回してくれ」

そう言っただけで新時間割のプリントが渡されたが俺達はそれを見て驚愕した。

「うそ…でしょ？」

「10時間目…」

「夜9時まで…訓練…？」

「ああ…このぐらいは当然さ、理事長にも話して承諾してもらった。

”地球の危機ならしょうがない”と言っただけ。このカリキュラムについてこれればおまえらの能力は飛躍的に上がる。では早速…」

「ちよつ、待ってくれよ！無理だぜこんなの！」

前原が時間割に異議を申し立てる。E組全員が同じ気持ちだ。

「勉強の時間これだけじゃ成績落ちるよ！理事長もわかかって承諾したんだ！遊ぶ時間もねーし…出来るわけねーよこんなの！」

ズンと鈍い音が響いた。鷹岡先生、いや鷹岡が前原に膝蹴りをしたのだ。

『できない』じゃない。『やる』んだよ。言ったら？俺達は”家族”で俺は”父親”だ。世の中に父親の命令を聞かない家族がどこにいる？」

鷹岡が豹変した。いや本性を見せたといった方が正しいかもしれない。こいつは鑄型にいれたような人間だ、心の籠が外れてるんだ。そんな鷹岡を見て俺達は何も言えなかった。すると支配欲に満ちた顔から人好きがする笑顔に変わり鷹岡は言う。

「さあ！まずはスクワット100回×3セットだ。：抜きたいやつは抜けてもいいぞ。その時は俺の権限で新しい生徒を補充する。1人や2人入れ替わってもあのタコは逃げ出すまい。——けどな。俺はそういう事したくないんだ、おまえら大事な家族なんだから。父親として一人でも欠けてほしくない！」

気の弱い生徒は鷹岡の一挙一動にビクツと体を震わしている。気が強いと思っていた凜香でさえも体を震わしていたのでやはり女子なんだなとこの場には相応しくないことを思った。鷹岡は演説をするが如く歩いて俺の隣にいる三村と神崎の肩を組んで言葉を続ける。「家族みんなで地球の危機を救おうぜ！な？お前は父ちゃんについてきてくれるよな？」

「…は、はい、あの…私……——私は嫌です。鳥間先生の授業を希望します」

俯いた顔をあげ強がった笑顔で神崎は言った。——まずい、前原と同じように暴力が飛んでくる。鷹岡が舌舐めずりをしたあと手を振りかぶり神崎の頬を目掛けて平手打ちを仕掛けたので俺は横からその腕を止める。

「…なんだ？お前は？」

「おい、女子に手上げようとするなよ」

「誰かを守るなんて父ちゃんは嬉しいぞ、だがわかっていないようだな、『はい』以外はないんだよ。文句や反抗があるなら拳と拳で語り合おうか？そっちの方が父ちゃんは得意だぞ！」

「やめろ鷹岡！前原君平気か!？」

「へ、へーきつす」

「ちゃんと手加減してるさ鳥間。大事な俺の家族だ、当然だろ」

「いいやあなたの家族じゃない、私の生徒です」

「殺せんせー!」

この騒ぎに鳥間先生と殺せんせーが校舎から駆けつけた。だが解決するとは思えなかった、鷹岡が余裕のある笑みを浮かべていたからだ

「フン、文句があるのかモンスター？体育は教科担任の俺に一任されてるはずだ。そして！今の罰も立派に教育の範囲内だ。短時間でお前を殺す暗殺者を育てるんだぜ？厳しくなるのは常識だろう。それとも何か？多少教育論が違うだけで…お前に危害も加えてない男を攻撃するのか？」

その言葉で殺せんせーと鳥間先生は下がってしまった。確かに間違っていると思うが鷹岡なりの教育論がありそれを頭ごなしに否定するのは筋が通らない。だから俺は考える。まずは鷹岡の授業を実践し終わったあとに『あんたの教育だと技術が身に付かない』と反論しよう。

「1!2!3!4!」

俺達は結局鷹岡の言う通りスクワットを行っている。体力に余裕のある運動系の者は根を上げていないがそれ以外はキツそうにしている。

「じよつ冗談じゃねえ…」

「初回からスクワット300回とか…死んじまうよ…」

「鳥間先生く…」

「おい。鳥間は俺達家族の一員じゃないぞ」

鳥間先生の名前を出した倉橋に鷹岡が詰め寄る。そして指をポキポキと鳴らし威圧したあと拳を固めた。

「おしおきだなあ…父ちゃんだけを頼ろうとしない子は！」
バキツという音が響く。

「純君…」

「南雲…」

俺は倉橋に手をあげようとした鷹岡の腕を止めると同時に思いきり殴ったのだ。

「…またお前か。それに父親に暴力を振るうなんてな…」

「反抗期なもんで」

強がりをお口にしたが内心はまじかよと困惑していた。しこたま力いれて殴ったのに鷹岡は全然効いてなさそうだからだ。

「ひとり欠けることになるなあ…悲しいなあ！」

そう言つて鷹岡は俺へと襲いかかつてくる。俺は烏間先生との訓練を思い出す余裕もなく攻撃を凌ぐ。俺が鷹岡の拳を何発か防ぐと鷹岡は気味の悪い笑みで口を開く。

「へえ…ある程度の戦闘の心得があるようだな。でもまだまだ中学生のガキだ、力もねえし——実践も知らねえ」

鷹岡は一步引いたかと思うと届きもしない距離で脚を蹴りあげる。

——この蹴りは俺を仕留めるためのものじゃなかった、仕留めるための下準備だ。蹴られた校庭の砂が舞って俺の目に入り視界が奪われる。

「じゃあな」

鷹岡の声がやけにハッキリと聞こえた。やられると思った。…だが鷹岡に一撃を入れることができなかつたらしい。

「それ以上…生徒達に手荒くするな。暴れたいなら俺が相手を務めてやる」

砂を払い目を開けると烏間先生が鷹岡の拳を止めていたのだ。

「言つたら烏間？…これは暴力じゃない、教育なんだ。暴力でお前とやり合う気はない。やるならあくまで教師としてだ」

鷹岡は一度俺を睨んだあと胸元から対先生用ナイフを取り出し言葉が続ける。

「おまえらもまだ俺を認めてないだろう、父ちゃんもこのままじゃ不

本意だ。そこでこうしよう！こいつで決めるんだ！」

鷹岡はそう言うのと手に持ったナイフを指し示す。

「烏間。お前が育てたこいつらの中でイチオシの生徒を一人選べ。そいつが俺と戦い一度でもナイフを当てられたら…お前の教育が俺より優れていたと認め俺はここを出て行ってやる。男に二言はない。——ただしもちろん。俺が勝てばその後一切口出しはさせない。そして、使うナイフはこれじゃない」

（（ほ、本物!?!））

「殺す相手が俺なんだ。使う刃物も本物じゃなくちやなあ」

「よせ！彼等は人間を殺す訓練も用意もしていない！本物を持っても体がすくんで刺せやしないぞー！」

「安心しな、寸止めでも当たったことにしてやるよ。俺は素手だしこれ以上無いハンデだろ？さあ烏間！ひとり選べよ！嫌なら無条件で俺に服従だ！生徒を見捨てるか生け贄として差し出すか、どっちもみち酷い教師だなお前は！」

*

↳ 烏間視点

——俺はまだ迷っている。地球を救う暗殺者を育てるには鷹岡のような容赦のない教育こそ必要ではないのか？…この職業についてから迷いだらけだ。仮にも鷹岡は精鋭部隊に属した男。このクラスで一番戦闘能力が高い南雲君でさえ不意打ち以外手が出なかつた。しかし、その中でひとりだけわずかに”可能性”がある生徒を危険にさらしていいものかも迷っている。

「…渚君、やる気はあるか？」

「!?!」

言われた本人は周りの生徒よりも驚いた顔をしている。

「選ばなくてはならないならおそろく君だが返事の前に俺の考え方を聞いてほしい」

話をする前に俺は渚君だけでなく生徒全員の顔が見えるように向

きを直す。

「地球を救う暗殺任務を依頼した側として俺は君達とはプロ同士だと思っている。プロとして君達に払うべき最低限の報酬は当たり前前の中学生生活を保証する事だと思っている。——だから渚君、このナイフを無理に受け取る必要はない。その時は俺が鷹岡に頼んで：“報酬”を維持してもらおうよう努力する」

「…やります」

そう言うと渚君は俺の手からナイフを受け取る。いつもの彼とは違う目だった。周りとの親和を一番に考え思いやりを持った目ではなく、覚悟を決めた、俺が舞台にいるときによく見た死地に赴く兵士の目だった。

「お前の目も曇ったなあ鳥間。よりよつてそんなチビを選ぶとは。まださっきの南雲だかのほうが可能性はあつたぞ？」

「…渚君、鷹岡は素手対ナイフの闘い方も熟知している。全力で振らないとかすりもしないぞ」

「…はい」

「…いいか？ナイフを当てるか寸止めすれば君の勝ち、君を素手で制圧すれば鷹岡の勝ち。それが奴の決めたルールだ。だがこの勝負の君と奴の最大の違いはナイフの有無じゃない。わかるか？」

「…？」

「いいか、鷹岡にとってこの勝負は“戦闘”だ。目的が見せしめだからだ。二度と皆を逆らえなくする為には攻防ともに自分の強さを見せつける必要がある。対して君は“暗殺”だ。強さを示す必要もなくただ一回当てればいい。そこに君の勝機がある。戦闘技術を誇示するためにはばらくは反撃が来ない、つまり最初の数撃が最大のチャンス。君ならそこを突けると思う」

「…わかりました」

「作戦会議は終わったか？もつともそれは意味がないだろうがな」

鷹岡が上着を脱ぐ。その顔からは誰の目からも油断が窺える。

「さあ来い！」

鷹岡が戦闘態勢に入る。しばらくシンとした空気が流れる。

渚君はナイフを何秒か見てから突然柔らかい笑みを浮かべた。そして構えもせずに普通に歩いて近付いた。レッドカーペットを歩くセレブのような派手さもなく、通学路を歩く中学生のように普通。体が密着する距離まで近付いた。

そのまま数秒が経過し突然ナイフを振る。鷹岡はここで気付いたようだ。自分が殺されかけていることに。

自分の死を告げるナイフに鷹岡はギョツとして体勢を崩す。彼は鷹岡の重心が後ろに偏っているのも見逃さなかった。服の裾を引つ張って転ばせたのだ。

そして仕留めに行く。正面からではなく、背後に回って確実に。流れるような一連動作は気付けば鷹岡の首もとにナイフを突きつけていた。

「捕まえた」

——なんて事だ。予想を遥かに上回った！普通の学校生活では絶対に発掘されることのない才能。戦闘の才能でも暴力の才能でもない。暗殺の才能！俺が訓練で感じた寒気は、あれが訓練ではなく本物の暗殺だったとしたら殺されていたからだ。これは咲かせてもいい才能なのか？

普段の彼はとても強くは見えない。だが暗殺者にとつては弱そうなおことはむしろ立派な才能だ。体運びのセンス、思い切りの良さ、殺気を隠す能力、これらは暗殺でしか使えないものだ。だが喜ぶべきことか？E組ではともかく彼の将来にプラスになるのか？

*

〈南雲視点〉

「このガキ…父親も同然の俺に歯向かってまぐれの勝ちがそんなに嬉しいか、もう一回だ！今度は絶対油断しねえ！心も体が全部残らずへし折ってやる！」

「…確かに次やったら絶対に僕が負けます。…でもハツキリしたのは

鷹岡先生、僕らの「担任」は殺せんせーで僕らの「教官」は烏間先生です。これは絶対に譲れません。父親を押し付ける鷹岡先生よりプロに徹する烏間先生の方が僕はあつたかく感じます。本気で僕らを強くしようとしてくれたのは感謝してます、でもごめんなさい。出て行ってください」

渚の言葉に鷹岡は俺が今まで見たことがないくらいの顔になった。憎悪とか人間の黒い部分が極限まで表れてるかのような顔だった。

「黙っ…て聞いてりや、ガキの分際で…大人になんて口を…！」

鷹岡が渚に襲いかかるが烏間先生がそれを一撃で制し言葉を続ける。

「俺の身内が迷惑かけてすまなかった。後の事は心配するな、俺一人で君達の教官を務められるよう上と交渉する。いざとなれば銃で脅してでも許可をもらおうさ」

「交渉の必要はありません。——経営者として様子を見に来てみました。新任の先生の手腕に興味があつたのでね。確かに鷹岡先生の言う通り教育に恐怖は必要です、だが暴力による恐怖は負けた時点で説得力を完全に失う」

突如現れた理事長はA4用紙に手早く何かを書くとそれを倒れている鷹岡の口へと突っ込む。まさか今の一連の出来事を全て見ていたんだらうか？

「解雇通知です。任命権は防衛省にはない、全て私の支配下だということをお忘れなく」

そう言つて理事長は去つていった。

「「よっしやあ！」」

E組全員が喜ぶ。だが俺の胸中には複雑な思ひがあつた。

俺の心に渦巻いたのは熱狂、そして強烈な嫉妬だった。渚が鷹岡に對して行つた暗殺。それは見るものがある種魅了するものだった。人は自分がないものを羨む。俺の場合は——渚の持つ暗殺の才能。

まるで結果がわかりきつてるような暗殺を見せつけられ俺は胸の内に尊敬にも似た畏怖の念すら抱いていることに気づく。そして激

しい嫉妬の裏側に確かな信頼を抱いていることも。

「純君行こ！烏間先生が甘い物奢ってくれるって！」

「あ、ああ。そうだな」

「それと…助けてくれてありがとう！カッコよかったよ！」

「気にすんな。…倉橋、ありがとう。なんか吹っ切れたよ」

「えへへ、じゃあ行こっか！」

倉橋の笑っている顔を見ていると渚に嫉妬している自分が馬鹿らしく思えてきた。俺が動いた結果で倉橋が助かって渚の活躍でE組が鷹岡の支配から逃れられた、それでいいじゃないか。比べる必要なんてない、才能があるうがなからうが俺に出来ることをやるだけだ。配られたカードで勝負するしかない、それがどういう意味であろうと。

第19話 歩く花

家を出るのが少し遅れた俺はいつもより遅めの登校となった。始業のチャイムがなる何分か前に教室へと入ると笑顔の倉橋がこつちに手を振っている。

「純君おはよー!」

「オッス、朝から元気いいな」

「えへへ、最近朝早く起きれるんだ」

「前まで遅かったん?」

「遅くはないけど今より早くはなかったよ」

「ほーん、早起きは三文の徳っていういいんじゃないやね。ちなみに今の価値にしたら三文って90円くらいらしいよ」

「へーやっぱ詳しいね」

「いやテレビでやってたから。チャイム鳴るからそろそろ席つくか」
「うん。じゃあまた後でね」

「純君純君!今度の土曜日って暇?」

なんだろう、鷹岡の一件があつてから倉橋に懐かれてる気がする。

「暇じゃない」

「えーなんか予定あるの?」

「家でゴロゴロする」

「それ予定じゃないよ」

「いや、嘘。図書館行って本借りようと思ってる」

「そうなんだ。よかつたらだけど私も付いていい?」

「いいよ。ていっても本借りるだけだから遊んだりとかしないぞ?」

「いいのいいの!」

「了解。何か借りる本とかあつたら図書館に登録しないと駄目だから一応生徒手帳持ってきた方がいいよ」

「わかった!楽しみにしてるね!」

そう言えば女子と休日に出掛けるのは凜香とペットを見に行つた以来ないなと思つた。スウェットとか適当な服装で行こうと思つていたが女子と出掛けるならそれ相応の服装をしないとまらないなと考へていたら次の授業のチャイムが鳴つたので鞆から教科書を取り出し机に並べた。

*

そして土曜日。待ち合わせは駅に13時。時計に目をやると家を出るには少し早いので適当に漫画を取り出して読むことにした。

久しぶりに読んだのでやっぱり面白いなと感じる。

……ふと時計を見ると夢中になつて読んでいたので13時ギリギリに着くくらいの時間になつていた。遅れる可能性もあるので倉橋に連絡をする。

南雲：悪い少し遅れるかも

倉橋：大丈夫だよ

南雲：急いで行くから

倉橋：事故とか気をつけてね！

事故の心配をしてくれるとか優しいなと思つたが、自転車をかつ飛ばしていくしか約束の時間に間に合わなさそうだったので事故に気を付けつつ急いでいこうと思つた。出掛ける前に本を読んで家を出るのが遅れるのと掃除のときにアルバムを見て片付けが進まないのってなんか似てるなとか考へながら自転車を漕ぐ。俺の自転車の車輪は錆び付いていないので悲鳴はあげていなかった。

「倉橋！待つたか？」

「ううん、あんまり待つてないよ。あとハイ、これ」

倉橋は女子特有の小さめのショルダーバッグから飲み物を出すと俺に差し出してきた。

「飲み物？どうして？」

「急いできたなら疲れるだろうなつて思つたからその自販機で買っておいんだ」

「悪い、いくらだった？」

「いいよいいよ！付いてくって言ったの私だし！」

「うーん…あつ、じゃあ俺もなんか倉橋に買うよ」

「いいの？」

「待たした挙げ句に飲み物を買っておいでもらうって申し訳ないしな。どれがいい？」

「えーと…じゃあこれで！」

そう言つて倉橋が買ったのは桃の天然水だった。チヨイスとかイメージが倉橋っぽいなと感じた。

「桃天ウマイよな」

「おいしいよね！純君つて桃天つて略すんだね」

「俺つていうか南雲家は桃天つて呼んでいるな。他にはアクエリアスをアクエリとかポカリスエットをポカリつて略してる」

「へくそうなんだ！」

「略すといえば関西の人つてマクドナルドのことマクドつて略すらしいけど、朝マックは何て言うんだろうな」

「朝マクドかな？…：…なんか語呂悪いね」

「な？悪いよな。企業側も朝マックつてCMしてるしどうなんだろう。関西人の知り合いいる？」

「いないからわかんない！」

「誰か知ってるやついないかな」

倉橋と話ながら少し離れた図書館まで歩いていると、倉橋が突然あつと声を出して立ち止まった。

「どうした？生徒手帳でも忘れたか？」

「ううん、噂を思い出して」

「噂？」

「うん。そこの花壇の話なんだけど」

そう言つて倉橋はある一軒家の前の歩道の脇にある花壇を指差す。それは市などで管理してるところにでもある植樹帯の花壇だった。

「その花壇がどうかしたのか？」

「えつとね、近くまで行って見たらわかると思うんだけど…：私も話だ

けしか聞いたことないから…」

「?、…うん、普通の花壇だな」

「なんか気づかない?」

「……………一輪だけ珍しいというか他の花とは違う気がする」

「そうなの、その花に関する話なんだけど——」

倉橋の話はこうだった。植樹帯は町内会の方の手によって整備されていて花なども一年草のものが綺麗に並んでいるのだが、その規則的に整備されているものの中になぜか別の花が植えられているらしい。しかも不定期でその花は変わっているとのこと。

「それで花が自分で動いてこの花壇に来ているんじゃないかってことで”歩く花”っていう噂話になってるんだよ」

「歩く花か。この場合ブルーハーツは関係なくて状況を見て名付けられた感じだな」

「ブルーハーツってリンダリンダとか歌っている?」

「そうそう、ちなみに結婚する友達のために作った歌だからラブソングだよ」

「へ〜今日家帰ったら聴いてみるね」

「話を戻すけど…えーと、マリーゴールドはわかるんだけど他は何の花?」

「赤いのがサルビアでピンクのがペチュニアだよ。どれも一年草で花壇に植えられることが多いんだけど…、この花だけはわかんない」

「動物だけじゃなくて植物も詳しいんだな、そういえば学校の花壇の整備のときに率先して動いてたつけ。歩く花についてはこれから図書館行くし図鑑でも広げてみるか」

「そうだね〜。じゃあ一先ず図書館行こっか!」

*

俺と倉橋は10分ほど歩いて図書館に着いた。着くと同時に倉橋がところどころこちらを向く。

「純君は何の本を借りに来たの?」

「読んだことない東野圭吾の本を借りようと思って」

「あつ知ってるよ！ガリレオの作者でしょ？」

「そうそう。文章が淡泊って言われてるけど俺はそれが好きなんだよね」

「へへ。私も何か小説借りようかな」

「おっいいんじゃないやね。内容じゃなくて目を惹いたタイトルで決めるのもいいよ」

「うーん：なんかおすすりめある？」

「どういうジャンルを読みたい？」

「えつとねー読みやすくして恋愛ものかな！」

「それだったら”恋空”か”イニシエーションラブ”だな。映像化もされてるから聞いたことあると思うけど」

「あつ恋空は観たことあるよ！」

「さすが女子。ちなみに俺は薦めておいてなんだけど恋空は読んだことない。イニシエーションラブはある」

「じゃあイニシエーションラブにしようかな」

「図書館にあるかわからないけどね。とりあえず貸出券作るか」

倉橋の貸出券を作り各々借りる本を探す、俺は東野圭吾の変身と秘密を手取る。歩く花を調べるための凶鑑も一緒に取ってテーブルに広げる。索引を見ていると本を借り終わった倉橋も合流する。

「よかった、無事借りれたんだな」

「うん。ありがとね」

「俺はなにもしてないよ。とりあえず花を探そう」

そう言つてページを捲る。

「花、綺麗だね」

「ああ」

捲つてはそんなことを言い合う。するとあるページで手が止まった。

「これじゃない？」

「確かに。見比べてみるか」

俺はあらかじめ撮つておいた画像と凶鑑に載っているものを見比

べる。

「これっぽいな。ダリアっていいのか」

「花言葉は移り気、華麗、優雅だつて」

「妙に目立ってたけどなんか意味あるのかな、目印とか」

「花壇の前の家の人が使う暗号とか？」

「それにしちや回りとかどいよな。近くに花屋あったっけ？普通に植えられていないようなものだからなんか知ってるかも」

「確かすぐ近くにあるよ。行ってみる？」

「ああ。倉橋は時間とか大丈夫か？」

「もちろん！なんかこういうのってわくわくするね！」

「隠されている秘密を探る感じがいいよな。じゃあ行くぞワトソン君」

「？、なーにそれ？」

「シャーロック・ホームズ」

凶鑑を棚へと戻し借りる本をカウンターに持っていく。念のために聞いてみるかと思ひ受付のおばさんに尋ねてみる。

「すみません、図書館とは関係ないんですけど歩く花の噂って知ってますか？」

「歩く花？うーん…聞いたことはあるけど詳細はわからないわ。ごめんなさいね」

「そうですか、いえ大丈夫です。変なこと聞いてすみません」

「あつても花壇を整備しているのは町内会の方々よ。図書館の前のはうちでも水をあげたりしてるけど」

「へく、ちなみに植える花とかって決まってるんですか？」

「ええ、そうよ。役所にまちづくりに関する課があるんだけどそこに申請したら必要な分の種とかがもらえるのよ」

「そうなんですか。仕事色々聞いてすみません」

「いいのよ、そういうのも含めて仕事なんだから。それではまたのご利用をお待ちしております」

気のいい受付のおばさんはやはり仕事のことは忘れていなかったのか形式上の挨拶はしっかりとしていた。

「あのダリアの花はやっぱり町内会とは別なんだね」
「そうらしいな。とりあえず花屋に向かうか」

花屋に到着、ちょうど例の花壇と図書館の中間距離らへんにあった。

「なんか外観がいかにも花屋って感じだな。自宅兼花屋みたいだな」

「そうだね、ドラマとかに出てきそう」

「えーと：見た感じ店員は若い女の人だけか」

「じゃあ入ってみよう」

そう言つて店内に入ると少し小さめの声でいらつしやいませと聞こえる。店内は落ちていた雰囲気の花が所狭しと並べられているのではなくそれぞれが映える置き方をされてるように感じられた。現在俺達と店員さん以外はいなかったので歩く花について聞きやすいなど思った。

「店員さん、すみませんちよつといいですか？」

「は、ハイ、どうされましたか？」

なんとなく引つ込み思案な印象を受ける。目を合わせてると言うより俺の目と目の間を見ている。

「お姉さんは歩く花の噂って知ってますか？」

「歩く花？あつダリアのことですか。噂には聞いたことがありますよ」

「何であそこだけ違う花知ってますか？」

「えつと：ごめんなさい。わからないです」

「そうなんですか？」

答えがわからなかったからか倉橋がしよぼんと小さく返事をする。そんな倉橋を見てお姉さんはあたふたとしながら情報を話す。

「あつても花壇の花のお世話のことは色々聞かれますよ。花屋なので」

「確かに枯れたら大変ですもんね」

「ハイ、この方々はイイ人ばかりですよ。ボランテアで水をあげるだけじゃなくて元気がなさそうな花とか見つけてどうすればいいか聞いてきますから」

「花のお世話ってやっぱり大変なんですね」

「でもそこが私好きなんですよ。お世話してあげた分応えてくれるというか自分の子供みたいで愛着が湧くんです。それでそれを買っていつてくれたお客様も喜んでくれて」

「じゃあ花屋はお姉さんの天職なんですね」

「天職だなんてそんな。ありがとうございます」

「ねえ純君、良いこと思い付いたんだけど教室に飾る花買っていかないう？」

「おっいいな。じゃあなんか買っていくか」

お姉さんにオススメの花を聞いてアネモネを買っていく。二人で割り勘したがとりあえず倉橋が持って帰って月曜日に持ってくるようになった。

買い物と話が終わり俺達は件の花壇へと戻ることにした。

「結局何もわからなかったね」

「そうだなー、歩く花だし本当に歩いてきてるんじゃないかね？」

「この土って花にとって魅力的なのかな？」

「栄養がいいとか？」

「そうなのかも…あっ！」

「どうした…あっ」

俺と倉橋が見る先には花壇の前の家に住んでるらしき人がいた。チャンスだと思つて話しかける。

「すみませーん！ちょっと聞きたいことがあるんですがいいですか？」

「大丈夫だよ、どうしたの？」

年齢は20代後半くらいだろうか、優しそうな大人の男性という印象を受けた。

「えっと、この花壇について聞きたくて」

「歩く花のことかい？」

「そうです、図書館行って調べたり花屋の店員さんに聞いてもわからなかったんです」

「花屋の店員に聞いたってことは若いお姉さんだったかい？」

「そうです」

「そっか、入江さんはやっぱり言わなかったのか」

入江さん？花屋の若いお姉さんは入江さんっていいのか。

「うーん……君達は口が固いかい？」

「言われるなど言われたら絶対に言いません。国家機密を誰にも言っていないですから」

「私もです！」

「あはは、なんかのジョークかい？——そうだね、図書館に行つて調べたり熱心だから歩く花の噂の真相を教えてあげるよ」

「ホントですか！」

「うん。ただし誰にも言わないっていうのが条件だけど」

「もちろんです」

倉橋がそう答えるとお兄さんは姿勢を正すように話をし始めた。

「じゃあ話すよ。歩く花って名前をつけられてるけど君達は花が歩くと思うかい？」

「メリーポピンズやデイズニーの世界なら動くと思います」

「私は動いたら素敵だなんて思います」

「君達面白いこと言うね。でも二人はやっぱり花は動かないっていう考えだね。うん、合ってるよ。花は動かない、誰かが花を植えてくれるんだよ。じゃあ誰が植えてるかってことだけど君達はさっきの僕の言い方からなんとなく検討がついているんじゃない？」

「入江さんですか？」

「そう。歩く花の正体は入江さんだよ」

「でも入江さんはわからないって言ってましたよ？」

「色々考えた結果言わなかったんだと思うけど、きつと恥ずかしかつたんじゃないかな。彼女少し恥ずかしがり屋だから。あと歩く花の噂を台無しにしたくなかったのもあると思う、悪い噂話じゃないからさ。どこことなくロマンチックじゃない？」

「子供でいうサンタクロースみたいなものですかね」

「そうそう。E・T・がゴム人形だつていうのはみんな知っているけどあえて口には出さないし、大人はサンタクロースの正体を知っているけど子供にバラさないでしょ？それと一緒に夢を壊したくなかつたんだと思うよ」

「なるほど。言わなかった理由はわかつたんですけどこの花壇つていうのはなにか理由があるんですか？」

「ああ、ここじゃなきゃダメな理由があるよ。じゃあここで問題です。なぜここじゃなきゃいけないんでしょうか？」

突然クイズ形式にしたお兄さんはなかなか茶目っ気のある人だなと思つた。少し笑いながら問題に答える。

「誰かに見せたいから」

倉橋と答えがハモつてしまい思わず顔を見合わせて笑つていとお兄さんも笑つていた。

「大正解！……この家では僕と花好きな祖母の二人で暮らしているんだ。でも祖母は脚が悪くて外に出ることができなくてそれで僕が入江さんのところの花屋で家に飾る花を買つてたんだ。いつだったか……3年くらい前かな？花を買つている事情を知つた入江さんが聞いてきたんだ。”私にもお手伝いできることないですか”つて。最初は断つていたんだけど祖母が僕が買つていく花以外にも窓から見える花壇の花を楽しみにしているつて話したら”じゃあ花壇に一工夫加えます”つて言つてさ。それで歩く花の誕生さ」

「じゃあ花が不定期だけど変わるの……」

「入江さんが違う花をわざわざ育てて変えてくれてるんだよ」

「素敵な話ですね」

「でしょ？だから僕も真相を言わないようにしているんだ。僕と祖母と入江さんの3人しか知らない秘密だよ。あつても君達も入れたら5人か」

お兄さんはそう言つておどけて笑つた。なんだかその笑顔は遠いところにあるというか眩しく感じた。

*

お礼を言って帰路へとつく。すると倉橋がポツリと呟いた。

「素敵な話だったね」

「そうだな。人の善意っていうか思い遣りというか」

「歩く花の噂もロマンチックだと思ったけど、真相はそれ以上にロマンチックだったね。誰かのためにずっと花を変え続けるなんて」

「…ブルーハーツの歩く花の中に ” 野に咲かず、山に咲かず、愛する人の庭に咲く ” っていう歌詞があるんだ」

「それって——」

「うん。きつと入江さんはお兄さんのことが好きなんだと思う」

「そうだよね。そうじゃなきゃ何年も花を変えるなんてできないもんね」

「休日がいい話きけたな」

「うん！じゃあ帰ろっか！」

俺達が知らなかつたり気付いていないだけで身の回りには色々な善意で溢れてるのかもしれないと思った。ゴミが1つも落ちていない公園も歩きやすく整備された歩道も、あつて当たり前ものじゃないな。くて誰かが良くしたいと思つて生まれたものなんだと気付かされた。

第20話 ビジョンの時間 その1

季節は夏。本格的な暑さはまだまだだがそれでも暑いことには変わりはない。授業中に関わらず俺達は机に突っ伏して溶けている。

「暑っぢ〜」

「全くだらしがない…ちなみに先生は放課後には寒帯に逃げます」

「ずりい！」

殺せんせーも文字通り溶けている。

「でも今日プール開きだよね！体育の時間が待ち遠しい〜」

「いやそのプールも地獄なんだよ、プールは本校舎にしかないから山道を往復しなきゃいけないし」

「そうだった…本校舎まで運んでよ殺せんせー」

「先生のスピードを当てにするんじゃないやありません！…でもまあ気持ちにはわかります」

そう言うのと殺せんせーは教科書を閉じ立ち上がる。

「そばの裏山に小さな沢があったでしょう。そこに涼みに行きましょう」

促されるままに俺達は準備をするが沢なんてあったらどうか？俺が首をかしげると千葉が殺せんせーの説明を補足するかのように話しかけてくる。

「足首まであるかないかの深さのがあってたぶんそのことだと思う」

「じゃあ出来るとしたら水かけ遊びくらいか。俺達は魚人じゃないから散弾銃にはならないな」

「アーロンパーク編か、懐かしいな」

さすがワンピース、誰にでも通じる。

男子は教室、女子は別室で水着を中に着てジャージをその上から着る。水着特有のゴムの締め付け感がいずい。

「皆さん準備ができたようですね、それでは向かいますよ」

殺せんせーが遠足の引率のように先導する。少し歩いたところで肩を小さな力でトントンと叩かれたので振り返ると神崎がいた。

「どうした？」

「鷹岡先生から助けてくれたお礼がしたくて」

「あーそういえば」

「本当はもつと早く言いたかったんだけど倉橋さんと話してるが多かったから話しかけられなくて。どうしても直接言いたかったから、本当にありがとう」

「そんな改まらなくても。助けるのは当たり前なんだから」

「なんか南雲君には助けられてばかりだね」

「俺だつて神崎を始めとしてみんなに助けられてるよ。学校だつて楽しんでっ」

「ふふっ、なんかお礼を言ったら毎回謙遜してる気がする」

「まあなんだ、照れくさいんだよ」

俺の言葉に神崎は上品に微笑む、それを見て俺は斜陽の最後の貴婦人はこんな感じだったのだろうかと考える。

「なんか聞こえね？」

前原の一言にみんなは立ち止まり耳を澄ませる。殺せんせーはそんな俺達を見てにやにやとしている。

「これって…」

「もしかして…」

何かを察した俺達はさあさあど流れる音がする方へと走る。深い茂みを抜けるとそこは自然豊かなプールだった。

「小さな沢を塞ぎ止めコースを整えることで自然のプールを作りました。制作に1日、移動に1分。あとは1秒あれば飛び込めますよ」

「「いやっほおう！」」

全く。こーゆー事をしてくれるからうちの先生は殺しづらい。

*

みんなはビーチボールで遊んだりクロールで競争したりなどしている。俺は背泳ぎの形で浮いてラッコのように漂っているが俺のすぐ近くに浮き輪に座りながらみんなの盛り上がりとは逆に溜め息を

つく茅野の姿があった。

「楽しいけどちよつと憂鬱。泳ぎは苦手だし水着は体のラインがはつきり出るし」

「中学生なんだし茅野くらいが普通だろ。周りがちよつとあれなだけで」

「うーん：そうなのかなあ」

「たぶんそうだろ」

「たぶんって。：なんかこのプールを見てステイブンキングの映画を思い出したよ」

「クリープショー2の”殺人いかだ”だろ。たしか最初に死んだのは女性だったから茅野が先にいなくなるな」

「それは嫌だなあ。まだまだ成長するかもしれないのに」

「大丈夫さ茅野。その体もいつかどこかで需要があるさ」

「うん岡島君。二枚目面して盗撮カメラ用意すんのやめよつか」

岡島はバズーカみたいな立派なカメラを持参しているが堂々としすぎて逆に盗撮がバレないみたいな感じだ。岡島のこの行動に名前をつけるとしたら”勇氣”というのがふさわしいなと思った。女子にドン引きも気にせず堂々と盗撮するその様が。

そんなことを考えていたら突如ピピピッと笛の音がプールに響く。

「木村君！プールサイドを走つちや行けません！転んだら危ないですよー！」

「あ、す、すみません」

注意された木村はというと鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔をしている。

「原さんに中村さん！潜水遊びはほどほどに！溺れたかと心配します！」

「岡島君のカメラも没収！」

「狭間さんも本ばかり読んでないで泳ぎなさい！」

（（小うるせえ…））

注意と共に笛の音がひっきりなしにプールに響く。

「いるよな、自分のフィールドで王様気分の人」

「ありがたいのにありがたみが薄れるやつな」

「ヌルフフ、自然を活かした緻密な設計。皆さんにはふさわしく整然と遊んでもらわなくては」

「固いこと言わないでよ殺せんせー、水かけちゃえ！」

「きやんっ！」

え？なに今の子犬のような悲鳴は。何かを思い付いたかのようにカルマはスウツと殺せんせーの下へと泳ぎ殺せんせーの座っている椅子を揺らす。

「きやあっ！揺らさないで水に落ちる！」

…もしかして。

「いや別に泳ぐ気分じゃないだけだし。水中だと触手がふやけて動けなくなるとかそんなん無いし」

泳げないし水で触手がふやけるのかよ。

だが俺達の大半は直感した、今までの中で一番使える弱点だと。

*

数日後。登校していると渚がいつもより眠そうな様子で歩いているので声をかける。

「よっ渚。いつもより眠そうだな」

「南雲君おはよう。ちよっと昨日の夜中に殺せんせーと片岡さんのお手伝いをしてさ」

「へ〜。お手伝いって？」

「片岡さんの本校舎の友達が泳げないからそれを泳げるようにするために演技したんだ。なんかその友達のせいで片岡さんがE組落ちしたらしいんだけど」

「そんなやつ放っておけばよかつたのに」

「なんか殺せんせーが共依存がどうか色々言ってる泳げるようにする流れになったんだよね。それより聞いてよ、殺せんせーやっぱり泳げないって」

「やっぱりっ！」

「うん。でも水中でも一人くらいなら相手できるしそもそも落ちないから大して警戒してないって」

「そっかー。じゃあ水の弱点は組み合わせる使うことになるな」

「そうだね——」

なにかを言いかけたところで思い出したかのようにあくびをする渚。

「そんなんで一時間目のプールの授業大丈夫か？」

「…うん。ほどほどにしとくよ」

教室に着き授業の準備をしていると岡島が勢いよく戸を開き街で号外を配る新聞員のように声を上げる。

「おい皆来てくれープールが大変だぞー！」

岡島の一言にクラス全員がプールに向かうとそこにはベンチなどの設備が破壊され投げ捨てられている状態だった。

「ニュースとかで見るゴミ山ってこんな感じだよな」

「冷静に言ってる場合か純ー！メチャメチャじゃねーか！」

「ゴミまで捨ててひどい…誰がこんなことを…」

ふと渚を見ると寺坂グループの三人を見ていた。寺坂達はにやにやとしておりまるで自分達がやりましたと公言しているようなものだった。

「あーあー…こりゃ大変だ」

「ま、いーんじゃね？プールとかめんどいし」

「んだよ渚。何見てんだよ。俺らが犯人とか疑ってるのか？くだらねーぞその考え」

殺人現場で誰が犯人なんだとか言っておいて血塗れの服を着てるくらいには疑わしいんだけどな。

「まったくです。犯人探しなどくだらないからやらなくていいですよ」

そう言っただけで殺せんせーは匠も真っ青なビフォーアフターを披露す

る。何ということでしょう。荒れたプールが一流ホテルばりのプールに早変わり。

「ハイこれで元通り！いつも通り遊んでください」

「はい」

そう言つてプールを離れてく殺せんせー。俺は渚達と話をする。話題はもちろん寺坂だ。

「寺坂達なんか変じゃないか？」

「うーん：元々3人とも暗殺とかに積極的じゃなかったけど：特に寺坂君が苛立つている気がする。たぶん主犯は彼だと思つし」

「放つとけよ。いじめっ子で通してきたあいつ的には面白くねーんだろ」

そう言つた友人は我関せずといった様子で言い捨てる。カルマはとうとういつも通りのにやけた様子で飄々と話す。

「殺していい教室なんて楽しまないほうがもつたいないと思うけどね」

カルマの意見には同意だった。せつかくもらつた権利というかこの状況を楽しまないのは損だと感じる。俺達の周りでは蟬が絶え間なく鳴き続けている。その鳴き声は、まるでこれから何か起きるということを教えてくれているように思えた。

教室に戻ろうと校舎に入ると教室から大きな声が聞こえてきた？

この声は——吉田か？

「マジかよ殺せんせー！」

「この前君と話したやつです。プールの廃材で作ってみました」

作つたつてなにを……すげー！

「まるで本物じゃねーか！」

吉田と完璧にハマってしまった。そこには曲線美が美しい木材のバイクに跨がっている殺せんせーがいた。いや殺せんせーはこの場合どうでもいい、バイクが素晴らしく男心をくすぐるものがある。

「このバイク最高時速300km出るんですって。先生一度本物に乗ってみたいです」

「アホか！抱きかかえて飛んだほうが速えだろ」

吉田の一言にクラスに笑いが生まれる。良い雰囲気だと思つていると教室の戸が開かれる。

「何してんだよ、吉田」

「あ、寺坂。いやあついバイクの話で盛り上がっちゃってよ。E組にあんまり興味のあるやついねーから——」

吉田の言葉を遮るようにバキツという木材が折れた音が教室に響く。寺坂が殺せんせー自作のバイクを蹴って破壊したのだ。

「何てことすんだよ寺坂！」

「謝つてやんなよ！殺せんせーも可哀想でしょ！」

寺坂は机から何かを取り出し振りかぶりながら話始める。

「…てめーら虫みたいにブンブンうるせーな。駆除してやるよ」

そう言つて寺坂は手に持つているものを床に叩きつける。取り出したのは殺虫剤のスプレー缶だった。教室中に勢いよくガスが散布されるがスプレーつてああいう感じで叩きつけたくらいで中身出たっけ？たまたま穴が開いたのか？

「寺坂君！ヤンチャするにも限度つてもんが——」

寺坂を制止しようと肩を掴んだ殺せんせーの手をはね寺坂は尚も反抗する。

「さわんじやねーよモンスター。気持ちわりーしつまんねーんだよ。テメーも、モンスターに操られて仲良しこよしのテメーらも」

敵意を全員に向ける寺坂に呆れながら俺は溜め息と共に話しかける。

「中学入学してからお前みたいなやつ増えたよな。全部分かったような顔して勝手にひねくれて、学校がつまんねえだのなんだの。学校なんて関係ないだろ、お前がつまんねえのはお前のせいだ」

「そうだよ寺坂、気に入らないなら殺せばいいじゃん。せつかくそれが許可されてる教室なのに」

カルマも寺坂に向けて話すが俺達の言葉は半ば煽り文句みたいに

なつてしまったので寺坂は怒った顔でこちらに詰め寄ってくる。

「何だよテメーら、ケンカ売ってんのか？上等だよ。だいたいテメーらは最初から——」

文句を言いながら近づいてくる寺坂の顔をカルマは思いきり掴み、人差し指を口に当てて幼子をあやすように言葉を続けた。

「ダメだつてば寺坂。ケンカするなら口より先に手を出さなきゃ」

「っ！放せーくだらねー!!」

カルマを振りほどくと寺坂は教室から出ていく。シンとした空気が一瞬流れると男子の誰かが呟く。

「…何なんだアイツ」

「平和にやれないもんかな…」

ふと殺せんせーを見ると顎に手をやって何かを考えている様子だった。それを見て俺は太宰治の有名な横顔の写真を思い出した。

*

翌日。昼休みになったが寺坂はまだ登校していない。だがそんなことより変わったことがあった。

「ぐすつぐすつ」

殺せんせーがずっと泣いているのだ。それを見かねたのか矢田達と昼食を一緒に食べていたビツチ先生が話しかける。

「なによ、さつきから意味もなく涙を流して」

「鼻なので涙じゃなくて鼻水です。どうも昨日から体の調子が変わす、夏風邪ですかねえ…」

目と鼻がだいたい同じ位置についているからまぎらわしいな。みんなが殺せんせーを見て苦笑いしていると教室の戸が開かれる。

「おお寺坂君!!今日は登校しないのかと心配でした!昨日のことなら皆気にしてませんよ!ね?ね?」

「うん…それより鼻水がだらだら垂れてて寺坂の顔にかかてるよ…」

「寺坂君、やはり先生と一度話しましょう。悩みがあるなら聞かせて

ください」

寺坂は少し黙ったあとに殺せんせーのネクタイで乱暴に涙、もとい鼻水を拭いて口を開く。

「おいタコ、そろそろ本気でぶっ殺してやんよ。放課後にプールへ来い、水が弱点なんだろう？ テメーらも全員手伝え！ 俺が水の中に叩き落としてやつからよ！」

寺坂が全員に暗殺を呼び掛けるが応えるものはいない。すると原がゆつくりと席を立ち上がり俺達の意見を代弁する。

「お前ずつと皆の暗殺に協力してこなかったよな？ それをいきなり命令されてハイやりますって言うと思うか？」

「別にいいぜ来なくても。そんな時は俺が賞金独り占めだ」

そう言つて寺坂は教室を出ていく。それと同時に教室全体が呆れにも似た溜め息をつく。

「私行かなーい」

「同じく」

「俺も今回はパスかな」

「皆行きましようよお！ せっかく寺坂君が殺る気になったんです。皆で一緒に暗殺して気持ち良く仲直りです」

「…まず殺せんせーの顔が気持ち悪いよ」

メトロイドフュージョンに出てくるボスのナイトメアそっくりに顔が粘液でデロデロになっている。

ふと渚がいらないことに気づいた。寺坂を追ったのか？ 最近の寺坂だと手を上げることも少くないので念のため俺も追うか。そう考えてて教室を出る。すると外から渚と寺坂の話し声が聞こえたので物陰から盗み聞く。

「本気で殺るつもりなの？」

「当たり前じゃねーか」

「だったら…ちゃんと皆に具体的な計画を話した方がいいよ。しくじったら同じ手は使えないんだし」

「具体的な計画なんて……うるせえよ。弱くて群れるばっかの奴等が、本気で殺すビジョンも無いくせによ。俺はテメーらと違う。楽し

て上手に殺るビジョンを持ってんだよ」

：寺坂は計画に自信を持ってる様子だったが俺の目には自分に自信を持ってるようには見えなかった。喋る言葉が、具体的に言うならばビジョンという単語が誰かの受け売りというか借り物のようで、当てはまらないパズルのピースのようなちくはぐさに胸騒ぎがした。

*

放課後となったが俺とカルマはプールには行かなかった。俺は迷っていたがカルマと一緒にサボろうと言われたから行かないことにしたのだ。

「寺坂の方に行かなかったのはサボりたいっていうのもあったんだけど渚君の暗殺について南雲に聞きたかったんだよね」

「俺に？渚本人じゃダメなのか？」

「うーん：渚君本人に聞くのはなんか変な感じするっていうか。その点南雲君は頭良いし俺に近い視点で見てたんじゃなかなって」

「カルマに近い視点って。俺なんか渚の暗殺を見て嫉妬したよ」

「ふーん、それってどういう意味の嫉妬？劣等感？」

「いや普通に自分に持っていないものを持つてる羨ましさからくる嫉妬だな」

「南雲の口から嫉妬って聞くと嫌みっぽいなあ。本校舎の連中の言葉を借りるなら文武両道でナイフ術、射撃も高い能力を持っている南雲はどちらかという嫉妬される側なんだから」

「まあ、なんだ。能力って先天性と後天性のものってあるだろ？俺はどっちかという努力の人だから。先天性のものなんて持ち合わせでないつもりだ。：まあ体の大ききとかは恵まれてるけど。話を戻すけど渚の暗殺は直接見なきゃどうしてもわからないというか伝わらない部分がある、だから渚が次なにかやるときはちゃんと見とけよ」

「ま、百聞は一見に如かずって言うしね。機会が巡ってくることを祈ってるよ」

「努力って言葉で思い出したけど期末テストに備えて勉強してる？」
「特別備えてはいないよ。だって殺せんせーだよ？教え方いーし大丈夫でしょ。それに——」

カルマが何か言おうとしたが爆発音で遮られた。俺とカルマは顔を見合わす。

「なあ、今の音って…」

「十中八九寺坂絡みだろうね。でも——」

状況から考えて寺坂関係で間違いないと思うが普通ではない音だ、暗殺以外の何かが起こっていると考え俺達はプールへと走る。

——俺達が目的地に着くとプールはなくなっていた。もっと正確に言うならばプールに溜まっている水が抜けて裏山特有の明るい色をした岩肌が広がっていたのだ。

俺達の目に映るのは疲労困憊の様子の子のE組面々と言葉を失い両膝を地面について項垂れている寺坂の姿だった。

第21話 ビジョンの時間 その2

「寺坂、何があった？お前何をした？」

現状を見て苛立っているのか少し冷たい声音だなと自分でも思った。寺坂は声を震わせながら話す。

「俺は…な、何もしてねえ。話が違いよ…イトナを呼んで突き落とすって聞いてたのに…」

イトナってことはシロ関係か。話してる内容的にどうやら聞かされてた計画とは大きく違うことが起きてるらしい。

「なるほどねえ、自分で立てた計画じゃなくてまんまとあの2人に操られてたってわけね」

カルマの正論とも言える言葉を聞いて寺坂は違うと叫びカルマに詰め寄る。

「言っとくが俺のせいじゃねーぞカルマ！こんな計画やらす方が悪りーんだ！皆が水に流されてったのも全部奴等が——」

ゴツという拳の鈍い音が響く、カルマが寺坂を殴り諫めたのだ。「ターゲットがマツハ20で良かったね、でなきゃお前大量殺人の実行犯にされてるよ。流されたのは皆じゃなくて自分じゃん。人のせいにする暇があつたら自分の頭で何をすべきか考えたら？」

そう言つてカルマは騒ぎの方へと走っていく。残された俺は呆気に取られてる寺坂に声をかける。

「今回の騒ぎは寺坂、お前一人が起こしたことじゃない。クラスで居心地悪そうにしていたお前を放置してた俺達全員の責任だ。ただそこにつけこまれただけだ。それに今回の出来事の責任をクラス全員で割れば27分の1だから気にすんな」

「その計算はおかしいだろ…」

「でもそう考えたら楽になったろ？…お前が始めた暗殺だ、嘆いてないで行くぞ」

「ああ、すまねーな。…南雲ひとつ聞いてくれねーか？」

「手短にな」

「…俺は自分が強いと思つてた。ガタイと声がデカいだけで大概のこ

とは有利に運んだしたまたま勉強もできたし柵ヶ丘に入学したよ。ただど——ここじゃその生き方は通じなかった。本当は俺は弱かったんだ。」

「本当に弱いやつは自分を弱いとは言わないらしいぞ。それは…そう言う人は強くあろうとする者つて言うらしい。まあ、俺の言葉じゃないけどな」

俺の言葉に寺坂は何も返さなかった。府に落ちたというか少なくとも先程のように狼狽えた様子はないので大丈夫だろう。あとはシロ達をどうにかするだけだ。

俺と寺坂はカルマのあとを追って走るとすぐに追い付いた。いや追い付いたというよりは全員が動けない状況になっていたところに合流したという感じだ。

皆の視線の先を見るとイトナと殺せんせーが前に行われた教室での試合のように戦っていた。だが前回と決定的に違うのは殺せんせーがかなり押されぎみということだ。

「触手の数を減らしてパワーとスピードに特化させたからね、より操りやすく一撃を鋭くしたんだよ。片や君は生徒を助けたことにより全身が濡れ動きが鈍っている。心臓を破壊するのも時間の問題だ」

シロの懇切丁寧な説明のあとに寺坂がそれだけじゃねえと言葉を続ける。

「力を発揮できねーのはお前らを助けたからよ、タコの頭上を見てみる」

あれは…

「村松と吉田と原！」

「それに原が今にも落ちそうだ！」

「あいつらの安全に気を配るからなお一層集中できない。おそろくシロはそれも計算に入れている」

淡々と説明する寺坂を前原が問い詰める。

「のんきに言ってるじゃねーよ！マジで危険なんだぞ！お前ひよつとして今回の事全部奴等に操られてたのかよ!?!」

「フン、あーそうだよ。目標もビジョンもねえ俺みたいなやつは頭の

「良いやつに操られる運命なんだよ」

自嘲気味に笑って言う寺坂を皆は少し睨む。だがそれに怯むことなく寺坂は急に覚悟を決めた真面目な顔になって言葉を続ける。

「だからよ、操られる相手ぐらいいは選びてえ。だからカルマに南雲！テメーらが俺を操ってみろや。お前らの頭脳で俺に作戦を与えてみろ！完璧に実行して全員助けてやる！」

指名されたカルマと俺は顔を見合わせ軽く笑う。カルマはいつものいたずらっ子がするようなずるい笑顔のまま口を開く。

「良いけど…実行できんの俺の作戦？死ぬかもよ？」

「やってやんよ、こちとら実績持つてる実行犯だぜ？」

「カルマ、寺坂だけだとあれだから俺も使えよ」

「ふーん、南雲もいるなら大丈夫だね」

カルマと俺の言葉を聞いて寺坂は文句を言いたげだったが指示を待っている状態だ。10秒くらい経ったあとにカルマがよし！と言うとそのまま作戦を言い始めた。

「原さんは助けずに放つところ！」

え？俺と寺坂のみならずクラス全員がポカンとなる。

「カルマふざけてんのか？原が一番危ねーだろうが！ふとましくへヴィだから掴まっている枝も折れそうだ！」

「寺坂さあ昨日と同じシャツ着てんだろ？同じところにシミあるし。やっぱお前悪だくみとか向いてないよ」

「ああ!？」

「でもな、バカでも体力と実行力持つてるからお前を軸に作戦立てるの面白いんだ。まあ南雲っていう上位互換がいるけど。それでもお前の方が面白いよ。だから俺を信じて動いてよ、悪いようにはならないから」

「ふん、いいから早く指示よこせ」

「わかった。みんなにも動いてもらうから指示をちゃんと聞いてよ——」

カルマが一通り説明し、皆は無言で頷きそれぞれの持ち場へと移動し、作戦の起点である寺坂は殺せんせー達の下へと行く。

「さて足元の触手も水を吸って動かなくなってきたね。とどめにかかろうイトナ、邪魔な触手を全て落としその上で心臓を」

「おいシロ！イトナ！よくも俺を騙してくれたな！」

「…ああ君か。まあそう怒るなよ、ちよつとクラスメイトを巻き込んだだけだしE組で浮いてた君にとっては丁度良いだろう？」

「うるせえ！テメエら許さねえ！イトナ！俺とタイマン張れや！」

「やめなさい寺坂君！君が勝てる相手じゃ…」

「すっこんでろタコ！」

「布切れ一枚でイトナの触手を防ごうとは健気だねえ。黙らせろイトナ、殺せんせーに気を付けながらね」

イトナは寺坂に対して触手を振るう。だが寺坂はそれをシャツを盾のようにして受け止めることができた。なぜなら死ぬ威力ではないからだ。今までのシロの言動から生徒に振るわれる触手の威力は明らかになっていて生徒が生きてるからこそ殺せんせーの集中が削げるといのがカルマの見解だ。どうやらその通りだったらしい。

「よく耐えたねえ、ではもう一発だ」

気絶する程度の触手に死ぬ気で喰らいつのが寺坂の仕事、そして俺の仕事は寺坂への追撃を防ぐこと。狙撃銃の乾いた発砲音がプールに響いた。2本しかないイトナの触手の片方を破壊することに成功する。直後イトナは激しくくしゃみを繰り返す。作戦の成功を確信したのかカルマが得意気に語り始める。

「寺坂のシャツが昨日と同じってことは教室で撒いたスプレーの成分をたっぷり浴びたってことだ。殺せんせーと同じく触手を持つイトナだってタダで済むわけがない。——で、イトナに一瞬でも隙を作れば原さんは殺せんせーが勝手に助けてくれる。殺せんせーと弱点が同じなら後は同じ事をやり返せばいいだけだ」

カルマが身ぶりで指示を出すと個別の作戦を実行した俺と寺坂以外のE組全員が高いところから水へと飛び込みイトナに水を吸わせる。イトナの触手は見る見る内に膨れ上がっていく。

「だいぶ水吸っちゃったね、これであんたらのハンデは少なくなった」
イトナだけでなくシロも表情には出さないが動揺が見て取れる。

「で、どーすんの？賞金持ってかれんのも嫌だし皆あんたの作戦で死にかけてるし。まだ続けるつもりならこつちも全力で水遊びさせてもらうよ」

「……してやられたな、丁寧に積み上げた戦略がたかが生徒のせいでもチャメチャだ。ここは引こう、皆殺しにするのは容易いがモンスタ―がどう暴走するかわからないしね。帰るよイトナ」

シロの言葉を聞いてもイトナは動こうとしない。むしろ怒りに肩を震わせ今にも殺せんせーに飛びかかりそうな様子だ。

「どうです？皆で楽しそうな学級でしょう？そろそろちゃんとかラスに来ませんか？」

「…フン」

イトナは殺せんせーの言葉を聞くと呆れ返った表情に変わりシロとそのまま去っていった。それを確認した全員は安堵の溜め息をつく。

「なんとか追っ払えたなー」

「良かったね殺せんせー、私達のお陰で命拾いして」

「ヌルフッフ、もちろん感謝してます。まだまだ奥の手はありましたかねえ」

殺せんせーのいつものものにやついた笑みを見て本当に騒ぎが収まったんだなと実感する。渦中にいた原がそういえばと寺坂に詰め寄る。「寺坂君さつき私の事さんざん言ってたね。ヘヴィだとかふとましいとか」

「い、いやあれは、状況を客観的に分析してだな…」

「言い訳無用！動けるデブの恐ろしさ見せてあげるわ！」

「あーあ、ほんと無神経だよな寺坂は。そんなんだから手の平で転がされんだよ」

「うるせーカルマ！高いところから見てるじゃねー！」

そう言うのと寺坂はカルマを水の中へと引きずり込む。カルマはぶつと普段からは想像できない声を発して着水することになった。

「はあア!?何すんだよ上司に向かって！」

「誰が上司だ！南雲の狙撃による保険があつたからと言って触手を生

身で受けさせるイカれた上司がどこにいる！」

「水に濡れてないのは南雲も一緒だろ！」

「いや、俺は上司というか業務を任された下請けみたいなもんだから」「話を逸らすなカルマ！大体テーマはサボり魔のくせにオイシイ場面は持つていきやがって！」

「あーそれは私も思ってた」

「この機会に泥水もたっぷり飲ませよう」

周りの同調もあり急遽カルマを水に叩き落としたりするなどの遊びが始まる。

俺はそれを見て安堵する。寺坂が乱暴で直情的なままだがクラスに馴染んでいたからだ。その事が内心嬉しくて遠くから見て笑っていると神崎が来て話しかけてきた。

「南雲君なんだか嬉しそうだね」

「ああ、やっとなんかクラスが1つになったっていうか。それが嬉しくて」

「確かにやっと1つになったって感じだよね。…さっきの狙撃カッコよかったよ」

「てんきゅ、あのとときら訓練通り当たってよかったなって顔には出さないけど安心してたよ、任されたからにはそれに応えるしかないから。それより神崎も皆と一緒に水に飛び込んだの意外だったな」

「そうかな？でも確かに普段しないことだから場にそぐわないけど内心楽しんだかも」

「神崎って意外と茶目つ気あるよな。てか俺達は水遊びしてるわけじゃないからこのままここにいたら神崎は体が冷えるな。校舎に戻って着替えるか？」

「ううん、もうちよつとここにいたいな。せつかく皆楽しそうだし」「そつか。じゃあこれ、上着羽織れよ。何も無いよりましだと思う」

俺が制服の上を渡すと神崎はありがとうと一言言ってそのまま着る。貸しといてなんだけど匂いとか大丈夫だろうか？気を遣ってはいるが汗とかかいたし心配になってきた。

「あー神崎。匂い大丈夫か？汗とか欠いたから不安になってきた」

「ふふつ大丈夫だよ。良い匂いだしなんか安心する」
「そっか、それならよかった」

それきり二人の間には言葉がなくなり無言の時間が流れる。バカ騒ぎしている生徒を見ていると神崎が不意に言葉をこぼす。

「海、行きたいね」

「海？海水浴？」

「うん」

「そうだな、クラス全員で行けたら楽しいだろうな」

「……そうだね」

「それよりさ、ちよつといいか？」

「？、どうしたの？」

「あまり大きい声では言えないんだけど……」

俺が小声で相談すると神崎は驚き、そして笑った。

「そんな変なことではないと思うんだけどなあ」

「ううん、南雲君はやっぱ優しいなって。私も色々と考えてみるね」
日々の忙しさですっかり忘れていたなと自分を叱りたくなった。だが期限までにはなんとかかなりそうだったのでテスト勉強はもちろんそれに向けても準備をしっかりとしないとなと考える。暦はすでに7月。俺達にこんなことが起きようと時間の流れは止まってくれない、その事を実感した。

*

く個人トークく

千葉：よくイトナの触手を破壊できたな

南雲：イトナが結構動揺してたからな

南雲：寺坂の頑張りがあつたからだよ

千葉：撃つ時ってなに考えてる？

南雲：照星と照門を合わせて目標をよく見るってことくらい

南雲：ていうか千葉の方が成績良いから俺が聞きたいくらいだよ

千葉：ちよつとでも人のコツを取り入れて命中率が良くなつたらそ

れだけ殺せる確率が上がるからな

南雲：仕事人だな

千葉：仕事人って響きいいな

南雲：いいよな

千葉：うん

南雲：うん

千葉：オウム返しか

南雲：まあ返信に困ったからな

千葉：それだったら無視してくれてもいいのに

南雲：まあまあ

南雲：ちようど勉強の休憩してたからさ

千葉：俺も勉強しなきゃなあ

南雲：千葉は実は勉強してそうだけどな

千葉：本格的には始めてないかな

南雲：それはほぼやってるようなもんだろ

千葉：殺せんせーの授業面白いからさ

千葉：今までとなんか違うんだよな

南雲：確かにそれは感じるな

南雲：じゃあ勉強に戻りますので

千葉：わからないとこあつたら聞くから

南雲：答えや解説を見てくれ

第22話 期末の時間

今さらだが柵ヶ丘中学校では成績が全てである。E組を誰に恥じることもないクラスにすると目論んでいる殺せんせーにとって期末テストは1学期の総仕上げ、つまり決戦の場である。だからと言って俺達も勉強をやらされているわけではない。自主的に勉強に励みわからないところは質問する、そんな模範的な勉強に対する姿勢を取っていた。

「ヌルフッフ、皆さん1学期の間に基礎がガツチリ出来てきました。この分なら期末の成績はジャンプアップが期待できます」

前回のテストのとき同様殺せんせーの分身が一人一人についている。寺坂の苦手教科を示すハチマキがナルトのマークなのも健在だ。「殺せんせー、また今回も全員50位以内を目標にするの?」

渚が全員が思っていた疑問を殺せんせーに聞くといつもののにやけたような笑顔で答える。

「いいえ、先生はあのときは総合点ばかり気にしていましたが生徒それぞれに合うような目標を立てることにしました。まさにこの暗殺教室にピッタリなものです!」

暗殺教室にピッタリという一言で皆のペンを走らせている動きが止まり殺せんせーを注視する。

「さて皆さんは先生が触手を失うのはご存知かと思えます。詳しく説明しますと——」

説明の途中で殺せんせーはエアガンで自分の脚を撃つ。そして分身をすると数十体の中に子供の分身が紛れている。分身ってそういう減り方するもんだっけ?」

「1本減ると全ての分身が維持しきれず子供の分身が混ざってしまいました。さらに1本減らすと……ごらんなさい。子供の分身がさらに増え親分身が家計のやりくりに苦しんでいます」

なんか切ない話になってきたな。

「もう1本減らすと父親分身が蒸発しました。母親分身は女でひとつで子を養わなくてははいけません」

「重いわー!」

殺せんせーの説明のボケ?に全員がツツコミを入れる。何で触手の本数の説明がドラマ仕立てなんだよ。

「色々試してみた結果、触手1本につき先生は約20%運動能力が失われます。そこでテストの本題についてですが今回は皆さんの最も得意な教科も評価にいきます。つまり教科ごとに学年一位を取った者には答案の返却時触手を1本破壊する権利をあげましょう」

全員の目の色が変わる、暗殺の成功率が格段に上がるだけではなく得意教科でクラスに貢献することができからだ。殺せんせーが言っていた通り総合ではなく1教科であればという生徒はE組には多くいる。

「チャンスの大きさがわかりましたね?総合と5教科全てで6本の触手が破壊できます。これが暗殺教室の期末テストです。賞金百億に近付けるかは皆さんの成績次第なのです」

本当にこの先生は殺る気にさせるのが上手いな。

心配なのは理事長の妨害だけだが烏間先生とビッチ先生が交渉しに行ってるのでこちらも問題ないだろう。

勉強も一段落し教室で各々休憩していると友人の携帯が震える。

バイブレーションの長さから見て電話だろう。

「進藤か!……ああ……A組が?ちよつと待って——」

そうやって友人は電話をスピーカーモードに切り替え進藤に続き話していいぞと告げる。

『——それでA組が全員会議室に集まって自主勉強会を開いてるんだ。こんなの初めて見る、音頭を取っているのは“五英傑”と言われる天才達だ。だが中でもとびきりヤバイのが中間テスト1位に全国模試1位の生徒会長の浅野学秀、あの理事長のひとり息子だ。奴等はお前らE組を本校舎に復帰させないつもりだ。トップ50はA組に独占される可能性がかなり高いぞ』

「ありがとな進藤、心配してくれてるんだろ?けど大丈夫だ。俺達も目標があつてA組に負けなくらいの点数を取るために頑張っているから見ててくれ」

『フン、勝手にしろ。E組の頑張りなんて知ったことか。じゃあ切るからな、頑張れよ』

そう言って進藤は電話を切った。なんか切り際の進藤がツンデレっぽいなって感じた。

「進藤って絶対根は良いやつだよな」

「ああ、部員からの信頼も厚かったしな」

「南雲ちよつといいか？」

磯貝が横から俺に尋ねてくる。

「放課後空きなら本校舎の図書室で勉強しないか？」

「えっ図書館取れたの？」

「ああ。期末を狙ってずつと前から予約しといたんだ、E組は基本後回しだから正にプラチナチケットだ。それでどうだ？」

「すまん、実は放課後予定があつて。代わりと言っちゃあれだけど後ろで目を輝かせてる莉桜を連れてってやってくれよ」

「さすが純——！気が利くじゃない！」

莉桜はそう言つて俺の背中を叩く。磯貝の了承がないと図書館に行けないということ忘れてないだろうか。まあ磯貝が断るとは思えないけど。

*

放課後となったが俺はE組の教室にいる。

「なんでこのメンバーで勉強会？」

そう言つたのは凜香だ。だが当然の疑問だと思つた。なぜなら勉強会のメンバーが男子は俺と千葉、女子は神崎、倉橋、凜香、矢田の計6人だからだ。

「私達じゃダメ？凜香？」

そう言つて矢田は上目遣い気味に男子だけでなく女子にも効きそうな仕草をする。

「いやダメって訳じゃないけど…誘ってもらえて嬉しかったし」

あつちよつとデレた。矢田すげえ。

「凜香ちゃん可愛い〜」

直接言える倉橋もすげえ、てか男子2人だと肩身が狭いな。友人でも誘えばよかったと思うがそれは今回の趣旨とは微妙にずれているので考え直す。

「じゃあとりあえず勉強するか。まあわからないところあったら教え合う感じで」

「南雲頼んだぞ」

「純君お願いね〜」

考えてみれば成績がこの中で一番良いのは俺だったので頼られるのは当然だった。

「同じ教科でも違う教科でもいいから始めるか」

俺の一言で各々勉強を始める。ちなみに俺は数学が得意な千葉がいるということでも数学を選択した。

50分ほど経った辺りで倉橋がう〜とうなり始めたので神崎が声を掛ける。

「倉橋さんどうしたの?」

「社会やってるんだけど全然頭に入らないよう。有希ちゃんはどうやって勉強してるの?」

「私は小説を読む感じで流れとかで覚えてるよ」

「難しいよ〜…」

倉橋が早くも音をあげて神崎が困っているのを助け船を出すことにする。

「倉橋は暗記が苦手ってことか?」

「うん。有名なものは覚えてるんだけど掘り下げられたり細かい部分があんまり覚えられないんだ」

「突然だけど…倉橋は自分の携帯の電話番号は言えるか?」

「もちろん!」

「父さんと母さんののは?」

「2人のも言えるよ〜」

「そうか。なら話が早いんだが電話番号は大抵10桁の数字だ、対して歴史の年号とかは3, 4桁だ。10桁が覚えられて3, 4桁が覚え

られないって不思議じゃないか？」

俺の言葉に皆はあー確かにと頷いている。ちよつと恥ずかしいので反応はしないでもしいなと鼻の頭を少し搔く。

「年号は”710^{なんと}素敵な平城京”とか”794^{なくよ}うぐいす平安京”みたいな感じで語呂合わせで少し苦勞して覚えるのに電話番号はすぐに覚えられる。この記憶の定着に差があるのは脳の思考が関係あるらしい。倉橋は電話番号覚えるのは嫌だったか？」

「全然嫌じゃなかったよ！」

「だろ？面倒くさいとかの否定的な、マイナスな思考が働かないから簡単に頭に入るんだ。しかもことあるごとに反復するから絶対に忘れられなくなる、この『電話番号を覚える能力』を応用するだけで暗記系はなんとかなるよ」

「へ〜」

「あとは神崎が言ってたけど小説とかみたいストーリー仕立てで覚えるとかかな」

「例えばどんなの？」

今度は倉橋ではなく矢田が質問してきた。どうやら俺の勉強に対する考え方に興味が湧いてきたらしい。

「うーん例をあげると…敵に塩を送る””っていう慣用句あるだろ？あれを俺は小話にしてどつちがどつちっていうのを記憶してる」

「聞かせて聞かせて！」

俺はコホンとわざとらしく咳払いをしてから話を始める。

「敵に塩を送る””っていうのは武田信玄が兵糧攻めにあつたときに上杉謙信が迷うことなく塩を送つたというのが語源なんだが武田信玄はこのことを感謝し上杉謙信に礼を言ったんだが、あまりに感謝をしすぎて上杉謙信はドン引いたらしい。『いやいや、塩を送つただけだというのにそんなに感謝するなんて。一体どれだけ腹を空かせていたと言うんだ。信玄、お前飢え過ぎだろ』『いや上杉はお前だよ』——って感じでな。完全に作り話だけだ」

俺の小話に一同はクスクスと笑う。

「他にもまだある？もつと聞きたい！」

「まあ他のは次の機会ってことで。話を戻すけど一番は嫌がって勉強しないってことだな、楽しいとか面白いって思いながらやればどんな頭に入ってくよ」

「ありがと純君！有希ちゃんもありがとね！」

「ふふつ南雲君が頭良い理由わかっちゃったね」

「純」ってそこまで考えて勉強してたんだ」

「いつも考えてるわけじゃないけどね。この考え方は父さんの受け売りだから」

「それでもその考えを実践して且つ結果を残してるっていうのはすごいと思うぞ」

千葉から褒められた俺は照れ臭くなったので額を軽く指先で触り話の軌道修正を試みる。

「まあそんなわけだから勉強再開するか」

「ちよつと南雲君……！」

矢田はタイミングは今しかないということ感じて俺を見る。速水以外の4人も目で同じく語っている。俺達の様子を不審に思ったのか凜香がジト目気味に当然の如く質問してくる。

「なに？どうしたの？」

「あーなんというか、その……」

俺は自分のタイミングで行けなかったせいかな言葉が出てこない。それを見かねたのか千葉が机の下で俺の脚を軽く蹴る。頭を軽くかしげてる凜香を見て俺は今日の本当の目的を切り出す。

「凜香の誕生日7月12日で近いだろ？試験と被ってて当日皆で祝えないからさ今日祝おうと思ってる」

「えっ」

中学1年から凜香と付き合いが今ほどの驚いた顔は見たことがなかった。二重でパツチリと開いている二つの目がいつも以上に大きく見開かれる。

「南雲から勉強会名目で集まって祝おうって提案があったんだ」

「そうそう！凜香は不必要に目立つの嫌だからって仲良いメンバーだけであつてね！」

「まあそんなわけでもちよっと早いけど——」

「誕生日おめでとう！」

「…ありがとう。…すごい嬉しい」

そう言って凜香は照れたように笑う。

「それでこれ、みんなで購入したプレゼント」

「いいの？ 私特になにもしてないのに…」

「大丈夫だよ。誕生日ってほら、無条件にその人が主役でしょ？」

いつもより少しテンションが高めの神崎がそう言う。凜香はそういうものかと納得した。

「じゃあお言葉に甘えて…みんなありがとう」

「気にしないで！ ほらほら！ 開けてみて〜」

「…これってブレスレット？」

「そうだよ！ 神崎さんを中心に女子でプレゼントを決めて男子に買いに行ってもらったんだー」

「そうなんだ。これシンプルなデザインで好きかな、色も私好みだし」

「俺は付いてたって感じだからほぼ南雲が決めたようなんだよ」

「バカ千葉、2人で決めたことにしようって打ち合わせたろ！」

千葉はそうだったか？ ととぼける。大人しいように見えて普通の男子同様こういう一面もある。

「みんな本当にありがとうね。私今までで一番嬉しいかも」

「そこはかもじゃなくて断定してよ！」

矢田が突っ込むとみんなが笑う。凜香も笑っていたがその笑顔の中には涙がうつすらと浮かんでいたのを俺は見逃さなかった。それを見て提案した者として冥利につきるといふか、なんだか油断すると涙が落ちそうだったがそれは死ぬ気で踏ん張った。

*

凜香を祝ったあとは勉強をする雰囲気にもならなかったので2、30分駄弁ったあとに下校した。

そして翌日。俺が登校し教室の戸を開くと友人が一目散に俺の下

へと来た。

「純一聞いたか！」

「なにを？」

「図書館騒動だよ！」

「図書館騒動？」

杉野の話を要約すると『A組と国数社理英の5教科で勝負をして学年トップを多く取ったクラスが負けたクラスにどんなことでも命令できる』ということらしい。

「そんな面白そうなことなら昨日の夜に教えてくれればよかったのに」

「俺がこの件は直接みんなに言おうって昨日の図書館にいたメンバーに言ったんだ」

そう切り出して説明をし始めたのは磯貝だった。

「負けたりしたら今後の学校生活を左右することだからSNSで間接的に教えるのはなんか違うなって思ってたさ」

「なるほど。さすがは磯貝というかなんというか」

「こつちには総合トップを狙える南雲にカルマもいるし、何て言っただって各教科のトップランカーがいるからな。俺は勝てるって思ってるよ」

「まあ賭けがあろうとなかろうと元々殺せんせーの触手予約権があったからな。頑張ることには変わらないだろう。それより勝ったら何でももらえるんだろ？それについて考えようぜ」

「そうだな！俺が提案するのは学校中の女子を…」

「岡島君自重して」

片岡が氷のように冷たい目で岡島を制する。

「学食の使用権とか欲しいな」

「ヌルフッフ、面白いことになっていきますね。それについて先生に良い考えがあります。この学校のパンフレットにとっても素晴らしいものが載っていたのですがこれをよこせと命令するのはどうでしょう？」

殺せんせーの提案に全員が気付かなかったということもありハッ

とした表情になる。

「君達は一度どん底を経験しました。だからこそ次はバチバチのトツプ争いも経験してほしいのです。成功のご褒美は充分に揃いました、暗殺者なら狙ってトツプを取るのです」

殺せんせーの一言は俺たちをより殺る気にさせた。

A組、E組それぞれの利害が交錯する期末テスト、ある者にとっての勝利は別の者にとっての敗北だ。一人一人が自分にとっての勝利を求め知識という名の刃を磨く。

——そしてやってきた試験当日。

「随分と余裕そうだな、カルマ」

「皆が力入りすぎなんだって」

俺はカルマと共に本校舎へと向かっている。みんなからはなんとなく気を張っている感じがするがカルマからはその様子が見受けられない。

「大体みんな目の色変えちゃって——勝つてのはそういうんじゃないんだよね。通常運転で勝つてこそその完全勝利なんだよ」

「まあ確かにカルマはそれで結果出してるしな。とりあえずテスト頑張ろうぜ」

そう言つて二人で試験会場である教室へと乗り込む。理事長の妨害はないにしてもこの学校の問題が凶悪であることには変わりはない。だから試験中はいつも自分のことで精一杯だ。

*

2日間のテストが幕を下ろした。暗殺、賭けなど全ての結果は○の数で決まる。桐ヶ丘中学校では学年内順位も答案と一緒に届けられる、よってテストの結果は一目瞭然だ。

「さて皆さん全教科の採点が届きました。では発表します、まずは英語から…E組の1位、そして学年でも1位！中村莉桜さん！」

おー！莉桜が英語得意なのは知ってたけどまさか満点を取るとは。名前を呼ばれた莉桜はというと下敷きを団扇のように扇ぎ余裕綽々

の表情だ。

「完璧です、君のやる気はムラっ気があるので心配でしたが」
「うふふーんなんせ賞金百億かかってっからね。触手1本忘れないでよ殺せんせー?」

「さてしかし1教科トップを取ったところで潰せる触手はたった1本。それにA組との対決もありますから喜ぶことができるかは全教科返したあとですよ。——それでは続いて国語：E組1位は……9点で南雲純一君……がしかし！学年1位はA組浅野君！神崎さんも大躍進、96点で学年3位です！」

まじか。国語は自信あった方なんだがな。殺せんせーから返された答案を見ると部分点で——1されていた。

「では続けて返します。社会：E組1位は磯貝悠馬君97点！そして学年では……おめでとう！浅野君を抑えて学年1位！マニアックな問題が多かった社会でよくぞこれだけ取りました！」
「よっし！」

勝利した磯貝はガッツポーズを作る。これで2勝1敗、あとひとつ勝てば勝利が確定する。

「理科のE組1位は奥田愛美さん！そして理科の学年1位は！——素晴らしい！学年1位も奥田さんです！」

3勝1敗、数学の結果を待たずしてE組の勝ち越しが決まった。殺せんせーが複数の触手でクラッカーを鳴らすとE組全員が沸く。

「やった!!」

「よくやった奥田！」

「触手1本お前のモンだ！」

みんなが盛り上がりつつある中カルマがいないことに気づく。少し心配になったので祝杯ムードのみんなに気づかれないように教室を抜け出し探すことにした。

教室を出て窓から外を見ると木に寄りかかっているカルマが見えたので向かう。上履きを変えてカルマの下へと近づくと殺せんせーと話していたので俺は木の影に隠れて話を盗み聞く。

「さすがにA組は強い。5教科総合は南雲君と同点8位の竹林君、片

岡さんを除くとtop10を独占しています。ですが当然の結果です、A組の皆も負けず劣らず勉強をした。テストの難易度も上がっていた。怠け者がついていけないわけがない」

「……………何が言いたいの？」

「恥ずかしいですねえ。『余裕で勝つ俺カッコいい』とか思ってたでしょ？」

隠れているので直接様子を窺うことはできないがカルマが動揺しているのはなんとなくわかった。

「先生の触手を破壊する権利を得たのは…中村さん、磯貝君、奥田さんの3名。暗殺においても賭けにおいても君は今回何の戦力にもなれなかった。わかりましたか？殺るべき時に殺るべき事を殺れない者はこの教室では存在感を無くしていく。刃を研ぐのを怠った君は暗殺者じゃない、錆びた刃を自慢気に掲げただけのガキです」

「…………チツ」

カルマは殺せんせーの言葉にバツが悪くなったのか校舎へと戻っていく。

「南雲君、そこにいるのはわかっていますよ？盗み聞きとは感心しませんねえ」

カルマにはバレてないけどやっぱ殺せんせーは気づくか。

「言い訳をするとカルマが心配で探していたので」

「ヌルフフわかってますよ、君はそういう子ですから」

「そんなことよりいいんですか？あそこまで言っただけで…」

「ご心配なく。立ち直りが早い方向に挫折させました」

そう言っただけ殺せんせーはいつものものにやけた表情をする。けどもその表情はいつもとは少し違う気がして、老人が若かりし日の話をするかのように遠い目をしながら話を続ける。

「彼も君も多くの才能に恵まれています。だが力ある者はえてして未熟者です、本気でなくても勝ち続けてしまうために本当の勝負を知らずに育つ危険があります。そして大きな才能は負ける悔しさを早めに知れば大きく伸びます。テストとは勝敗の意味を、強弱の意味を、正しく教えるチャンスなのです。だから先生は成功と挫折を今一杯

に吸い込んでほしいと思っっています」

「…胸に刻んでおきます」

「さて南雲君。今回君は総合2位です、この結果に満足していますか？」

「…いえ、浅野にも勝てなかったしカルマは今回は勝負の土俵に上がっていなかったなので満足していません」

「そうですね。君の点数について詳しく言うとは浅野君に勝った教科はひとつもありません。穿った見方をすれば詰めが甘いということですが、ですが先生は君が今回努力を怠っていなかったことを知っています。だから勝てなかったからといって叱りつけたりしません、今この段階での君の勉強に対する理解が点数に現れたと思っっています。きつと君はこの先も努力は怠らないと思っますがどうか今の現状に満足しないでください」

「叱ってはいないですけど…それって褒めてます?」

「褒めてると言うよりは君に対する評価を言っっています」

「先生の言っただ通り今後ももちろん努力は続けます」

「よろしい。そんな真面目な南雲君にアドバイスです。君に勝った浅野君を君はどう評価しますか?」

「…やっぱり俺以上に勉強をしてるんだなって思っいます」

「ええ、その通りだと思っいます。では彼の性格については?」

「傲慢だけど…進藤とはベクトルは違うけど常に上を目指してるといっうか、そんな印象です」

「そうですね。一言で言うとは彼の良さはあの気位の高さです。口だけでなく全てを支配しようとは本気で考えて行動しするための努力をします。不思議なことに本当に高いプライドは目線をあげたまま人を地道にさせるのです。勉強は一朝一夕で身に付かないことからそのことが見て取れます」

「プライドを高くってことですか」

「むやみやたらに振り回すプライドではありません。目標に対するプライドを高く持つということですが。君も自信のあるものや負けたくないことの一つや二つあるでしょう?」

「はい」

「そのプライドを是非大切にしてください。——そろそろ教室へと戻りますか、テストの触手破壊の報酬もありますし」

「そうですね。……先生ありがとうございます、色々とお話ししていただいて」

「先生だから当然です、では戻りますよ」

「さて皆さん素晴らしい成績でした、5教科プラス総合点の6つ中皆さんが取れたトップは3つでした。早速暗殺の方を始めましょうか、どうぞ3本ご自由に」

「おい待てよタコ。5教科のトップは3人じゃねーぞ」

そうやって寺坂、村松、吉田、狭間の4人が立ち上がる。

「?、3人ですよ寺坂君。国数社理英全て合わせて…」

「はあ?アホ抜かせ。5教科つつたら国・英・社・理…あと家だろ」
そうやって4人は100点の答案を突きつける。

「か…家庭科ア〜!?ちよ、待って!家庭科のテストなんてついででしょー!こんなのだけ何本気で100点取ってるんですか君達は!」

「だーれもどの5教科とは言ってねーよな?」

…確かに。

「クツクツク。クラス全員でやれば良かったこの作戦」

こういうときに殺せんせーを先陣切ってからかうのはカルマだ、だから俺は発言を促す。

「おい、言ってやれカルマ」

「……ついどこか家庭科さんに失礼じゃね殺せんせー?5教科の中で最強と言われる家庭科さんにさ」

「そーだぜ先生約束守れよ!」

「一番重要な家庭科さんで4人がトップ!」

「合計触手7本!」

「7本!?!」

「それと殺せんせー、これは皆で相談したんですがこの暗殺に…今回の賭けの『戦利品』も使わせてもらいます」

あたふたしてる殺せんせーに盛り上がる生徒達。なんにせよ1学期の残る行事は終業式のみ、中学校生活の終わりをまだハッキリと意識はしないがこうやってひとつひとつ終わっていくんだなと一陣の風のように寂しさがよぎった。

第23話 隣町の隣探訪記

『今日の運勢1位は獅子座のあなた！遠くに足を伸ばすと吉！ラッキーアイテムは襷です！続いて…』

朝食を取りながらテレビを見ていると若手の女子アナウンサーがハキハキとした明るい声で教えてくれる。どうやら今日の主役は俺達獅子座らしい。終業式で午前中の内に学校も終わるのでバスに乗ってどこか行こうかなと考える。

「父さん、俺今日出かけるわ」

「占いで今日の予定決めるって安直だなー」

「安直じゃねーし、てかたまたまだし」

「襷は持つていなくて大丈夫か？」

「家に襷があるわけじゃないでしょ。ラッキーアイテムって何で持つてる可能性が低いものばかりなんだろうね」

『ラッキーアイテムを持つてるのにラッキーなことが起きなかった！苦情を入れてやる！』っていうモンスター視聴者を恐れたテレビ局の陰謀じゃないか？」

「何かと炎上しやすい世の中だしね」

「テレビ局の陰謀は置いて出かけるんだろ？お金大丈夫か？」

「あーたぶん。足りてると思う」

「たぶんか…これで足りるか？」

そう言つて父さんは財布から3000円を出してきた。

「そんな大金いいの？」

「お前は頭良いからな、無駄遣いはしないだろ？それに大金って言ってるってことは物の価値がわかってるってことだ」

「まあそういうことなら…ありがとうございます」

「いえいえ楽しんでください」

話が終わると朝食を食べ終え準備をしてから学校に向かう。期末の後にはほどなく一学期の終業式、中学生活に束の間のピリオドが打たれる。

*

「おおくやつと来たぜ、生徒会長様がよ」

俺達は他のクラスの生徒よりも早く登校し、A組の五英傑を待ち伏せていたのだ。

「何か用かな？式の準備でE組に構う暇なんて無いけど」

「おう待て待て、何か忘れてんじやねーのか？」

「浅野、賭けてたよな。5教科のトップを多く取ったクラスがひとつ要求できるって。内容についてはさつきメールで送信したけどあれで構わないな？」

「5教科の賭けを持ち出したのはテメーらだ。まさか今さら冗談とか言わねーよな？何ならよ、5教科の中に家庭科とかも入れてもいいぜ？それでも勝つけどな」

寺坂が水を得た魚の如くイキイキとしている。気持ちはわかるが殴りかかられても文句は言えないレベルで憎たらしい顔をしているなど思った。

「それにしても珍しいな。カルマが全校集会来るなんてさ」

「だーってさ、今フケると逃げてるみたいでなんか嫌だし」

「まあ次のテスト頑張ろうぜ、俺もお前も」

「言われなくても刃は磨くよ」

「ところであの見慣れない女子は誰だ？」

「あーあれね、偽律だっさ。何でも律が機械だとバレないための必要な工作らしいよ。てか試験中気付かなかったの？」

「あんまり周り見てなかったからなー」

カルマと話していると終業式が始まりつつがなく進む。E組がトップ争いをしてしまったためいつものE組いじりもウケが悪い。本校舎の面々がバツの悪そうな顔でE組が堂々とした面持ちという逆の状況が生まれていた。

終業式が終わり教室に戻ると殺せんせーが俺達を待っていたのか
そわそわとした様子で教卓に立っていた。

「殺せんせーただいま。寂しかった？」

「ビッチがいるせいで終業式に来るなって烏間先生が言うんで寂し
かったですよ」

「あはは烏間先生そんなこと言ったんだ…」

倉橋と殺せんせーが話しているがたぶん単純に烏間先生は来るな
と言っただけだと思う。ビッチがいるからってなんだよ。

「それより皆さん、夏休みのしおりを作っておきましたよ！一人一冊
です」

あれしおりなの？分厚すぎてアコーディオンみたいになってるけ
ど。

「これでも足りないぐらいです！夏の誘惑はいとまがありませんか
ら。——さてこれより夏休みに入るわけですが皆さんにはメインイ
ベントがありますねえ」

「ああ、賭けで奪ったコレのことね」

莉桜がドヤ顔気味に学校のパンフレットを取り出し掲げる。

「本来は成績優秀クラス、つまりA組に与えられるはずだった得点で
すが今回の期末はトップ50のほとんどをA組とE組で独占してい
ますので君たちにだってもらう資格は充分あります」

みんなは殺せんせーの話を聞いてるようで聞いていない様子だ。
なんと言っても中学生の俺達としては魅力的なメインイベントであ
りご褒美だからだ。

「夏休みに行われる桐ヶ丘中学校特別夏期講習！沖縄リゾート2泊3
日！とても楽しみです！——君達の希望だと触手を破壊する権利は
この離島の合宿中に行使するということでしたね。触手7本の大ハ
ンデでも満足せず四方を先生の苦手な水で囲まれたこの島も使い万
全に貪欲に命を狙う。…正直に認めましょう、君達は侮れない生徒に

なりました」

殺せんせーは触手で額を搔きながら嬉しそうな表情になる。俺達は成長したことを告げられ明るい表情だ。

「親御さんに見せる通知表は先ほど渡しました。これは先生からあなた達への暗殺教室としての通知表です」

殺せんせーはA4用紙にもすごい速度で何かを書き教室にバツとぼら蒔いた。それは二重丸が書かれた紙だった。まるで桜吹雪のように教室いっぱい舞っている。

「二学期で培った基礎を存分に活かし夏休みも沢山遊び、沢山学び、そして沢山殺しましょう！——暗殺教室！基礎の一学期！これにて終業です！」

殺せんせーが夏休みの始まりを告げる。それと共に俺達は達成感の満ちた顔になる各々下校をする。もちろんアコーデイオンみたいな夏休みのしおりは置いていく。俺は鼻唄を歌いながら忘れ物がなかなど鞆を整理してから教室を後にした。

*

家に戻り昼食を食べ終えた俺は自転車で駅へと移動しバスが来るのを待っていた。程なくしてバスが来たので乗り込んで後ろの二人掛けの座席に座りイヤホンを装着しぼうつと外を見る。

テストから時間が経ったとはいえ徹夜して勉強してた疲れと夏休みに入ったという安心感から眠気があるなど思っていると肩をとんと叩かれた。

「あつすみません、もう少し詰めます」

「あはは、南雲君私だよ」

俺が顔をあげるとそこには小さめのバッグを肩にかけた私服姿の矢田がいた。

「ビックリした。てつきり座席が狭くて詰めろって言われたのかと」

「広いくらいだったから全然大丈夫だよ。それより南雲君もどこか用事があるの？」

そう言いながら矢田は膝の上にバッグを移し俺の隣に座る。

「隣の本屋に行こうと思って」

「奇遇だね！私も一緒だよ！」

「へへ何か買うの？」

「うん！ビッチ先生が薦めてくれた本買いに行こうかなって、朝の占いで遠くに足を伸ばすと吉って言ってたし！」

「えっひよっとして獅子座？」

「そうだけど…もしかして南雲君も？」

「8月5日生まれでな、矢田は？」

「私は8月1日だよ、誕生日近いね」

「一足先に軽く祝っちゃおう？」

「いいね！500円以内で祝うっていうのはどう？」

「冗談で提案したのにノッてきたことに少し驚く。

「えつまじで？俺はいいけど矢田は小遣いとか大丈夫か？」

「フッフッフ、修学旅行のお小遣いを残してあるから余裕があるのだ」

「なんか矢田って世渡り上手だよな、さすがビッチ先生の一番弟子というか」

「ちゃんと親には返そうとしたんだけどね。そしたらお小遣いにしなさいって言ってもらえたから」

「ちゃんと報告する辺り偉いな」

「その辺はちゃんとしないとね」

そう言つて矢田は片目でウインクする。こういう仕草はE組の女子の中で一番うまいと思う。

「それにしても乗客俺達以外いないな」

「平日のお昼過ぎだからね、朝とか夕方だったら利用者は多いと思うよ」

「そっか。普段利用しないから知らなかったよ」

すると出発時間になったのかバスが動き出す。

「本屋つてことは降りるところ同じだよな？」

「そうだな、なんか流れで一緒に行動する感じになってるけど矢田は

「いいのか？」

「うん！普段あまり喋らないし沢山話そうよ！」

矢田の発言はなんか勘違いしそうになるな。狙って言ってる感じもしないしビッチ先生の教えを受ける前からおねだり上手というか男子のツボを押さえてるんだろう。

「確かにあまり話さないな」

「でしょ？陽菜ちゃんの横とか凜香の横で話を聞いている感じだし」

「倉橋はわかるけど凜香と仲良いよな、なんか接点あるの？」

「ダンス仲間なんだよ。体育の空き時間とか二人でステップ踏み合ってるんだけど…見たことない？」

「ないなー、体育の時は鳥間先生の動きを見て盗むようにしてるから」

「あはは、私はビッチ先生の一番弟子だけど南雲君は鳥間先生の一番弟子って感じだよな」

「その自負はある」

「言い切るんだ！…そういうえば私が来る前にイヤホンで何か聴いてたよね？」

「ああ、ピロウズ聴いてたんだ」

「ピロウズ？」

「うん。ロックバンドなんだけど…知らない？」

「うーんわからない。…ねえ聴かせてもらっていい？」

「いいよ、ハイ」

「ありがと、じゃあハイ」

俺がイヤホンと携帯を渡すと矢田が携帯とイヤホンの片方を渡してきた。

「何となく察したけど片耳ずつ聴く感じ？」

「だってなに聴いたらいいかわからないもん。それにこっちのほうがどの部分を聴いてるかわかるでしょ？」

「あー確かに。じゃあ聴くか、音量は大丈夫？」

「…もうちよつと大きい方がいいかな。南雲君は大丈夫？」

「矢田に合わせるから心配しなくていいよ」

俺はとりあえずピロウズに興味を持ってほしかったのでなんと

く一番ウケやすそうな”Tiny Boat”を流す。

二人の間に会話はなくなったが無言なのに心地良い空気感が流れる。サビが終わった辺りで矢田が一言「私好きかも」と言ったので俺も短く「それはよかった」とだけ返した。

——1曲目が終わり2曲目に移りサビに入った辺りだろうか、矢田がkokokokと舟を漕ぎ始めた。それを見て少し笑った俺だが瞼が重くなってるのを感じた。

——…今何曲目だろうか？気付いたら俺は完全に意識を手放していた。

*

「…(´▽｀)？」

「…終着だって」

俺と矢田は結局降りるべき停留所を寝過ごしてしまい終点に着いてから運転手に起こされた。停留所の名前を見ると全然知らない地名が書かれていた。

「バスってぐるぐる同じところ回ってると思ってた」

「俺もそう思ってたが違ったらしいな。世の中知らん事だらけだ」

そう言いながら停留所に張られている時刻表を確認する。

「後30分くらいで帰り方向のバスが来るって」

「本当？」

「本当も本当。いやそれにしてもよく寝たから疲れが取れたよ」

「私も。テストの疲れとか色々溜まってたところに心地良い音楽だからね、寝るのも仕方ないよ。それよりバスが来るまで30分かー」

「…なあ、せっかくだしこの町を歩いてみないか？」

「…本当？」

矢田の目が子供ののようにキラキラと輝く。そのせいか何歳か幼く見える。

「俺達獅子座の今日の運勢は”遠くに足を伸ばすと吉”だからな。これでも何かの縁だと思って」

「そうと決まったら行こっか！別に30分後のバスじゃなくてもいいよね？」

「俺はいいけど矢田は大丈夫か？女の子だし親御さん心配しない？」
「ちゃんと連絡しておくから大丈夫だよ！それより南雲君は襷は持つてる？」

「持つてない、ていうかよくラッキーアイテム覚えてたな…」

切り替えが早い矢田が先導する形で歩き始める。

「矢田ちよい待ち」

「どうしたの？」

「知らない町だからな、迷ったら困るし今いる停留所の地点を登録しておく」

「そういうところしつかりしてるよね、南雲君って」

「イタズラをするときは逃走経路を複数用意するし何事も下準備が大仕事ってね。言うなれば第二の刃だよ」

「あはは、殺せんせーはそう言うつもりで言ったんじゃないと思うよ」

「よし、今度こそ行くか！」

「なんだかワクワクするね！」

矢田も共に歩く。家がただ並んでいるだけでも新鮮に感じ、なんとなくノスタルジックな感情が生まれる。

「なんだか不思議な感覚だね」

「わかる」

「普段目にしないし来ないから意識しないけど、私達が学校で過ごしてるときもこの町はここにあって機能してるんだよね…、なんて！らしくないかな？」

「いや俺も似たようなこと考えてた。子供のと違って目に入るもの全部新鮮で、今と同じ気持ちだったのかなって」

「そうだね、…あつ川だよ！」

「名前は…この川俺達の街にもあるな。例え迷っても川沿いに歩けば帰れるんじゃない？」

「私達の街に着く頃には足が棒になってるよ、きつと」

「そうならないために地図に停留所登録したからな」

「第二の刃じやなかつたの？」

「そうでもある」

「もう適当だなく。川を見て思い出したことあるんだけど…聞く？」

「矢田がどうしても話したいなら聞く」

「そうかそうか、南雲君はどうしても聞きたいのか。ならしようがない、話してあげよう」

「…そういうことでいいよ」

「子供のときってきなんだからわからないけど怖いものってなかった？」

「押し入れが怖いとか？」

「そうそう！そういうの！私の場合はさ、川が怖くて近づけなかったんだよね」

「へえ、どうしてまた」

「昔読んだ絵本でさ、河童が川から出てきていたずらっ子を懲らしめるっていうのがあったんだけどお母さんに悪いことしたら絵本の中の子供と一緒に河童に懲らしめられるわよって言われて。それで川が怖くなっちゃってさ。今はもう平気なんだけど」

「子供のときってさ大人の何気ない一言とか絵本で色々連想しちゃうって怖いものを自分で産み出しちゃうよな」

「そうなんだよね。南雲君もなにかそういうのある？もしかして押し入れ？」

「そのまさか、押し入れが怖かった」

「ちなみにどうして？」

矢田はいたずらっ子のような笑みを浮かべて尋ねてくる。俺もそうだがおそらくこういう今とは違うその人が持っている昔話などが好きなのだろう。

「絵本でさ、『いるのいないの』っていうのがあったんだけど知ってる？」

「あー怖いやつだよね！知ってるよ！でもあれって押し入れじゃなくて天井の暗がりじゃなかったっけ？」

「よく覚えてるな。それで幼稚園のときにその絵本を読んでなんとな

く暗がり怖くなったんだよ。夜に家の中の電気がついていない暗い部屋に入れなくなったりさ」

「うんうん。その感じわかるよ」

「それでまた別の日に違う絵本を読んだんだよ。今度は『おしいれのぼうけん』ってやつ」

「あー！確かイタズラをした子供二人が押し入れに入れられちゃうってやつだよね！」

「そうそう。押し入れに入れられた子どもがよくわかんないけど冒険に出るってやつなんだけど、俺は押し入れがどこか別の世界に繋がっているって考えちゃったんだな。暗いということも合わさって俺の中で押し入れという名のモンスターの誕生だよ」

「あはは、本当はなんてことないのにね。子供のとキッて不思議だよね」

「おかげさまで押し入れは明るいときも苦手だったよ。その時の名残で夜寝るときにクローゼットが少しでも開いていたら気になっちゃうんだよ」

「誰かが覗いているとか？」

「そうそう！そういうのってホラー映画によくあるだろ？ちよつとの隙間から殺人鬼が覗いていたりベッドの下に何か潜んでいたり」

「もしかして意外と怖がり？」

「うーん…怖いのは平気なんだけど色々連想しちゃうっていうのはあるな。矢田は平気なのか？」

「へっっちゃらだよ。弟がいるしお姉ちゃんの私がしつかりとしないからね！」

「お姉ちゃんは強いな」

「えへへ、まあね！」

「川からずいぶん脱線したけどとりあえず散歩を継続するか」

「そうだね！じゃあ行こ！」

そう言って矢田は俺の手を握って引張る。俺は驚いて咄嗟に引いてしまった。

「あ、ごめん。年が離れた弟がいるからクセになってるんだ。…嫌

だった?」

「いや、ビックリしただけ」

「それならよかった!それより手握る?」

「花のJCなんだから好きな人のために取っとけ」

「冗談だよ、それに私だって握る相手は選ぶよ。南雲君は大丈夫」

「それは褒め言葉として受け取っておくよ。それより手握るのはなしで。俺の心臓が持たない」

「私もちよつとドキドキしちゃうかな。南雲君って正直者だよ、金の斧と銀の斧両方もらえそう」

矢田の言葉に俺は思わず吹き出して笑ってしまう。矢田がそんな変なこと言ったかなと口を膨らませている。そんな矢田に俺は歩きながら笑った理由を説明する。

「正直者で泉の精を連想するっていうのが個人的に面白かったんだよ」

「むー、だってそう思ったんだもん」

「まあ確かに俺は金の斧と銀の斧の両方をもらえると自分でも思うよ。ただイソップ寓話とは違うもらいかたをする」

「どんな風にもらうの?」

俺はわざとらしく咳払いをし寸劇を始める

「泉の精が『あなたが落としたのは金の斧ですか?それとも銀の斧ですか?』って尋ねてくるから俺はこう答える。『私が落としたのは普通の斧ですが金の斧も銀の斧も欲しいです!』ってな。そんな正直者の俺を見て泉の精は『なんて正直者なんでしょう!』と感動して斧をくれるってわけよ」

「正直者すぎない!?!」

「両方もらって俺は更に続ける。『一本ずつと言わずもつとほしいな』』泉の精は『本当に正直者なんですな!』ってな感じで追加でもつと斧をくれるってわけよ」

「あはは、現代版イソップ寓話作ったら?他のお話もいじって」

「そうだな、その時の監修は矢田に頼むぞ」

「私プロデューズなんだ!?!」

「もちろん。…あつ和菓子屋だ。寄ってみてもいい?」

「うん。行こ行こ」

川から少し歩いたところに住宅地の中にある和菓子屋を見つけたので店内に入ってみる。そこにはいかにもなお婆さんが営んでいる店だった。

「あつきんつばだ!美味しそう!」

「和菓子って無性に食いたくなるときあるよね。…これなんだ?」

「それはべちこ焼きって言うんですよ」

俺の疑問にお婆さんが答える。和菓子といえば和菓子なのだが見た目の色がカラフルで今まで見たことのない物だったので目を引いたのだ。

「へえ。この町の名物かなにかですか?」

「いえいえ、そんな立派なものじゃありませんよ。私が作ってなんとなく命名したお菓子ですよ」

「じゃあべちこ焼き2つください」

「ハイ、240円になります」

俺が会計を済ませると矢田にひとつ手渡す。

「えっいいの?」

「矢田も食べたことないだろ?」

「うん。ありがと!」

「ありがとうございます、またのご来店をお待ちしております」

丁寧なお婆さんの店を後にする。店を出たところで買い食いのように食べながら散歩を再開する。

「ウマイなこれ」

「優しい味だね」

「隣町だったらリピーターになるかも」

「更はその隣だから車とかじゃないと来るのが辛いもんね」

「ネットで売ってたらなー」

「そうすれば願ったり叶ったりなのにな。和菓子といえばたい焼きって頭から食べる?それとも尻尾から?」

「頭からかなー」

「あつ一緒だ。ちなみに理由は？」

「頭から食べたなら餡が尻尾まで行き渡るから。矢田も同じ理由？」

「ううん違うよ。餡がたっぷり入った頭から食べて最後にカリっとした尻尾を食べるのが通の食べ方ってテレビでやってたから同じ食べ方してるんだ」

「頭から食べたなら餡が尻尾までいかないか？」

「そこはほら、微調整するんだよ」

「ガバガバじゃんか」

「むー。だつてたい焼きも店ごとに微妙に違うじゃん」

「それを言われたら何も言えないな」

どんなに下らない話をしようと歩みは止めない俺達。商店街のようなものが入ったのでそちらに進路を変更し尚も歩き続ける。

「矢田大丈夫か？歩き疲れてないか？」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「俺は体力に自信がある方だからさ、イマイチ加減というかどのくらいで普通の人が疲れるかってわからないんだ」

「心配しなくても大丈夫だよ！これでも訓練してますから」

そう言つて矢田は胸を張るが、如何せん発育が良い方なので目のやり場に困る。

「今日はまだ本買えなさそうな雰囲気だな」

「だね。でも普段とは違う体験出来るから私は満足してるよ」

「占い当たってるな」

「今までは良い占いだけ信じてたけどこれからは何でも信じちやいそうだよ」

「俺はラッキーアイテムは信じないけどな」

「私もそこはちよつとだけ考えるかな？…あつそこにある雑貨屋さんに寄つていかない？」

「いいよ。ついでにそこでお互いのプレゼント買うか」

「いいのあるかな」

入り口のドアを開けると小気味いい鈴の音のような音がドアの開閉に合わせて店内に響く。いや違う、鈴じゃない。たしかウインド

チャイムだ。

「それぞれで買い物して店の外で交換するつてのはどうだ？」

「おっいいね。プレゼントは開けてみるまでわからないってやつだね」

「そういうこと。じゃあ俺はこっちから見て回るから」

そう言つて暫し矢田と別れる。

500円という制限があるため豪華なものはいないので普段使うものから選ぶのが妥当だろうか。矢田が普段使うといったらポーチだろうか？いやでも既にお気に入りのものがあつたらあまり使われなくてもつたいないな。矢田といえば：ポニーテールだな。髪留めはありだな、わからないがいくつあつても困らないだろうし。

購入する物が定まつたのでファッションコーナーへと足を伸ばす。そこには所狭しと多種多様なヘアゴムなどのアイテムが陳列されていた。小学生がするような派手なものから大人がするようなシンプルで落ち着いた雰囲気のものまである。どれがいいだろうかと手に取ろうとしたその時南雲に電流走る。

誤算！ヘアゴムとシュシュの違いわからず！

矢田がいつも髪をまとめているのはシュシュっぽいやつだと思うのだがあれは果たしてシュシュなんだろうか？派手なヘアゴムなんだろうか？そもそも女物のファッションアイテムに詳しくないことに気付く。そんな状態でプレゼントを送つて微妙な顔をされたら俺はどんな顔をすればいいんだろうか。笑えばいいのか？

失敗する可能性を考慮した俺は別のコーナーに移動し第2候補を購入することにした。

俺がプレゼントを購入し店の外に出て5分ほど経つてから矢田も店から出てきた。

「ごめん遅れちゃつて」

「俺が早かつただけだから」

「じゃあ交換しようか。せーので出す？」

「掛け声は任せた」

「私一人で言うの？」

「二人で言ったら息が合わずグダグダになりそうだから」

矢田はもうつと頬を膨らますと後ろに隠したプレゼントを持ち直すように姿勢も正したので釣られて俺も背筋を伸ばした。

「いくよ?…:せーの!」

バツとプレゼントを互いに出すと同じ店で買い物したはずなのに二人の包装の仕方が全く別になっている。理由は明白だ、なぜなら――

「南雲君レジで自宅用って答えたんだね」

「矢田はプレゼント用なんだな」

「だって南雲君に渡すし」

こういうところで男女の性格の違いが出てくるなど感じる。俺はすぐに渡すものだしいいかと思いきや自宅用と答えた。

「それじゃ俺から開けるわ」

「気に入ってもらえるといいんだけど…」

俺は丁寧に包装されたラッピングを崩さないように開いていく。なんとなくながさつな男と思われなくなかったからだ。中身を取り出すと紺色のシンプルなタオルが出てきた。大人になっても外で使えるような落ち着いた色だなという印象を受ける。

「ありがと!今必要なものランキングベスト3に入ってたよ」

「よかった!ちなみにベスト3ってことは他にもあるんだ?」

「うん。1位は襷かな」

「嘘ばかり」

矢田はそう言って無邪気に笑う。ちなみに襷が1位な訳がない、ランキングベスト100にすら入らない。

「襷は嘘だけどタオルが欲しかったのは本当だよ。ありがとう」

「えへへ、じゃあ私も開けるね。…:わっ!ハンカチ?」

俺が迷いに迷って買ったものはハンカチ。これもいくつあっても困らないだろうかと思いきや選んだものだ。

「仮にハンカチじゃなかったとしたらグレードダウンしたタオルだな、大きき的に」

「色が薄ピンクなのは私の名前から？」

「それもあるけど単純に矢田っぽいなって」

「ありがと！嬉しい！」

矢田が子供ののように笑うのを見て俺も思わず笑みがこぼれる。

「結構いい時間になったし停留所に戻るか？」

「そうだね。それか川沿いに歩いて柵ヶ丘に帰る？」

「よし！そうするか」

「待って！冗談だよ冗談！」

「あはは、わかってるよ」

俺は停留所に戻るためスマホであらかじめ登録しておいた地点を確認する。地図で見ると停留所を始点として円を描くような形で歩いていたらしい。それほど停留所から離れていない場所にいることがわかった。

「まあバスがなかったら歩くことになるかもね」

「え、嘘、バスあるよね？歩くことになったら私大変だよ？」

「時刻表を見ないことにはわからんな」

ちなみに1時間に3本程度走っていることはここに来たときに見た時刻表で確認しているので俺は答えを知っている。

「ここから歩いて10分ないくらいだからとりあえず停留所に向かうか」

「大丈夫かなー…バスあるかなー…」

「なかつたら川沿いに歩けばいいだけだから」

「…南雲君妙に落ち着いてない？」

「…いや？」

「変な間があつたよ！っていうことはバスあるんでしょ！」

「……ないよ？」

「その反応はあるでしょ！」

「……いや？」

「もー！」

半分答えを言ってしまってるようなものだがあえて口には出さない。矢田の反応が見ていて単純に面白いからだ。あるでしよないよ問答を繰り返しながら10分ほど歩くとスタート地点でありゴール地点でもある停留所が見えてきた。矢田は走って一足先に時刻表を見るとやっぱりあるじゃん！と頬を膨らましている。

太陽が真上の辺りにあったのが今では低い位置にまで来ていて、それを見て時間の経過を実感しているとバスが到着したので乗り込む。二人で椅子に座ると矢田はふうーと軽く筋肉を伸ばす。

「疲れたん？」

「うん。久しぶりにあんなに歩いたよ」

「そんな矢田に……ほれ」

「えっチョココレート？」

「えっ嫌い？」

「同じこと考えてたんだってびっくりしてる」

「同じことってことはもしかして矢田も——」

「うん……ハイこれ」

矢田も同じくチョココレートを取り出す。それは互いにプレゼントを買った雑貨屋のレジに置かれていたものだ。歩き疲れた帰りのバスで食べようと思って買っておいたのだがまさか矢田も買っているとは。

「私達思考回路似てるのかもね」

「かもな。占い見て行動決めるとかな」

「私はたまたまだよ」

「俺もたまたまだ」

俺達は顔を見合わせて笑う。今日一日だけで矢田とかなり話した気がする、まるで今まで話していなかった分の埋め合わせをしたかのように思えた。

「なんだか今日デートみたいだったね！」

「そうだな、彼女とか出来たら今日みたいな感じなのかね」

「きつとそうだよ」

「まあ今のところは縁はないがな」

そう言つて俺は窓側に座っている矢田越しに外を見る。少し間があつたあとに矢田が俯き気味に言葉を呟く。

「…南雲君はさ、優しいからその人の気持ちに気づいてもきつと見て見ぬ振りをしたりとか、もしかしたら一人を選ぶことができないかもしれないと思うんだ」

矢田の呟きに俺はひどく動揺した。自分の中の核心をつかれた気がしたからだ。

「私は…まだ誰かを本気で好きになつたことがないからわからないけど、でも好きな人が出来たら返事に関わらずちゃんと答えてもらいたいって考えると思う。…だからもし誰かから想いを告げられたらちゃんと向き合つてほしいんだ。…これは私のワガママなんだけだね」

「…そうだな」

俺は矢田の言葉を聞きながら3月の終わりに岡野と話したことを思い出していた。

「…選ぶつて残酷だよね」

「…ああ」

「……うそうそ！今の全部私の独り言！忘れて！」

「忘れられそうにないけど…」

「そうだ！私行きと同じく音楽聴きたいな！ピロウズだっけ？また聴かせて！」

「わかつたよ」

ポケットからイヤホンを取り出し今度はちゃんと片方だけを渡す。

「2曲目にかかつてたの聴きたい！なんて曲？」

「”パトリシア”って曲だけど…あの時もう寝てなかつた？」

「か、完全には寝てなかつたよ！」

「そつか。…矢田、ありがとな」

「…だから独り言だつてば」

矢田がおそらく言いたかつたのはE組内で俺のことを好きな女子が複数いるということだ。そして一番言いたかつたのは返事のイエスノーに関わらずちゃんと向き合つて答えてあげてほしいというこ

とだった。俺はまだそれに関しての答えは持ち合わせていないが、だからと言って曖昧に返事を濁すのは相手だけでなく自分をも傷つける結果になるというのは理解している。理解はしているが――。

「そういえば、結局ラッキーアイテムの襷は必要なかったね」

「いや案外そうでもなかったぞ」

「えっどういうこと？」

「さあ？」

矢田は今日小さめのショルダーバッグを持っていた。それを肩が疲れないように右に掛けたり、左に掛けたり、時には斜めに掛けたり。襷その物はなかったが俺にとっては充分眼福だったのだ。

こうして俺と矢田の獅子座コンビによる小旅行は占い通り良い結果に終わった。

第24話 ガラスの脳

7月が終わると同時に3月を待たずして地球が終わるんじゃないかと思うくらい暑い日に俺は前原と共にある場所へ向かっている。「だから俺は旅行に着て行く服のどこかに遊びを取り入れたいんだけど、今持っているもの以外にもっと良いのがある気がするんだ」「ふーん、まあいいんじゃないねえの。俺は普通にラフな格好で行くよ」「とりあえずモテるために純一との被りは避けたいから服を見るだけじゃなくて似たようなものだったら言ってくれよ」「了解」

暗殺旅行のために前原に買い物に付き合ってくれと言われた俺。なんでも旅行に来ていく服にイマイチ納得がいてないらしい。

「1, 2年の頃はこうやってたまに一緒に出かけてたけど最近はめつきりなくなっちゃよな、なんでだろう?」

「そんなの前原が女の子により夢中になったから以外にないだろう」

「:そう言われてみれば。原因は俺か」

「まあでも中学に上がってから告白してくる人増えた気がする」

「あー確かに、小学生の頃はたまにだったけど。やっぱり男女を意識するからかね」

「十中八九そうだろうな」

「純一も自分の顔をもっと有効活用しろよ。やろうと思えば取っ替え引っ替えできるだろう?」

「俺はそういうのには誠実でいたいんだよ。前原だって絶対に二股とかはしないだろう?」

「:うん」

なんとなく歯切れが悪い気がしたがたぶん気のせいだろう。

「言い訳するとハッキリとした浮気ではないんだ。ただ付き合ってるときに他の女の子に目移りしちゃうときがあつてそれが過っただけだ」

うーん。綺麗な人がいたら目で追ってしまうのはわかるからしょうがないとは思うけど:人によっては嫌なんだろうな。

「そんなこと言ったら目的地に着いたな」

「ああ」

「前原の服って全部ここで揃えてるんだっけ？」

「そうだよ。マルイで揃えるのが俺の流儀だ」

俺達が目指していた場所はマルイ。マルイとは全国各地に大型商業施設を構えていて、プライベートルブランドだけでなく有名ブランドもテナントで入っている日本のデパート業界の大手だ。

「とりあえず見て回るか。まずはこっちからだ」

「うい」

前原の先導について行く。あまりマルイには来ないので店内のどこになにかあるかなどはほとんど覚えていない。

「ちなみに純一はどういう服装なんだ？3日もあるから完全に被らないのは無理だろうけど系統は別にしたいからな」

「たぶん3日とも七分丈のパンツスタイルだな、膝より上の短パンあんまり好きじゃないから。それにシャツをアウター感覚にするつもり」

「ふーん、俺もシャツをアウターにするから似た感じだな」

「俺は綺麗な感じでいくから前原はモテカジ系でいいんじゃない？」

「あーそうするかな。綺麗な磯貝の土俵だしな」

「とりあえずさっき言った系統で探すか」

「シャツとかは家にあるので大丈夫だからパンツだけでいいよ」

「あんまり金使うとデートにも行けないしな？」

「わかってるじゃん」

半分冗談で言ったんだが中々侮れない男だな。

前原に似合うパンツを探すこと数十分、パツとするものが見つからなかった。何着か試着してみると確かに似合うことには似合うのだがなんとなく違うと言って前原がNGを出していたからだ。

「前原、ひよつとするとなんだが…今日何も見つからないんじゃないのか？」

「奇遇だな、純一。俺もそんな気がしてきた」

「そんな前原に俺が竹林から教えてもらった素晴らしい言葉を授けよ

う」

「どんな言葉だ？」

『何を着たって自分は自分』…だそうだ」

「えっ竹林がそんなこと言ったのか？どんな状況？」

「いや普通に会話してて服装の話になったんだっただけかな？その時に竹林が言ってた」

「ほー。いやちよつと見直したよ」

「なんかのアニメの受け売りらしいけどね」

「へえー、何を着たって自分は自分か。…よし！旅行へはいつも通りの服装に行くことにするー！」

「…単純なやつ」

「うるせー。確かにどんなに良い服を着てたって中身が伴ってなかったら意味ないんだよ」

「なんで急にお前まで良いこと言ってたんだよ」

俺が前原の頭を軽くチョップすると前原がアハハと笑う。店員さんにチラ見されたので会釈をして謝る。

「せっかくこうして出かけたしな、色々と回ろうぜ」

「あっそれだったら俺なんか甘いもの食べたい」

「この辺だったら確か…」

「さすが前原さん、知ってるんですね？」

「そらそうよ、女の子が突然スイーツ食べたいとか言ったら困るからな。確か近くにある大きめの公園に人気があるクレープの販売車がよく来ているからそこに行ってみるか。そこで噴水とか見ながら食べるのが乙なんだよ」

「ほーん、じゃあ行くか。どれくらいで着く？」

「20分くらいだな。男二人だからもう少し早いかもだけど」

「じゃあのんびり歩きながら行きますか」

「おう、店を出て少し真っ直ぐ行ったところにある公園だから」

「少して言ってたって20分かかるんだろ？」

「それは女の子と歩いたとき」

揚げ足を取るようにならかうと今度は前原が俺の肩に軽くパンチ

してくる。

予定が変わったので2人で並んで歩いて目的地へと向かう。

「なんで休日なのに男と並んで歩いてるんだろうな」

「忘れてるかもしれないけど言い出しっぺはお前だからな」

「冗談だよ、それに今はフリーだしな。だから南の島にかけてるんだ」

「E組の中には良いと思う人いないのか？」

「うーん…全敗してるからなあ」

「そういえばそうだったな。岡野はどうなんだ？他のE組女子とは違う感じで接してる気がするけど」

「あー岡野は違うんだ。女子というよりは男子同士で馬鹿を言い合うみたいな、そっちに近いな」

「いやわかんないぞ？これは俺の言葉じゃないけどその人との会話や思い出が蓄積していったって好きだということに気が付くらしい」

「それじゃあ俺も岡野のことを好きになる可能性もあるってことか」

「そういうこと」

「そっかあ。ところでそういう純一はどうなんだよ」

「俺？俺は…わからん」

「そっか」

「…思ったより突っ込んでこないんだな」

「友達の恋を掻き乱すのは野暮だろ？」

「意外と分別あるのな」

「ナチュラルに失礼だな。俺はE組のみんなが大事だからそういうからかいとかで関係が壊れるのは嫌なんだよ。…俺から純一に一つ言うとしたら難しく考えるなってことだな」

「難しく考えているつもりもないんだけどなあ。好きな人いないじゃダメなのかね」

「ダメじゃないさ。きつかけや好きのラインなんて人それぞれだし」

「ちなみに前原の好きだなんて思うラインは？」

「うーん…その人ともっと話したいとか手を繋ぎたいとか友達以上の関係を望むってことかな。上手く言えないけど」

「なるほどね、参考にしとく」

「いや本人それぞれだよ。1日に3回その人のことを考えたら恋っていう人もいるし」

「あはは、なんだそれ」

真面目な顔なのに言ってる内容が少しぶつ飛んで思わず笑ってしまった。そんな俺を見て前原も笑う。

「よし次の話題に移ろうぜ」

「話ってそうやって移ってくもんだっけ？」

「細かいこたあいんだよ。それで純一なんかないか？」

「そうだな……前置きとして前原サッカー部だったよな？」

「そうだよ。おかげで暗殺の基礎体力もばっちりだ」

「そこで質問なんだけど飲み物でミロってあるだろ？あれって何でサッカーのパッケージなの？」

「たしかサッカー以外のパッケージもあった気がするけど」

「まじで？」

「うん。それでパッケージが何でサッカーかは知らないけど名前の由来は知ってるぞ。古代ギリシアのミロンだから人から取ってるらしいぞ」

「へえ。そのミロンはサッカーやってたの？」

「いや古代オリンピックピクがどうかだったかな……。サッカーの監督が言ってたのを覚えてたからうる覚えだよ」

「なるほどな」

「ミロってさ上手く混ぜらなくね？上にダマが出来ちゃうから飲むっていうよりはそのダマを食べる感じになっちゃわないか？」

「あのダマうまいよな。単体で出したら売れるレベルで」

「な？正直ダマがミロの本体になっちゃってる感がある」

「前原ひよっとしてココアとか作るときも上手く混ぜってないだろ」

「えっ何でわかったの？」

「俺も昔は上手く混ぜらなかつたから。今ではミロでもダマなく作れる方法を編み出したんだよ」

「一応教えてくれよ。最初に言っておくけどお湯で混ぜるのはなし」

「冷たい牛乳だけでいけるよ。ちなみに前原の入れ方を教えてくれ」

「粉をスプーンで数杯取ってそこに牛乳を飲む分だけ入れる」

「カップは用意しないのか」

「してるに決まってるだろ！用意してる前提だよ！」

「冗談冗談。ところで入れ方だけどちよつと違うわ。牛乳は少量入れて混ぜてから飲む分だけ入れるんだよ」

「へえー」

「少量の牛乳で粉を混ぜるとペースト状になるんだよ、そのあとに飲む分だけ入れて混ぜれば普通より溶けやすいからダメがないミロ、またはココアの完成」

「手順一つでなかなか違うんだな」

「ちゃんと混ぜてるから味も変わってるんだよ。体感だけど」

「今度やってみよーっと。良いこと聞いた」

「話が随分と変わるけど今日前原と合流する前に理事長に会ったわ。A組に来ないかって」

「えっ」

俺の突然の告白に間の抜けた返事をし、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする前原。

「もちろん断ったけどね。成績良かったから声をかけたんだと思う」

「おま、いきなりこんな重要なことぶつこんでくるか普通」

「ごめんごめん、でも答えはわかりきってただろ？」

「それはそうだけど…。なんか理事長って大人の汚さというかずる賢さがあるよな、この間の俺が本校舎の連中と少し揉めたときもさ」

「あの人は俺が今まで出会ってきた人の中で群を抜いて頭が良いと思う。殺せんせーとか烏間先生は置いておくとして純粋な一般人であれだけの人って中々いないよな。前原が言ったように大人の汚さみたいなものもあるけど理事長の場合は完全にそれらを理解して使いこなしてる気がする」

「確かに…。あつ公園見えてきたな」

「見えてきたっていうか到着したな。クレープ屋来てるかな」

少しでも遠くが見えるように背伸びをする俺と前原。正直意味が

ない行動だなと思ったがなんとなく背伸びをしてしまうのは人間の習性なので仕方がない。

「来てるな、純一早く行こうぜ」

「急がなくても逃げないだろ。前髪しかないわけではないだろうし」

「それってなんだっけ？」

「チャンスの神様」

逃げはしないだろうが気持ち早歩きになる俺と前原。販売車の下へと着くと車の横側に記載されているメニューを見る。

「前原さん、おすすめはなんですか？」

「そうですね純一さん、イチゴとバナナが美味ですよ」

「何で前原さんまで敬語になってるんですか？」

「純一さんが敬語になったんじゃないですか？」

「…似非貴婦人というか今の俺等かなり馬鹿っぽいな」

「…そうだな、やめておこう」

店員さんに何にしますかと聞かれたので俺はオススメと言われたイチゴを選び前原はバナナを選んだ。お金を払い溢さないように気をつけてくださいとクレープを手渡される。生地が焼きたてらしく温かい、そして何より見た目がよく美味しそうなので人気なものも領ける。最初に説明された通り噴水の近くのベンチに腰かけて食べる。

「これは…：かなり美味しいな。イチゴの酸味とチョコと生クリームの甘さが絶妙」

「だろ？別の味を頼んで女の子とあーんし合ったりするのが定番だ」

「ほーん。前原のバナナクレープも一口くれよ」

「いいよ。純一のイチゴも一口くれ」

という訳であーんで食べさせ合う。他意はない。

「あつ前原、お前今二口食ったろ」

「いやいや、今俺が食べた場所にイチゴが乗ってなかったんだよ」

「風味あるだろ」

「風味じゃダメだろ！ていうか純一は俺のほうに乗っているバナナ食べたしこれでフェアだろ？」

「まあ気にしてないしいいよ、単純に突っ込んだだけ。バナナのほう

も美味しいな」

「人気ナンバー1と2だからな。当然だ」

「あーそういうえば手書きのポップで書かれてたな」

「販売しているお姉さんらしい可愛い字だったな」

「いや知らんけど。後ろで作ってる男の人が書いてる可能性もあるぞ」

「やめろ！夢を見させてくれ！」

「なんか今の会話で思い出したことがある」

「ん？なんだ？」

「よく飲食店とか行ったらさメニューに”店長のオススメ！”って書かれてるじゃん。人気ナンバーとかとは別に」

「あー確かに書かれてるな。それがどうかしたか？」

「いやあれってさ、店長だけがオススメして他の従業員は反対してるんじゃないかとか考えちゃうんだよな」

「そんな捻った考え持つてるのは純一くらいだろ」

「えー」

「いや、えーって。…まあでも店長のオススメとか書いてるけどただ単に在庫というか売りたいやつを薦めてるだけじゃないかとは考える」

「前原のほうがよくつぼど捻くれてるというか汚い考えだな」

「なんでだよ！大人というか商売人はそういうところ汚いだろ！」

「いやいや、前原。お前の考えが汚いだけだ」

「ええー…」

互いの考えを貶しあうという何とも生産性のない会話をしてしまったなと思わず苦笑いをする。

クレープを食べ終わったのでゴミを近くに設置されているゴミ箱に捨てに行く。

「いやークレープ美味かったな」

「気になる子いたら誘ってきてみるよ。きつと喜ぶぞ」

「考えとくよ。…前原、あそこ。ベンチのところ見てみる」

「ん？……女の子が泣いてるな」

「どうする?」

「女の子が泣いてるんだからすることは決まってるだろ」

前原の言葉に俺は頷き泣いている女の子の下へと行く。近くで見ると遠くで見たときより小さく見えた、年齢は小学校低学年くらいだろうか。とりあえず女の子に声をかけてみる。

「グスツ、グスツ」

「どうしたの?どこか痛いの?」

「グスツ、ちがう」

「ひよつとして迷子?」

「グスツ、ちがうもん」

女の子の反応に俺と前原は顔を見合わせ無言で会話する。俺がどうすると目で訴えると前原がクレープがある方角を顎でクイツと示す。つまりクレープを与えてまずは泣き止ませようということだ。俺は無言で頷き買いに行く。再び買いに来た俺に店員さんは少し驚いた様子だ。

「いらつしやいませ…つて、あら?さつき二人組で買いに来てた子だよね?」

「あつ覚えてましたか」

「その日に販売したお客様の顔は忘れないよ。君達の場合はメニューを見て面白いやり取りをしてたから尚更ね」

「あ、あはは」

あの下らないやり取りを聞かれてたかと思うと作った苦笑いしかできなかった。

「それで買いに来たんだよね?そんなに気に入ってくれたの?」

「確かに美味しかったんですけど、またこれには訳がありました…」

俺が事情を説明すると女性店員は偉い!と褒めて言葉を続ける。

「そういうことならタダでいいよ!ねっいいいよね?」

クレープを作ってるお兄さんに確認するともちろん!と男性の声が後ろから聞こえる。

「いや、そんな悪いですよ。こんなに美味しいクレープをタダでなんて」

「いいのいいの！その代わりちゃんと女の子の件を解決するんだよ！」

「ありがとうございます。そういえば僕と一緒にいた奴がお姉さんの字を褒めてましたよ」

「あつこの字？あはは！この字を書いたのは私じゃないよ、後ろの彼だよ。顔に似合わず可愛い字書くでしょ？」

前原…、嘘から出た実というかまじでお姉さんじゃなかったぞ…。

「それじゃあ…ハイこれ！イチゴ味にしたから女の子も食べれると思うよー！」

「ありがとうございます。では」

お姉さんからクレープを受け取ると溢さないように前原達の下へと戻る。心なしか会ったばかりの時よりも泣き止んでる気がする、さすが前原。

「ハイこれ、美味しいよ？」

「…いいの？」

「うん。イチゴは食べれる？」

「…すき。…ありがとうございます」

女の子にクレープを渡すと少し笑った。それを見て安心すると前原が袖をクイツ引つ張ったので小声で話す。

「…純一わざわざクレープ買ってきたのか？」

「…わざわざって前原が顎で示したろ」

「…あれはそこの自販機で飲み物を買えって意味だよ」

「…確かにクレープ屋行く途中にあっただけだよ」

やはり言葉にしないと意思疎通は出来ないようだ

「…それで女の子からなにか聞けたか？」

「…名前ぐらいしか」

「…充分だ、それで名前は？」

「…あおいちゃんだって」

「…あおいってどういう字書くんか？」

「…知らんわ。小ボケを挟むな」

俺が前原と小声で会話を続行しているとあおいちゃんとやらはク

レープを食べ終わったので出来る限り優しく質問をしていく。

「どう？落ち着いた？」

「…うん」

「名前あおいちゃんって言うんだって？」

「…うん」

「あおいちゃんは どうして泣いてたの？」

「…えつとね、…グスツ」

あつやべ、また泣きそうになってる。選択肢ミスったか？

「バツカ、こういうのは徐々にいくんだよ。これだから一人っ子は」

「…お前も一人っ子だろ」

「姉二人いるわ」

「マジで？」

姉が二人いるっていうここに来ての衝撃の告白。だから女性に対して抵抗なしのチャラ男になってしまったのか。

「大丈夫だよ。嫌だったら話さなくていいから」

「…ううん、だいじょうぶ」

「そっか。あおいちゃんは強いね」

そう言っであおいちゃんの頭を撫でる前原。これが一人っ子とそうでない者の違いか。

前原の神対応によって話始めたあおいちゃんの話の要約すると、あおいちゃんが持ってきていたお気に入りのお人形を一緒に遊びに来ていた友達が羨ましがったらしく人形をちよつと見せてくれと頼んだらしい。あおいちゃんはちよつとだけなら人形を渡したらそのまま返してくれずいなくなってしまうので泣いていたところを俺達2人が発見という流れだ。

なんというか、物を羨ましがってる奴にそれを渡したら返してくれないのは目に見えてるといふか想像つくけどなあと思った。

「あおいちゃんはその子のこと怪しいなとか思わなかったの？」

「だってみずきちゃんはトモダチだし…」

「そっか、あおいちゃんは優しい子だね」

少しも疑わないのか。俺もこうだったのだろうか。

「おにいさんたちの名まえなんていうの？」

「俺は南雲純一だよ」

「俺は前原陽斗」

「ジュンイチとヒロトはこういうときどうする？」

「まあその子と…みずきちゃんと話すかな」

「俺も同じかな。どうしてこういうことするの？つて」

「…なかなかおもしろいけどみずきちゃんいないし」

「みずきちゃんとは二人で一緒に公園に来たの？」

「…うん。あおいはこうえんにきたことあったからいつしよにあんないしてあげたの」

「ならきつとみずきちゃんは戻ってくるよ。一人じゃ帰れないからね」

「みずきちゃん来るまでお兄さん方とお話ししよつか」

「いいの？あおいとおはなししてくれるの？」

「もちろん！」

「やった！えつとね、このあいだがつこうでね！——」

——それでね、あおいはユウキくんよりヒロキくんのほうがカッコいいとおもうんだけどカナちゃんはユウキくんのほうがカッコいいっていうんだ。でもそれって——

——たいいくのときにユウキくんがあおいにさか上がりおしえてくれだけど、それでユウキくんのほうがいいなって思ったんだ！」
な、長え。そして中身がねえ。わかったことと言えば、

・あおいちゃんは小学1年生

・カナちゃんだかはユウキ君推し

・最近のあおいちゃんの押しもユウキ君

以上3点。なんで女子小学生はこっちも知ってる前提で登場人物を話の中で増やすんだ。ユウキ君もヒロキ君もカナちゃんも知らんよ。辛うじてこの3人は覚えれたけどあおいちゃんの怒濤の小学生事情のせいで何も頭に入ってるよ。

それでも俺と前原は頑張ってるあおいちゃんの話に相槌を打ち続けた。俺達中学生が中身のある会話をしているととは思わないけど話の起承転結って大事だなと実感させられた。あおいちゃんの話は起起起ばかりでたまに承が入ってくる。当然転結などありはしない。

「へえ、あおいちゃんはヒロキ君よりユウキ君のほうが好きなんだね」

「ヒロキ君のほうがカッコいいよ。ヒロトはちゃんとお話ししてなかったの？」

前原：お前は悪くない。俺が前原に同情の視線を送っていると前原が何かを見つけたように俺にあつちを見ると口パクで伝えてくる。示された方向を見ると人形を持った女の子がこちらを伺うように少し離れたところから見ていた。俺はあおいちゃんに飲み物買ってくるねと言ってその少女の下へと向かう。とりあえず途中にある自販機でココアを2本買ってから話しかける。

「もしかしてみずきちゃん？」

「そうだけど：おにいさんはなんでみずきのことしってるの？」

「あおいちゃんから話を聞いたからだよ」

「：あおいちゃんおこった？」

「ううん、仲直りしたいって言ってたよ」

「ほんと？」

「本当だよ。でもその前にどうしてあおいちゃんの人形を取ったのか教えてくれる？」

「：だってうらやましかったから。さいしよはちよつとみせてもらうつもりだったけど：手にもったらほしくなっちゃって：」

「そっか、でもどうして戻ってきたの？そのまま帰っちゃわなかったんだね」

「だってあおいちゃんにわるいことしたなっておもったし：かえりみ

ちもわからなかったし…」

「悪いことしたってわかってるならみずきちゃんは大丈夫だね。それじゃあどうしたらいいかわかる?」

「あおいちゃんにあやまる…」

「お！わかつてるなんて偉い！」

俺がそう言っつて前原の真似をしてみずきちゃんの頭を撫でる。すると少し俯いてしまったのでまた選択肢をミスったかと焦る。

「あおいちゃんゆるしてくれるかな…?」

「大丈夫だよ、お兄さんが一緒に行つてあげるから。それなら行ける?」

「…うん。おにいさんなまえなんていうの?」

「南雲純一だよ」

「ジュンイチありがとう」

あおいちゃんと同じく呼び捨てかい。妹いないからわからないけどいたらこういふ感じなんだろうか。

「どういたしました。じゃあ行こつか」

手を繋いで前原達の下へと向かう。なんとなくみずきちゃんの手が震えてる気がした。

「あつ帰ってきた」

「ジュンイチおそい!…あつ」

みずきちゃんを見てぼつが悪くなったのか急に大人しくなった。とりあえず早く仲直りしてほしいから助け船出しますか。

「みずきちゃんが言いたいことあるんだって、聞いてくれる?」

「うん…」

「ほら、みずきちゃん」

「…おにんぎょうさんとつてごめんね」

「ううん、あおいもちよつとじまんしちゃったから」

「…なかなかおりしてくれる?」

「うん」

「ありがとう、これおにんぎょうさん」

「いいよ、ふたりであそぼ?」

「…うん！」

2人のやり取りを見て思わず笑みが溢れる俺と前原。

「2人とも仲直りして偉いな。ハイこれ」

「あっココアだ！」

「ジュンイチいいの？」

「いいよ。喧嘩せずに仲直りした2人へのご褒美だから」

「ありがとうー！」

「どういたしまして」

「じゃあわたしたちいくね！ヒロトもありがとう！」

「おう！今度は喧嘩しないようにな？」

「うん！じゃあバイバーイ！」

2人に手を振り別れる。ようやくと一段落ついた俺達はベンチに座り深く溜め息をつく。

「あー疲れた」

「女子小学生ってあんなに扱い大変なのな」

「その割に手慣れてた感じがしましたけど？前原さん？」

「俺達が狼狽えてたらあおいちゃんも戸惑っちゃうだろ」

「たしかに」

「思いの外すんなり仲直りしてよかったな」

「そうだな。：俺達って喧嘩したりとかして先生とかに怒られてさ、

とりあえずポーズみたいな形で謝るじゃん？」

「その場限りの取り繕いみたいな感じでな」

「そうそう。でもあおいちゃんとかは幼いからそういうのわからない

と思うんだよ。邪な考よこしまえがないっていうのかな」

「あーたしかにな」

「相手が謝ったら許すっていう教えられたことを当たり前のようにやってるけどさ、なんか年齢を重ねるにつれて難しくなってくるよな」

「俺も岡野に直接謝れなくて純一経由で謝ったしな」

「そういえばそんなこともあったな」

「だからあの二人を見てたら眩しいものを見せつけられた感じがした

よ。純一も俺が悪いことしたらちやんと許してくれよ？」

「内容による」

「そこは許せよ！」

2人で馬鹿みたいに笑い合う。

笑いながら俺は小さいときの喧嘩のことを思い出していた。昔の記憶を手繰っても幼いときの喧嘩で解決しなかったものは一つもなかった、全て仲直りという円満解決のみだった。

しかし最近ではどうだろう。仲違いするような喧嘩はしてないが、仮にしたとして果たして先程のようにスツと仲直りすることができらるだろうか。素直に首を縦に振ることができない俺は大人へと近付いているということなんだろうか。

色々と考えていたが前原の声に俺は現実には引き戻される。

「なんか安心したら腹減ってきたな。またクレープ食べないか？」

「そういえばな、前原」

「なんだ？」

「クレープ屋さんの字な、お姉さんのじゃなかったわ」

「え？てことは…」

「後ろのお兄さんの字だ」

「バ、バカ野郎！そういうことは知ってても言わないもんだろ！」

「あはは！悪い悪い！」

「ちくしょう！夢壊しやがって！許してやらねー！」

前原はこんなことを言ってるが少し大人に近付いている俺は知っている。言葉とは裏腹に前原があまり怒っていないこととすぐに許してくれるということ。そういう建前がわかるようになってる辺り大人になるのも悪くないなと思った。

8月

第25話 策謀の時間

倉橋：ハロハロく

南雲：ハロー

倉橋：純君明日って用事ある？なかったら一緒に出かけよう

南雲：実は明日朝から用事あるんだ

南雲：誘ってくれたのにごめんな

倉橋：私の方こそ急にごめんね？

南雲：今度埋め合わせするからさ

倉橋：ホント！楽しみ！

南雲：それじゃあ朝早いから寝る、おやすみ

倉橋：おやすみく

*

7月某日。朝6時。俺は今E組校舎のある山に来ている。

「おい純ー！トラップを早く設置するぞ！」

「待て岡島。まだ慌てる時間じゃない」

「今日のトラップは今までの中で極上ものなんだ！早く設置しなきゃ鮮度が落ちる！」

「鮮度で。お前小学生の頃の方がまだ頭よかつたんじゃねーの」

「あの時の俺は世の中を窮屈に感じていた！だが今は違う、体の成長に伴って俺は自分の中の殻を破ることに成功したんだ！」

「ハイハイ。……ネットは仕込んだぞ」

「よしこれで餌を大量に巻いて……一番上にこれを置けば完成だ！」

「まあ今まで一番成功しそうな気がしなくてもないけど……」

「なんだよ純ー、不満があるのか？」

「だってエロ本じゃん。不満はないが釈然としない」

極上ものだとか鮮度だとかどんなに言葉で着飾ってもエロ本はエロ本。仮に暗殺が成功したとして俺だけじゃなくて世界が釈然としないだろう。暗殺成功の鍵はエロ本だなんて。

「その内お前も目覚めるよ。…エロにな!」

「力強く溜めて言わなくていいから。それよりなんか食おうぜ、コンビニで色々買ってきただろ?」

「ちようど目の前にオカズもあるしな」

「ちよつと面白いのが腹立つな」

そう言つて俺と岡島は朝食を取る。俺の今日の用事は一言でいうと”岡島の暗殺に付き合う”だ。作戦概要を説明すると、

大量の餌（エロ本）を巻いたトラップの下に対先生弾を繋ぎ合わせたネットを仕込み、殺せんせーが餌（エロ本）に夢中になるときにネットと連動しているロープを切つて捕縛、飛び出してナイフで止めを刺すというものだ。

「でも夏休みだけ?都合よく殺せんせーが来るか?」

「標的の行動パターンは午前7時過ぎくらいにこの山にあるエロ本廃棄スポットで芸術鑑賞したあとに教室に行っている。みんなが登校するのは大体午前8時頃、俺はみんなより少し早めに登校してこっそりと殺せんせーのエロ本に対する反応を研究したんだ。夏休みに入つてからもこのパターンは変わっていない。事前に表情の変化の画像を見せたら?」

「ああ、あの百面相ね」

俺は岡島にこの作戦を持ちかけられたときにエロ本に対する殺せんせーの反応という画像フォルダを見せられた。そこには絵柄、シチュエーションなど多種多様なエロ本に対しての表情の変化を見せる殺せんせーが映っていた。

「どれ純一も待つてる間に一冊どうだ?」

「お酒を薦めてくるおっさんみたいにエロ本を差し出すな。俺はスマホをいじってるよ」

「そうか。…さつき純一はこの作戦を釈然としないって言つてたがエロ本に対して罪の意識でもあるのか?」

「別に罪の意識はない。ただ…：そうだな、岡島の言葉を借りるならまだエロに目覚めてないだけかもしれない」

「ふっ大丈夫さ。年齢を重ねていくと共にエロに対する罪は反比例曲線のように小さくなる。反比例と違いやがて0になるのさ」

俺が呆れて携帯を取り出すと倉橋から連絡が来ていた。トーク画面を開くと倉橋が現在いる場所の画像が送られてきていたのだがそこには見覚えのある風景が広がっていた。

「岡島、誰かが来ていたらこの作戦に支障は来すか？」

「いや殺せんせーは一度エロ本を読んだらよほどのことがない限り気づかない。メタルギアの兵士をイメージしてくれ」

「わかりやすい説明どうも。この山に今倉橋が来ているから報告しておく」

「倉橋が？どうして？」

「さあ、わからん」

「！、標的がきた。じっとしてろよ」

音をたてないようにそつと盗み見ると既にエロ本を熟読している殺せんせーがいた。岡島も同じく殺せんせーを見るとニヤリと笑いドヤ顔で説明をする。

「あの殺せんせーのデレ顔見覚えがないか？」

「ビッチ先生が初めてE組に来たときにおっぱいを見てあんな顔してたよな」

「さすが純一、正解だ。まるで目の前に生のおっぱいがあるかのようなデレ顔。やはり俺の考えに狂いはなかった、今日の獲物が殺せんせーのど真ん中ストライクだ。…もう少し熱中した頃に作戦を決行しよう、同じエロを追い求める者として自分の理想を目の前にして命を終えるのは忍びないからな」

「了解」

「生のおっぱいで思ったことがあるんだが…：聞いてくれるか？」

「どうぞ」

「生チョコとか生キャラメルとか生のつくものは総じて素晴らしいだろ？でもそれって洋菓子ばかりで和菓子は少ないように感じる。そ

ここで生煎餅なんでもものを作ったらかなり売れるんじゃないか？」

「煎餅が生だったらそりゃ餅だろ」

「…なるほど、餅だ」

岡島が妙に納得してる中、近くから声が聞こえてくる。それも一人だけでなく複数だ。

「岡島、誰か来た」

「この声は…倉橋と杉野？」

耳を澄ますと確かに倉橋の声が聞こえてきた。だんだん俺達に近づいてきてるのか会話が鮮明になっていく。

「お手製のトラップを20箇所位仕掛けたからうまくいけば1人あたり10000円は稼げるよ」

「おお、バイトとしちやまずまずだな」

「純一、聞いたか？」

「会話を？まあ聞こえたけど」

「ちよつとあいつらに説教してくる。純一はそのまま標的の監視を続けてくれ」

「ラジャ」

そう言つて岡島は倉橋たちに近づいていく。すると少し離れた、大体10mくらいの距離から声が聞こえてくる。

「効率の悪いトラップだ、それでもお前らE組か！」

「岡島！」

「せーせー10000円稼いでいる場合か？俺達のトラップで狙うのは百億円だろ！」

「百億つてまさか…」

「その通り、殺せんせーだ。…こつちにそつと来い、いいものを見せてやる」

岡島がそう言うのと複数人がこちらに近づいてくるのがわかる。それでも殺せんせーは微動だにせずエロ本を読んでいる。岡島がメタルギアの兵士と言つたのも頷ける。

「じゅ、純一!？」

「あつ！純君！おは〜！」

「おはよう倉橋。みんなもおはよう」

倉橋、友人の他に渚、前原がいた。なんだこの謎メンバー。

「みんなあれを見ろ」

岡島が殺せんせーを指差すとみんなは呆れたような顔で驚く。

「すげえ…スピード自慢の殺せんせーが全く動かない」

「よほど好みのエロ本なのか？」

「まさかこの作戦の立案者は純一か？」

「前原、違う、俺じゃない」

「いや、それでもだ。エロに対して関心がなかった純一が岡島の作戦に、それもエロ本を利用した作戦に協力するなんて。…純一、2つの意味で一皮剥けたな」

「うまいこと言えてねえし、ぶつ飛ばすぞ？」

「みんなも手伝ってくれ、エロの力で覚めない夢を見せてやろうぜ」

「でも殺せんせーって巨乳なら何でもいいんじゃない？」

「渚の疑問はもつともだと思うが岡島は殺せんせーの好みを相当研究したんだ」

「純一の言うとおりで。俺は殺せんせーを研究した、いや、し尽くした。みんなも気づいてほしい。エロ本は夢だ。人は誰しもそこに自分の理想を求める。写真も漫画もわずかな差で反応が全然違うんだ。お前のトラップと同じだよ倉橋、獲物が長時間夢中になるよう研究するだろ？」

「……うん」

普段岡島のエロい話をスルーする倉橋が引くくらい熱弁を振るう岡島。倉橋に軽くなにかごめんなって言うといいの気にしないので笑って返してくれた。そんな倉橋になんだか泣きそうになった。

「俺はエロいさ、蔑む奴はそれで結構。だがな誰よりエロい俺だから知っている。エロは…世界を救えるって。純一、作戦決行のときだ。ロープを切って発動させてくれ」

「合点」

さっきの岡島はなんかカッコよく見えた。どんなものでも研ぎ澄ませば刃になるということを岡島が教えてくれた気がする。

「な、なんだ!?!あの目は!?!」

岡島が急に狼狽えたので殺せんせーの方を見ると目がみよーんと伸びていた。その顔は今まで見たことのないものだった。

「ヌルフッフ、見つけましたよ」

そう呟くと触手をシユパツと目にも止まらぬ速さで動かす。すると手に何か持つているのが見えた。

「ミヤマクワガタ、しかもこの目の色!」

「白なの!?!殺せんせー!」

倉橋が急に飛び出していく。どういうこつちや。

「すつごーい!探してたやつだ!」

「ええーこの山にもいたんですねえ」

よほど嬉しいのか二人は飛び跳ねて喜んでいる。エロ本の上で担任の先生と同級生の女子が飛び跳ねているのは生涯見ることができない光景だろうなと思った。

俺達も倉橋に遅れて出ていくと殺せんせーは急停止する。どうやらエロ本があるということを忘れていたらしい。そしてそれを読んでいたということも。両手で手を覆い恥ずかしいと呟き続ける。

「面目ない…教育者としてあるまじき姿を…」

「いや、まあ、うん。でも殺せんせーだから」

「本の下に罾があるのは知ってましたがどんだん先生好みになる本の誘惑に耐えきれず…」

「岡島、バレてたな」

「そんな馬鹿な!?!」

「で、どーゆー事よ倉橋?それってミヤマクワガタだろ?ゲームとかだとオオクワガタより安いぜ」

「最近ミヤマの方が高いときが多いんだよ、まだ繁殖が難しいからこのサイズなら2万はいくかも」

「2万!?!」

「そしてよく目を見てください、本来黒いはずの目が白いでしょう。授業で”アルビノ個体”について教えましたね?」

「ああ、ごくたまに全身真っ白で生まれてくるやつだろ?」

「全身とは限りません。クワガタのアルビノは目だけに現れ”ホワイトアイ”と呼ばれます。天然ミヤマのホワイトアイはとんでもなく希少です。売ればおそらく数十万は下らない」

「す、数十万!?!」

「一度は見てみたいって殺せんせーに話したらズーム目で探してくれるって言ってたんだあ。ゲスなみんな、欲しい人手ー上げて♪」

「欲しい!」

そう言って倉橋が逃げるのを男子達は追いかける。あの渚までもが走ってるのを見て俺は思わず笑ってしまった。

「おや南雲君は追いかけていいのですか?」

「もうすぐ南の島で百億円手に入りますからね。それに比べたら数十万円なんて」

「ヌルッフフ、そう簡単にはいきませんか。明日から先生は南の島に行くまではエベレストで避暑に行きますからそれまでにしっかりと作戦を立てておいてください」

「殺せんせーこそ最後の旅行になるかもしれないのでしっかりと堪能してくださいよ」

*

く渚視点く

南の島での暗殺旅行が1週間後に迫り今日はその訓練と計画の詰めに集まった。勝負の8月。殺せんせーの暗殺期限まで残り7カ月となった。

いつもの訓練は烏間先生が僕達を見てくれているけど、今日はビッチ先生の師匠であるロヴロさんが来てくれている。何でも今回の作戦にプロの視点から助言をくれるらしい。

「殺せんせーは今絶対に見てないな?」

「ああ、予告通りエベレストで避暑中だ。部下に見張らせてるから間違いない」

「ならばよし。作戦の機密保持こそ暗殺の要だからな」

そう言うとロヴロさんは気を引き締めるかのように黒い手袋をギョツと履き直す。真夏なのに暑くないのかな？

鳥間先生とロヴロさんの話を聞いていると現在の僕達以外の暗殺の状況が見えてきた。

- ・臭いに敏感な殺せんせーのせいで旅行に殺し屋が送れないこと
- ・上と同じ理由で同じ殺し屋は使えないこと
- ・有望な殺し屋数名に何故か連絡がつかないこと

以上のことからロヴロさんは僕達に殺してもらうのが一番だと考えているらしい。どんな理由であろうと期待してもらっていることが嬉しかった。

「誰か旅行での暗殺について説明してくれないか？」

「あつそれは僕が説明します」

僕が後ろから返事をするるとロヴロさんはキョロキョロと辺りを見渡してからようやく僕を見つける。…そんなに背が小さいかな？

「先に約束の7本の触手を破壊して間髪入れずクラス全員で攻撃して奴を仕留める、それはわかるが”精神攻撃”とはなんだ？」

「まず動揺させて動きを落とすんです。この前殺せんせーエロ本を拾い読みしてたんですけど…他にもゆするネタはいくつかあるのでまずはこれを使って追い込みます」

「残酷な暗殺法だ。——それで肝心なのはとどめを刺す最後の射撃だが…これについては問題ないな。特にあの3人は素晴らしい」

「…そうだろう」

ロヴロさんの言葉に鳥間先生が珍しく笑みを浮かべて3人の説明をする。

「千葉龍之介は空間計算に長けているおかげか遠距離射撃では並ぶ者のないスナイパータイプ。速水凜香は手先の正確さと動体視力のバランスが良く動く標的を仕留めることに優れたソルジャータイプ。そして南雲純一は近距離ではまず狙いを外さない。加えて長距離射撃もいける万能型だ。3人とも結果で語る仕事人タイプという共通点もある」

「ふーむ、俺の教え子に欲しい位だ。他の者も高いレベルに纏まって

いてとても短期間で育てたとは思えない。人生の大半を暗殺に費やした者として…この作戦に合格点を与えよう。彼等なら充分に可能性がある」

ロヴロさんの言葉に僕は誇らしくなった。作戦だけでなくE組のみんなが認められているっていうのは上手く言葉には出来ないけど口角が持ち上がるのを押さえられない。

その後もロヴロさんの指導は続く、狙いを安定させる方法だとか心を落ち着かせる方法。烏間先生が基礎ならばロヴロさんは応用を教えてくれる。そんなロヴロさんに僕は聞いてみたいことがあったのでハンドガンでの射撃訓練を中止して尋ねてみることにした。

「ロヴロさんいいですか？」

僕が声をかけるとロヴロさんは一瞬少し驚いたような表情になるとすぐ元の強面に戻りどうした？と返してきた。

「クラスメートのことで聞きたいことがあって」

「いったい誰のことだ？」

「彼です。南雲君って言うんですけど」

僕が指で南雲君を示すとロヴロさんは少し目を細め彼かと溢す。

「彼がいったいどうしたんだ？」

「南雲君って僕達と同じ時間の訓練しかやってないのに何でもそつなく、高いレベルでこなすんですけど僕達と何が違うのかなってプロの視点から聞きたくて。やっぱり才能とかですか？」

「…ふっ、才能か。まあ言うなれば才能なんだろうが…」

ロヴロさんがハツキリとしたことを言わないので僕は少し首をかしげる。

「そうだな。少年、君から見て彼のナイフの振り方や銃の構えはどの様に映る？」

「…すごい綺麗でお手本みたいだなって思います」

「では君のナイフや銃の構えはどうだ？」

「固いというか少なくともお手本とは言えない形です」

「そうだ、彼はお手本のように綺麗というよりお手本そのものだ。能力はカラスマに及ばないにしても、まるでどこかの部隊にいたかのよ

うに動きが洗練されている。ではなぜ洗練されているかということだが：君は『運動の再現性』というのを聞いたことがあるか？」

「いえ、ないです」

「人は誰しも動くときにまず頭でイメージをする。ベースボールで言えば理想的なバットのスイング、射撃で言えば理想的な構え、全て頭に理想の形というものを思い浮かべるのだ。だがその理想通りに動けるかと言えばそうではない、どうということかわかるか？」

僕が首をかしげるとロヴロさんはそのまま説明を続ける。

「訓練次第では限りなく理想に近い形には近づけることができる。だが頭の中のイメージと全く同じ通りには出来ていないんだ、手首の角度などどこかでわずかなズレが必ず生じる。だが彼の場合はそのズレがほとんどなく理想通りなのだ、だから同じ訓練の時間でも上達の早さに差が生まれる」

「えっと、つまり頭の中でイメージしている通りに体を動かすことができているってということですか？」

「そういうことだ。彼のような人間は表舞台では一流のトップアスリートになれる」

「なるほど」

「私の説明により信憑性を持たしたいなら良いテスト方法がある。紙を2枚用意して彼に同じ大きさで自分の名前を書いてみさせてみる。私の見立てでは2枚の紙を重ねたら文字もピッタリ重なるはずだ」

「文字を書くのも運動の再現性？なんですかね」

「そうだ、運動の再現性は一種の才能だが多くの者はそれに気づかず飲み込みが早いとかの一言で片付けてしまい有効に使うことができなない。そういう意味では多くのことに挑戦できるこの教室は素晴らしい環境だな。彼だけでなく多くの者にとって」

「それともう一つ聞きたいことがあって：どちらかというところらがメインなんですが、ロヴロさんが知ってる中で一番優れた殺し屋ってどんな人なんですか？」

僕の質問にロヴロさんは少し黙ったあと笑った。なんだかその反応が場にそぐわないというか不釣り合いで僕達と違う世界にいるこ

とを実感する。

「興味があるのか？殺しの世界に？」

「あ、い、いやそういう訳では…」

「そうだな…俺が斡旋する殺し屋の中にそれはいない。最高の殺し屋、そう呼べるのはこの地球上にたった1人。彼の本名は誰も知らない、ただ一言の仇名で呼ばれる。曰く、”死神”と。死を扱う我々の業界で”死神”と言えば唯一絶対奴を指す。夥しい数の屍を積み上げ死そのものと呼ばれるに至った男。いつかは奴が姿を現すだろう、ひよつとすると今でもじつと機会を窺ってるかもしれない」

ロヴロさんの言葉に僕は息を飲む。尚更南の島のチャンスは逃せないと気を引き締める。

「少年よ、君には才能がある。南雲というのが優秀な兵士なら君は暗殺者だ」

「暗殺者？」

「そんな君には”必殺技”を授けてやろう。プロの殺し屋が直接教える”必殺技”だ」

そこからのロヴロさんはまさしく鬼、僕がそれを身に付けるまで厳しく教えられた。

…そして、南の島の暗殺ツアーが幕を開ける。

第26話 リゾートの時間 その1

待ちに待った2泊3日の暗殺旅行。現在俺達は船の揺れを堪能しながら本を読んでいる。

船の動いている音や波の音、そして同じクラスの級友の声をBGMに読む本はいつもとはまた違ったものだなと感じる。俺達のいる部屋には紙を捲る音が人数の分だけ響いている。

「純君！島見えてきたよ！あつまんなごめん、本読んでたんだっただね」

「てんきゅ、倉橋。そろそろ外出るか」

「そうだね」

「なんか久しぶりに集中して本読めた」

「教室は騒がしいのが多いからね」

「うーいつも騒がしくてごめんなさい」

最初は俺も倉橋達と船の甲板で遊んでいたが6時間という長旅のため途中から読書に切り替え神崎、凜香、狭間のわりと最初から読書をしてた組と合流したのだ。

「でもみんなよく船の中で本読めるね」

「船は大きいからそんなに揺れが気にならなかったな」

「車とかだと酔っちゃうんだけどね」

「神崎は車の中でも本を読むのか？」

「小さいときに車の中で絵本を読んでお兄ちゃんとかお母さんに迷惑かけちゃった」

「えっお兄さんいるの？」

「うん、そうだよ。言っただけじゃなかったかな？」

「…びっくり」

凜香と狭間はポーカーフェイスを保っていたが俺と倉橋は驚きを隠せなかった。こんだけ可愛い子が妹だったらやはりシスコンなんだろうか。

みんなで中から外に出ると倉橋の言うとおりの島が見えていた。6時間前のワクワクとした気持ちが沸々と湧いてきたのだが船に酔ってグロッキーになっている殺せんせーを見ているとなんだかその気

持ちもなくなってきた。殺せんせーを哀れな目で見てみると茅野が話しかけてくる。

「南雲君途中からいかなかったけどどこにいたの？」

「神崎達と本読んでた。まあ一緒に空間でそれぞれが読んでただけだけど」

「ふーん。南雲君ってスポーツもやるのに読書とか映画とかにも詳しいよね、なんで？」

「色々経験したほうが為になるからな」

「大人びてるね。そんな映画とかに詳しい南雲君に問題です！私は今何の映画を思い浮かべてるでしょうか」

「タイタニック」

「正解！さすが！」

「よかった、沈黙の戦艦だったらどうしようかと」

「あはは、私はステイブンセガール好きだよ」

女の子でステイブンセガールを知ってるとは中々の映画通だなと思ったがそもそもが有名なのでその考えは捨てる。

「暗殺頑張ろうね、今回の作戦のキーマンは南雲君なんだから」

「キーマンはあと2人いるけどな。ていうかみんな無くして暗殺は達成できないんだからキーマンはみんなだろ」

「たしかに。今南雲君良いこと言ったね！」

「どうもどうも」

船の停泊の準備が終わり各々荷物を持って宿泊場所へと移動する。俺達が泊まる普久間島リゾートホテルは海がすぐ横にある。個室ではなく男子と女子にそれぞれ大部屋2部屋が割り当てられていて食事などは共同の場所で食べるらしい。大部屋に荷物を置き、外に出ると当たり前だが目の前には海が広がっている。ホテルの施設の一つである見晴らしのいいロビーでまずは休むことにした。南の島らしい音楽がウクレレやアコギなどで奏でられている。

「純君ハイこれ！」

「ジューズ？」

「うん！サービスのトロピカルジューズだつて！」

「てんきゆ。なんか倉橋から飲み物もらってばかりだな」

「えへへ」

一口飲むと口いっぱいフルーツの味が広がる。南の島という環境もあってかいつもより美味しく感じる。E組のみんなもコテージに集まってきてこれからの予定を確認する。

「いやー最高だな」

「景色全部が鮮やかで明るいなく」

「ホテルから直行でビーチに行けるし、様々なレジャーも用意してるんですねえ」

「暗殺は夕飯の後にやるからさ、まずは遊ぼうぜ！」

「修学旅行の時みたく判別行動で殺せんせーも一緒にさー！」

「ヌルフフ賛成です。よく遊びよく殺す、それでこそ暗殺教室の夏休みです」

そこからの俺達は遊びに見せかけて真剣に暗殺の段取りをする。各班を殺せんせーが回るのでその間に計画通りに暗殺を行えるか綿密に現地をチェックして回る。ある班はグライダーで、ある班は海底洞窟巡りで他の班の下準備に目がいけないようにしているので殺せんせーに計画がバレることなく準備をすることができる。

「今殺せんせーどこだっけ？」

「3班と海底洞窟巡り。こっちの様子は絶対に見えないよ」

「じゃあ今なら射撃スポット選び放題だな」

「サクツと決めちゃいますか」

「2人がそっちなら俺はこっちに行くよ」

「…3人も渋いな」

「もはや仕事人の風格だ」

スポット選びで1人になったことから考える時間ができた。物音1つもしないくらい静かすぎて自分の体の中の音と地面を踏みしめる音しか聞こえない。

そんな中、俺は暗殺が成功したらということを考える。もし仮に殺せんせーを殺すことができたならE組の教室からいなくなるということだ。もちろん殺せんせーだけではない、鳥間先生もビッチ先生も当然いなくなる。

今いる先生方が全員いなくなったら本校舎から補充の先生が来るのは当たり前だが、果たしてその人は俺達に真摯に向き合ってくれるだろうか。俺にはそうは思えない。むしろ雪村先生や殺せんせーのように普通と変わらず接してくれる人のほうが貴重だ。かといって本校舎に戻ろうとも思えない。今いるE組のメンバー全員が本校舎に戻るならば喜んで戻るが、戻るためには50位以内に入るだけでなく元の担任の復帰許可があるので100%戻る保証はどこにもない。

暗殺しないほうが俺達は幸せなのではないか？

……ダメだ、考えてはいけないことが頭を過ってしまっている。頭で変な考えが渦巻いているが計画通りに射撃スポットに細工をする。今俺が考えていることは俺だけが持っている思いなのか、それとも他の人も同じ事を考えているのか。わからない。でも今は暗殺をするしかない。俺に今できることは暗殺だ。それ以外のことは今は考えるべきじゃない。

*

「いやあ遊んだ遊んだ。おかげで真っ黒に焼けました」

「「黒すぎだろ！」」

墨汁より真っ黒に日焼けしてる殺せんせーを見て全員少し引いている。

「歯まで黒く焼けてるし」

「表情が読み取れないよ」

「じゃあ殺せんせー、メシの後に暗殺なんでレストランに行きましょ

う」

磯貝にスキップ気味に且つ鼻唄を歌いながら付いていく殺せんせー。

「ま、今日殺せりや明日は何も考えずに楽しめるじゃん」

「まーな、今回ぐらい気合い入れて殺るとすつか！」

珍しくやる気を出している村松と吉田。一方で俺の心には先程の考えが渦巻いていてみんなと同じように上手く笑えているかわからなかった。

「夕飯はこの貸し切り船上レストランで夜の海を堪能しながらゆっくり食べましょう」

「な、なるほどねえ…まずはたっぷりと船に酔わせて戦力を削ごうというわけですか」

「当然です、これも暗殺の基本ですから」

磯貝の言った通り俺達は今船上レストランにいる。ご飯が美味しいだけでなく殺せんせーの弱点である乗り物酔いも誘える正に一石二鳥の計画だ。

「君達は実に正しい。ですがそう上手く行くでしょうか？暗殺を前に気合いの乗った先生など恐れるに足りません」

「黒いわー！」

「…そんなに黒いですか？」

「表情どころか前も後ろもわかんないわ」

「ややこしいからなんとかしてよ」

「ヌルッフ、お忘れですか皆さん？先生には脱皮があることを、黒い皮を脱ぎ捨てれば……ホラもとどおり」

脱皮をしたことによつていつも通りの殺せんせーの姿になる。ただクラス全員が脱皮を見て何かを察した表情になっている。

「月1回の脱皮だ」

「こんな使い方もあるんですよ。本来はヤバイときの奥の手ですが

「……………あつ！」

「バツカでー、暗殺前に自分で戦力減らしてやんの」

「どうして未だにこんなドジ殺せないんだろ」

「この日のために夏休みに入って密かに特訓を重ねてきた。計画も綿密に練っており、今のところ順調で仕込みも万全。ただ——

「——も君？南雲君？」

「あつ神崎。どうした？」

「なんか考え込んでるようだったから：気分でも悪いの？」

「いや大丈夫だ。心配してくれてありがとな」

「それならいいんだけど：何かあつたら言つてね？」

「どうやら上手く笑えていないだけでなく、いつも通りの俺ですらないらしい。計画を練りに練った今回こそ殺せんせーに刃を届かせなければならぬのに：その刃を届かせていいものかと考えてしまっている。」

「気分を切り替えようと食事をするがあまり喉を通らず充分に味わうこともできなかつた。それでもみんなの士気か下がらないようにいつも通りを装い続けた。」

夕食を終えE組全員で暗殺前の最後の下準備のために水上パーティションルームへと向かう。但し、俺と千葉と凛香を除いて。俺達3人は殺せんせーに止めを指す役目なのでここからは別行動となる。暗殺の流れはこうだ。

1. 三村が編集した殺せんせーの恥ずかしい姿を編集した映像を1時間に渡って上映。終わる頃には満潮になっているので触手に水を吸わせることができる。

2. 触手破壊権利を持つてる7人が触手を破壊。

3. 殺せんせーは急激な環境の変化に弱いので木の小屋を崩しホースなどの放水で水の檻を作る。

4. 殺せんせーに当たらない弾幕を作ることによって逃げ道を塞

ぐ。(殺せんせーは当たる攻撃には敏感なため)

5. 俺達3人で止めを指す。

以上が暗殺の流れだ。

俺達は酸素ボンベの準備を入念に行っている。行程3が行われたときには既に水中に潜んでいなければならぬからだ。陸の上には匂いが染み込んだダミーを置いたので俺達の居場所はバレないという寸法だ。

「純一、大丈夫？」

「?、何が？」

「何がって：ずっと浮かない表情してるから：」

「あつそれは俺も思った。なんかブーツとしてるっていうか」

「柄にもなく緊張してるのかもな。今日で暗殺生活終わると思ったらなんかね」

「南雲でも緊張するんだな」

「人っていう字を手にも3回書いたら？」

「久しぶりに聞いたな、それ」

「あーたしかに。小学生のときの発表会でやってたよ」

「千葉は木の役っぽいから必要ないんじゃないか？」

「失礼な、村人A役だよ」

「それあまり変わらないんじゃない？」

凜香の言葉に3人は笑う。これから暗殺を行うとは思えない雰囲気だなと思った。

「そろそろ上映開始から50分経つから潜るか」

「そうだな」

「2人とも頑張ろうね」

「……………」

「なに？2人して口開けて」

「いや凜香がデレたなって」

「俺は珍しいものを見たなって思ってる」

「あんだ達バカ？早く行くよ」

素直な感想を言つて一蹴される男2人。凜香に続いて海中へと潜

りそれぞれの持ち場へと泳ぎ移動する。

——10分ほど経った辺りで爆発音にも似た大きな音が水を伝わって聞こえてくる。暗殺が開始されたということだ。

水が叩きつけられる音に続いて一斉射撃の音が聞こえ水中で水面に出るタイミングを合わせる。

小屋の中で陸上を警戒させておきフィールドを水の檻へと変えることで全く別の狙撃点を創りだす。俺達の匂いも発砲音も水が全て消してくれる。

引き金をじわりじわりと引いて、殺せんせーの背後からついに俺達3人は発砲する。

瞬間、殺せんせーの全身が閃光と共に弾け飛んだ。

*

弾け飛んだ衝撃で周辺にいる俺達全員は爆風に煽られる形で体勢を崩され数メートル吹き飛ばされる。

クラス全員が感じている今までの暗殺とは明らかに違うこと。

殺せんせーが爆発して後には何もない。確かに殺った手応え。

「油断するな！ 奴には再生能力もある！ 片岡さんが中心になって水面を見張れ！」

「「はー！」」

鳥間先生の指示に従い殺せんせーを警戒する俺達。すると水面にブクブクと空気浮いているところを発見する。

俺達は全員でその一点を囲むように移動し銃を構える。

俺達が見たものは殺せんせーの顔が入ったオレンジの変な球体だった。

「これぞ先生の奥の手中の奥の手、完全防御形態！」

完全防御形態？

「説明いたしますと外側の透明な部分は高密度に凝縮されたエネルギーの結晶体です。肉体を思い切り小さく縮め、その分余分になったエネルギーで肉体の周囲をガッチリ固める。この形態になった先生

はまさに無敵！水も対先生物質もあらゆる攻撃を結晶の壁が跳ね返します」

「そんな…じゃあずつとその形態でいたら殺せないじゃん…」

「ところがそう上手くいきません。このエネルギー結晶は24時間ほどで自然崩壊します、裏を返せば結晶が崩壊するまでの24時間先生は全く身動きが取れません。この状態で最も恐れるのはロケットに詰め込まれるか遠くの宇宙空間に捨てられることですが…その点はぬかりなく調べ済みです。24時間以内にそれが可能なロケットは今世界のどこにもない」

説明を聞いてやられたという感情しか生まれてこなかった。ここに来ての殺せんせーの隠し技、その欠点までちゃんと計算ずくで…。完敗だなと思っただけじゃないのか俯いている者が多くいる。「……とりあえず解散だ皆。上層部とこいつの処分法を検討する」

そう言っただけで烏間先生はビニール袋に球体の殺せんせーを入れる。袋に入れられた殺せんせーはいつも通りのにやついた笑顔で俺達全員に向けて話をする。

「皆さんは誇っていい、世界中の軍隊でも先生をここまで追い込めなかった。ひとえに皆さんの計画の素晴らしさです」

殺せんせーはいつものように俺達の暗殺を褒めてくれたが全員の落胆は隠せなかった。かつてなく大がかりな全員での渾身の一撃を外したショック。異常な疲労感と共にホテルへの帰途につく。

俺と凜香と千葉の3人は皆より遅れて水面から上がる。

「律、記録はとれてたか？」

「はい千葉さん、可能な限りハイスピード撮影で今回の暗殺の一部始終を」

「俺さ、撃った瞬間わかつちやったよ。『ミスった、この弾じゃ殺せない』って」

「完全防御形態に移行するまでの正確な時間が不明瞭なので断定はできません。ですが千葉さんの射撃があと0.5秒早いか速水さんの射撃があと30センチ殺せんせーに近ければ射撃に気付く前に殺せた可能性が50%ほど存在します」

「自信はあったんだ。あそこより不安定な場所で練習しても外さなかった。だけどいざあの瞬間、指先が硬直して視界も狭まった」

「…同じく」

「絶対に外せないというプレッシャー、『ここしかない！』って大事な瞬間」

「…うん、こんなにも練習と違うとはね」

千葉と凛香の2人はとぼとぼとホテルの方へと帰っていく。だが俺は空を見たままその場から動くことができなかった。

「……………律」

「南雲さん何でしょうか？」

「俺のことは言わなくてよかったのか？」

「…何のことでしょう？」

「記録してたからわかるだろ？俺が銃を撃てなかったことだよ」
「…そうですね」

俺はあの瞬間引き金を引くことができなかった。狙いを定めじわりじわりと引き金を引いていたのだが今にも発砲しそうな瞬間指を離したのだ。そして殺せんせーは爆発した。

「私はE組で暗殺以外にも様々なことを学びました。だからこそ南雲さんのことは黙っておくのが正しいことだと判断しました」

「…ちなみに理由を聞いてもいいか？」

「はい。南雲さんは暗殺が行われる前からどこか変でした。おそらく暗殺をするべきかしないべきか迷っていたのではないのでしょうか？」

「…合ってるよ。俺は迷ってた。このまま暗殺をしないほうが俺達は幸せなんじゃないかって」

「…」

「もし暗殺が成功したらさ、殺せんせーも烏間先生もビッチ先生も律もみんないなくなる。…そう考えたら引き金が引けなかった」

「南雲さんは優しいですね。クラス全員のことを考えてくださって」

「違うよ、これは俺のエゴだよ」

「たしかにその考えの中には南雲さんの願望が少なからず含まれていないはずですよ。ですが南雲さんは言いました、俺達って」

「…」

律の言葉に俺は何も言えなかった。自分の考えを否定しようにもそれが間違つてるとは思えなかった。

「人間には人生を失敗する権利があります。…だから皆さんのところへ帰りましょう。南雲さんの考えは何も間違っていないと思います」

「ありがとう、律」

「はい！」

「俺が撃たなかったことは言ってもいいけど、俺の持っていた考えは言わないでくれな。暗殺教室の持つ意味を否定することになるから」
「もちろんです。…人間とは不思議なものですね。様々な葛藤の中もがいて答えを探す、私達AIにはない感覚です」

「俺達も律も、何も変わらないよ。きつと」

ホテルのロビーへと帰るとみんなはロビーで休んでいた。ある者は天を仰ぎある者は突つ伏している。

「しっかし疲れたわ〜」

「自室帰って休もうかな…もう何もする気力ねえ」

「ンだよテメーら、1回外した位でダレやがって。もう殺ることやつたんだから明日1日遊べんだろーが」

寺坂の言葉に何名かは頷くが多数は疲れているのか反応を示さない。

「そーそー。明日こそ水着ギャルをじっくり見るんだ。どんなに疲れなくても全力で鼻血出さぜ」

…何か変だ。いくらなんでも皆疲れすぎじゃないか？

「渚君よ、肩貸しちゃくれんかね…部屋戻ってとつとと着替えたいんだけどさ、ちいゝとも体が動かんのだよ」

「なっ中村さん！ひどい熱…！」

莉桜が渚にもたれ掛かる形で倒れる。やはりおかしい。

「いや…もう想像しただけで…鼻血が…あ、あれ…？」

「岡島！」

岡島は鼻から大量に鼻血を出して机に突つ伏す。

それを皮切りに多くの者が熱などを訴える。

「フロントー」この島の病院はどこだ！」

烏間先生がホテルの従業員に医者の確認をするが当直医はよその島に帰ってしまったていて明日の10時にならないと来ないらしい。

するとピピピピと電話の着信音が響き渡る。烏間先生はそれに出ると電話先で問答を始める。

このタイミングでこの電話。どんなに察しが悪い者でもわかる。この騒動は人為的なものだ。

第27話 リゾートの時間 その2

電話の相手と交渉をしている烏間先生。だが交渉が決裂したのか、電話を切るや否や珍しく苛立ちを隠そうともせず、袋に入った殺せんせーを机に叩きつける。

「皆、聞いてくれ。今起きていることを説明する」

そう言つて烏間先生は説明を始める。

・生徒達が苦しんでいるのは人工的に作り出されたオリジナルのウイルスであること。

・治療薬は一種類のみで電話先の相手しか持っていない。

・治療薬は袋に入っている殺せんせーと交換でしか渡さないこと。

・交換場所は山頂にある“普久間殿上ホテル”の最上階。時間は1時間以内で最も背が低い男女（渚と茅野）に持つてこさせること。

・外部との連絡、時間が過ぎた場合は即座に治療薬は破壊する

「——という訳だ」

「…ひどい、誰なんですかこんなことする奴は！」

「…わからない」

「烏間さん！」

防衛省の園川さんが烏間先生に報告する。どうやら政府としてホテルに連絡しても一切の情報は答えてくれなかったらしい。

その理由を烏間先生が説明する。普久間島は通称“伏魔島”とも呼ばれ様々な世界の警察組織からマークされているらしい。山頂の普久間殿上ホテルだけは他の真つ当なホテルとは違い国内外のマフィア勢力、財界人らが出入りしていて政府としてもつかつに手が出せないとのこと。

「ふーん、そんなホテルがこつちに味方するわけないね」

「ど、どーすんすか!?俺達殺されるためにこの島に来たんじゃねーよ！」

「落ち着いて吉田君。そんな簡単に死なないから、じっくり対策考えてよ」

原の言葉に吉田だけでなくE組全体が落ち着きを取り戻す。

「こんなやり方する奴等にムカついてしょうがねえ。人のツレにまで手エ出しやがって。要求なんざ全シカトだ！今すぐ全員都会の病院に運んで…」

「ダメだ寺坂。烏間先生の説明を聞くにおそらくあつちは監視カメラでこちらの様子を見ている」

烏間先生は説明の中で治療薬は袋に入っている殺せんせーと交換でしか渡さないと聞いていた。なぜ殺せんせーが袋に入っていると知っているのか。海岸で暗殺を行ってホテルのロビーにしか移動していないのでその短い距離でこちらの様子を把握したとは考えにくい。監視カメラが仕掛けられているとしか考えられない。

「南雲の言う通りだ、寺坂。僕は違う観点から賛成できない。もし本当に人工的に作った未知のウイルスなら対応できる薬はどんな病院にも置いていない。無駄足になれば患者の負担を増やすだけだ。対症療法で応急処置はしとくから急いで取引に行った方がいい」

「竹林…」

打つ手がなく皆が固まっている。烏間先生は額に手を当て様々なことを考えているのだろうが良い案が出てきてないみたいだ。殺せんせーが動けるのなら手の打ちようがあるが俺達の暗殺が良い所まで行ったらせいで身動きが取れなくなってしまうている。

「皆さん良い方法がありますよ」

「「え」」

「病院に逃げるよりおとなしく従うよりもです。律さんに頼んだ下調べも終わったようです。敵の意のままになりたくないなら手段はひとつ、動ける生徒全員でホテルに侵入し最上階を奇襲して治療薬を奪い取る！」

「ダメだ、危険すぎる。この手慣れた脅迫の手口は明らかにプロだ」

「ええ、しかも私は君達の安全を守れない。大人しく私を渡したほうが得策かもしれません。全ては君達と指揮官の烏間先生次第です」

「…烏間先生行きましょう」

「指揮はお願いしますね」

「キツチリ相手に落とす前をつけてやる」

俺を始めとして動ける全員がホテルに行く意思を示す。烏間先生はそんな俺達を見てまだ迷っている様子だ。

「…見ての通り彼等は只の生徒ではない、ある種の特殊部隊です。さあ、時間はないですよ?」

殺せんせーの言葉に烏間先生は目を瞑り深く深呼吸をしたあとに目をカッと開き言葉を発する。

「注目! 目標山頂ホテル最上階! 隠密潜入から奇襲への連続ミッション! ハンドサインや連携については訓練のものをそのまま使う! いつもと違うのはターゲットのみ! 3分でマップを頭に叩き込め!
ヒトキューゴーマル
19時50分作戦開始!」

「は!!」

*

各々が動きやすい服装に素早く着替えてホテルを出る。磯貝と烏間先生が全員が出るまで出口で待機してるが最後の一人は俺だった。

「南雲まだか?」

「いや、今行く。…おっと!」

何も無い場所で躓いてしまった。

「大丈夫か? 南雲?」

「ああ、大丈夫だ…うわっ」

立とうとするとまたしても足元が覚束ないのかよろけてしまった。それを見た磯貝と烏間先生は怪訝な表情に変わる。

「なあ南雲、お前もしかして…」

「いや大丈夫だ。熱は出てないし目眩も起こしていない」

「南雲君。ちよつと目を瞑って両足でその場に立つんだ」

俺は言われるがままに目を瞑り両足を地面につける。すると頭がグラグラとしているのが自分でもわかった。倒れそうになったので目を開けバランスを保つと何かを察した表情の2人がいた。

「間違いない、感染している。能力が突出している君が来れないのは心許ないがここに残れ」

「…まじですか」

「南雲、俺達を信じてくれ。お前に及ばないにしろそれぞれのエキスパートがいるんだ。烏間先生もいるしきつと上手くいく」

「で、でも——」

「こうしている間にも君を含めた生徒みんなの病状は悪化していく。南雲君、わかってくれ」

「…わかりました。…磯貝頼んだぞ。みんなを守ってやってくれ」

「もちろん。烏間先生行きましょう」

「ああ。南雲君、君もロビーに戻って安静にしているんだ、決して無理はするんじゃないぞ。こちらに何か問題が起きた場合には必ず律さんから連絡がいくものと思ってくれ」

俺は2人を見送ったあとしばらくその場から動かなかった。激しい自己嫌悪が襲ってくる。なんだよ、暗殺だけじゃなくクラスの皆が苦しんでいる状況でも俺は足手まといなのかよ。

物を破壊したい衝動に刈られるが物に当たっても何も意味はない。目を瞑り深く息を吐き気持ち切り替える。俺に今できることは何か。それを考える。個人差からか俺には高熱や目眩などは起きていない、ならば竹林、奥田と共にみんなの治療に当たるのが最適解か。

出口から回れ右をして患者の下へと向かうと竹林と奥田が驚いた顔をして患者から離れて俺に近づいてくる。

「南雲、君は行かなかったのか？」

「ああ。俺は感染している」

「そんな！今すぐ休んでください」

「辛い重い症状はまだ表れていない。だから手伝わせてくれ」

「…わかった。でも体調が悪くなったらすぐに休んでくれ」

「ありがとう、竹林。それで俺は何をすればいい？」

「竹林君が男子を、私が女子を治療しているので南雲君は飲み水を持ってきてもらっていいですか？」

「わかった。すぐ持ってくる」

奥田の指示を受け言われた通りに動く。いつもは自分から動かない竹林と奥田が率先して動いているのを見て俺はすごいなと思った。

この緊急事態に自分に何ができるかを考え動いている、その姿勢がカッコいいなと思った。

「すみません、冷たい水をもらえますか？」

「ハイ、今すぐお持ちいたします」

ホテルの従業員はすぐに裏に行くのとペットボトルに入ったミネラルウォーターと氷がたくさん入った容器の2つを持ってきてくれた。従業員は運ぶのを手伝おうかと申し出てくれたが伝染したら困るということ、丁重に断ると何かできることがあつたらすぐにお申し付けくださいと言ってくれた。俺は再度深く頭を下げ水と氷を運び、コップへと注ぎみんなに渡していく。

「南雲、一先ず君も休んでくれ」

「わかった竹林。何かあつたらすぐに言ってくれ」

言われた通りに俺も椅子に腰掛け水を飲む。幸いまだ熱などの症状は表れていない。その中で俺は考える。

いったいこのウイルスはどこから感染したのだろうか。ホテルの食事というのは考えられない。なぜなら夕飯を食べずに動画を編集していた岡島と三村が感染しているからだ。：ダメだ、ヒントが圧倒的に足りない。それになんとなく頭が働かない。

「あつ純君だ…」

「倉橋、大丈夫か？感染してるんだから無理するな」

「純君は…感染してないの？みんなと一緒に潜入に行かないの？」

「俺は…俺はみんなの護衛を頼まれた。万が一ここに敵が来たら困るからつて烏間先生から言われたんだ」

「えへへ。なら大丈夫だね…。純君はいつも守ってくれるから」

倉橋が力なく笑ったのを見て俺は自分に対して怒りが湧いてきた。こうして信頼してもらえてるのに俺は何をしているんだ？肝心の暗殺では引き金を引けず、ウイルスに感染してみんなを助けに行くこともできない。

頭を冷静に今一度俺にできることを考え直す。なにか、なにか必ずあるはずだ。ホテルの設備に何かあつたか、その設備はどのよう利用できるか。南の島に来てからの会話の中にヒントはないか。

思考の渦の中で1つの活路というか道が見えた。そのための障害は敵の監視カメラだ。

そこで俺はある1つのことに気付く。監視しているならばクラス他の者達が潜入しているのに気付くはずだがなぜ気付いていないのか。俺の中で導き出された答えは単純明快なものだった。設置したカメラの数が少ないから俺達全員の動きが把握できていないんだ。つまりカメラの位置と数、その映る範囲が特定できれば俺は行動することができる。ちようどこちらにはその手伝いができる者が残っている。俺は席を立ち岡島に話しかける。

「岡島、おい岡島」

「…純一か。何でここにいるんだ？潜入は？」

「そんなことは後回しだ。ちよつと手伝ってもらいたいことがある。お前にしか頼めないことだ」

「…わかった。こんな状態の俺でもよかったら」

「すまん。手伝ってほしいのは監視カメラの発見とその視野角についてだ」

「？、…とりあえず監視カメラを探せばいいんだな」

「ああ。歩くのが辛いなら俺に寄りかかれ」

「…わかった」

岡島に肩を貸す形でロビーをぐるりと周り監視カメラが仕掛けてある可能性があるところを全て探す。すると1つだけ天井の照明のところを発見することができた。

「岡島、あのカメラはどれくらいの範囲映るかわかるか？」

「…普通のカメラだな。魚眼ではないから狭いアングルでおそらくそこからそこまでは映っていて音は拾っていないタイプだな」

岡島は映る範囲を指で指し示す。

「了解、体調が悪いのにすまない」

「…いいんだ。それより純一何をするんだ？」

「まあお楽しみってことで。みんなには監視カメラの範囲に気を付けるようそれとなく言っておいてくれ」

俺は岡島を元の場所へと運ぶと再度従業員のところへと行き、ある

ものを持ってきてきてほしいとお願いする。数分待つと頼んだものを持ってきてくれたので俺はお礼を言ってみんなの下へと向かって準備をする。

「南雲どうしたんだ？ギターなんて持って。体調は大丈夫なのか？」

「竹林はさ、音楽の力って信じるか？」

「音楽の力？」

「ああ。ジョン・レノンには音楽で平和を歌った。ある音楽がきっかけで戦争が一時的に休戦になった。胎教でも音楽が密接に関係があると言われている。つまり——」

「つまり？」

「ここで歌わなきゃ俺じゃねえ」

「全く話が繋がってないんだが……」

「みんなの苦痛を和らげるために俺がギターを弾いて歌うんだよ。みんなが苦しんでいるのを黙っては見てられない。だから俺はやる。オーケー？」

「……わかった」

俺はギターのチューニングをする。そして準備完了。全員に聴こえるように出来るだけ中央で演奏をする。だがその前に——

「あーあー。みんな聴こえるか？」

俺の声に俯いている者は顔をあげ、そうでないものは何をしているんだ？という不思議な顔でこちらを見ている。

「……純一？何するんだ？」

「これから弾き語りで歌うから出来る限り耳を傾けてくれ。そうすれば辛いのも多少は軽くなると思う。だから……俺を信じてくれ」

「……私は信じるよ。純君のこと」

「……何を歌うの？」

神崎の質問に俺は出来る限りの笑顔で答える。

「楽しい気分にならなきゃ辛いものも和らがないからな。だからみんなが1度は耳にしたことがあって口ずさみたくなるような曲だ——」

そう言っただけ俺は演奏を始める。短いイントロから聴き覚えのある

歌へと入っていく。

「…これビートルズだっけ？」

「CMで聴いたことあるな」

「…英語の発音きれい」

みんなは口々に曲について言葉を発する。そしてサビへと入ると倉橋や前原が声は聞こえないが口をパクパクとさせて口ずさんでいるのがわかった。

サビを歌い終わるとみんなが何の歌かわかったみたいだった。俺は思わずしたり顔になるが演奏と歌うことはやめない。曲を歌い終わるとまばらながらに拍手が送られる。

「今の曲は知ってる人も多いと思うがビートルズのOb-La-Di, Ob-La-Daだ。ちよつと解説すると市場に勤めるデズモンド・ジョーンズと、バンドで歌手をしているモリーが恋をして結婚する物語だ。ポップな感じで口ずさみやすいかなって思ったからこの歌をチョイスした」

「ギターも歌も上手いけど密かに練習してたの？」

「密かについてわけじゃないけど…まあ理由は全てが解決したら話すよ。次の曲も口ずさみたくなるようなものだ。それでは、『can, take my eyes off you』」

俺の言った曲名にみんなは聞き覚えがあるようだった。でも日本で知られてる曲名は原題とは少し違う。

『can, take my eyes off you』は日本では『君の瞳に恋してる』と和訳されている。原題をそのまま訳すと君から目が離せない、それを君の瞳に恋していると訳するのは洒落ているというか何だかロマンチックだなと感じる。

曲の中盤辺りからだろうか、体温が上がっているのがハッキリとわかった。おそらくこれはテンションが上がってるからではなくウィルスの症状が表れてきているからだ。だがここまで来たら関係ない、潜入してくれている皆が帰ってくるまで演奏を続かせてちよつとでも病人が楽に感じるようにするだけだ。そのためには体調不良を悟らせてはならない。

「汗かいてきちやったからちよつと水を飲ませてくれ」

2曲目を終えると同時に水を飲む。体との温度差がかなりあるせいか水を飲んでるように感じた。

「次からは一人一人のリクエストに応えていこうと思う。俺が知ってる曲だったら大丈夫だから…倉橋なにか弾いてほしい曲はあるか？」

「…えーとね、…『ベイビー・アイラブユー』が聴きたいな」

「THEEの曲だな、オーケー。確かに南の島にいるっぽいていいうか海が見えるところってイメージの曲だな」

指先の感覚はハッキリとしている。喉の調子も悪くない。いつもと違うのは体調が悪いということだけだ。みんなが戻ってくるまで意地でも弾き続けてやる。それこそが俺が敵に対して唯一できる抵抗だ。

*

～神崎視点～

倉橋さんのリクエストを受けて南雲君は歌い始める。

私は彼の夢を知っていたから他のみんなほど驚きはしなかったけど、自分が考えていた以上に夢に対して真摯に取り組んでいたんだなと別の意味で驚いた。

彼が歌い始めてからは確かに体が少し軽くなったというか気が紛れてるように思う。いや、彼の歌は気が紛れるなどと形容してはいけないレベルのものだ。私は正直音楽には疎いがそんな私でもそのような印象を受ける。

私は彼の声が好きだ。教室でもどこでも彼がいると思ったら彼の声を探してしまい、そして聞き入ってしまう。そのような状態や脳の働きのことをカクテルパーティー効果だということをもビッチ先生が授業の中で話していた。

でも彼の歌声は普段のものとは別次元のものであるかのようなだった。耳を傾けずにはいられない、ずっと聴いていたいと思えるくらい惹き付けられるものがあつた。

彼は今ラブソングを歌っているが私の心は嬉しさよりも嫉妬の気持ちで勝っている。なぜなら倉橋さんのリクエストで彼がラブソングを歌っているからだ。

この非常事態に現状晒されている問題よりも自身の恋愛事情を優先させてしまうなんて自分は案外凶太い人間だったんだなと思わず口許が緩んでしまう。

クラスの皆が体を張って頑張ってくれているという事実を思ったら私の今の状態なんて大したことのないように思えた。せめて皆の頑張りに報いれるよう自分の意識は覚醒させ続けようと心に決めた。

今私にできるのは南雲君の歌を聴くこと。どうか歌っている彼の意識の片隅にでも私がいてくれたら…そう思わずにいられなかった。

第28話 リゾートの時間 その3

〈渚視点〉

「…寺坂君ありがとう。あの時声をかけてくれて、間違えるところだった」

「…ケ、テメーのために言ったんじゃないやねえ。1人欠けたらタコ殺す難易度がんだろーが。それに鷹岡の野郎にも腹が立ったからな」

「うん…ごめん」

僕はミツシオンを無事に終え現在はヘリコプターでみんなの待つホテルへと向かっている。今回の黒幕は鷹岡元先生だった。みんなが感染してるのは殺人ウイルスだと鷹岡元先生に言われ目の前で薬を爆破されたときは本当に殺しそうだった。だけど寺坂君の言葉で我に返ることができロヴロ先生から教えてもらった”猫だまし”で鷹岡元先生を倒すことができた。ちなみにクラスのみんなが感染してるウイルスは食中毒菌を改良したもので交渉用の物なので無毒になるらしい。

他にも暗殺者はいたけどクラスの皆で力を合わせて退けることができ、今日の経験は殺せんせーの暗殺に必ず役立つということを実感できた。

「早くみんなに大丈夫だってこと伝えたいね」

「みんな大丈夫かな？盛られた毒が無毒になるとはいえあと3時間は猛威を振るうんだよね？」

「大丈夫だって渚君。寺坂見てみ？全然平気そうでしょ。あつでもみんな寺坂みたいにかっこ悪いから心配だよ」

「おいカルマテメえ。治ったら覚えとけよ」

「確かに寺坂君は体力があるから平気そうに見えるけど…」

「でも栄養剤もらったからな。みんなに飲ませて今日はもうゆっくり休もう」

磯貝君の言葉にみんなは頷き無言になる。解決したと思ったらドツと疲れを感じてきた。それでも感染したみんなはまだ不安なはずなので無事を伝えるまでは休まないようにしようと思った。

ヘリがホテルの近くのビーチへと降り立ち岡野さんなど脚が速いメンバーを先頭にみんなの下へと向かう。僕は少し出遅れてしまつて一番後方になってしまった。ホテルに繋がる入り口の前に着くと先行したメンバーが立ち止まっていたので釣られて僕も止まる。一体どうしたんだらう？

「立ち止まってどうしたの？」

「歌が聴こえる」

「…ホントだ。すごいまい」

「男の人の声だね。ビッチ先生が演奏してたみたいにホテル側の人が演奏しているのかな？」

「なんか聴き入っちゃうね」

茅野がそういうとみんなはそのまま入り口の前で歌を聴き続ける。たしかにこの歌のうまさは自分の周りにはいないレベルのものだなと感ずる。

「あれ？この歌…」

「矢田さん、この歌知ってるの？」

「うん。”Tiny Boat”って曲だよ。まさかとは思うけど

…」

「どうしたの？」

「次に歌う曲で確証が持てるんだけど…この曲が終わるまで待つてちやダメかな？」

「矢田つちがそう言うならもう少し待つてみようか」

「ありがとう、ひなたちゃん。でもみんなはいいの？」

「うん待つてみよう。むしろもう少し聴いていたい」

磯貝君がそう言うと言ふみんな頷き尚も聴き続ける。端から見たら大勢の中学生がホテルの入り口で立ち止まっているという不思議な光景なんじゃないかなって思う。曲が終わって別の曲が始まると矢田さんはやっぱりと言った。

「今聴こえてる曲”パトリシア”っていうんだけど、歌ってるのきつと、ううん絶対南雲君だと思ふ」

えつ南雲君？みんなが僕と同じように驚いた表情になるが千葉君

と速水さんの2人はさほど驚いた様子ではなかった。

「矢田っちどうして南雲君だと思うの?」

「前に一緒に音楽聴いたんだけどその時と全く同じ曲なんだ。だからなんとなくなんだけど…言うなればカンかな?」

「仮に歌ってるのが南雲だとしてもギターの音も聴こえてるぜ?」

「無事を伝えなきゃいけないしそろそろ入ろうみんな。そしたら演奏者もわかるし」

片岡さんの言葉で入り口のドアを開ける。

すると矢田さんが言っていた通り南雲君が感染してるクラスメートに向けてギターを演奏しながら歌っている光景が広がっていた。

「おっみんな帰ってきた。大丈夫だったか?」

「南雲一体どういうこと…いやまずはみんなに報告しないと」

さすが学級委員と言うべきか磯貝君は自分の好奇心よりもクラスを優先した。感染してるものは無毒になるということと無事に潜入をこなしてきたということを要所要所掻い摘んで説明をするとみんな安心しきった顔になった。

「南雲君大丈夫!?!」

「ああ渚、うん大丈夫だ」

「南雲君そっちは茅野だよ、僕はこっち。全然大丈夫じゃなさそうだから早く休もう」

「すまん。正直しんどい」

「僕の肩使っていいから布団に入ろう。あつでもその前に栄養剤あるからそれを飲んでから休んだほうがいいかも」

「ありがとう渚」

「このタイミングで聞くのもなんだけど、さっき歌ってギター弾いたのって南雲君だよな?」

「そうだよ。俺にできることっていったらこれくらいだったから」

「詳しいことは…一段落したら聞かせてくれるよね?」

「もちろんだ茅野。…俺は大丈夫だから神崎とか見てやってくれ、きつと辛いだろうから。渚だけ貸してくれ」

「わかった。南雲君もしつかりと休むんだよ!」

そう言つて去つていく茅野に南雲君はなんか頼もしく見えるつて言つて椅子に腰掛けた。その後栄養剤を飲ませて部屋へと運んだ。病人をみんな休ませてから潜入してきた人達も布団へと入り休むことになつた。それぞれがそれぞれの疲れで泥のように眠つた。

*

く南雲視点く

目覚めたとき男子全員が大部屋で並んで寝ていた。

時計に目をやると正午前。徐々に覚醒していく頭で昨日の記憶を思い出す。そうだ、ミツシヨンは無事に終わったと磯貝が言つていた。俺は歌を歌い続けて戻ってきた渚の肩を借りて布団に入つたんだつた。

起きそうにもないクラスメート達に小さくお疲れ様とこぼし俺は服を着替えてから洗面所に向かい顔を洗い歯を磨く。

なんとなく外の空気を吸いたくなつたのでホテルから出るとビッチ先生がビーチ横でくつろいでるのが目に入ったのでそちらへ向かう。

「あら南雲起きたのね。みんなはまだ寝てるんでしょ？」

「ハイ。昨日はお疲れ様でした、そして：ありがとうございます」

「私はなにもしてないわよ。全部あんたたち生徒が頑張つたからこうしてゆつくりできてるのよ」

「はあ」

「それに私に潜入の内容を聞こうとしても意味ないわよ。私はみんながホテルに潜入するために序盤に離脱したから」

「そうなんですか」

「そうよ」

ビッチ先生はそう言うと言元のトロピカルジュースを上品に飲む。

「ビッチ先生、聞いてほしいことがあります」

「：どうやらその顔は真面目な話みたいね。なに、言つてみなさい」

「：俺、昨日の暗殺で引き金を引けなかつたんです。殺せんせーを殺

さないほうが俺達E組は幸せなんじゃないかって考えちゃって」

「……」

「ビッチ先生は殺したくないのに殺したことってありますか？」

「…そうね、1度だけあるわ」

「聞いても大丈夫ですか？」

「ええ。あれはそうね…5年くらい前かしら、私はターゲットに恋をしてしまったの。色仕掛けで近づいて相手が色仕掛けをしなくても警戒しなくなった頃にその気持ちを自覚したわ。それから殺す機会を何回も逃した。誰にもバレずに確実に殺せたとしても彼といたいと思うとその首もとにナイフを突きつけることができなかった。そして、遂に——タイムリミットを迎えたわ。つまり依頼主から予め言われていた暗殺期限を過ぎようとしていた。私は迷った、迷った結果…彼を殺したわ。私の気持ちを心の奥底にしまって眠っている彼を出来るだけ苦しめないように、一撃で」

「……」

「気分は最悪だったわ。依頼主からはよくやったと多額の報酬をもたらったけど…何か大切なものを失った感覚と自分の中の何かが麻痺していくのを感じた」

「辛く…なかったですか？」

「結局その暗殺がきっかけで人を殺すことに何も感じなくなったわ。…いえ違う、自分の気持ちを殺すようになったのよ。南雲、あんたは今暗殺に対して疑問を持っているのよね？」

「そうです」

「私から言えることは…何もないわ。悩んで悩んであんた自身の答えを見つけないさい」

「わかりました」

「あんたの持ったその考えは間違っていないわ。だから引き金を引けなかったのは気にしなくていい、人間には人生を失敗する権利があるんだから。たった一回の暗殺の失敗を引きずる必要なんてないわ」

「…あれ？」

「どうしたの？なんか私おかしいこと言ったかしら？」

「律も人間には人生を失敗する権利があるって言ってたから」

「律が?…フツ、そういうことね」

「どういうことですか?」

「これはある映画のワンシーンの台詞なのよ。私はこの映画をととも気に入ってるから覚えてるけど…あのコもあんた達と一緒に色々と学んで成長してるんだなって思ったのよ」

「あーなるほど。でもいい台詞ですね、なんかこう胸にストンと落ちてくるというか」

「でしょ?だから好きなのよこの台詞が。…話を戻すけどあんたの暗殺に対する考えが決まったらよかったら教えなさいよ、先生としてもプロとしても気になるから」

「わかりました、ありがとうございます」

「既に昼だけどあんたももう少し休みなさい。たぶんみんな夕方くらいまで起きないでしょ」

「そうします」

ビッチ先生に別れを告げ俺は部屋へと戻るとやっぱりみんなは眠ったままだった。俺は布団に入ると先程話した内容を頭で反芻しゆっくりと目をつぶった。

夕方に目覚めると俺以外誰もいなかった。枕元にはみんなジャージで浜辺にいますというメモが残されていた。メモの右下の隅に小さく渚と自己主張をあまりしない感じで書かれていた。渚らしいなと小さく笑ってジャージに着替えみんなの下へと向かう。

「みんなおはよう」

「あつ南雲君。ジャージってことはメモ見たんだね」

「ああ、渚色々ありがとうがとな。それであの浜辺に浮いている大きなコンクリート?の固まりはなに?」

「ダメ元だけど殺せんせーが元に戻ったとき殺せるようにガツチリ固めてるんだって。烏間先生が不眠不休で指揮とってるよ」

「…本当に同じ人間なのか不安になってくるな」

「あはは…」

鳥間先生達の作業を見てシンとした空気が流れている。

すると磯貝が小さく言葉を溢し始める。

「鳥間先生だけじゃなくてビッチ先生もすごい人だし、ホテルで会った殺し屋達もそうだった。仕事に対してしつかりとした考えを持っていたし。…と思えば鷹岡元先生みたいに”あははなりたくないな”って人もいて。いいなと思った人は追いかけてダメだと思ったやつは追い越して…多分その繰り返しなんだろうな、大人になつてくつて」

磯貝の言葉にみんなは無言で頷く。すると聞いたことがないくらいの爆発音が響き体が思わず反応する。

殺せんせーを固めていたコンクリートが爆発したのだ。でもきつと失敗しているはずだと思った。そう思ったのはどうやら俺だけじゃなかったらしくみんなは殺せんせーの姿を探すようにキョロキョロと周りを見ている。

「ヌルフッフ、先生のふがいなさから苦労させてしまいました。ですが皆さん本当によく頑張りました！」

みんなの真後ろに殺せんせーは気付いたら立っていた。なんだか触手がある殺せんせーを久しぶりに見たような気分になった。

「では皆さん旅行の続きを楽しみましょう…と言いたいところですがその前にやる必要があります」

「「やるハントか…」」

「正確には聞くべきことですね。南雲君、わかっていますね？」

「…はい」

殺せんせーがそう言うとは皆は口々にそういえばと言っている。

「正直昨日の南雲君を見た瞬間からどうしてかギターが弾けてあんなに歌がうまいか聞きたくて聞きたくて。ですが鳥間先生に止められました」

あとで鳥間先生にお礼を言っておこう。

「そうだなあ…どこから話そうか…」

俺が話の切り出しかたを考えているとみんなの視線が俺に集まっている。当然といえば当然だがなんだか恥ずかしくなってきた。

「みんなは…将来の夢はあるか？俺はある。自分の歌で食っていくことだ。もつと言えば今組んでいるバンドでメジャーデビューをして日本全国で知らない人がいないくらいになる」

俺の言葉にみんなは物真似みたいな真剣な顔になる。やはり中学3年生という将来を見据えた時期だからだろうか。

「バンドで俺はボーカル、ギターの役割だ。だから歌も普通の人よりは上手いし当然ギターも弾ける。これで昨日なんで俺がああいうことができたっていう説明になると思うんだけど…みんなは笑わないのか？」

俺の言葉にみんなは無言のまま顔を見合わせる。すると笑って言葉が続ける。

「ギター弾けるなんてそんなカッコいいこともつと早く言えよ！」

「人の夢なんだから笑うわけないだろ！」

「今度弾いてほしい曲あるからお願いしていいか？」

男子達の声が大きすぎて女子も何か言ってるのだが俺の耳には届かなかった。でも批判的なことを言ってる人は誰もいなくて、油断すると涙が落ちそうだった。それくらい嬉しかった。

「だってさ歌手だぜ？現実を見るとか思わないのか？」

「ヌルフフ、そんな冷たいことを言う人はこのクラスには一人もいませんよ？それよりも皆さん質問はないですか？」

「ハイ！ハイ！」

「では中村さんどうぞ」

気付いたら俺への質問コーナーみたいになっている。

「私小学生のときに何回か純一の家言ってるけどギターとかなかったよね？いつからやってんの？」

「目指し始めたのは幼稚園のときだ。ギターは俺の部屋じゃなくて別の部屋に置いてたから気付かなかったんだろ。それと秘密にしたのは…恥ずかしかったからだよ」

「いやー幼馴染の新たな一面が見られたね」

「じゃあ他に質問がある人はいませんか？」

「はい！」

「岡島君どうぞ」

「バンドは何人組なんだ？女の子はいるのか？」

「4人組で俺の他にベース、ドラム、キーボードがいてキーボードだけ女の人だよ。ちなみに俺以外は高校生」

「おー！その女性は可愛いのか？」

「まあそれなりに」

「今度ライブやるときチケット売ってくれ！」

「いいけど彼氏いるからな」

「可愛い人は見るだけで癒されるから十分だ！」

「そ、そうか。岡島がそれでいいなら」

「他に何か聞きたいことがある人はいますか？キリがないのでこの場では最後にしますか」

「はーい！」

「倉橋さんどうぞ」

「純君は自分で曲作ったりするの？」

「するよ。でも自分の中の経験だけじゃ足りないと思ってるから本を読んだり映画を観たりで補っている」

「今度聴かせてね！」

「いいよ。ライブやるときチケットあげるからその時にでも聴けるよ」

「俺もチケットほしい！」

「私も！」

「純」と俺親友だよな!？」

みんながチケットを欲しがっているのでキャパとかの関係があるから順番になるからと説明する。ていうか前原の俺とお前は親友だよなって頼みかたは俺がまるで宝くじに当たったみたいだなと思っ

た。俺はみんなが聞いている今だからこそ言うべきことがあると思っ

たのでさつきまでの笑顔とは全く別物の真剣な顔になって話を切り

出す。

「俺、みんなに謝らなきゃいけないことがあるんだ」

俺の真面目な空気を察したのかクラス全員が姿勢を正すかのよう
に俺を見る。

「昨日の暗殺で俺…引き金を引くことができなかつたんだ。せつかく
信頼してくれて俺に止めを任せてくれたのに…みんなごめん！」

「…おい南雲、なんか勘違いしてねえか？」

「寺坂…」

「お前一人の責任な訳ねえだろ。信頼してお前に止めを任せただけどな
にも100%確実に成功するなんて誰一人思っちゃいねえ。それに
お前が引き金を引こうと引くまいと昨日の暗殺はこのタコが防いで
失敗に終わってたはずだ」

「でも…」

「それにお前は俺に言ったよな？出来事の責任をクラス全員で割れば
27分の1だつて。お前の失敗は俺達の失敗だ。お前が撃てなかつ
たんだつたら俺達が撃てるわけがねえ。なあみんなそうだろ？」

「…寺坂の言う通りだ」

「南雲君気にしなくていいんだよ」

「てか寺坂のくせに良いこと言い過ぎ」

「おいカルマ！聞こえてるからな！本当に許さねえからな！」

寺坂がカルマのコメントに対して怒つたのを見てみんなは笑う。
でも俺は――

「みんな…ごめん、本当に…ありがとう…」

「お、おいあの純」が…」

「な、泣いている…？」

「なんか泣いてる姿もイケメンなのがちよつと腹立つ」

「ヌルフッフ、仲間はいいいものですねえ。楽しいときは共に笑いあい、
悲しいときはその分辛くなくなる。先生はこの旅行で君達の本当の
繋がりとこのものを感じました。そうでしょう？南雲君？」

「…ハイ。本当に良い仲間を持ったと思います。…俺の自慢です」

仲間の優しさに触れて俺は涙が止まらなかった。止めようと思っ

ても止まらなかった。

「南雲君、これ」

「ありがと、神崎」

ハンカチを受けとると俺は涙を拭く。

「そういえば前に話したこと叶ったね」

「?、前に?」

「うん。海行きたいねって話したでしょ?」

「そんなのよく覚えてたなあ。言われて思い出したよ」

「…忘れないよ。南雲君と話したことだから」

「えっ?」

神崎の言葉に驚いた俺は横にいる彼女を見る。その目は俺の方は向いていなくて、どこか遠くを見てるような、何か別の事を考えていてここにいるのに別の場所にいるかのような目だった。その横顔を見て俺は綺麗だなって思った、今まで見たどんな人よりも。

「今度一緒に出かけようよ」

「いいよ。みんなも一緒?」

「ううん、2人で。南雲くんの都合の良い日で大丈夫だから」

「了解。そのときになったら連絡するよ」

「約束だよ?」

神崎が小指を差し出してきたので俺も小指を出して指切りをする。最後に指切りをしたのはいつだったろうか、記憶を辿っても思い出せない。

「それでは旅行の続きを楽しみますよ!」

殺せんせーが仕切り直しと言った感じで全体に対して宣誓する。

「旅行の続きだったってもう夜だよ?」

「うん、明日は帰るだけだし」

「1日損した気分だよね」

「ヌルフフフ、夜だから良いんですよ。昨日の暗殺のお返しにちゃんとスペシャルなイベントを用意しています。真夏の夜にやる事はひとつ、肝試しです!」

殺せんせーの言葉にみんなはポカンとした顔になる。何もないと

思った矢先また何か始まるみたいだ。

第29話 リゾートの時間 その4

「肝試し?」

「先生がお化け役を務めます、久々にたっぷり分身して動きますよお。もちろん殺しにきても構いません。旅行の締めくくりにはピッタリでしょう」

「おもしろそー!」

「えーでも怖い嫌だな」

「へーきへーき!」

「はしゃぐ俺達を見てあったかい目でこちらを見ている殺せんせー。」

「場所はこの島の海底洞窟。300メートル先の出口まで男女ペアで抜けてください。男女ペアは…そうですねえ、組みたい方は是非組んでください」

「渚!私と組まない?」

「茅野は僕でいいの?」

「おーい岡野組まねえ?」

「うん…いいよ」

続々とペアが出来ていく、どうしたもんかな。

「あら純一、お困り?」

「莉桜のほうこそ困ってるんじゃない?」

「しようがないから組む?」

「そうだな、よろしく」

流れで莉桜と組むことになったが久しぶりにこういうのでペアになったなと感じた。小学生の頃は当たり前だったのに。

「南雲君どうしよう!前原から誘われちゃったよ」

「ああ、よかったな」

「岡野ちゃんおめく」

「ありがとう…じゃなくて!どうすればいいかな?」

「別にいつも通りでいいんじゃないか?…訳もなく殴ったり蹴ったりしない限り嫌われはしないだろうし」

「それと心配してたアピールしたら？体調よくなってよかったーみたいな」

「…そうだね。うん、そうする。ありがと！」

そう言っただけ岡野は前原の下へと戻る。残された俺達は離れていく岡野を見送る。

「…やっぱりこういうので関係が進展したりとかするのかねえ」

「なんだ莉桜らしくない。誘いたいやつでもいたのか？」

「ま、声かけるか迷ってたって感じね。それに純一も困ってる感じだったし」

「ふーん…俺達の番だな、行こうぜ」

「エスコートよろしく」

怖いのが平気なはずだからエスコートもなにもないだろとは思ったが、岩場で歩きづらいうちはななので段差くらいは教えてやろうかなと一歩先を歩いた。

*

杉野視点

「神崎さん、よかつたら俺と組もう！」

殺せんせーが組みたい人と組んでいいと言ったとき俺はすぐに彼女の下へと行き肝試しに誘った。勇気を出した甲斐あってか良い返事をもらうことができ、思わずガッツポーズをしました。

「それでその時俺は言ったんだよ——」

今は肝試しの順番待ちをして彼女と話している。神崎さんは俺の話の要所要所に相づちを打ってくれていたので俺も話しやすかったけど、あることに確信が持ててしまった。認めたくはないけど。

俺と話しているけど、神崎さんの心はここにはなくてどこか別のところにあるって。他の誰が見てもわからないだろうけど、ずっと彼女の事を見てた俺だからわかる。

教室とかで俺が神崎さんを目で追ってしまうように、彼女もまた目で追っていたんだ。それは俺の親友でその事に気付いたとき俺はど

うすればいいんだろうって頭を悩ませた。だから今まで気付かない振りをしてたんだ。

もちろん純一に対して手を引いてくれとかそういうのは一切言うつもりはなかった。神崎さんのことが好きだと言いつつ、彼女に対して起こせたアクションは何もない。強いて挙げれば修学旅行に誘ったくらい、ただそれだけだ。彼女の心が純一に靡くのも当然だった。同性の俺から見ても純一はカッコいいし、何より良いやつだから。

俺のこの気持ちが届かないとわかってても、それでも俺は神崎さんを諦められなかった。追いかけても心の距離は縮まらないし、叶わない恋に飛び込んだ俺だけこの気持ちは偽れなかった。

俺は神崎さんのことが誰よりも好きだ。

*

〜南雲視点〜

「莉桜、そこ滑りやすいから」

「なに？私の話が面白くないって？」

「そのスベるじゃない」

「冗談、わかってるわよ。ありがとう」

「それにしても…殺せんせーの考えがわかってきたんだけど…」

「これって明らかに私達をくっつけようとしてるよね」

入り口で殺せんせーは気合いの入った語りをしていたので本格的なんだと思つた矢先にカップルベンチに座れだのイチヤイチャするカップルを見れば恨みが収まるだの明らかに目的が透けていた。極めつけはポツキーゲームをしろという指令、訳がわからないよ。

「でも殺せんせーってE組で一番怖がりだよな？その内ポロ出るんじゃないの？」

「たしかに。狭間ちゃん辺り見たら驚きそうだよな」

『キヤーツ!!化け物出たーツ!!』

「…殺せんせーだよな」

「…うん」

そこからはひっきりなしに殺せんせーの悲鳴が聞こえ続けた。もはや肝試しのきの字もなかったので俺と莉桜の2人はそのまま出口へと向かった。

「要するに…怖がらせて吊り橋効果でカップル成立を狙ってたと」

「殺せんせーは結果を急ぎすぎなんだよ」

「怖がらせる前にくつつける方に入ってるから狙いがバレバレだし」

「だって見たかったんだもん！手繋いで照れる2人とか見てニヤニヤしたいじゃないですか！」

「うわっ泣きギレだ」

殺せんせーは大人のはずなのだが隠すことなく大泣きで駄々をこねる。ちよつと感情に正直すぎないかな。

「まあでも殺せんせー、そーいうのはそつとときなよ。うちら位だと色恋沙汰とかつつつかれるの嫌がる子多いからさ」

珍しく莉桜が宥めるほうに回る。

「うう…わかりました」

「何よ！結局誰もいないじゃない！怖がって歩いて損したわ！」

俺達全員が声が出した方向を向くとビッチ先生が一方的に腕を組んでいる状態で海底洞窟から烏間先生、ビッチ先生ペアが出てきた。

「だからくつつくだけ無駄だと言ったろ。徹夜明けにはいいお荷物だ」

「うるさいわね男でしょ！美女がいたら優しくエスコートしなさいよ！」

「ただの洞窟に何もあるわけないだろ」

「だからって…もう…」

ギャアギャアと騒いでたのとは一転、俯き気味に寂しそうな表情になるビッチ先生。そんな様子を見て誰かが呟く。

「…なあ、うすうす思ってたけどビッチ先生って…」

「…うん」

「…どうする?」

「明日の朝帰るまで時間はあるし…」

「(くつつけちゃいますか!?)」

クラス全員が悪い表情になる。それと共に暗殺旅行最後の作戦が開始された。

*

「意外だよなくあんだけ男を自由自在に操れんのに」

「自分の恋愛にはてんで奥手なのね」

ホテルのロビーにてビッチ先生を囲んで話をしている俺達。烏間先生は暗殺の報告とやらで部屋に籠っているので逆に都合がいい。

「仕方ないじゃないのよ! あいつは世界でも見ないくらいの堅物なのよ! そりや私にだってプライドがあるし男をオトす技術だって千を越えてるから色々試したわよ! ムキになって本気にさせようとしてる間に…その内こつちが…」

「…可愛いと思ってしまった」

「なんか屈辱」

「なんでよ!」

ビッチ先生は意外と不器用だし、積み上げた経験が逆に邪魔で気持ちに素直になれないんだろうな。こういう恋の形もあるということ覚えておこう。するとE組きつての恋愛の達人こと前原が口を開く。

「俺等に任せろって! 2人のためにセッティングしてやんぜ! 作戦決行は夕食の時間だ!」

「いつもお世話になってるしね」

「最高のディナーになるといいね!」

「烏間先生をビツクリさせるか!」

「あ、あんた達…」

「ヌルフフフ、では恋愛コンサルタントE組の会議を始めますか」

「ノリノリね、タコ」

「同僚の恋を応援するのは当然です。女教師が男に溺れる愛欲の日々…甘酸っぱい純愛小説が描けそうです」

「殺せんせー、それ明らかに官能小説だよね？」

「まあまあ南雲君。今回の会議は君が重要ですよ、何て言ったらって烏間先生の一番弟子ですから。色々と情報提供、提案をお願いします」
「うーん…まず服が悪いかな」

「たしかに。露出しときゃいや的な」

「烏間先生みたいな日本人はそういうのは好みじゃないからもっと清楚な感じで攻めない」と

「む、むう…清楚か」

「清楚つつたらやっぱり神崎ちゃんか。昨日着てた服乾いてたら貸してくんない？」

「あ、う、うん」

そう言ってビッチ先生と神崎は部屋へと着替えに行った。数分後に戻ってきたので俺達は全員下を向いてせーので一斉に見る。

「ほら、服ひとつで清楚に…なつてねーな」

（（なんか逆にエロい！））

女子でさえも赤面している。清楚系ガリーなワンピースを着ていた神崎だが、ビッチ先生が着ると胸元が大きくはだけてしまい、それこそビッチみたいになんか感じになつていた。

「そもそも全てのサイズが合わないな」

「神崎さんがあんなエロい服を着てたと思うと…」

岡島の言葉に赤面し顔を両手で覆う神崎。俺はなんとなく腹が立ったので無言で岡島のケツを蹴飛ばす。

「もうこの際エロいのは仕方ない！大切なのは胸よりも人間同士の相性よー」

「そーだよ！岡野さんの言うとおり！」

岡野と茅野の2人がなぜこんなに声をあげているかは全員がわかっているがあえて口には出さない。

「それでは南雲君、烏間先生の女性の好みは？」

「うーん…あー1度だけ女性をべた褒めしてたことあるけど…」

「えつなにB専？」

「いや、そうじゃなくて…褒めてたのって柔道女子の無差別級の人だから理想のタイプってよりは理想の戦力って感じかなって」

「たしかに」

「いや…強い女が好きって線もあり得るけど、なおさらビッチ先生の筋肉じゃ絶望的だね」

竹林の一言にビッチ先生はぐぬぬと唸る。奥田がそんなビッチ先生を見てじゃ、じゃあと切り出す。

「手料理とかどうですか？ホテルのダイナーも豪華だけどそこをあえて2人だけは烏間先生の好物で！」

「烏間先生、ハンバーガーかカツパ麺しか食ってんの見たことないぞ」
「…なんかそれだと2人だけ不憫すぎるわ」

「純…なんか他にないか？」

「訓練後にサラダチキンとプロテインを2人で摂取したことあるよ」
「なお不憫だわ。てか摂取の時点で食事というより栄養そのものとし
か見てないだろ」

つけ入る隙が無さすぎる。さすが烏間先生。

「なんか烏間先生の方に原因あるように思えてきたぞ」

「でしよでしょ？」

「先生のおふぎけも何度無情に流されたことか…」

打つ手を無くして烏間先生がディスプレイられ始めた。

「と、とにかく！ダイナーまでに来ることは整えましょう。女子は日本人が好むようなスタイリングの手伝いを、男子は2人の席をムードよくセッティングです」

「はーいー」

「そうだ純ー！ダイナーのときにギターでムードいい感じで演奏できないか？」

「やってもいいけど烏間先生怪しまないかそれ」

「た、たしかに」

「でも音楽でムードを作るのはいい案だな。ホテル側が演奏すれば自然だし頼んでみるか」

「席はどーするよ？俺達のガヤがあつたらいいムードもなにもなくないか？」

「それだったら取って置きがいい場所があるよ」

「いい場所ってどこだカルマ？」

「ほらあそこ」

カルマはそう言つて外を指差す。その席は俺達が夕食を食べる場所とは別に用意されているホテルの施設の一部であろう特別席だった。

「さすがカルマよく見つけたな」

「いやあそこで食べてる人だったらイタズラしやすいなうって思っただけだよ」

「…烏間先生とビッチ先生の邪魔はするなよ」

「とりあえずこれで大丈夫だな。後は女子のコーデ次第つてことだ！」

磯貝がまとめて男子による会議は終了、ホテル側に許可を取つたり夕食までに時間がないので迅速に行動した。

21時ディナー開始。時間に正確な烏間先生はちょうどにホテルのレストランに来た。

「俺の席がないように見えるが…どこだ？」

「あつ烏間先生。いつも先生方にはお世話になってるのでホテル側をお願いして特別席を取つたんです。外に席を用意してるんでビッチ先生と楽しんでください」

「俺達国が迷惑をかけている立場なのにすまないな」

「いえいえ。そちらのドアから出られるので」

烏間先生は俺の言葉に従つて外に向かう。外へと繋がるドアが閉まると同時にクラス全員が特別席が見えるドアへと近づく。

席には既にビッチ先生がいつもと違った大人しめのドレスのような服装でスタンバイしている。

「あのシヨールどうしたの？」

「売店で買ってミシン借りて…ネット見ながらブランドっぽくアレンジした」

「原さん家庭科強いもんなー」

「ていうか声が聞こえないね」

「てことはせつかく頼んだ音楽も2人に聴こえないんじゃない？」

「…まあ俺は良い音楽が聴けて嬉しいから」

「純君と同じで私も嬉しいよ」

「ともあれフィールドは整った、いけビッチ先生！」

前原の言葉にクラス全員が同調する。たしかにビッチ先生をからかって楽しんでいるが上手くいってほしいというのは全員同じ気持ちだった。

「なに話してるんだらうね」

「月がきれいですねとか？」

「それくらいじゃやっぱり烏間先生は気付かないよ」

「でも2人とも楽しそうだよね」

「先生3人いて1人はタコだから、人間同士仲良くなんのはトーゼンだろ」

「うう、寺坂君ひどい！」

「殺せんせー静かに。あつビッチ先生席立った」

ビッチ先生は席を立つと烏間先生がの胸元のナプキンを直し口をつける、ナプキンの同じ場所を烏間先生の口へとつけ何か言っていた。一体何を言ったんだらうか？ビッチ先生が中に入ってくるとクラス全員がブーイングを浴びせる。

「何よ今の中途半端なキスは！」

「いつもみために舌入れる舌！」

「ビッチってのは名前だけか！」

「あーもーやかましいわガキ共！大人には大人の事情があんのよ！」

「いやいや、彼女はここから時間かけていやらしい展開にするんですよ、ね？」

「ね？じゃねーよエロダコ！」

ビッチ先生とみんなが騒いでいるのは南の島も終わりかーとセンチメンタルな気持ちになった。だけど旅行が終わっても暗殺は続く。今回のような失敗を2度とするわけにはいかない、俺はひとつの決心をした。

*

俺はみんなが寝静まった頃外のベンチでカルマを待っていた。今回の潜入について詳しく聞こうと思ったからだ。

「南雲ここにいたのか、ちよつと思つてたところと違つたよ」

「すまんな、カルマ」

「いいよ、それで潜入のことが聞きたいんだつて？」

「ああ。カルマの主観でもいいからできるだけ詳しく頼む」

「了解、まず最初は――」

そこからカルマは潜入の一連の流れを説明してくれた。

・ロビーを通るためにビッチ先生がピアノの演奏で警備の目を引き誰も気付かれることなく潜入でき、そしてそれを見た烏間先生が”優れた殺し屋ほど方に通じる”という印象的なことを言つてたこと。

・俺達にウィルスを持った人はホテルで最初サービストリンクを配つていた人でその人の麻酔ガスで烏間先生が戦闘不能になつたこと。

・素手が暗殺道具のプロとカルマが戦闘、毒使いのおっさんの未使用をくすねた麻酔ガスを使用し勝利を収めたこと。

・渚が女装したこと。

・3人目の暗殺者に対して千葉と速水が実弾で応戦しクラス全員で攪乱して相手を拘束したこと。

「それで鷹岡を渚君が猫だまし？で怯ませたあとにスタンガンを流して勝利つて感じ」

「詳しくありがとな、カルマ」

「いつだったか南雲が『渚の暗殺は直接見なきゃどうしてもわからない』つて言つてたけどその意味がわかつたよ」

「と言うと？」

「怖くないのが怖いっていうのが俺の感想かな」

「怖くないのが怖い？」

「そ。渚君見て正直俺衝撃受けた。鷹岡を倒したことじゃなくて倒して帰ってきた後なんだけど…全つ然怖くないんだ。あんだだけの強敵を仕留めた人間が。突然だけど俺がクラスで一番警戒してるの南雲なんだよね」

「成績とかそういうの？」

「それもあるけどそうじゃなくて…烏間先生に唯一クリーンヒット与えたの南雲だけでしょ？それで仮に戦闘になったとして俺の敵となるのは南雲くらいだからそういう意味で警戒してるんだ。それでそういう腕っぷしが強い所を見せた奴って普通ちよつとは俺だけじゃなくて誰もが多少は警戒するけど…渚君は何事もなく皆の中に戻ってた。目立つのが苦手だからちよつとだけ照れ臭そうに」

「その様子が容易に想像できるな」

「ケンカしたら俺が百パー勝てるけど殺し屋にとってそんな勝敗何の意味もない。警戒できない、怖くないって実は一番怖いんだなって初めて思った。…でも負けないけどね、先生の命をいただくのはこの俺だよ。E組で勝つのはアインシュタインじゃなくてダーウィンだ」

「強い者が生き残るんじゃないやなくて環境に適応した者が生き残るからな。…まあお互い頑張ろうぜ」

「そうだね」

俺の言葉にカルマは真面目な顔から一変し、いつもみたいなのらしくらりと人を小馬鹿にするような顔に戻る。

「アンタ人を呼んどいて場所を教えないってどういうことよ…って、赤羽も呼んだの？」

「なに南雲ビッチ先生呼び出し？烏間先生から略奪すんの？」

「ちげーよ、昼頃に話したことで答えが出たからビッチ先生に報告しようと思って。それにカルマがそれを聞くことでもし失敗したときに言い訳しないように逃げ道なくしておこうと思ったんだよ」

「アンタなりの答え出たんだ」

「ハイ。俺は…殺せんせーを殺します。信頼してくれている皆のためつてのもあるけど…自分が、俺が納得するために暗殺を続けます」
「…そう。じゃあ頑張りなさい。あんたには良い仲間がいるんだから」

「はい」

「じゃあ私は部屋に戻るわ。夜更かしは女の敵だからね」

そう言つてビッチ先生はホテルへと戻る。俺のただ一言を聞くためだけにわざわざ来てくれたことにビッチ先生も先生として成長してるんだなつて思った。

「なに? どういうこと?」

「気にするなカルマ。殺せんせーを殺すつていう宣言をしたんだよ」

「まあよくわかんないけどたぶん引き金が引けなかった関連でビッチ先生に相談したつてところでしょう?」

「…バッチリわかつてんじゃねーか。…話は変わるけどさ日本に戻つたら俺の家に遊びに来いよ」

「南雲の家に? いいの? 俺行つたら部屋物色しまくるよ?」

「いいよ。渚とか誘えるやつみんな誘つてさ」

「了解、楽しみにしてるよ」

「…カルマ、お前結構な量勉強してるだろ?」

「…なんのこと?」

「指、ペンダコできてるぞ」

カルマの指を何気なく見た俺は1学期にはなかったペンダコを発見した。カルマもカルマで殺せんせーに言われた言葉を噛み締めて努力をしてるつてことがなんだか嬉しかった。

「ちよつと南雲、なににやけてんの?」

「にやけてねーよ。ただ凜香とは別ベクトルのツンデレだなーつて」

「そんなんじゃないから」

「そうかそうか」

「だからそのにやけやめてくんない? 殴りそうなんだけど」

「カルマも努力してるつてことが嬉しかったんだよ。…次のテストは頑張ろうぜ」

「…言われなくても頑張るよ」

そう言つて2人で部屋へと戻る。まずは帰りの船の中でも家で遊ぶ旨声をかけるかと頭で考えながら歩く。

ふと空を見上げると日本では見られない数の星々が俺達を照らすように輝いていた。まだまだ夏休みは続く、E組のみんななどもっと色々なことがしたいなと空の星々を見て思いを馳せた。

第30話 同級生のうちへ遊びに行こう

「父さん、明日家に友達来るから」

「了解、何人？」

「9人」

「9人か、クラスの3分の1くらい来るんだな」

「大丈夫だよな？」

「持て余すくらい広い家建てちゃったからな。いくら夢だったとはいえアホなことをしたなと少し反省している」

「反省はいいよ。たぶん俺の部屋だとキツイからリビング使うから報告しとく」

「了解。朝から来るのか？」

「12時過ぎくらいからかな」

「ふーん、そっか。俺は明日午前中に出かけて昼過ぎに帰ってくるからケーキでも買ってくるよ」

「えっいいの？」

「お前が友達を家に連れてくるの久しぶりだしな。…まあ本音を言うところというときくらいしかケーキ買わないからさ」

「ありがとう。それだったら誕生日プレート1枚買っておいて。じゃあ俺は明日に備えて寝るから、父さんも早く休みなよ」

「了解、じゃあおやすみ」

「おやすみ」

そして翌日。みんなが来る前に掃除機などをかけておき、より綺麗な状態にしておく。

片付けを終え時計を見ると11時30分。約束の時間までまだ時間があるからとりあえずギターでも弾いて時間を潰すかと思いきや部屋へと向かうと玄関のチャイムが鳴る。インターホンのボタンを押すと茅野が確認できたのでドアを開ける。

「いらっしやい、一人で来たの？」

「うん、ちよつと行くところあったからみんなとは別に来たんだ」

「ふーん。まあ上がってよ」

「お邪魔しまーす。持て余してるって言ってたけど本当に家でかいね」

「この家主はでかくしすぎたって後悔してたけどね」

「あはは、なにそれ」

茅野をリビングに通すとリビングでもおー！と声をあげる。

「ソファーがでかい！」

「リビングに入って第一声がそれかい」

「だってそう思ったし」

「他になんかあるだろ…ってなんか今日の茅野オシヤンテイーだな」

「あつわかる？今日の服今年の新しいやつなんだ」

そうやってバレエのダンサーのようにその場で一回転する茅野。

なんだか妙に慣れてるといふか絵になるなと思った。

「へえ〜可愛いじゃん」

「えへへ、ありがと！」

「渚が来るからそれ着たのか？」

「違うよ！単純に新しいの着ただけ！」

「ほーん」

「なにさ！南雲君もいつもよりおしやれな格好しちやって！神崎さんとかが来るからでしょー！」

「そりやお客さんが来るんだからちゃんとした服装をするのは当然だろ」

「むー」

そう言つて茅野が頬を膨らましていると玄関チャイムが鳴つたのでインターホンを確認する。今度こそ全員来たみたいだったので玄関を開ける。

「いらっしやい。ひーふーみー…全員来たみたいだな」

「純一、あんたひーふーみーで数えられるの？」

「いや正直無理」

「じゃあ数え直したら？」

「わかった。一、十、百、千、万、十万、百万、千万、よし全員いる」
「もつと数えにくいよ！」

「渚のツツコミを聞くと安心するなあ。とりあえず玄関にいるのもな
んだから上がってよ」

「お邪魔しまーす」

そうやってカルマ、渚、友人、神崎、倉橋、莉桜、凜香、矢田の8
人は家の中へと入る、これで9人全員揃った。

「わー！ソファアーでかい！」

「小学生に来たときよりソファアーでかくなってない？」

「なに？今は人の家来たらソファアーを褒めるのが主流なの？」

「あつ茅野さん、おはよう」

「神崎さんおはよう」

「買ってきたお菓子はここに置くとして飲み物どうしたらいい？」

「あつ矢田ありがとう、わざわざすまん」

「ううん、みんなで近くのコンビニで買ってきたから」

「コップ出すからテーブルと一緒に置いといてくれ」

「はーい」

「あれー？ソファアーの下に何も無いね」

「こっちのソファアーの下にも無いわ」

「カルマに中村、そんなところにエロ本があるわけないだろ」

「そっか、南雲の部屋に行かないとないよね」

「俺の部屋にもねえよ、てかこの家にそんなもんねえよ」

「純一、クーラーの設定2度下げといたわよ」

「その辺はどうでもいい。皆の様子を見て勝手に上げ下げしてくれ」

「なあ純一、このテレビ何インチ？」

「すまん友人、知らない」

「純君の家ってペット飼ってないんだね」

「あれ倉橋言わなかったっけ？」

「南雲君が忙しそうだ」

「渚、そう思うんだったらツツコミを手伝ってくれ」

閑話休題。

お菓子を開け、飲み物を注ぎ先程までの怒濤の皆の攻め？は落ち着く。

「いやーでも小学生に来たとき以来だけど結構家具の配置変わってるのね」

「1年に1回くらい模様替えしてちよつとずつ変えてるから積み重ねだな」

「南雲の父さんは今日いないの？」

「用事で出かけてて昼過ぎに帰ってくるよ」

「へえーそうなんだー」

「南雲君のお父さん面白いよ」

「茅野は会ったことあるの？」

「私もあるよ」

「茅野と神崎は修学旅行前に会ってるもんな。莉桜も小学生の頃に面識あるし」

「へえー楽しみだな」

「ところでだけど凜香大人しすぎない？お邪魔しますしかまだ喋ってないだろ。借りてきた猫状態になってるな」

「…いやなんか緊張しちゃって」

「凜香ちゃん可愛い」

「…別に可愛くないし」

倉橋と矢田両方から頭を撫でられ顔が少し赤くなる凜香。

「ていうか何でこんなソファーでかいの？なんか悪いことしてんの？」

「ナチュラル失礼かカルマ。いやたまに父さんへの来客あったりするからそれででかいんじゃないかな」

「ふーん」

「てかソファーだけじゃなくて食卓の椅子も使って10人が収まってるからこんなもんだろ」

「たしかに。ところで純一の部屋見たいんだけど」

「えー見せなきゃダメ？」

「純一、正直今日のメインイベントだろ」

「まあ断る理由もないしいいよ、2階だから階段気をつけて」

そう言つて俺が先導し自分の部屋を開ける。

「わーちゃんと綺麗にしてある」

「机変わつてないのね」

「なんか良い匂いする」

「ベッドの下は…何もないと。机の引き出しの中かな」

「だからエロ本とかはないって」

「間接照明あるなんて洒落てるねー。この目覚まし時計も良い感じのデザインだし」

「本当にカルマは物色しまくってるな」

「やっぱりギターは置いてあるんだね」

「どうして3本もあるの？」

「ちよつと説明すると3本あるけど大きく分けたらエレキとアコギの2種類だけんだけどエレキの2つがストラトとレスポールっていう種類なんだ」

「へえーやっぱり音違うの？」

「そりゃね」

「聞きたい聞きたい！」

俺はそれぞれをアンプへと繋ぎ音を出す。同じのを軽く弾けばなんとなく違いがわかるかなと思ひ少し弾く。

「ほんとだ、なんとなく音が違う」

「なんとなく尖ってるのとなんとか丸っぽい感じだ」

「おつ友人いい線いってる。音をこだわる人はすげーこだわるからね、俺はどちらかというとなんとか無頓着な方だよ」

「ねえ純一なんか一曲弾き語りしてよ」

「嫌だよ。自分の家で同級生の前で弾き語りって拷問かよ」

「えー弾かないの？」

「まあライブに来てよ。チケットあげるから」

「弾かないんだったら何でもいいから秘密ひとつ教えてよ」

「何でそうなるんだカルマ」

「ほら、あれだよ、等価交換」

「絶対に今本棚にあるハガレン見て思い付いたら」

「でも確かに純一の秘密知りたいかも」

「私も聞きたいな」

「凜香と神崎まで……秘密って言われてもなあ」

何かあったかなと頭を回転させてると矢田と目が合う。矢田は口をパクパクとさせて何か伝えようとしている。なんだろう、目で壁の方を示してるけど……あーそれがあったか。

「あったわ、秘密」

「なにになに!？」

「昔押入れが怖かったからその名残で今も押入れが閉じてないと寝れないことかな」

「押入れってこれ？」

そうやって渚は押し入れを少し開ける。

「そうそれ。絵本で別の世界に繋がってるのを見てなんとなく怖くなった」

「あく」おしおしのぼうけん」ね」

「みんな知ってるのか。絵本って結構記憶に残ってるよな」

「私はやつぱり」はらぺこあおむし」かなあ」

「僕は」ねないこだれだ」がパツと出てきたよ」

「色々覚えてるんだね」

「……あれ本棚に1冊だけ絵本ある」

「よく見つけたな凜香」

「これ」100万回生きたねこ」だよ。純一好きなの？」

「うん、絵本の中で一番好きだよ。……それとその一冊は母さんが俺が生まれる前に買ったやつだから。他のやつはどこかに寄付したけどそれだけは取ってあるんだ。……なんか湿っぽい話してごめん、小学生のアルバムもあるけど見る？」

「見るー!」

「じゃあ……ハイこれ」

俺は机の引き出しから卒業アルバムを取り出しみんなに渡す。

「ちよつと純一、私もいるんだけど」
「えーよくね？」

「私今と全然違うからあれでしょ」
「南雲君と中村さんは何組なの？」

「2組だよ。岡島も同じだから」

「えーつと2組は：あついた！」

「純君の顔幼ーい！」

「あつ本当だ、中村さんも幼いね」

「髪はこのときまだ黒かったんだね」

カシヤツ

「おいカルマ、写真撮ったのお前だろ」

「えー撮らないわけないでしょー」

「カルマ君後で送つといて〜」

「いいよー」

「俺はいいけど莉桜のは撮るなよ」

「大丈夫、南雲のしか撮つてないから」

「何でだよ」

「あつ南雲君リレーのアンカーだったんだね。襷つけてる」

「純一昔から脚速いから。鬼ごっこで全然捕まえられないのよ」

「そーいえばそうだったな」

「他になんか純一のエピソードない？」

「うーん：あつ意外だと思っけど純一って劇のときに絶対主役やらな
かったのよ」

「ほんと？」

「本当よ、ねえ純一？」

「うん」

「えーどうして？純君主役似合いそうなのに」

「なんとなく主役に苦手意識があつたんだよ。台詞が何個かある役を
台本見て選んでた」

「へえ〜意外」

「逆にこの中で主役やったことある人いるの？」

俺の一言にみんなは無言になる、どうやらいなかったやしい。すると玄関のドアが開く音が聞こえる。

「あつ父さん帰ってきた」

「本当？なら挨拶しなきゃね」

「おお、なんか莉桜が礼儀正しい」

「失礼ね、私はちゃんとしてるときはちゃんとしてるわよ」

「とりあえずお父さん見たいなく」

「：私もちよつと気になるかも」

「了解、じゃあ降りるか」

部屋を出て全員がリビングに降りると案の定父さんが帰ってきていた。

「父さん、おかえり」

「「お邪魔してます」」

「みんな、ただいま」

「そこはこんにちはじゃない？みんな南雲家の人間かよ」

「元を辿ればみんな一緒だから」

「アダムとイブまで遡る気か」

「それよりみんないらっしやい。えーつと茅野さんに神崎さんに……もしかして莉桜ちゃん？」

「ハイ、お久しぶりです」

「いや、綺麗になってたからわかんなかったよ。えらいべつぴんさんになつちやつてまあ」

「べつぴんさんって死語じゃね？まあ順に紹介してくけど、この頭良さそうなのがカルマ、小さくて可愛いのが渚、運動してそうなのが友人、茅野と神崎は飛ばしてふわふわなのが倉橋、クールビューティーなのが凛香、で最後にポニーテールなのが矢田」

「カルマ君に渚君に友人君、倉橋さんと凛香さんと矢田さんね、よし覚えて」

「渚が男ってわかったんだ」

「わかるよそれくらい。何年生きてると思ってる」
「さすが」

「それよりみんなケーキ買ってきたから食べるといいよ」

「ありがと、父さんも食べるでしょ？」

「いや、また出掛けなきゃいけないから冷蔵庫にでも入れておいて」

「了解。帰りは遅くなる？」

「いやそんなに遅くならないから夕食は頼んだ」

「任せられた」

「それじゃあもうちょっとしたらまた出掛けるから。みんな遠慮しないで楽しんでね。男子諸君は純一のエロ本見つけてくれよな」

「見つけてくれよな、じゃねえ。そんなもんねえよ」

父さんはそう言うとりビングを後にする。なんだか普段と変わらないやり取りをしているのにどっと疲れた。

「へへあれが南雲の父さんか」

「顔似てるな」

「南雲君がもつとフレンドリーになった感じだったね」

「純一、ケーキなんだけど実は私達ワンホール買ってきてるんだ」

「ひよつとして俺と矢田祝う感じ？」

「うん。だから包丁貸してもらえると嬉しい」

「了解、ありがとな」

「あーでもプレート1枚しかもらってきてないや。南雲我慢できる？」

「カルマ、お前は俺をなんだと思ってるんだ？」

「冗談、からかっただけだよ」

「プレートはこつちにもう1枚あるからこれで俺と矢田は喧嘩することなくプレートを食べれるな」

「プレートってそんな取り合うものだった？」

「あーでもわかる。なんとなく特別な感じする」

「とりあえず一人辺りケーキ2個食べるな。…茅野よだれ出てるぞ」
「えっ嘘！」

「ついてないから大丈夫だよ」

「ありがと渚…ていうか南雲君！私そこまでいやしくないよ！」

「ごめんごめん、プレートやるから許して」

「南雲君は私を子供かなにかと思ってるの？」

「プレートいらんの？」

「…いるけどさ」

「とりあえず純」、矢田ちゃん、遅れたけど誕生日おめでと！」

「おめでと！」

「どうもどうも」

「みんなありがとう！」

祝いの言葉をもらいケーキに手をつける。うん、甘すぎず食べやすいな。

「桃花ちゃんこれ！女子のみんなで買ったんだ！」

「えっいいの？ありがとう！開けてみてもいい？」

「うん。気に入ってもらえるといいな」

「わあハンカチだ！みんなありがとう！」

やはりプレゼントにハンカチは間違っていないなかったんだなと心の中でどや顔をした。ただひとつ安心したことは色とデザインが被ってなくてよかったということだ。

「純君も！ハイ！」

「俺の分もあるのか、ありがとな」

「開けてみて〜」

「おっマグカップだ」

「たしか純一って家で本読むとき紅茶とかコーヒー用意するって言うてたから」

「凜香よくそんなこと覚えてたな、みんなありがとな」

「ちなみに男子でケーキ選んだんだよ」

「えっまじで？」

「まあ茅野から色々聞いたんだけど」

「確かに甘いもの大好きな茅野がケーキに口を出さないわけないしな。みんなって誕生日いつなの？近い人いる？」

「私は10月〜」

「私は3月だよ」

「8月」

「おい今声被ってたぞ、莉桜と友人か」

「うん、私24日」

「俺は23日」

「へへ近いな」

「昔の純一は祝ってくれたのにね。あんた忘れてたでしょ」

「誕生日近いと言えばクラスで同じ誕生日がいる確率を計算で求められるの知ってた？」

「露骨に話を逸らしたけど中々気になる内容ね」

「だろ？俺らのクラスは約30人だけど計算すると約70%だつて」

「あーなんか殺せんせーテスト勉強の時言ってたなー。こういうのを知ると数学がもっと楽しいですよって」

「でも70%って高くないか？1年は365日もあるのに。もっと低い気がする」

「私もちよつと違和感あるかな」

「自分と同じ誕生日の人がいる確率とクラス全体での同じ誕生日の人がいる確率が頭で混じって違和感を覚えるらしいよ。実際30人いたら自分と誕生日が被る確率は7%くらいだし」

「あーそれか。それでも何となく違和感あるな」

「モンティ・ホール問題も解説されてもイマイチピンとこないよね」

「たしかに」

「モンティ・ホール問題って？」

「それはだな…って何で遊びに来てるのに知的な話してるんだよ俺達は。そんなのいいからゲームでもして遊ぼうぜ」

「おっいいね、神崎さんもいるし楽しみだ」

「ふふつ、そう言ってもらえると嬉しいな」

「有希ちゃんってそんなにゲーム上手いの？」

「そつか、倉橋とかは見てないのか。たぶん櫛ヶ丘中学1じゃないかな」

「「そんなに!?!」」

「スマブラとマリカーあるけど…どっちがいい？」

「CPUに負けたらショックだからスマブラがいい」

「莉桜、そんな理由で選ぶのか…。みんなはそれでいいか？」

「いいよー」

「まあ男共は全員やったことあると思うけど女子はないだろうから説明するよ」

「純君教えて〜」

「とりあえず最初の対戦は俺を除いた男3人と神崎でいいか」

ゲームを起動、キャラを選択しいざ対戦スタート。俺が知らなかっただけでスマブラは無双ゲーだったらしい。バツサバツサ男子達の残機が減っていく。

「有希ちゃんすごーい」

「話に聞いてたけどこんなにすごいとは思わなかった」

「ちよつと恥ずかしいな」

その後は女子同士でやったり男子が女子を接待プレイしたり、色々と遊んだ。ただひとつ変わらなかったことは神崎が参加したラウンドは彼女が絶対に1位だったということだ。俺も善戦はしたがことごとく返り討ちにされた。

「いやー久しぶりに遊んだ」

「莉桜、お前は毎日遊んでるようなもんだろ。主に渚で」

「夏休みは渚で遊べないのよ」

「何で2人も僕をからかう前提なの!？」

「そろそろ良い時間だし帰ろうか？」

「えっ帰っちゃうの？そこは夕飯を食べてく流れでしょ」

「カルマ君や、君は本当にぶれないねえ」

「たしかにあんまり遅くなったら家の人に心配かけちゃうしね」

「なんか時間過ぎるの早かったね」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

「じゃあ帰るかな」

「またね！南雲君！」

「気をつけて帰れよ。女子は特に」

「お邪魔しました〜」

「あつ南雲、時限爆弾仕掛けておいたから日付が変わるまでに見つけないとダメだから〜」

「はっ？時限爆弾？」

するとみんなが笑い帰っていく。時限爆弾？とりあえずカルマがいじってたところを探すか。

まず思い当たるのはソファの下だったのでリビングのソファの下を見ると案の定ラッピングされた袋があった。中を開けるとコースターが入っていておそらくマグカップのプレゼントと合わせたんだなということが伺える。

莉桜がいじってた方には何もなかったので男子が中心になって買ったんだと推理。こうなると部屋も怪しくなってきたので自室へと戻る。

渚が押入れを開けたのはなんとなく違和感があったので押入れを見るが何もない。ベッドの下は：同じく何もない。仕掛けたのはリビングのソファーだけで、どうやら時限爆弾はプレゼントのことだったらしい。たしかに今日が誕生日というわけではないが日付を越したらなんとなく意味がなくなってしまうような感じがするしな。

みんなが来ていた割には汚れていない部屋を整理すると机の上には”百万回生きたねこ”が置かれていた。凜香が出したつきりだったのかと手に取って何ページか捲ると手紙が挟まっていた。便箋を開くと、

誕生日おめでとう。

抜け駆けしちやった。 凜香

とだけ書かれていて、それと共に葉もあったので凜香からのプレゼントということだろう。

今日緊張していたのはこのためだったのかと思うとなんだか愛おしく感じた。

*

その日の夜、日付を跨ぐと同時に南雲家には目覚まし時計の音が響いた。

第31話 陽の香る場所

夏休み某日。俺が本日の待ち合わせ場所である駅に着くと既に今日行動を共にする4人の内の1人が見えたのでそちらに駆け寄る。

「よお千葉、一番乗り？」

「ああ。まだ誰も来てないよ」

「突然誘って悪かったな」

「いや大丈夫だ、ちょうど暇してたし。でも動物園なんて久しぶりだよ」

「俺も倉橋に誘われなかったら行くことなかったと思う」

「倉橋は南雲と2人で行くつもりだったんじゃないか？」

「なんか緊張するからとかなんとか送られてきたよ」

「倉橋は緊張とかそういうイメージないんだけどな」

「それで凜香も誘うって言ってたから俺も千葉を誘ったってわけよ」

「そういうことか。さすがの南雲も両手に花はダメだったか」

「思春期男子舐めんよ。てか千葉も女子2人と出かけるって言われたらどうよ？」

「無理だな。ていうか考えられない」

「だろ？ところで思ったんだけど千葉って倉橋とか凜香とどんな話するの？」

「うーん…倉橋とは話すというより相づちを打ってるって言った方が正しいかもしれない。速水とは前に一度だけ一緒に行動することがあったんだけどその時はお互い終始無言だったかな」

「凜香は口数多い方じゃないからな」

「南雲はどんな内容話すんだ？」

「俺？俺はなんか思い付いた話題を出して話す感じかな。凜香とは無言になるときもあるけど無言が苦にならないというか。2人きりになつて話がなくて気まずいときの魔法の言葉あるけど…聞く？」

「聞きたい」

「2人きりに無言で気まずくなつた場合って恐らくこっただけじゃな

くて相手側もそう感じてると思うんだよ。だから一言『こういうとき何話したらいいか困らない?』って言ったら自分も相手も楽になるってわけよ」

「あー確かに。相手が自分と同じく思ってたんだって安心するな。南雲はそれを中学生にして編み出したのか?」

「いや父さんの受け売りだよ。…あつ倉橋と凜香来た」

千葉とベンチに座りながら駄弁っていると残りの2人が到着した。今日はこの4人で動物園に行く。

「純君、千葉ちゃんおはよ」

「二人共おはよう」

「おはよ」

「おはよう」

「ごめんね、遅くなって」

「時間に遅れてないから大丈夫でしょ。なんなら一番早かったの千葉だし」

「千葉なんだ。意外」

「何分前に着けば正解かがわからなかったから」

「それあるよね。よしそれじゃあ動物園に行こっか!」

「列車だっけ?」

「うん! 下調べはバツチりだから安心して!」

「私が動物園のシャトルバスに気付かなかったら目的地の駅から歩いてたけどね」

「凜香ちゃんそれは内緒にしてって言ったでしょ」

券売機で切符を買い改札を通り列車へと乗り込む。子供の時以来動物園には行ってなかったのが柄にもなく心を弾ませていた。

*

「本当に今日快晴でよかったね!」

「これでちよつとくらい風があつたら最高だったんだけどな」

「それは俺も思う」

「私はスカートだからないほうがいいかな」

凜香が私服着ると女の子らしさグツと増すよねって言おうとしたが、おそらくそれを口にするのと平手打ちが飛ぶことが予想されるので口には出さない。

俺達4人は入場料を払い、現在は動物園入り口にあるデカイ案内図の前に立っている。

「ここって何の動物いるの？」

「レッサーパンダとかいるよ！」

「猫は？」

「ネコ科のコーナーがあつてチーターとかいるよ」

「だつてき凜香。ネコ科はどうだ？」

「…いいんじゃない？」

「速水って猫好きなのか？」

「他の動物と比べたら一番かな」

「素直に好きって言えばいいのに」

「ね」

「…まあ、好きだよ」

「ふーん、そうなのか」

「じゃあまずはネコ科が集まつてる場所から回るか？」

「いいの？」

「いいよ」

「俺も速水が行きたいのでいいぞ」

「じゃあ行くか。それでネコ科の場所はどっちだ？」

案内図を見るとここからさほど離れてないところにあることがわかったので向かう。

「13時過ぎからイルカのショーあるから見たい！」

「いいよ。男子2人もいいよね？」

「うん」

「純君と千葉ちゃんはどこか見たいところないの？」

「俺はデカイ動物が見たい」

「純一なんか子供みたい」

「子供のときは大きく感じたけど今はどう感じるかなって思ったんだよ」

「俺は…鳥かな」

「千葉は鳥か。どうして？」

「うーん…なんとなく？」

「なんとなくかい。まあでも千葉って鳥っぽいな、鷹っていうの？そんな感じ」

「あーわかる」

「鷹か。初めて言われたよ」

「能ある鷹は爪を隠すっていうし千葉ちゃんにピッタリだよ！」

「あ、ありがとう」

褒められ慣れてないのか千葉が少し照れている。

「動物で例えたらみんなは何になるんだろうな」

「じゃあ鳥でみんなを例えてみよっか！」

「凛香は…なんだろうな。飛んでるっていうよりは地に脚が着いてる鳥って感じだな」

「あつそれちよつとわかる」

「どういう意味？」

「いや悪い意味ではない。孔雀とか？」

「凛香ちゃんはヘビクイワシ！」

「ヘビクイワシ？」

「うん。…こういう鳥だよ」

倉橋が手慣れた操作でスマホを操作しこちらに見せてくる。

「あースレンダーな感じが凛香っぽい」

「なんか堂々してるしな」

「…ありがとう」

「ヘビクイワシは地球上で最も美しい生物って言われてるんだよ」

「へえ〜」

「そうなんだ」

「あつ満更でもない顔になった」

「私はいいから次いこ。倉橋はなんの鳥？」

「なんだろう…愛玩系？」

「ほら、あれ…冬場の雀。あの丸つとして可愛くなってるやつ」

「あーわかる」

「可愛いから、えへへ」

「私は倉橋は鳥の雛って感じかな」

「陽菜乃だけに？」

「ただの偶然だから」

「じゃあ南雲は？」

「うーん…」

「なんだろう…」

必要以上に頭を悩ます3人、ちなみに自分でも全く思い付かない。

「いや、そんなに真剣にならなくても。目的地着いたぞ？」

「動物園にいる間に思いつけばいいな」

「まあ期待しておく。ほら凛香、猫だぞ」

「ネコ科ね。…可愛い」

「猫可愛いね〜」

「チーターってなんかドヤ顔してるみたいだな」

「俺には勇敢な顔に見える」

「見方の相違だな」

「だな」

「もっと可愛いとかないの？」

「可愛い上でドヤ顔だな」

「それ付け足しただけじゃない？」

「まあまあ凛香ちゃん。次行こー！」

そこから4人でネコ科のコーナーをグルッと一回りした。俺は色々な種類の動物を見ながらイヌ科とかネコ科はどうやって区別してるんだろうかと考えていた。なんだろう、見た目か？

「ふう、満足」

「次行く前に休憩するか？昼飯もどこかで食べなきゃだし」

「そうだね〜。2人もいいかな？」

千葉と凛香の2人は無言で頷く。

「えっと、案内図はどこだ…っ」と

「南雲、マップをさつき回収しておいたから手元にあるぞ」

「おっナイス千葉。どれどれ」

「いくつか休憩場所みたいなのあるな」

「俺はどこでもいいけど」

「じゃあ一番近いところにする?」

「そうだね」

「えーと場所は…見えてるな」

「見えてるね」

「純一はボケてるの?それとも素?」

「今のは素だよ」

「もつとわかりやすくボケたら?ボケてるときだけ挙手するとか」

「ボケてるっていうよりそれやったらただのバカじゃないか?」

「そう?名案だと思ったんだけど」

ひよっとして今のは凜香なりのボケだったのか?

「とうちやーく!」

「先にとりあえず席確保しよ」

「じゃあ俺確保しとくから食べるもの選んできていいよ。俺の分は何でもいいから」

「何でも?嫌いなものとかってある?」

「ポテトサラダの中の玉ねぎ」

「たぶんそれはないだろうから大丈夫だな。じゃあ席は任せた」

「飲み物は持ってきてるから買わなくていいよ」

俺の言葉に3人は領き販売場所へと向かう。席を探そうとしたが別にその必要はなかった、そこそこに空いていたからだ。とは行っても急に人が来たら席がなくなる可能性もあったので座って3人を待つこととした。

待ってる間にそういえば写真を全然撮っていないことに気づく。ここの動物園は写真の撮影自体は禁止しておらずフラッシュに関しては禁止しているのみなので普通に撮影する分には問題ないだろう。ということ午後からは午前分も撮ることにしよう。

「ここにいたんだ」

「あつ場所を連絡し忘れてた」

「いやあんまり混んでないしすぐに見つけられたから大丈夫だ」

「それならよかった。それでいくらだった？」

「600円」

俺の問いに千葉が答えたのできっちり金額分を支払う。買ったのはホットドッグとサンドイッチだった。

「お手軽な感じでいいな。他には何があったの？」

「カレーかな」

「へえ。他には？」

「がつり系はカレーだけで他は細々としたのだったよ」

腹持ちで言ったらカレーが一番なんだろうが匂いがな。もし食べようものならその後はカレーの香ばしい匂いと行動を共にしなければならぬから選択肢には入らないなと思った。他の3人も当然のようにカレーは選んでいない。

「じゃあいただきます」

「いただきます」

号令をかけたわけではないが凶らずも声が被ってしまった。

食べてる最中は互いに何を言うわけでもなく黙々と食べていた。たまに倉橋が凛香に一口頂戴と言うのみであとは無言、だが嫌な感じの無言ではなく心地の良い雰囲気だった。

「おいしかった」

「そうだね。こういうところの食事も捨てたもんじゃないね」

「場所によつてはもっと力を入れてるところもあるらしいよ」

「へえ」

「私ちよつとお手洗いに行ってくるね」

「あつ私も」

「行ってらっしゃい」

残された男2人。飲み物を飲んだあとにリフレッシュがしたかったためミント味のタブレットを2粒ほど口にする。千葉にもいるか聞くというと答えたため2粒あげると同じく口に含む。

「そういうえびさつきポテトサラダの玉ねぎが嫌いって言ってたけど生の玉ねぎがダメなのか？」

「うーん：そうだな、苦手かも」

「かもつてことは食べれるのか？」

「食べようと思えば食べれるけど：まず玉ねぎを生で食べる機会つてそんなくないか？サラダ以外で」

「たしかに」

「ポテサラの味に生の玉ねぎ感が広がるのがダメなんだ。あと見た目では入ってるようには見えないから思い切つて一口でいこうと思つて口にしたら生の玉ねぎのザクツとした食感と共にあの玉ねぎの風味よ、むしろ食べられる方がすごいと思うけどな」

「俺食べられるけど」

「まじ？コンビニ弁当とかのポテサラも？」

「うん」

「今後俺のポテサラを千葉が食べることに決まった瞬間だった」

「なに言つてんだよ」

そう言つて口許を綻ばせる千葉。

「いやいやまじで。適材適所つてやつだよ」

「そんな都合の良い適材適所聞いたことないぞ」

「細かいことは気にすんな」

「：まあ別に食べても良いけどさ」

「てんきゅ」

「なんか動物豆知識ないのか？いつも教室とかで結構小ネタとか話してるイメージなんだけど」

「動物豆知識かく。なんかあつかな」

千葉に言われ俺は頭を働かせる。本などで得た情報の中で面白いものはないか記憶を呼び起こす。

「あー！つだけ思い出した」

「おっじゃあ頼む」

「いいけど：聞かなきゃよかったとか言うなよ？」

「えっ。カバは実は凶暴とかそういうの？」

「いやそれとはベクトル違うんだけど…レッサーパンダっているじゃん？この動物園にもいるけどさ」

「あーいるな。それがどうしたんだ？」

「一時ニュースで立って歩くレッサーパンダが話題になったじゃん？でもレッサーパンダって普通に立つらしいぞ」

「そうなの？」

「ああ。威嚇や警戒をするときに尻尾を器用に使って立つらしい」「へえ。でも別に聞かなくてよかったとはならないな」

「レッサーパンダの見方が変わるとか言われても困るからな。まあつまり、レッサーパンダは客寄せとかのために人間に立つのが珍しい動物っていうレッテルを張られた可哀想な動物なんだよ。本当はそんなことないのに」

「まるで俺みたいだな」

目元が見えないから直接はわからないが、千葉が昔を思い出して遠い目をしてる気がした。

「俺も『あいつだったたら大丈夫だろう』とか勝手な信頼押し付けられたりしてさ、わからない問題があっても周りには聞きづらいし先生とも上手くコミュニケーション取れてなかったし。それで結局成績が落ちてE組落ちだよ」

「でも今はそんなことないんだろ？そんな顔をしてるぞ」

「ああ。ここではそのプレッシャーを共有できる仲間がいるし、何より殺せんせーがいる」

「そうだな」

「…俺さ、心のどこかで南雲は完璧超人だと思ってたんだ」「そんなことないだろ」

千葉の突然の言葉に思わず苦笑いをしてしまう。

「模擬戦闘ではトップクラスだし、射撃の成績も俺に次いで良いし」「まあ、うん」

「でもリゾートでの暗殺のときに改めて確認できたんだ、南雲も俺達と同じ中学生なんだって。だからさ、もつと俺達を頼ってくれよ。お前が頼ってくれないと俺達も南雲を頼れないんだよ」

この言葉は恐らく俺にずっと言おうと思っていたんだなと思わせるくらいに普段の千葉からは想像もつかないほど流暢に発せられたその言葉は、俺の心にスツと入っていった。

「…ああ、もちろんだ。千葉も困ったら…いやそうじゃなくて誰かを頼れよ」

「…そうするよ」

真面目な話はこの場で打ち切るという意思表示のために不必要なくらいにハッキリと話題を転換させる。

「ところで、凜香たち帰ってくるのも遅いし勝手に次に行くところ決めておくか」

「そうだな。たしかデカイ動物が見たいんだっけ？」

「そうなんだけど…13時からイルカを見るはずだからその前に回りやすい場所から行くべきかな」

「あーたしかに。じゃあなんかイルカの場所向かう途中に流れでって感じの方がいいかな」

「それでいこう」

*

～速水視点～

「ご飯美味しかったね」

「そうだね」

お手洗いという名のお色直しに行った私達は男子がいない神聖なところで身だしなみを整えていた。

「倉橋から誘われたときは突然だったからビックリしたよ」

「…うん、凜香ちゃん和有希ちゃんは誘わないとダメだと思ったから。残念ながら有希ちゃんは予定があつて来れなかったけど」

いきなり倉橋の口から有希子の名前が出てきたので思わず心臓が跳ねてしまった。たぶん表情の変化は悟られていないと思う。だけど、私は倉橋が誘ってきた理由をなんとなく察していた。察していた

けど面と向かって言われるとは思っていなかった。

「倉橋は…純一と2人きりじゃなくてよかったの？」

「本当は2人きりがよかったけど…抜け駆けみたいでズルい気がしたから。だから声をかけたんだ」

倉橋のまつすぐさに心臓を掴まれたような感覚になった。私が純一に秘密裏に送ったプレゼントがバレているのではないかと思った。

「私ね…純君のことが好き。大好き。…凛香ちゃんも…そうなんだよね？」

まるで本人に告白しているかのように顔を少し赤らめ上目遣いに私を見る倉橋が、…彼女が私が願ってもなれない存在に思えた。

互いに純一に気があるということは一度も話したことがない。けれど何となくわかっていた。それは有希子にも同じことが言えた。

「…うん。私も純一のことを好きだよ」

「…やっぱりそうだよね。うん、そうだと思った」

倉橋は何か納得したような表情になってからまたいつもの笑顔に戻って言葉を続けた。

「同じ人を好きになっても…私達友達だよね？…上辺だけじゃなくて、心の底からそう思える」

「うん、もちろん」

「……よかったあ」

力が抜けたような顔で笑う彼女を見て私も思わず笑みがこぼれた。すると倉橋は今までできなかったことを許された子供のようにはしゃいで身を乗り出して質問をぶつけてきた。

「ねえ凛香ちゃん純君のこと好きなの？」

「私は…気づいたらかな」

「そっか。私はね——」

「鷹岡から助けてもらったときから、でしょ？」

「え、えく！なんでわかったの!？」

「わかるも何も倉橋に関しては端から見てもわかるよ」

「純君も気付いてるかな？大丈夫かな？」

「さあ？純一は鈍くもないと思うけど…わからないかな」

「うーん：でも仮に私の気持ちに気付いて一緒に遊んでくれるってことは好印象を持たれてるってことだよね？」

「ふふっそうだと思うよ」

「よーし、これからも頑張ろう！凜香ちゃんも頑張ろうね？」

「そうだね」

「じゃあ戻ろっか！純君と千葉君待たせちゃってるし」

「あの2人は待たせても大丈夫なタイプだと思うよ、きつと」

私が読んだことのある少女漫画では、友達と好きな人が被ったら仲違いをすることがほとんどだった。でも私達は前よりも本音で話せる関係に進展したように感じ、なんだかそのことが純一と一緒にいることよりも嬉しく思えた。そんな風を感じる私はきつと、恋する乙女失格なのかもしれない。

*

↳南雲視点↳

妙に機嫌が良い凜香達が戻ってきたあとは千葉と話した通りにイルカの場所に向かう流れで色々な動物を見た。凶鑑でしか見たことのないものだったり、デジャブのように昔見た記憶があるものだったり様々な感情が押し寄せた。

イルカショーも恙無く終わり、現在は俺が当初見たいと話していたデカイ動物ことキリンがいる場所に向かっている。

「イルカと飼育員のお姉さんの息ピツタリだったね」

「予想以上に頭よかったなイルカ」

「カルマだったら寺坂より頭が良いとか言いそうだけどな」

「たしかに」

「寺坂が聞いたら怒りそう」

「いつもちよつと反論するだけだけどね」

「あっキリン見えてきたね」

「本当だ」

話に夢中になっていると目的地に着いたらしい。自分達が立って

いる場所より低い囲いのような場所にいるのに俺達より少し高い位置にキリンの顔があることから、いかに俺達と比べてデカイ存在なのだということを実感させられた。俺が少し言葉を失っているところにいる女子2人が感嘆の声を漏らしていた。

「恐竜とかも目の前にいたらこれくらいデカイのかな」

「自分が思ってたよりでかくてびっくり」

「どうだ南雲、感想は？」

「デカイとしか言えねえ」

「あはは、もつと他じゃないの？」

「他に？…えーと、キリンの柄で四色問題出来そうだなって」

「あーたしかにできそう」

「四色問題？」

数学に強い千葉とは対照的に頭を傾げる女子2人。

「そう。隣接する領域が異なる色になるように塗り分けるには4色あれば十分っていう数学の定理んだけど…簡単に言ったら同じ色が隣にならないようにすればいいってこと」

「そんなのあるんだ」

「キリン見てそれ思い付くって純一ちよつと疲れてるんじゃない？大丈夫？」

「なんで素直な感想を言ったのに心配されてるんだよ」

「だって…ね？」

「俺もちよつとだけ速水と同じこと思った」

「千葉、お前もか。…まあ言葉を失うくらいにはデカイことにビックリしたよ」

「そうだね、本当にデカくてビックリ」

そう言って再度キリンを見上げる俺達。小学校や公園の遊具は大きくなった今日の前にするとこんなにも小さかったのかと驚きを隠せないが、キリンなどの大きなものはそれを感じさせない。

「そろそろ次行こっか」

「そうだな」

そこからは動物園を隅々まで回った。レッサーパンダはもちろん

日本にはいない動物も見た。

昔見た動物が結構いたが、日常とはかけ離れた環境ということもあつてか目に映る全部が新鮮に感じられた。その感覚がなんだか子供のときに戻つたみたいでくすぐつたかった。

気がつくと時間は人によっては夕方と言つてしまふくらいのものとなつていた。誰が言い出すでもなく今日が終わる雰囲気の流れている。

「今日楽しかったね！」

「そうだな、倉橋誘つてくれてありがとう」

「みんな楽しんでる様子だったし誘つてよかった！今度はまた別のところ行こうね！」

倉橋の言葉に俺を含めた3人は頷く。

「じゃあ帰るか」

「ないとは思うけど落とし物とかないよね？」

「たぶんない」

「俺も」

「私も」

「そう、よかった」

「凜香も大丈夫か？」

「私は大丈夫」

「よし、ならバスに乗るか」

バスに乗り込むとまもなく出発した。俺はだんだんと遠ざかる動物園を見ながら残りの人生であと何回動物園に来る機会があるのだろうかとセンチメンタルなことを考えていた。

「悪い、ちょっとコンビニ寄っていい？」

「大丈夫だよ」

駅に着くと同時にコンビニが目に入ったおかげで買わなければいけない物を思い出した。

俺は3人を外に待たせてコンビニに入ると他の商品には目もくれず目的の物を手に取ると素早くレジに向かう。幸いレジは空いたので会計もすぐに終わり、過去最速と思われるほどの買い物スピ―ドを記録したなと心の中で思った。

「目的の物なかったの？」

「あつたよ、ほら」

「…リップって。それにしても早すぎない？」

「待たせたら悪いから最短を心がけた」

「カラスの行水みたいだな。本来の使い方とは違うけど」

「…あゝ」

千葉の言葉に女子2人は納得したように相槌を打つ。

「動物園で純一の例えだけ出なかったけどカラスでいいんじゃない？
頭いいし」

「カラスって…。素直に喜べないのはどうしてだろう」

「えゝカラス可愛いよ？」

「倉橋、そういう問題じゃあない」

「とりあえず南雲は暫定カラスっていうことで。とりあえず列車に乗り遅れるから行こう」

「そうだね」

釈然としないものがあるが嫌というわけではないので、まあ…いいかといった感じで納得してしまった。もつと俺に合う鳥がいると思うんだが。

「…俺にとっては油揚げをさらっていった鳶かな」

「ん？千葉なんか言ったか？」

「いや、何でもないよ」

列車に乗り込み席に座ると歩き疲れたせいか目を開けるのが辛くなってきた。横を見ると千葉はわからないが倉橋と凜香も眠そうに見えた。間もなく全員寝るだろうという希望的観測のもと俺は目を瞑った。意識がなくなる最中、写真を全然撮ってないことに気づいた。記録より記憶に残る一日だったということでもいいだろうと自分に対して言い訳をしながら夢の中へ旅立った。

第32話 遠い記憶で溢れる前に

く個人トークく

南雲：明日か明後日って時間ある？

神崎：両方とも大丈夫だけどどうしたの？

南雲：出かける用事できたから誘おうと思って

南雲：リゾートで2人でって言ってたから

神崎：覚えててくれてありがとう

神崎：よろしくお願いします

南雲：遊ぶっていうよりは、

南雲：俺の行きたいところ行かって感じなんだけど大丈夫？

神崎：うん。

神崎：明日でいいのかな？

南雲：明日の12時半に駅集合で

神崎：わかったよ、楽しみにしてるね

南雲：少し歩くことになるからヒールとかは避けた方がいいかも

*

翌日、約束の時間の10分前に駅に到着した俺は神崎が来るまでに今日のルートをどうするかスマホで地図を見て考えていた。なぜなら場所がハッキリとわかっていないからだ。スマホとにらめっこしている俺の名前を呼ぶ声が聞こえたのでそちらを見ると清楚な印象を受けつつも動きやすそうな服装の神崎が立っていた。

「ごめんね、待った？」

「いや今来たところ」

「ふう、よかった」

「俺の予定に一方的に付き合わせる感じでごめんな。神崎は行きたいところとかないのか？」

「ううん、南雲君の行きたいところで大丈夫だよ」

「そっか。列車に乗って移動するからとりあえず切符を買うか」

切符を買って改札を通りまもなくやって来た列車へと乗り込む。列車内はお盆を過ぎたということとローカル線ということもあつてか俺達以外に乗客がいなかったので貸しきり状態で2人並んで座ることができた。

「そういえば今日行くのって私達の住んでいる街とは違う所だよ？何をするのか聞いてもいいかな？」

「そういえば詳しく説明していなかったな。えーと…どこから話すかな」

俺は昨日家で父さんと話した内容を思い出しつつわかりやすいように整理する。

「俺が物心つくかどうかってくらい小さいときに父さんと色々知らないところに行つた記憶があるんだよ。そのことを思い出して父さんに聞いてみたらそんな場所行ってないって言われたんだ」

「何か別の記憶と勘違いしてるってことはないかな？ほら、似たようなところに出かけた記憶と混同してるみたいだな」

「同じ事を父さんに言われたよ。でもそれだけは絶対に違つて断言できるんだ」

ハッキリと違うということをお口にすると神崎は首を傾げ俺がその理由を言うのを待っている。

「南雲家が出かけるときは基本的に車で外出するんだよ。俺が小さいときもそうだったし、もちろん今だってそうなんだ。例えば目的地が駅の隣にあつたとしても車でそこに行くんだよ」

「ということは南雲君の記憶では目的地へは車で行ったんじゃないかって」

「そう、今と同じく列車で移動したんだ。だから記憶にも残ってる。さすがに幼いから場所の名称とかは覚えてないけど駅を降りてすぐのところの時計塔があつたっていうことが印象に残つてたんだ。だからネットでその時計があるところを調べたらこれから行く駅が出てきたって訳」

「それで南雲君の記憶にあるところが本当にそこか一緒に回るつてことなんだね」

「そうそう、公園とか花屋とかカフェとか色々臚げながら記憶にあるんだ。1人で行こうかなとも思ったんだけど神崎と2人で出かける約束をしていたから誘ったんだ。ちよつと神崎の思い描いていた出かけるとは違ったかもしれないけれど…」

「ううん、いいの。私と一緒に出かけただけだから」

「ならよかった、でもなんかあつたら遠慮なく言ってくれな。飲み物代とか基本的に俺が出すから」

俺の言葉に神崎は小さく微笑みながらありがとうと言った。一先ず今日の目的についてはわかつてもらえたようなので何か別の話をしようという話題を考えていたら神崎の方から話しかけてきた。

「この間南雲君の家に行ったときにケーキを食べたでしょ？」

「ああ、2つ食べたな。それがどうかしたの？」

「何のケーキが一番好きなのかなって」

「そうだな…チョコ系も好きだけど季節のフルーツが使われているケーキが一番好きかな」

「そうなんだ」

「神崎は何が一番好きなんだ？」

「私は…シヨートケーキかな、やっぱり。シンプルなのが一番好きかも」

「へえくなんとなくイメージ通りって感じる。シヨートケーキの苺は最後に食べる派？」

「最初に食べることが多いかな」

「神崎は最初派か、茅野はたしか最後まで取っておく派だったはず」

「南雲君はどっちなの？」

「俺は…全然意識したことないから次ケーキを食べる機会があったときにしっかりと覚えておくよ」

「どっちなのか楽しみにしてるね…あつもうそろそろ降車駅だね」

「本当だ。なんか時間過ぎるの早いな」

列車が停車し俺達は降りる。改札を通り駅の外に出ると子供のときに来たのはやはりここだということを確認した。

「時計塔ってあれのことだよな？」

「うん。間違いない。この駅で降りて父さんに手を引かれて歩いた」
「他には何か思い出したことはある？」

「うーん……父さんはその日……全然喋らなかつた気がする」
「それも確信があるの？」

「うん。神崎は俺の父さんに会ったことがあるからわかると思うけど、父さんってかなりお喋りじゃん？」

俺がそう言うのと神崎は苦笑いをする。否定はしなかつたので直接口にはしないが彼女も俺の父親をお喋りだと思っていたようだ。

「でもさ、そのお喋りな父さんが全然喋ってなかつたんだよ。——そうだ、喋らない父さんを見て俺は怒ってるのか不安で聞いたんだ、父さん怒ってるの？って。そしたら怒ってないよって返ってきたんだ」

「季節は今と同じ夏？」

「夏……だった気がする。熱中症になつたら困るからって帽子を被つてたし、たぶん」

「南雲君の誕生日ってことで遠出をしたっていうことはないかな」

「そうなのかな、でもそれだつたら父さんが頑なに言わないのも変だしなあ。単純に忘れてるだけっていう可能性もなくはないけど」

駅前にて頭を悩ます2人。自分のことのように考えてくれている神崎を見て俺が小さく笑うと彼女はどうしたの？と聞いてきたので俺は仕切り直すように言葉を繋ぐ。

「とりあえず公園向かうか。見覚えのある道があつたら何か思い出すかも知れないし」

「公園は覚えてるの？」

「いや正直覚えてないけど、子供の俺が歩いていける距離ってことはたぶんそんなに離れていないと思う」

俺はそう言つてスマホで周辺の地図を再度確認する。神崎が来る前になんとなく下調べはしたが土地勘がないためマップをちよくちよく見なければならぬ。歩きながら俺は横を歩く神崎に少し気になったことを聞いてみる。

「神崎はなんかないのか？俺みたい記憶にはあるけどハッキリしなくて思い出したいこととか」

「私は…特にないな。考えてみたら臃げな記憶の方が多い気がする。何て言うのかな…記憶の濃い部分は覚えてるけどそれ以外はあまり覚えていないみたいな」

「そう言われてみると…そうかも。幼稚園のときの出来事を全て覚えてるかと聞かれたら要所要所、それこそ行事とかの強烈なものしか覚えてない」

「やっぱりそうだよ。だからきつと…南雲君のナゾの思い出は何か大切な記憶なんだと思うよ」

俺が頭を捻らせていると神崎が悪戯な笑みを浮かべながらとろとろと言葉を続ける。

「知らない街ってなんだか不思議な感覚がしない？」

神崎の言葉に俺は既視感を覚えた。あれはたしか終業式の日の一

「私達が柵ヶ丘にいるときもこの街はここにあるんだよ」

そうだ、矢田との会話だ。

「前にも似たような話をしたな、そういえば」

「お父さんと？」

「ううん、別の人。神崎の感覚わかるよ、上手く言えないけど…わかる」

「ふふつ、よかった」

スマホで地図を開いて公園の場所を再度確認する。今のところ間違った道は歩いていない。

「あともうちよつとで着くな、5分とかからないくらい」

「わかったよ」

「線路沿いの道を歩いてたら連想するものないか？」

「もしかして『スタンド・バイ・ミー』かな？」

「そうそう！まあ、今の俺達を探してるのは死体じゃないけど」

「南雲君ってやっぱり面白いね」

微笑みながら褒めてくる神崎に俺は少し恥ずかしくなって頬を掻いた。

「公園ってここだよ？」

「そうそう、たしか父さんはブランコに乗った俺を押してくれてその後ベンチに座ってたな」

「ちようど使ってる人もいないしブランコを漕いでみる?」
「そうするかな」

ブランコは2つあるので並んで軽く漕いでみる。最後にこれで遊んだのはいつだっただろうか。

「神崎って小学生のときに公園で遊んだりとかしてた?」

「うーん…あんまり外では遊んでなかったかな。家の中で読書したりあやとりしてたほうが多かったかも」

「あやとりか、俺正直やったことないな。銀河とか作れるの?」

「ふふつ、そんなにすごいのは作れないよ」

「そっか。のび太君はやっぱりすごいんだな」

あつドラえもんのことかと神崎は上品に笑う。

「南雲君は外で遊ぶことの方が多かったの?」

「そうだな。野球やっていたってこともあるけど雨の日以外は基本的に外で遊んでたな」

「雨の日は何をしてたの?」

「学校の図書館で本読んでた。インドアとアウトドア両方いけるハイブリッドな男の子だったから」

「珍しいタイプの男の子だったんだね。…どう?何か思い出した?」

「いや正直なにも思い出せない。ここで遊んだ記憶はあるんだけど」

「そっか、残念」

「次は花屋、それからカフェだな。大丈夫?疲れてない?」

「大丈夫だよ、ありがとう」
「疲れたら遠慮しないで言ってくれよ。おぶったりなんたりするか」

「それは…ちよつと恥ずかしいかも」

はにかむ神崎と再度散策を始める。今日は夏だけどそれほど気温が上がっておらず、かといって天気が悪いわけでもない、風が心地いい日なのでまさに散策日和だなと思った。

「さつきブランコに乗ったときにさ、一瞬立ち乗りしようかなって

思ったんだけど俺の中のモラルがやったらダメだって訴えかけてきたよ」

「中学生になって成長したってことかな？」

「だと思おう。それに…身長が伸びてるからどっちにしろできなかつたと思おう」

「たしかにそうだね」

「思いがけないところで自分の成長を感じてしまった。神崎はどんなときにそういう風に思う？」

「私はやっぱり読書していて小さいときに読めなかつた漢字が読めるようになっていたときかな」

「それは俺もたまに思う。読めたらちよつとドヤ顔したくなるんだよな」

クスクスと口許を押さえて笑う神崎。

「南雲君のドヤ顔が見たいからちよつとやってみて？」

「えっどこで？」

「うん、だめ？」

「この無茶ぶりは登ってもいない山を下山させられている気分だな」

「ふふっ。普段意識しないから難しいよね」

「まあ、今後の俺にご期待くださいって感じ。ドヤ顔してるなどは思うけどやれと言われたら難しいかな」

「楽しみにしてるね」

見知らぬ街の土地勘のない道を歩いているわけだが初めて通る道ではない気がする。つまり今歩いている道は、やはり子供のときに通ったことがあるのだ。

今度は地図で確認しなくても花屋の位置がなんとなくわかった。次の交差点を曲がれば商店街のやや外れに当たるところに――

「花屋見つけた。ほらあそこ」

「本当だ、あそこで間違いないの？」

「うん」

花屋の前まで歩くと店内に何人かお客さんがいるのが見て取れた。それを確認した俺と神崎は買い物の用もないのに店内に入るのは憚

れるのでやめておこうという結論になった。

「でも本当に店内に入らなくていいの？せつかく来たのに…」

「お店の人に迷惑がかかるのはちよっと…って感じだし。カフェはここからそんなに離れてないからそこで休んで今日は終わりって感じでもいいか？」

「名残惜しいけどあんまり遅くなると家族に心配かけちゃうしね」

時計に目をやると時刻は15時を回っていた。15時と言えばおやつの時間とよく言うが起源はなんだろう、昔やってた某カステラのCMか？

俺は変なことに頭を捻らせながら神崎とカフェへの道を歩く。5分とかからずカフェに着いた俺達は店員に案内されるがままにテーブル席へとつく。個人経営でやってる店のようで店内からは初老の店主のこだわりのようなものが随所に感じられる。それでも落ち着いた雰囲気がいっかりとあるのは喫茶店特有のものなのかもしれない。

「今日歩きっぱなしになってごめんな」

「E組で鍛えてるし平気だよ。それに南雲君とお話するの楽しかったから」

「俺変なこと言ってなかった？大丈夫？」

「いつも通りだったから大丈夫だよ。ところで…何か思い出しました？」

まるで記憶喪失にでもなったかのように今日は思い出そうとすることが多いなと思った。それでもたしかに店内に入ったと同時に既視感があったことを考えるとここに来たことがあるのも確かだった。あのときは――

「今みたいに神崎と向かい合わせで席に着いたんだけど…何だったかな、父さんがメニューを頼むとは別に一言なんか言っていた気がする。小さかった俺は全く理解できなかったけど」

「そうなんだ…」

「とりあえず今は昔のことを忘れて楽しもう。せつかく神崎と出かけてるのに俺のことばかり気にかけてもらったら申し訳ないし。俺が

全部出すから何でも好きなもの頼んで大丈夫だよ」

「えっでもそれはちよつと申し訳ないし…」

「いいっていいって。神崎に奢れるなんて役得だし…それにプレゼントってわけではないけど俺の感謝の気持ちとして出したいんだ。ダメ？」

俺がそう言うのと神崎は申し訳なさそうな顔で何かを考えた後に少し笑って、それだったらと承諾してくれた。

2人でメニューを見て注文をするものを決める。互いにチーズケーキに紅茶と全く同じものを注文したので2人して小さく笑った。

「南雲君って珈琲より紅茶の方が好きなの？」

「時と場合によるかな、今は紅茶の気分。神崎は？」

「私はケーキには紅茶の方が合うかなって思ってる」

「あなるほど」

程なくしてメニューが運ばれてくる。紅茶は家で飲んでるインスタントとは大きく異なり、さすがお店で出すレベルの物だなと思った。ケーキも同様にかなり美味しい、自分の語彙力が低いことが悔やまれる。

「美味しいね、これ」

「うん、ウマイ」

本当に美味しいものを食べたとき人がする反応は自然と笑顔になるんだなと思った。なぜなら俺も神崎も口許が弛んでしまっているからだ。神崎の場合は弛んでいるというより微笑んでいると言った方が正しいけど。

ケーキを食べ終わり紅茶を飲みながら談笑していると制服のカツプルが入ってきた。男子はブレザーで物珍しさは感じなかったが、女子はセーラーだったので新鮮に感じた。

「セーラーって新鮮だな。俺らのところは男女共にブレザーだからさ」

「そうだね。あのセーラー服って確かジャスミン女子大附属の制服だから2人は違う高校だよ」

「そうなのか。やっぱり制服で高校選んだりとかってあるの？」

「うーん…私はないかな。でもどこの高校の制服は可愛いとかで女子
同士盛り上がったたりするよ」

「へ〜」

相槌を打ってから紅茶に口をつけたと同時に俺の脳が活性化した
と表現すればいいのだろうか。とにかく一気に記憶が呼び起こされ
た感覚に襲われた。

「神崎、俺全部とは言わないけど…思い出したかも」

「え？」

「まず思い出したきっかけについてだけど…俺の母さんの母校はジャ
スミン女子大附属なんだ」

「そうなの？」

「ああ、父さんが言ってたから間違いないと思う。高校は別だってこ
とも言ってたし」

「さっき入ってきたカップルと同じように？」

「そう。それと…今日回った場所はおそらく昔に父さんと母さんが実
際にデートした場所だと思う」

「…おそらくってことは確証はないの？」

「直接聞いたわけじゃないから確証はない…けどわかる。だって俺が
小さいときに父さんとこの街を回ったあの日は母さんの命日だった
から」

神崎は大きく目を見開いた。

「きつとあの日父さんが全然喋らなかったのは母さんとの思い出を振
り返っていたからだ。この街のどこに行っても父さんは俺のことを
見ていなかった気がする、視界には入っているけど心ここにあらずと
いうか」

「……」

「この喫茶店で言った言葉は『これで最後にする』だ。母さんが亡く
なって、たぶん父さんもずっと寂しかったし泣きたかったんだと思
う。でもまだ幼い俺がいたからその気持ちを押し殺すしかない…だ
から母さんとの思い出の場所を巡って寂しい気持ちと決別したんだ
ろうな。今考えたら車じゃなくて列車でこの街まで来たのも学生

だった当時をなぞった行動だったのかも」

「……」

「…あれ？」

俺が神崎を見ると、彼女は泣いていた。俺はその姿を見て狼狽えずにはいられなかった。

「な、なんで神崎が…じゃなくて大丈夫か？これ、ハンカチ」

「ごめんね…」

今にも消えてしまいそうな突然の謝罪の言葉に俺の頭はこの状況をどうするべきか、正答を出せなかった。

「と、とりあえず店を出るか？」

「うん…」

*

会計を済ませ店を出ると神崎の手を引いて座れるところを探した。幸い最初に行った公園がすぐ近くだったのでそのベンチに座ることにした。俺が手を引いているときも神崎はずっと涙を流して、声を出さない彼女に俺は何て声をかければいいかわからず手を引くしかなかった。

「とりあえず座って落ち着こう」

「うん…」

「俺は母さんのことなんてほとんど覚えてないしき、だからって訳じゃないけど…気にしなくて大丈夫だぞ？」

「ううん、そういうことじゃないの。ただ…申し訳ないなって思ってる…」

神崎の言葉をそれほど理解できなかった。そんな俺を見て理由をポツリポツリと語り始めた。

「そんな悲しい記憶だったのに…私浮かれて楽しんじゃって…ごめんなさい」

「いやいや、神崎を誘ったのは約束したっていうのもあったけど一緒だったら楽しいなって思ってたことだから全然気にしなくて大丈夫

だよ」

「ううん、それだけじゃなくて。南雲君のお父さんがどういう気持ちでこの街を巡ったんだろうとか考えたら…涙が止まらなくて…」

俺は涙を流す神崎を見て自分は果たして人のために悲しむことが出来るだろうかと自問自答した。口ではなんとでも言える、だがこんなにも綺麗な涙を流すことは俺には出来ない。

「神崎、ありがとう。…俺と父さんのために涙を流してくれて」

「私はそんなつもりじゃ…」

「そうでなくても俺は嬉しかったからさ」

少し時間が経って落ち着いたのか、神崎の涙は止まっていた。

「…きつと——」

「ん？」

「きつと南雲君のお父さんは昔のことをしつかりと覚えていると思うよ」

「…うん。俺もそう思う」

「忘れたことないと思う…ううん、絶対そうだよ」

「ああ、そうだな」

「…そろそろ帰ろっか」

「…ああ」

公園のベンチから立ち上がり駅へと向かう2人。そこには会話はなかったが考えていることはきつと同じだと思った。

とりあえず家に帰ったら事の真相を改めて聞いてみよう。

第33話 夏が終わる

8月31日、それは長かったようで短かった中学校生活最後の夏休みの終わりの日を意味している。

俺は午前中に丁度宿題を終わらせ、2学期の準備をしてから読書をするなど有意義に過ごしていた。父親もどこかに出かけたらしく家の中はまるで誰もいないかのように、ただ紙を捲る音だけが響いていた。はずだった。

「南雲君!!」

「わっ! 殺せんせー!?!」

俺の安寧の時間は開いていた窓により家の中に入ってきた殺せんせーにより奪われた。ていいうかなんで泣いているんだ?

「聞いてくださいよう、今日の夜にある夏祭りにクラス皆を誘っているんですが用事で断る人が多くて先生傷ついています」

「そんなことよりも先生不法侵入だよ」

「そんなこと...: およよ、ということはやはり南雲君も...」

「...今時およよって泣く人いないんじゃないかなあ」

家に突然来たかと思えば泣き言を言われる生徒の身にもなってほしい。

「そうですか、南雲君は来ないんですね。いいです、どうせ先生なんてその程度の信頼しかないんです」

「誰も行かないとは言っていないですよ」

「ということは——」

「行きますよ、夏祭り」

俺がそう言うと言った先生はたくさんさんの触手を駆使して小躍りを始めた。どれだけ嬉しかったんだろう、そしてやっぱり行けないと言ったらどれだけ落ち込むだろう。少し気になる。

「それじゃあ19時に柵ヶ丘駅に集合です! 夏休みの最後くらい何も考えずに遊びましょう!」

殺せんせーはそう言うと言った目の前から一瞬で消えた。夏休みの最後という単語を聞いて、俺は改めてこの夏は色々あったなあと振り返

る。

時計に目をやると時刻は17時過ぎ、約束の19時までまだ余裕はあるが早めに準備しておいて損はない。俺はさつきまで読んでいた本に葉を挟み自室に戻る。軍資金はしつかりと足りているし、余程のことがない限り底を尽きるということはないだろう。

俺は誰が夏祭りに来るのか少し心を弾ませながら準備を始めた。

*

集合時間の5分前に着くと既に俺以外は全員集まっているように感じるくらいに人がいて、少なくとも10人以上は来ているように思えた。みんなの下へと近づくと後ろから声をかけられる。

「よっ純一、来たんだな」

「おっ前原。お前こそいないと思ってたからびっくりだよ」

「何でだよ」

「女の子と祭りに行くから無理とか言うタイプだろ」

「俺は先に予定が入っていた方を優先するタイプだから」

「…つまり今日は何も予定がなかったんだな」

「…それは言うな」

「まあまあ二人とも！君たちで最後です、それより早く祭りに行きましよう！先生皆さんが来てくれて嬉しいです！誰も来なかったら先生自殺しようかと思いました」

「じゃあ来ない方が正解だったか」

茅野が苦笑いしながら殺せんせーに言葉を返すが、先生はその一言を意にも介さず皆を引率し始める。

周りを見ると男子は全員私服だが、女子の多くは浴衣を着ていたの
でこれが男女による祭りへの意気込みの違いなのかなと考えた。

とにかく普段見慣れない見知った女子の浴衣姿はなんか…こう…
グツと来るものがあるなと思った。

「やっぱり浴衣っていいな！」

前原の言葉に一瞬心を読まれたのかと思ったが、こいつの場合は自

分の心に素直なんだった。

「ああ、そうだな」

「おっ純」がそうやって同調するの珍しいな」

「ちようどそう思ってたからな。前原は祭りで女の子が浴衣着てないと嫌だつてタイプなのか？」

「いやそんなことないぞ？ただ浴衣が新鮮に感じていいっていうか。俺はその人に合った服装をしていればいいと思う」

「…なんか前原のくせに良いこと言ってるやない？」

「どういう意味だ？」

「あはは、そういう意味だよ」

俺が前原とアホな問答を繰り返していると祭りが行われている神社に着いた。広い境内の中には多くの出店がありお客さんも当然のようにかなりの人数が来ている。

「それでは皆さん楽しみますよ！ちなみに21時に打ち上げ花火が上がってそれでこの祭りは終わりますので時間を打ち合わせて皆是非見ましよう！」

「はーいー」

ということで祭りが終わる20分前、つまり20時40分に中央の広場に当たる部分に集まることになった。それまで誰と回ろうかなと思っていると小さく溜め息をついている少女がいたので声をかけた。

「どうした岡野、溜め息なんてついちゃって」

「あつ南雲君。いや大したことじゃないんだ」

「元気が取り柄の岡野が溜め息をついている時点でなんか変な感じするんだが…」

「本当に大したことじゃないんだよ。…ただ、私も浴衣を着てくればよかったなあって」

「ああ、そういうこと」

祭りに来ているE組女子のほとんどが浴衣で来ていたのを見てナイーブになってるって訳だ。ざっと見た感じ岡野、片岡、矢田の3人以外は浴衣を着ている。

恋する乙女である岡野は前原に浴衣姿を見せたかったんだろう、ク
ラスメートを見ては溜め息をついている。

「さつき前原が言ってたんだけど…」

「？」

「その人に合っている服装だったらいらしいぞ」

「…本当？」

「本当だよ。浴衣姿見せたかったてのはわかるけどあんまり気にすん
なよ」

「そっか…うん、そうだよね」

「おーい！前原！」

「ちよつと南雲君!？」

「どうした純一？」

「前原は誰と祭りを回るんだ？」

「いやまだ決まってるじゃないけど…」

「岡野と一緒に回りたいってさ。いいか？」

「岡野が？いいけど…どうしてまた？」

「せっかくの祭りなんだから仲良いやつと回りたいと思うのは普通だ
ろ、な？岡野？」

「え、う、うん！そう！」

「そっか、じゃあ回るか」

「じゃあ行ってらっしゃーい」

半ば強引な形になったが俺は前原と岡野を行動させることに成功
した。当事者である2人だけが全く気づいていないが女子を始めと
して、ある程度勘が良いE組の面々は岡野が前原に気があることに気
付いている。そこそこ岡野が素直に行動しているのに前原は全く気
付いていないので俺の行動の真意も恐らく気付いていないだろう。

「フラインプレーだよ南雲君！」

「おっ矢田か。まああれくらいしても気付かないだろうけどね」

「もうちよつとひなたちゃんに気を使ってもいいのにな、前原君は」

「まあまあ、変にくつつかせようとしてマイナスになるよりはいいだ
ろ？」

「それはそうだけど……ってそうじゃなくて！南雲君は誰と回るか決まってるっ！」

「決まってるないよ」

「じゃあ私達と回らない？」

「私達？」

矢田一人しか見えないのに私達とはこれいかに。そう思つて矢田の後ろを見ると浴衣を着た倉橋が縮こまっていた。ただでさえ小さいのに矢田の影に隠れていたので正直気が付かなかった。

「ああ倉橋も一緒に私達か。いいよ、回ろう」

「本当？やった！」

「ところで倉橋いつもより大人しいけど大丈夫か？調子悪いのか？」

「いやそうじゃなくて……」

矢田が目で何か訴えかけてくる。俺の目と倉橋を交互に見て……

ああ、そういうことか。

「倉橋、浴衣似合ってるぞ」

「……ホント？」

「本当だよ。花の模様っていうの？何て言うのかわからないけど倉橋っぽくてよく似合ってる」

「……えへへ、着てきてよかった！」

どうやらというか、やはり正解だった。俺が倉橋の服装を褒めるといつもの彼女に戻った。

「じゃあ時間ももつたいないし行こっか！」

「とりあえず目についたところに行くか」

倉橋が真ん中となり3人並んで歩き始める。

「祭りといえばで一斉に言わない？」

「おっいいね！」

「じゃあそれで被ったところに行こう！」

「よし……せーの」

「焼きそば」

「かき氷！」

「わたあめ」

見事3人とも分かれてしまったが、やはり女子の2人は甘いものだった。

「桃花ちゃん頭キーンってなっちやうよ？」

「でも夏っぽくない？」

「夏っぽい！」

「でしょ？」

「じゃあかき氷から行く？」

「うん！」

「何味にしようかなー」

「イチゴにする〜」

「あつ私も同じのにしようかな」

「2人は本当に仲良いよな。親友っていうの？そんな感じ」

「なんかすぐ仲良くなったよね」

「ね〜」

「やっぱり休日と一緒に出掛けたりとかするの？」

「服を見に行ったりとか結構行くよね？」

「うん、桃花ちゃんオシャレだし色々で見立ててくれるんだ〜」

「陽菜ちゃんも可愛い系を着こなせてるし羨ましいよ」

「えへへ、ありがとう〜」

竹林から教えてもらったんだがこういうの何て言うんだっけ。百合？だかなんだか。

かき氷屋まで辿り着いたが暑さと人気が相まって他の出店と比べると多くの人が並んでいた。

「やっぱり祭りのかき氷の屋台は混むね」

「こういうときしか食べれないしな」

「確かに。コンビニとかスーパーで氷菓を買うっていつてもかき氷ではないしね」

「氷菓とアイスって何か違うの？」

「シャリシャリしてるのが氷菓でクリーム系がアイスじゃない？」

「そうなの？純君？」

「えっそこで俺に振るの？」

「だって物知りだし」

「今の矢田の説明で大体合ってるはずだけど。…たしか乳固形分だけの割合じゃなかったかな。一番割合が高いのがアイスクリームで低いのが氷菓だよ」

「へえ。ということは中間もあるの?」

「全部で4つに分類されるはず」

「あつラクトアイス!」

「あーそういえば成分表にそんなこと書いてあったな。さすが倉橋」

「えへへ」

「あと1つは何かな?」

「「うーん…」」

全く思い出せない。殺せんせーにでも聞けば答えが返ってくるかな、全然見当たらないけど。

話をしていると俺達の順番が回ってきたので先程の会話に合ったように女子2人がイチゴ味を、俺はブルーハワイ味を注文した。

近くにベンチがあったのでそこで座って食べることにする。

「あつ」

「桃花ちゃんどうしたの?」

「ふふん、かき氷で思い出したことあるんだ」

「食べたら頭がキーンってなること?」

「そんなの当たり前でしょ…」

「あはは、それで?桃花ちゃん?」

「おほん、かき氷の味についてなんだけど…実は全部同じなんだって」

「えつまじ?」

「本当に?」

「うん、この間テレビでやってたの見たんだ」

「へえ、食べ比べてみる?」

「じゃあハイ!あーん!」

まあ当然そうなるよね。3人いるけど味は2種類しかないわけ。となると必然的に俺のブルーハワイ味が女子2人へ、どちらかのイチゴ味が俺の口へと運ばれる。

だがあーんは想定してなかった。いや、あーんはこの際置いておくとして問題は間接キスの方だ。健全な男子中学生である俺にはハードルが高い。

「南雲君早く食べないと溶けちゃうよ?」

矢田が急かしてくる。南無三、食べることにしよう。できるだけ平静を装って――

「ど、どう?・味は同じ?」

「…違う気がする」

ていうかよく見たら倉橋の顔が赤い。俺も赤くなつてないか不安になってきた。

「じゃ、じゃあ純君のちようだい」

「ほい」

そう言つて俺はスプーンでかき氷を掬い、そうするのが当然のような雰囲気醸し出しつつ倉橋にスプーンを差し出す。

倉橋は髪を耳の後ろにかけ直して俺のスプーンからかき氷を食べる。その仕草に俺はドキツとした。

「あれ?味違うよ?」

「ふっふっふ、実はね」

「…実は?」

「匂いと色が違うから脳が錯覚しちゃうのだ!」

「へえ〜」

いやこれは素直に感心した、匂いと色だけでこんなに変わるのか。

「てことで南雲君、私にもちようだい!」

「はい、あーん」

「…違う味だね」

「人の脳って不思議だね〜」

「そういえばブルーハワイ味ってなんなのかな?ラムネ味のこと?」

「たしかカクテルの名前から取ってるんじゃないかな」

「へえ〜」

「じゃあラムネとソーダの違いは?」

「瓶かペットボトルじゃない?わからんけど」

「あーでもそれっぽいね」

「サイダーは？」

「ソーダが訛ったんじゃないか？またはサイダーが訛ってソーダになったか」

「色々可能性あるね」

「そうだね」

「みんな食べ終わったしそろそろ次行くか」

「甘いもの食べたから次はしょっぱいの食べたいな」

「わかる！甘いものとしょっぱいものでずつと食べ続けられるよね！」

「ね！」

「じゃあ歩いて食べたいものがあつたらその場で買って食べ歩けばいいか」

「焼きそばはいいの？」

「祭りといえぱで思い付いただけだから特にこだわりはないよ。どちらかというとお好み焼きの方が好きだし」

「あつわかる！粉ものつてたまに無性に食べたくなるよね」

「そうそう、そんな感じ」

「2人はお好み焼きは関西風と広島風どっちが好き？私は関西風なんだけど」

「俺も矢田と同じで関西風かな」

「関西風と広島風って何が違うの？」

「大雑把に言うとなん西風が具材を全部混ぜて、広島風は生地の上に具材を乗せて目玉焼きで挟んでるって感じかな？」

「じゃあ関西風かな」

「ちようどそこに広島風の屋台あるぞ」

俺が指差した方向を覗く2人。しかし倉橋は身長が低いせいが見えていないらしい、背伸びをして前にいる人の頭と頭の間から頑張つて見ようとしている。そんな倉橋を見ているとなんだか微笑ましく感じた。

「うー見えないうー」

「倉橋、こつち」

「あ、ありがとう純君」

俺はうまく隙間を見つけてそちらに誘導した。ちよつと倉橋と密着する形になってしまっているがこの際致し方ない。

「南雲君紳士だね」

「まあね。どう倉橋見えた？」

「うん、あれが広島風なんだね」

「話の流れ的にお好み焼き食べる感じですか？」

「なんで急に博多弁？…うーん、陽菜ちゃんどうする？」

「お好み焼きは食べたいけど…うーん」

女子2人が難色を示しているのだが俺はなんとなく理由を察した。恐らく青のりが歯につく可能性があるからだろう、ブリトラでも青のりって曲があるくらいだしな。同様の理由で焼きそばもNGだろう。とすれば――

「あつちにフランクフルトあるんだけど、俺それ食べたい」

「ほんと？ 私もそつちのがいいかな」

「私も」

誘導成功。心でガッツポーズをする。

屋台に行つてフランクフルトを買おうとしたら、私はこつちにすると言つて矢田は隣のイカ焼の屋台へ行った。

「倉橋、歩く速さ大丈夫か？ 下駄でしょ？」

「大丈夫だよ、ありがとう！ それに実は下駄じゃないんだよ！」

「そうなの？」

「うん！ ほら！」

そう言つて倉橋は片足立ちをし、もう片方の足をこちらに見せてきた。

「あーサンダルなのか。オシャレだな」

「えへへ、でしょ？」

「うん。可愛い」

「あ、ありがとう」

「2人ともお待たせー！…って陽菜ちゃんどうしたの？ 顔赤いよ？」

「何にもなかったよ。それよりイカ焼は無事に買えたんだな」

「そりゃ無事に買えたけど……あっ！なるほどね」

「矢田さん何がなるほどなのかな？」

「南雲君も隅に置けないな」

矢田がにやにやして肘で小突いてくる。俺は普段可愛いとか思っても直接言わないのでどうかしてるのかなって思った。きつと夏の暑さのせいだ。

買ったフランクフルトとイカ焼きは腹が減っているせいかすぐに3人も食べ終わった。

「おい純ー！」

「岡島か。どこから現れた？」

「写真撮って回ってるんだ」

「浴衣の女性を？」

「ちげーよ！そりゃちよつとは撮りたいなーとか思うけど……って何言わせるんだよ純ー。誘導尋問うめーな」

「いや今のは勝手にお前が言ったただけだろ。てかまじに他人の写真撮ってるんだったらやめた方がいいぞ？」

「本当に撮ってねえよ！ほら！」

そう言っつて岡島は慣れた手つきでカメラをいじると画像フォルダを見せてきた。そこには祭りの屋台や提灯などが直接目で見るより綺麗に収められていた。

「あつ本当だ。疑ってすまんかった」

「これ全部岡島君が撮ったの？」

「もちろん」

「すごい！キレイ！」

「いやー素直に褒められると照れちゃうな」

「さすがカメラマンを目指してるだけあるな」

「すごい！」

「褒められ慣れてないからどう反応すればいいかわからなくなってるな……そうだ、E組のみんなの写真も撮ってるから3人も撮ろうか？そう思っつて話しかけたんだ」

「そうだったのか。じゃあ頼んだ」

「女子2人は前髪とか大丈夫か？ノークレームで頼むぞ」

「あはは、苦情なんていれないよ。ね？陽菜ちゃん？」

「もちろん！」

「よしじゃあ撮るぞー。ハイ、チーズ」

俺を真ん中として3人並んで写真を撮ってもらった。撮影者が岡島だからか自然体で撮れたなと思う。

「撮った写真は二学期入ってちよつと経った辺りで渡すから楽しみにしててくれ」

「岡島ありがとな」

「ありがとう！」

「岡ちゃんありがとね〜」

岡島に手を振って別れたが、その背中はなんだか学校で見るよりも頼もしく見えた。

「なんか甘いもの食べたい」

「そうだね〜」

「りんご飴とかわたあめ？」

「りんご飴な気分、いやでもわたあめも捨てがたい」

「じゃあ私がわたあめ買うから少しあげるよ！それなら両方食べれるでしょ？」

「えっいいの？矢田が女神に見えてきたんだけど」

「あはは、わたあめでそこまで言ってもらえるんだ」

「私もりんご飴にするから一口ちようだ〜い」

「もちろんいいよ」

「時間的に買ったら約束の広場に向かった方がいいな。それほど急がなくても大丈夫だろうけど」

「楽しいことってあつという間だね」

「だね〜」

「明日から学校か〜」

「朝起きれるかな？」

「起きれても学校があること忘れてそうだよね」

「さすがにそれはないだろう…ないよね？」

あるともないとも言い切れない微妙なラインだな。

少し歩くとわたあめと飴細工の屋台へと着いた。

「あつ倉橋さんに矢田さん、それに南雲君も」

「殺せんせーどうしてわたあめとか売ってるの？」

「ヌルフフ、みなさんのおかげですよ」

殺せんせーの話を聞くに金魚すくいを始めとした各屋台においてE組の面々が暗殺で鍛えた技術を遺憾なく発揮した結果、景品などがなくなり早じまいする店が多かったそうだ。その空いたスペースに殺せんせーは入りこんで支店を増やしているとのこと。

「そんなことより何にしますか？みなさんなら少し安くしますよ。1

0円くらい」

「「せんっ」」

「ほらこのりんご飴なんて青森産を使っているので美味しいですよ！」

「あつじゃあそれで。純君もだよな？」

「俺はこっちにするかな」

「イチゴ飴を選ぶとはお目が高い。これには拘ってましてね、ただ糖度が高い品種を使うのではなく酸味があるものを使うことによつて飴の甘味と調和して——」

「拘ってるのはわかったけど材料費とか大丈夫？ちゃんと元は取れるの？」

「ヌルフフ、その点も抜きありません。みなさんに教えている数学を少し応用するだけでどれくらい売ればいいのかとわかるんですよ。具体的には——」

「授業は明日以降にしてもらっていいですか？はい、お代です」

「毎度あり！」

「あつ私はわたあめで！」

「ハイどうぞ！200円です」

「今細かいのしかなくて10円玉ばかりだけど大丈夫？」

「もちろん大丈夫ですよ」

「じゃあ…1、2、3、4、5、6、7、8、祭りって何時で終わりだっけ？」

「午後9時に終わりですよ」

「10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20……じゃあ花火でまた！」

「こらこら矢田さん！時そばなんて渋いものどこで覚えたんですか！」

「ちえー」

「待て矢田、殺せんせーは最初に10円安くしてくれるって言ったから払う必要ないぞ」

「そういえば言ってたね」

「だって！殺せんせー！」

「ぐぬぬ…男に二言はありません…」

値引きするって言ったこと忘れてたな。俺と倉橋が値段そのまま支払ったってのもあると思うけど。

「ちよつとボケたつもりだったのに10円得しちゃったよ」

「でも時そばなんてよく知ってたな」

「私わからな〜い」

「さつき矢田がやったように勘定の時に時間を尋ねて釣り銭を誤魔化すっていう落語だよ。それを見た別の男が同じ方法を試すんだけど聞く時間を間違えたせいで多く払っちゃうっていうオチがつくんだけど」

「へえ〜そんなのがあるんだ」

「まさか本当に支払う金額が少なくなるとは思ってなかったけどね」

「なんなら殺せんせー気付いてたしな。…あっ本当にイチゴ飴美味しい」

「よかったね〜、私のりんご飴も美味しいよ」

「わたあめ久しぶりに食べたけどやっぱり甘いね。ハイ陽菜ちゃん」

「ん…美味しい！」

「でしょ！ハイ南雲君も！」

差し出されたのでそのまま一口もらったが正直最初のかき氷のく

だりのせいかな距離感が麻痺してる感じが否めない。

「わたあめいいな。一生食ってられそう」

「あはは、わただからね」

「ここで問題、1キロの鉄と綿はどっちが重いでしょうか」

「鉄！」

「ぶー、正解は両方同じでした。1キロの鉄と綿だから」

「あっ」

「完全にイメージで答えちゃったよ」

「鉄と綿だったらイメージ的にね。まあ引っかけ問題みたいなもんだな」

「引っかけ問題懐かしいね〜」

「たしかに小学生以来やってないかも」

「なんか覚えてるのある？」

「うーん…」

「あっカエルの問題！」

「「かえるの問題？」」

「そうそう。お父さんカエルはケロケロケロ、お母さんカエルはケロケロと鳴きます。では子どもはどのように鳴くでしょうか」

「ケロ」

「ぶぶー。正解はおたまじやくしだから鳴かない、でした！」

「あ〜！」

「ちよつと盲点だよね」

「全然思い付かなかった〜」

「後でカルマに出してみよつと」

「カルマ君はこういうの強そうだよね」

「悪戯っ子だからな」

ちよつとイチゴ飴を食べ終わったので近くにあったゴミ箱にゴミを捨てる。女子2人もまもなく食べ終わったのでこれで心置きなく待ち合わせ場所に向かえる。

「時間は…ちよつと40分か」

「あっみんな来てる！おーい！」

「肝心の殺せんせーがいないね」

「きつと今が稼ぎ時なんじゃないか」

行動を共にしてた倉橋、矢田は女子の方へと向かった。俺も当然男子の方に行く。

「よっ渚。茅野と回ったのか？」

「うん、なんとなく流れで」

「そっか」

「南雲君は倉橋さんと矢田さんだったよね」

「ああ、誘われたから」

「そうなんだ、どうだった？」

「楽しかったよ。渚は？」

「うん、楽しかったよ」

「他に男女で回ったやつはいたのか？」

「そういえば千葉君と速水さん一緒だったよ」

「そうなのか。どっちから誘ったか気になるな」

「千葉君から声かけてたよ」

「へえ、あと前原と岡野も男女ペアだったな。ていうか男女事情に詳しいな」

「ちよつと出遅れちゃったから。茅野もそうだったらしくてそれで一緒だったんだ」

「ああ、なるほど」

「あつそろそろ花火上がるね」

渚がそう言うのを待ってましたとばかりに上空に花火が上がった。公園内ではなく位置的に恐らく近くの河川敷で上げてると推測。

ともかく近くで見える打ち上げ花火は迫力があつた。

「濃かつたね、夏休み」

「そうだな」

思えば俺の夏休みは矢田との隣町の隣の探索から始まったんだつた。それから前原と小学生の女の子の仲直りを見届けて、リゾートで暗殺をして…昨日のことのように夏休みの記憶が過る。

「…同じ夏は二度と来ないんだよな」

「…そうだね、うん、たしかにそうだ」

「1日1日を大事にしなきゃな」

「うん、2学期も暗殺頑張ろうね。もちろんそれ以外も」

花火が終わると来ていたお客さんの誰かが拍手をしてそれに釣られて全員が拍手をする。

少し時間が経って拍手が鳴り止むと終わりの雰囲気の流れで帰り始める人が増えてきた。俺達もその流れに乗って歩く。

「ちよつと待つてくださいい！」

「わっ殺せんせー！」

「夏はまだ終わりませんよ！」

殺せんせーの言葉に全員が首を傾げる。

「これ、やりますよ！」

「『手持ち花火？』」

「そうです、みんなでやれば楽しいですよ！それに青春ばいですよね！」

「ここでやるの？殺せんせー？」

「いえ近くの公園が22時までだったら大丈夫なようなのでそちらでやります。家の人が心配するのでしたら帰っても大丈夫ですが、先生の速さで皆さんを無事に家まで送り届けますのでそこはご心配なく」

ああ、それなら時間については心配ないな。帰る時間さえ親に連絡を入れておけば後はそれに合わせて送ってもらうだけだし。

後は家に帰るだけと思った矢先のサプライズだったので俺は心が小躍りしているのを感じた。

*

「皆さんくれぐれも危険な方法で楽しむのはやめてくださいね！先生が譲歩できるのは二刀流までです！」

公園に移動し、バケツなどの準備を終えた途端に世間体を気にする殺せんせーの注意説明が入る。そんなこと言われなくても人に向けて遊ぶ人はE組にはいないと思うけど。

何はともあれ花火がスタートする。打ち上げ花火のように迫力はないが手持ち花火にしかないメリツトもある。身近っていうのはりこのような感じで友達らと楽しめるとというのが一番の良さに思える。

「南雲君、火のお裾分けしてもらっていい?」

「あつ神崎。いいよ、ほら」

「ありがとう」

「手持ち花火なんていつぶりだろう」

「私も。たぶん小学校高学年の頃にはもうやってなかったかも」

「俺もそのくらいかな」

「同じだね」

「ああ。そういえば神崎は今日誰と回ったんだ?」

「片岡さんとかの女子メンバーで回ったよ」

「そっか。…今言うタイミングでもないけど浴衣似合ってるぞ」

「ふふっありがとう。着てきた甲斐があったよ」

「俺も次に祭りに行くときは甚平とか着ようかな」

「南雲君だったら絶対似合うよ」

「そう?」

「うん。…今度は一緒に回りたくないな、祭り」

「夏も終わるし来年以降になるな。たぶん」

「そっか…」

「そのときまで地球があるかもわからないけどね」

「きつと…あるよ。きつと」

「そうだといいな。あつ火のお裾分けしてもらっていいか?」

「うん。どーぞ」

それきり会話もなくなつて俺はふと周りのE組のみんなを見てみると各々楽しんでいたので何だか安心した。大きな声を出さない辺り周辺住民への配慮もしっかりと出来ている。

「ふう」

「おわっ!…つてなんだ前原か。ビックリさせるな」

「いやずつと近くにいたよ」

「そうなの？打ち上げ花火のときにはいなかったような…」

「ああ、あのときはみんなと少し離れた場所で見えたから」

「なるほどね。それで溜め息なんてどうした？岡野と回ったの楽しくなかったのか？」

「いや楽しかったよ。でもそうじゃなくて——」

前原はバツの悪そうな顔をしてその先の言葉を言わなかった。

「言いにくいなら言わなくて大丈夫だぞ。どうせ女絡みで岡野に怒られたとかだろ」

「当たらずといえども遠からずって感じ。まあその内話すよ」

「おう」

「なんか男の子っていいね」

「そうか？神崎？」

「うん。全部言わなくても通じあってるっていうか…上手く言えないけど」

「いや全然そんなことないぞ。この前目で会話して俺は前原にクレールを買ってきてくれと頼まれたと思ったら自販機で飲み物を買ってきてくれたっし」

「ふふっ、なにそれ」

「いやいや本当。な？前原？」

「そんなこともあったなあ。たしか7月の終わりだったよな」

「そうそう」

「みなさん！お待ちかねの線香花火ですよ！」

気付くと殺せんせーが準備した手持ち花火が無くなっていて定番の線香花火をやるみたいだ。

1人2本ずつ線香花火を手渡されて火をつけると先程の盛り上がりとは打って変わって、しんと静かになった。磯貝が誰が一番長く火がついてるかなと呟いたのが聞こえ、みんなはより落とさないように大事に線香花火を持ったように見えた。

俺は移り変わっていく火を見ながら、最後まで落ちなかったら願い事が叶うんだっけと考えていた。

「あっ落ちちゃった」

たぶん倉橋の眩きだったと思う。それから立て続けに火は落ちていったようで、ついには俺の線香花火の明かりも無くなっていった。

「一番長く火がついていたのは岡野さんですねえ。では皆さん、最後の1本に点火する前に線香花火について学びましょう。皆さんは線香花火に段階があるのはご存知ですか?——」

そう言つて殺せんせーは説明をし始める。曰く、起承転結の物語があるものらしい。燃え方によって名前が変わるみたいだ。

点火をすすぐの段階の丸い火の玉、それが「蕾」。花を咲かせる蕾のように酸素を取り込みながら大きくなっていく。

パチパチと小さな音を立てて火花が散り出す、この段階を「牡丹」というらしい。

牡丹の段階での火花とは打つて変わって勢いが強くなる、これが「松葉」。普通の花火と比べて線香花火は小さいのに堂々とした様子で飛び散る火花は他の花火にないのだと殺せんせーは言った。

松葉で激しくなった火花はやがて大人しくなっていく、この状態を「柳」というらしい。

火花が1本ずつ儂げに落ちていく「散り菊」。やがて火花は分裂しなくなり火の玉は落ちるか燃え尽きていく。

「——以上のように5段階で分けられています。次は今教えたことを少し意識して風流を感じてみてください」

俺達は線香花火に火をつけると1本目のときより、じつと火の一点を見ることに集中した。

誰かが「まだ蕾だ」とか「牡丹に変わった」など段階を口にする。俺も心の中で先程の殺せんせーの説明を反芻して火花を見ていた。

——気が付くと俺以外のほとんどは火の玉が落ちてしまったらしくこちらを見ていた。

「純君と凜香ちゃんの線香花火長いね」

「どうやらもう1人いたらしい。」

「うん。良いのに当たったかも」

「俺も…あつ」

俺の火の玉はおそらく柳の段階で落ちてしまったが凜香のは大人

しく、それでも絶え間なく燃え続けていた。

ずっと続くかに思われた線香花火だったが先程の説明にあった通り、火花は1本、また1本と少なくなっていくやがて燃え尽きた。散り菊という名に相応しい情景に俺のみならず、全員が小さく感嘆の声を漏らした。

「落ちないで燃え尽きるの初めて見た」

「俺も」

「私も」

「線香花火に何か願ったのか？」

「：ううん、なんにも。ただ綺麗だなんて」

「ヌルッフ、これがいわゆる日本の”侘び寂び”ですねえ。：線香花火も終わって、これで本当に皆さんの中学校生活最後の夏休みが終わりました。先生はとても：いえ、言葉では表現できないくらい良い夏休みでした。皆さんはどうでしたか？」

殺せんせーの言葉に全員が無言で頷いた。まだ十数年しか生きていないが今までにない、最高の夏だったと思う。

「皆さんも同じ気持ちで安心しました。あまり遅くなっては明日の学校に響きますので送っていきますよ」

比較的家が近く、家族にしっかりと連絡出来ている人は歩き、若しくは自転車で帰ることになった。それ以外の人は先生がマツハで家に送るらしい。

殺せんせーにさよならを告げて帰路につく。家の方向が同じ人を見ると岡野と矢田の2人だった。

「祭り、楽しかったね」

「そうだな」

「明日から学校か〜！」

「ちゃんと朝起きるんだぞ」

「失礼な！ちゃんと起きるよ！」

「ならいいけど」

「南雲君こそしっかり起きれるの？」

「イージーだな」

「イージーなら大丈夫そうだね。…ひなたちゃん大丈夫？公園で花火をしたときからずっと元気ないけど」

「…うん、大丈夫」

「そういえば前原も大人しかったな」

「前原君も？」

「うん。なんか考え込んでいる様子だった」

俺の言葉で誰も喋らなくなってしまった。地雷を踏んでしまったか？

3人の間に流れた沈黙を破ったのは岡野だった。

「…前原に告白しちゃった」

「…え？」

俺が告白されたわけでもないのに心がドキツとした。

「打ち上げ花火のときに前原からせつかくだし2人で見るかって言われてさ、それで2人きりで花火を見たんだけど…。——自分の中で好きって気持ちを抑えられなくて…それで好きって伝えちゃった…」

岡野の言葉に適度に相づちを打つ矢田。勝手なイメージで女子はこういうとき盛り上がるイメージだったが、当事者である岡野が神妙な雰囲気なので聞く立場である俺達も真面目に話を聞いている。

「前原君はひなたちゃんの言葉に何て返してきたの？」

『少し考えさせてほしい』って、それきり会話もなくなっちゃって」

「そっか…。ひなたちゃん、すごいね」

「…ああ、勇気出したな」

「…うん、ありがとう」

「良い返事だといいな」

「…そうかな？大丈夫かな？」

「無責任なことは言えないけど…、前原のあんな様子初めて見たからさ。だからってわけじゃないけど…」

「ありがとね、南雲君」

またも沈黙が流れる。無責任な言葉を言えない俺と矢田はそれ以上何も言えず、対して岡野は何を言えればいいかわからない様子に見えた。

「あつ南雲君、私達こつちだから」

「送つてかなくて大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

「わかつた。じゃあまた明日学校で」

「また明日ね」

2人と別れたあとの帰り道、俺は「変わる」ということについて考えた。

今回では人の気持ちだ。変わっていくものだとはわかつているが普段はそんなこと考えない。しかし目に見える変化が起きてから初めて人はその変化に気付く。岡野が前原に気持ちを伝えたように。

2人は恐らく、いや確実に今のような仲の良いクラスメートという関係ではいられない。より仲が深まるか、それとも別れるか。友達のままだとしても今回の出来事が必ず尾を引いてしまう。

——恋愛って難しいな。「自分の好きな人が自分のことを好きになつてくれる」、言葉にするとそれだけのことなのに。

ふと我に返ると腕や服に夏の濃い空気がまどわりついていることに気が付いた。それに外には微かに火薬の匂いが混じっている。

どこかで俺達と同じように小さな夏を燃やしている人達がいたんだなと思った。

第34話 始業の時間 2学期

〈渚視点〉

二学期の始業式。夏休みから心を切り替え、勉強も暗殺も新しいステージへ。

折り返しの9月。殺せんせーの暗殺期限まであと6カ月となった。

「久しぶりだな、E組ども」

声のする方を見ると浅野君を除いた五英傑の4人がいた。

「おや…このような掃き溜めにも鶴がいる」

「二?」

榊原君の言葉にE組のみんなが何を言ってるかわからない様子だった。もちろん僕にもわからない。

「君だよ、君。もつたいない…学力があれば僕に釣り合う容姿なのに」

そう言つて神崎さんにボディタッチをしようとした榊原君の間に誰かが割つて入った。

「神崎さんが困ってるだろ?」

「おや君は…たしか杉野君だったかな?球技大会では頑張ってたね」

「そんなこと今は関係ないだろ?」

「まあまあ榊原、こいつらに構つてないで行こうぜ」

「そうだね、では神崎さん。また声をかけるよ」

そう言つて五英傑は僕達から離れていった。残された僕達はと言
うと――

「やるじゃん、杉野!」

「神崎さんを守るなんてやるじゃん!」

「杉野君、ありがとう」

神崎さんを守つた杉野を称えていた。みんなに声をかけられ、彼女からお礼を言われた杉野は照れ臭そうに笑っていた。

ともあれ始業式があるため僕達は体育館に整列をした。

夏休み中に活躍をした部活などが表彰され、つつがなく始業式は進む。校長先生の話も終わって式が終わると思っていると司会進行の荒木君が口を開く。

「さて、式の終わりにみなさんにお知らせがあります。今日から3年A組にひとり仲間が加わります。昨日まで彼はE組にいました」

荒木君の言葉に僕達E組が動揺を隠せないでいるが、尚も話は続く。

「——では彼に喜びの言葉を聞いてみましょう！竹林孝太郎くんです！」

「[!:]」

なんで竹林君が!?

「僕は4カ月余りをE組で過ごしましたが、その環境を一言で言うなら地獄でした」

余りの事態に僕は竹林君のスピーチが一切耳に入ってこなかった。彼が話終わるとE組を除く全校生徒が一斉に彼を称えて、それで本当に竹林君がE組ではなくなったんだと思いき知らされた。

*

く南雲視点く

「なんなんだよあいつ！」

始業式が終わり、教室に戻ると同時に前原が黒板に怒りをぶつける。でも俺には竹林のことだけじゃなくて、別のことにも苛立つてるようにも見えた。

「この事地獄とかほざきやがって！」

「落ち着けよ、前原。たしかに言わされたにしてもないけどよ」

「でも南雲君。私は竹林君の成績が上がったのは殺せんせーに教えられてこそだと思う。それさえ忘れちゃったんなら、彼を軽蔑するよ」

片岡も同様に静かに怒りというかやりきれない思いを抱いてるようだった。周りもそのような雰囲気です。新学期早々にE組という学校

の底辺である現実を突きつけられたような気がした。

もしかして理事長は俺に声をかけたように竹林にも声をかけたのか？

「とにかくああまで言われちゃ黙ってらんねー！放課後竹林のところに行くぞ！」

竹林のところに行くにもどうしたもんかなと考えてしまう。事情があるのかもしれないし、何を考えて本校舎に戻ったのかも本人しかわからない。

それに竹林のことだけじゃなくて前原と岡野の件もある。二人の間だけの問題だけど、前原の苛立ちも含めて気になってしまう。岡野を横目で見ると夏祭りの帰り同様いつもと違って大人しい様子だった。

「おい竹林！」

「…」

放課後になったので前原を先頭として俺達は竹林を訪ねに本校舎まで来ていた。当の竹林はとうとうなることがわかっていたかのような様子だった。

「竹林、俺達は別に怒ってるわけじゃないんだ。ただ一言の相談もなしに本校舎に戻ったからその理由が聞きたいだけなんだ」

「賞金百億、殺りようによっちゃもつと上乘せされるらしいよ。分け前が要らないなんて無欲だね」

「……せいぜい十億円」

竹林が答えた言葉に俺達は首を傾げる。

「僕単独で百億ゲッツは絶対に無理だ。上手いこと集団で殺す手伝いが出来たとして：分け前は十億がいいところだね。僕の家は代々病院を経営していて、兄2人は揃って東大医学部。十億って金はうちの家族には働いて稼げる額なんだ」

突然饒舌になった竹林の話をみんなは真剣な顔で耳を傾ける。

「E組に在籍していて落ちこぼれである僕は家族として扱われない。トップクラスの点数を取って成績の話を初めて親に報告できたよ。たったそれだけのためにどれだけ血を吐く思いで勉強をしたか……！——僕にとつては、地球の終わりや賞金よりも、家族に認められる方が大事なんだ」

歯を食い縛るようにして自分の思いを吐露する竹林に俺達は何も言えなかった。先程まで怒りを隠せていなかった前原でさえも言葉を返さなかった。

「裏切りも恩知らずもわかってる。君達の暗殺が上手くいく事を祈ってるよ」

「ちよつと待て竹林！まだ俺達の——」

振り返つて帰ろうとする竹林を呼び止めようとしたところ誰かに腕を捕まれて止められた。

「…神崎」

「やめてあげて南雲君。親の鎖つて…すごく痛い場所に巻き付いてきて離れないの。だから…無理に引っ張るのはやめてあげて」

「…そっか。ごめん、配慮が足りなかった」

そう言つて悲しげな、自分も経験してきたような顔で言った神崎に俺はそれ以上何も言えなかった。俺達が竹林と一緒に暗殺を続けたいつていう気持ちも、俺が個人的に竹林ともつと話したいという気持ちもエゴにすぎないと気付かされた。

「…俺達も帰るか」

磯貝の言葉で俺達はその場を後にした。竹林にああ言われてしまつては俺達からはもう何もアクションが起こせない。SOSが出るわけでもなく、自分の意志で本校舎に戻ったからだ。その事実がもどかしく感じて、中学生の今の自分の無力さを思い知らされた。

「南雲、一旦切り替えようぜ。竹林の件は俺達がどうこうできるわけじゃないし…一番熱くなつてた俺が言うのもおかしい話だけど」

隣を歩く前原が俺を宥める形で言葉をかけてくる。

「まあ、その通りなんだけどさ…。それより前原は大丈夫なのかよ？朝から竹林の事以外にも苛立つてる感じだけど」

「あーやっぱりわかっちゃうか。…南雲ってさ、口固いよな？」

「俺達は国家機密を抱えてるんだから口が固いに決まってるだろ？」

「そう言えばそうだったな。相談みたいな形になるんだけど、…実は岡野に告白されたんだよ」

「へー岡野に。いつ？」

事前に聞いていたため反応が希薄になってしまったが、念のため初めて聞いたということにしておく。

「昨日。祭りの花火のときに」

「あー2人で行動してたもんな。それで相談って？」

「今俺は特に狙ってる子とかいない状況なんだよ。でも相手のことが好きでもない状態で付き合うとかそういう返事をするってのはどうなんだろうって思ってるんだ」

「茶化すわけではないけど、前原って意外とそういうとき簡単に付き合うって感じがする」

「いや、まあそういうイメージを持たれてても仕方ないけど…それでも俺はちゃんと好きな人とか付き合ってきてないよ」

「そうなのか、誤解しててすまん」

「大丈夫だ。…それより南雲はどう思う？」

「うーん…俺は…俺だったらちゃんとか好きになってから付き合いたいかな。でも人それぞれだと思うし、色々な形があっればいいんじゃないかな」

「南雲はそうなのか」

「うん。とりあえず返事に関わらずちゃんと答えるべきだな。自分の今思ってることを相手に伝えて、ちゃんと向き合うというか。そうしないと岡野が蛇の生殺し状態になっちゃう」

「そっか、そうだよな」

「矛盾すること言うけど返事を焦る必要はないと思う。ちゃんと考えて、悩んで、前原の答えを出してくれよ」

「…ありがとな、南雲。お前も相談事があったら何でも言ってくれよ」

「そうさせてもらおうよ」

それからは岡野と竹林のことは話題に出さず、普通に話して帰っ

た。互いにその事については口にしなかつたけど、前原も察したような感じで今まで通りを装うように話題を探してる様子だった。

翌日、学校に登校するとクラスが何となく大人しいような印象を受けた。やはり竹林がA組に行ってしまった影響だろうか。そう考えながら自分の席に着くとちようど殺せんせーが教室に入ってきた。

「みなさんおはようございます」

「…なんで真つ黒になってるの殺せんせー？」

「アフリカに行つて日焼けしてきました。完全に全身黒くなったことで人混みで行動しても目立ちません」

「「恐ろしく目立つわ！」」

もっとバレない方法あるんじゃないかなあ。ウオーリーみたいに赤と白の縞々模様の服を着るとか。…いや、これも恐ろしく目立つな。ウオーリー半端ねえ。

「でも何のために日焼けしたの？」

「もちろん竹林君のアフターケアのためです。自分の意志で出ていった彼を引き止めることはできませんが、新しい環境に彼が馴染めていくかどうか見守る義務が先生にはあります。これは先生の仕事ですので君達はいつもと同じように過ごしてください」

殺せんせーはやっぱりどこまで行っても先生だった。A組やE組だとかの境界線など関係なく見守ってくれているんだと思つたら、嬉しく感じてにやけそうになつてしまつた。

「俺等も様子見に行つてやろうぜ？」

「なんだかんだ同じ相手を殺しにいつてた仲間だしな」

「竹ちゃんが洗脳でやな奴になつたらやだな」

「殺意が結ぶ絆ですな。では授業に入りますよ」

どうやら竹林のことは心配なさそうだなと思ひ授業の準備を始める。鞆から教科書を出して机に入れようとする。机の中に何か入つてることに気づいた。中から出して確認するとメモ帳が四つ折りに

なっていて開いてみると矢田からのメッセージだった。それには短く――

放課後一緒に帰れないかな？

と書かれていた。次の休み時間にでも返事をしようと考えながら俺は教科書とノートを開いた。

放課後となり、みんなが竹林の様子を見に行つたのを見送つてから矢田と一緒に帰っている。

「ごめんね、南雲君も竹林のところに起きたかっただでしょ？」

「いや殺せんせーもいるし、何となくもう大丈夫なような気がしてるから。それで突然一緒に帰ろうつてどうした？ なんとなく察してはいるけど……」

「やっぱりわかっちゃうよね」

「たぶん前原と岡野の件でしょ？」

「うん。2人のこと何もしないでそつと見守ろうつて言おうつて思つて。南雲君なら大丈夫だと思うんだけど……つてどうしてそんなに驚いた顔してるの？」

「いや、てつきり2人をくつつけるためにどうかしようつて言われるものかと」

「むっ、南雲君は私のこと何だと思ってるの？」

「ごめんごめん、でも本当に予想外だったんだよ」

「……私だつて上手くいってほしいって思うけど、周りが勝手に盛り上がつてもそれつてどうなんだろうなつて思ったからさ。だから2人を見守ろう」

「俺は元からそのつもりだったけどな。……でも、わかつたよ」

「じゃあ指切りっ！ ほら指出して！」

急に子供っぽく笑う矢田にギャップを感じて反応が遅れた俺の手を、彼女は軽い物でも持つかのように簡単に持ち上げて勝手に指切りをする。

「じゃあ約束したからね？」

「一方的な約束感があつたけど…まあいいか」

「南雲君はないの？恋の相談とか」

「俺はないよ。そういう矢田は？」

「私は…ないよ。うん、ない」

「そっか。お互い寂しいな」

「どう？寂しい者同士付き合う？」

「寂しさ2倍になるんじゃない？」

「あはは、冗談だよ」

「矢田のことは好きだけど、俺自身が誰かと付き合うってことを考えたことないからさ。どつちにしろ寂しい思いをさせることになると思う」

「そっか。でも南雲君って尽くしてくれそうなタイプだと思うな！」

「まあそりゃ好きな人には尽くすでしょ。矢田も一途そうだけ」

「女子は男子の前だったらそうじゃなくてもそう言うよ？」

「じゃあ違うのか」

「一途だから！」

「まるで違うみたいなの反応が返ってきたけど」

「女の子はお砂糖とスパイスと素敵な何かで出来てるの！」

「答えになつてないけど」

そう返すと2人して大きく笑った。竹林の事があつて学校に来てから笑えていなかったので、久しぶりに笑ったような気がした。

「矢田はそれの男バージョン知ってる？」

「そんなのあるの？」

「マザー・グースの中に”What Are Little Boys Made Of?”ってのがあるんだけど、それによると男の子は蛙とカタツムリと子犬の尻尾で出来てるんだとき。そのあとにみんなが聞いたことある女の子が砂糖とかで出来てるってのに続くんだよ」

「マザー・グースってたしか童謡の総称だっけ？それにしても女の子に対して男の子可哀想過ぎない？」

「俺は言い得て妙だと思うけど。小さいときって虫でも何でも好きだったし、目の前にあるもの全部に興味示してた記憶あるから」

「へえ。虫で騒いだりする南雲君が想像できないや」

「カブトムシとか好きだったよ、今はそうでもないけど」

「ちゃんと男の子の時代があつたんだね」

「テレビでやってたりしたら今でも童心に返っちゃうのあるよ」

「待って！当てるから！」

そう言う矢田はむむむと言いながら色々考える素振り 시작했다。

「よし、わかった！当たったら何かあるよね？」

「えっ景品みたいなの？」

「うん！」

「当たったときに考えるよ。それでは答えをどうぞ」

「恐竜！」

「あー惜しい。正解はUMA、UFOでした」

「恐竜ってUMAじゃないの？」

「UMAは未確認生物のことだから」

「むー、釈然としない」

「まあまあ、飴でも食べて落ち着いて」

「まあいいけど。飴はありがたくもらっておくね」

「矢田の好きなものってなに？」

「私はパンケーキが好きだよ」

「おっ女の子って感じがする。磯貝がバイトしてる店のハニートースト美味いから今度行くか。パンケーキじゃないけど」

「あつ凛香が3月頃言ってたお店かな？」

「たぶんそうだと思う」

「楽しみ、陽菜ちゃんとかも呼んでいい？」

「どうぞどうぞ」

「やった！」

話の流れで一緒に出かける用事ができたが、矢田と行動することが多いなど何となく思った。

「じゃあ私はこつちだから」

「おう、気を付けて帰れよ」

「送ってくれてもいいんだよ?」

「送ってほしいの?」

「うん、ちよつとだけ」

「なにそのお願い、ビツチ先生にでも習ったの?」

「あはは、そんなところ。本当は送ってもらわなくても大丈夫だよ」

「なんだそれ。明日は創立記念日で集会あるから早めに登校だからな」

「はーい。それじゃあまた明日ね」

「また明日」

*

そして翌日。俺達は集会のために本校舎に赴き、体育館に整列していた。始業式同様に校長先生の長い話が終わると司会の荒木が口を開く。

「それでは次は竹林君のスピーチです。お願いします」

また竹林がスピーチ?そう思っていると原稿を開き竹林は口を開く。

「僕の…僕のやりたいことを聞いてください」

やりたいこと?若干の声を震えを残しながら言葉を続けるを

「僕のいたE組は弱い人達の集まりです。学力という強さがなかったために差別待遇を受けています。でも僕はそんなE組がメイド喫茶の次ぐらいに居心地が良いです」

…竹林は一体何を言ってるんだ?

「僕は嘘をついていました。強くなりたくて、認められたくて。そんな役立たずで裏切り者の僕をE組の皆は何度も様子を見に来てくれました。先生は僕のような要領の悪い生徒でもわかるように工夫して勉強を教えてくださいました。家族や皆さんが認めなかった僕の事をE組の皆は同じ目線で接してくれた」

前に立っている莉桜が俺の方を振り向き笑いかけてきたので、俺も笑い返す。対照的に本校舎の生徒は困惑した表情を浮かべている。

「世間が認める明確な強者を目指す皆さんを正しいと思うし尊敬します。でも、僕はもうしばらく弱者のままがいい」

壇上の横から浅野が出てきたと同時に竹林は自分の胸元から盾のような物と対先生用ナイフを取り出した。

「これは理事長室からくすねてきたもので私立学校のベスト経営者を表彰する盾です」

竹林は振りかぶってまるで何かを断ち切るかのようにナイフを振り下ろした。盾はガラス製だったらしく今までに聞いたことのないくらいに綺麗な音をたてて粉々に割れた。

「浅野君が言うには過去これと同じことをした生徒がいたとか。前例から合理的に考えれば僕もE組行きですね」

そう言うのと晴れ晴れとした笑顔で竹林は壇上を去っていった。俺達E組は竹林が帰ってくるという事実が嬉しくて、全員笑顔が隠せないでいた。

いつもどっつたら集会が終わるとすぐに旧校舎戻るけど、俺達は本校舎の校門前で竹林が来るのを待っていた。少し待っていると竹林がバッグを背負ってこちらに向かってきた。

「おかえり竹ちゃん！」

「いやースカツとした！」

「伊達に眼鏡かけてねえな！」

みんなは笑顔で思い思いの言葉を口にする。すると竹林はフツと笑いながら話始める。

「壇上では涼しい顔してたけど、盾を割ったときに指を少し切っちゃってね」

そう言っつて竹林は絆創膏を貼った指を俺達に見せてきた。それを見てまた笑っつて、俺はやつとE組の2学期が始まるなと思った。

旧校舎に戻る道中は竹林が主役で、みんなは彼を囲みながら色々話をしながら裏山を登っていく。そんな中、全員に聞こえるか聞こえないかわからないくらいの声の大ききで前原が口を開いた。

「なあ岡野！」

「…どうしたの？」

「放課後時間あるか？」

「あるけど…」

「じゃあちよつと話があるから一緒に帰るぞ」

「…わかった」

短いやり取りですぐに会話は終わったが俺の耳には確かに届いていた。竹林が決心したように前原もまた決心したんだなと思った。前原に話しかけるのは野暮だなと思つていと向こうから声をかけてきた。

「今日の竹林を見てさ、俺も決めたんだよ。普段大人しいやつが勇気出してるの見たら、黙つてられねえよな」

「…それ、俺に言う必要があるか？岡野に言えよ」

「岡野にはもちろん言うよ。でも、これを南雲に言うのは逃げ道無くすためだから」

そう言つた前原はいつもよりカッコよく見えた。でもそれを言つたらいつもの前原に戻りそうな気がしたから俺は意地でも言わなかった。少しでもカッコいい状態で放課後を迎えてほしかったから。

翌日登校すると前原と岡野の両名とも吹っ切れたような顔をしていたので俺はなんだか安心した。どのような話をしてどのような結論になったかはわからないけど、あの顔を見たら大丈夫な気がした。前原に朝の挨拶をすると放課後一緒に帰ろうぜと誘われたので俺は快諾した。柄にもなく放課後が楽しみで、竹林が火薬の取扱いを学ぶことになったが全然授業内容が頭に入つてこなかった。

そして放課後――

「よし南雲、帰るぞ」

「うーい」

教室を出て、2人並んで裏山を下る。

「それで？昨日の報告だろ？」

「おう、岡野と色々話したよ。それこそ今の俺の気持ちもちゃんと言った」

「具体的には？」

「岡野のことは好きだけど、友達として以上には見たことなかったって」

「それ岡野のこと振ってない？」

「いや待て、続きがある。でも今は意識するようになったってところまでがセットだ」

「へー、それで結論を言うത്？」

「彼氏彼女の関係ではない」

「へ？」

「だから、まだ付き合っていない」

「お前は昨日の竹林を見て何を決心したんだ？」

「俺の気持ちを正直に岡野に話すことだよ」

「あーなるほど、そういうことか」

「まさか南雲は付き合うか否かの2択しかないと思ってたのか？」

「…そのまさかだよ。早合点だった」

「これだから恋愛初心者は」

「悪かったな。とりあえず前原も岡野も納得してるんだろ？ならいいのか」

「ああ。好きになる努力って言い方が正しいかはわからないけど、俺も岡野を意識するようになったし何かが変わるのは確かだよ」

「ちよつと聞きたいんだけど岡野のこと1日にどれくらい考える？」

「そりや何回も考えるよ」

「ふーん。どんなこと？」

「手繋いだらどんな反応するのかなーとか。…ってお前何言わすんだよ」

夏休み前半に前原と出かけたときの会話を思い出して、思わず笑ってしまった。

「おい今言ったこと絶対に他の人に言うなよ！何言われるかわかったもんじゃねえ！」

「大丈夫だ、誰にも言わないから」

俺は心の中でお前自身にも言わないよと付け加えた。俺が親友だと思っっている前原には自分自身でその気持ちに気付いてほしいから。